遊女の足蹴

古典インド劇・チャトゥルバーニー

藤山覚一郎
横地優子　訳

春秋社

目次

はじめに

本書の訳者の一人である藤山覚一郎氏が、サンスクリット語学習のために私のところへ来られたのは、かなり以前のことになる。当時私は、インド学の泰斗中村元先生が創設された東方学院で、サンスクリット語初級を受け持っており、藤山氏はその講義を受講された。そのうち、藤山氏がすでにヒンディー語を修得して、ヒンディー語で書かれたいくつかの短編小説を翻訳されていることを知った。氏はどこかの会社の重役と見受けられたが、カルチャーセンターでヨーガを学ばれたりして、随分と奇特な人であると思ったものであった。

そのうち、私はサンスクリット語で書かれた戯曲のうちで最も面白いものと信ずる、『チャトゥルバーニー』のうちの『ウバヤ・アビサーリカー』を講読した。藤山氏はその作品に非常に興味を示され、他の三つも読んでみたいと言われた。私は東京大学印度文学科の土田龍太郎氏からヒンディー語訳付きの原典を借りてコピーし、藤山氏と読み始めた。わざわざ拙宅まで来られて、読み合わせをしたこともあった。藤山氏は驚異的な熱意をもって訳出を進め、ワープロ印刷で次々と出版された。そのうち、私の時間の都合がつかなくなり、東大印度文学科助手である横地優子氏の協力を仰いだ。横地氏も『チャトゥルバーニー』に魅せられ、自ら同類のジャンルの諸作品を研究するとともに、その優れた読解力により、前にワープロ出版された分を含め、藤山氏の訳を徹底的に点検された。この二人の協力作業により、訳文は流麗にして、かつ学問的に正確なものとなった。その頃、春秋社のほうで、完全な形のものを出版してくださるということになった。

藤山氏が翻訳の仕事を始められた頃であったろうか。私はテレビのニュースで、ある高名な政治家

の葬儀に際し、見おぼえのある紳士が座っておられるのを見出した。藤山氏がその政治家の御長男であることを、私はその時初めて知ったのであった。そのようなことは、無論この翻訳の価値には関係ないが、藤山氏の謙虚な人柄を再認識して、私にとってはこの上なく印象に残ったので、あえてここに書き記しておきたい。

『チャトゥルバーニー』が、サンスクリット戯曲のうちで最も面白いと考えるのは、私だけではない。多くのインド学者の認めるところである。言うまでもなく、詩聖と仰がれるカーリダーサの『シャクンタラー』などの戯曲は、最高傑作として有名である。しかし、翻訳された場合、その詩作品としての多くの美点は損なわれ、単なるメルヘンと見なされかねない。やはり詩は翻訳不能なのである。それに対し、『チャトゥルバーニー』は、主として内容の面白さで勝負する作品である。もちろん詩的な描写もあるが、それよりも独り芝居を演ずる粋人の機知に富んだせりふが主要なのである。そしてこれらの戯曲の作者たちは、古典期のインドの洗練された花街の情景を活き活きと描写している。『チャトゥルバーニー』の魅力を、この翻訳によって十二分に味わっていただきたい。

サンスクリット語を学ぶ人は、インドの宗教や思想に興味を抱く人が多い。しかし、藤山氏は、文化史上重要ではあるが、軟文学として片付けられがちな、このようなジャンルの作品をあえて選ばれた。この点からも、すべからく権威主義的なものを嫌う藤山氏の人となりをうかがい知ることができるのである。

一九九三年一一月

東京大学東洋文化研究所教授　上村　勝彦

凡例

一　本訳に使用した底本テキストについては、解説の三を参照されたい。

二　訳文中において、ト書きは（　）内に本文と同じ大きさの文字で、文意を通じるための訳者の補足は〔　〕内に小さい文字で、語句の説明などは（　）内に小さい文字で示した。

三　読者の便宜のため、各章冒頭に、あらすじ、登場人物（五十音順）、時、場所を示した。

四　訳註において使用した略号は次のとおりである。（解説三参照）

「蓮華」　Ⅰ　蓮華の贈り物
「極道」　Ⅱ　極道と通人の対話
「逢引」　Ⅲ　逢い引き
「足蹴」　Ⅳ　足蹴にされた男
M&A　Moticandra & Agrawala のテクストおよび注釈
Loman　Loman のテクストおよび注釈
W&V　Warder & Venkatacharya のテクストおよび注釈
Schokker　Schokker のテクストおよび注釈
Gosh　Gosh のテクストおよび注釈
Kuiper　Kuiper の「蓮華」注釈

遊女の足蹴——古典インド劇・チャトゥルバーニー

I 蓮華の贈り物

あらすじ

伊達男カルニープトラ・ムーラデーヴァは、愛人デーヴァダッターを囲っているにもかかわらず、彼女の妹デーヴァセーナーにも惚れこんでしまう。彼は親友の通人にデーヴァセーナーの心の内を探ってもらうことを依頼する。通人はウッジャイニーの繁華な街並みを歩いて行き、道すがら出会うさまざまな有閑人士・遊女たちと言葉を交わしてから、デーヴァセーナー宅に着き、依頼された役目を果たし、デーヴァセーナーから愛のしるしの蓮華の贈り物を託される。

登場人物

男性

イリマ　ドゥールタ（遊び人）
カーティヤーヤナ　＝サーラスヴァタバドラ
カーマダッタ　遊女ヴィプラーの相談相手
カルニープトラ　ドゥールタ
サーラスヴァタバドラ　詩人
サンギラカ　仏教僧
シャイシラカ　バラモンの息子
シャシャ　ヴィタ（通人）。本篇の語り手
ダッタカラシ　パーニニ学派の文法家
ダルダラカ　ピータマルダ（取り巻き人、取り持ち役）
ダルドゥラカ　女役者の息子。劇作家の弟子
チャンドラダラ　遊び人
チャンドローダヤ　マウリヤ家の世子
パヴィトラカ　判事の息子
プシュパーンジャリカ　遊女デーヴァダッターの使用人

ムーラデーヴァ　＝カルニープトラ
ムリダンガ・ヴァースラカ　元役者
老牛先生　＝ムリダンガ・ヴァースラカ

女性

アヴァンティスンダリー　遊女。ヴィプラーの友人
ヴァナラージカー　遊女
ヴァールニカー　遊女。パヴィトラカの愛人
ヴィプラー　遊女。カルニープトラの別の愛人
クムドヴァティー　遊女。チャンドローダヤの愛人
ショーナダーシー　遊女。チャンドラダラの愛人
チャンダーリカー　＝デーヴァセーナー
デーヴァダッター　遊女。カルニープトラの愛人
デーヴァセーナー　遊女。デーヴァダッターの妹。カルニープトラの新しい恋の対象
ターンブーラセーナー　遊女。イリマの愛人
プリヤヴァーディニカー　デーヴァセーナーの女中
プリヤングヤシュティカー　遊女
マガダスンダリー　遊女
マーラティカー　華鬘作りの娘。シャイシラカの愛人
ラシャナーヴァティカー　遊女。ダッタカラシの愛人

時

春のある一日

場所　ウッジャイニーの街

（祝禱終わって、舞台監督登場）

かの大神、ルドラ神[1]に栄えあれ。
かの神こそは、怒りによって、いやむしろ慈しみによって、
愛神カーマ[2]に女性（にょしょう）のなまめかしき風情（ふぜい）を授け、
より美しき姿態となせり[3]。（一）

そしてまた、

クラヴァカ[4]は花もたわわに輝くばかり。
郭公鳥[5]はさえずり、
アショーカ[6]の花咲く若枝は美しく揺れ動く。
マンゴーの甘き薫りと蜜蜂のささやきに満てる風、
愛の神は弓を持ちて、今し森を駆けゆく。（二）

そして、

小鳥たちのさえずりを伴奏に、
樹液に酔える郭公鳥は、歌いつづける。
後宮の美女のごとき森の蔓草は、

風節の振付けで〔そよぎ〕しなをつくる。
花を付け浮かれた樹々[7]は、若芽の指先をさしのべて
その蔓草を誘惑する。
真珠の首飾りのように白き冠霜は足早に消え去り、
「春」はまさに訪れたり。（三）
根より、樹芯より、
小枝より、そして若芽より、
裏切り者のところにある秘密が露見するごとく、咲き出ずる
アショーカの花々は至るところに。（四）

ああ！
上機嫌の郭公鳥の唄い声、
シンドゥヴァーラ[8]、クンダ[9]、マンゴー、
蜜蜂は酔い、そよ風の吹く、若者たちの心にかなう、
〔春の〕季節は来たれり。（五）

（舞台監督退場）
（プロローグ終わり）

（ヴィタ登場）

おお、素晴らしいではないか！　この気持ちよいこと、年老いてよぼよぼの冬を越したヴィタ[10]という「年」にも、若返りの雪の妙薬を食べたおかげで、若さいっぱいの「春」がやって来ましたぞ。今こそは、

揺れ動く若枝の先端という手で舞うがごとき樹々、
花をつけた蔓草に満てる森は青春の盛り。
ティラカ樹[11]の梢に、髻のごとく郭公鳥はとまり、
クンダの花に群れる蜜蜂は、
愛をささやく女の流し目のごとし。
胸のふくらみ初めし乙女にもまがう蓮華は、
薄墨の盛り上がりし蕾にて粧われたり。
春風は蕩児のごとく、
恋の気怠き汗ばみを含みし乙女たちの、
豊かな乳房をくすぐりぬ。（六）

いや、まったく、愛の神様の矢に射られりゃ、胸の痛みもきつくなる。春の季節は、なかなかに力強いものですな。
　デーヴァダッターとの愛の戯れで、うまいぐあいに若気の宴を楽しんだのに、カルニープトラの恋心という黒蜂が、今度は、幼さから解き放たれて今や青春の化身となって、愛の陶酔の花をいっぱいにつけた、デーヴァセーナーというあのしなやかなマンゴーの小枝めがけて、ブンブンと飛び回るな

んて！　いやカルニープトラの恋心が〔デーヴァセーナーに〕まったく移ってしまうものだろうか。
　たしかに酒や凝乳入りのうまい食物も、おつまみを加えて食べると、また一段とおいしくなるものです。だから、彼がデーヴァダッターとの美酒を味わいながらも、そのおつまみとして十五、六のうぶな娘チャンダーリカー[12]（デーヴァセーナー）との別な味わいの恋を楽しもうとしているのも、私にはよくわかる。そっちの恋では、若くあどけないもてなし方や、愉快な笑いや、からかいの気分が楽しめるというものなのさ。
　やれやれ、この恋の病は、一見軽そうではあるけれど、なかなか治りにくいものなのだ。いろいろな教典を間違いなく知りつくし、判断力をきちんとそなえ、あらゆる技芸や知識に通じており、また、若者の恋の達引に巧みなはず[13]のカルニープトラでさえ、こんな様子になってしまうのだから。

夜も寝られず眼はくぼみ血走り、夜明けの月のごとく蒼白き顔、
思い悩みの果てに体は弱り、吐息をつくばかり。
感官のみが高ぶりて、
月光、酣春、花環、歌舞音曲、芳香の入り混じりし
もろもろの悦楽にも常のごとくに心慰まず、
悶々とするばかりなり。（七）

いやいや、デーヴァセーナーとの一件でと考えれば、彼がこうなったのも不思議じゃあない。あの娘は、愛の神さまのすてきな望みの地だもの。若さと美しさでいっぱいのあの魅力は、カルニープトラの心を惑わすに値するということだ。

揺れ動く眼差し、いまだ〔キスで〕傷つけられざる唇と歯、
ふっくらとした頬を見せている顔、
その胸には瑞々しく盛り上がる蕾の乳房、
腕は柔らかな蔓草のごとく、
うっすらとした産毛（うぶげ）の条（すじ）のきざまれる腹部、
いつのまにか豊かに盛り上がりし腰、
しかも天性優しく、開け広げな心もつ彼女に
誰か迷わざるを得んや。（八）

（ひとまわりして）
　今や、デーヴァセーナーへの想いで掻き立てられ、狂わしいばかりの愛の熱病にとりつかれ、やつれ果てた彼（カルニープトラ）は、真珠の首飾りや、扇や、栴檀香の助けをかりて心の炎をさまそうとするのだが、彼女に会いたい思いで、なんとか命をながらえて、寝床にしがみついている有り様なのだ。
　だが、今朝がた、デーヴァダッターの召し使い、プシュパーンジャリカが、うやうやしくカルニープトラのところにやって来て、こう言ったのだ。
「旦那様、デーヴァダッター様が申しますには、『昨日、私がお伺いいたさなかったことで、私があなた様につれなくしたとお考えになってはいけません。実は、私の妹のチャンダーリカー（デーヴァセーナー）がちょっと病気いたしまして、気づかって私は外出できなかったのでございます。今日こ

れからすぐに、おそばに参ります』」
と。これに返事して、使いのプシュパーンジャリカを帰してから、カルニープトラは、手なづけるように、私にこう言うのだ。
「ねえ、きみ、シャシャ君、聞いただろう。『すぐにおそばに参ります』って。だから、ちょうどよい機会だ、きみ、今すぐ向こうへ行って、病気見舞いにことよせて、デーヴァセーナーを信頼させて、彼女の悩みの原因を探ってきてくれないか。どうかよろしく頼む。デーヴァセーナーが放った愛の矢の切っ先は、僕の心に命中し、羽の元まで突き刺さっている。そいつを、神様たちのお気に入りのきみ[14]の術策で引き抜いてくれよ」
と私に言ってきたので、私は笑いながら言ってやりました。
「わかった、極道のお師匠さん。あんたは昼日中にランプを灯そうっていうのかね？　この私が、二人の愛の眼差しという無言のお使者[15]に気付いていなかったとお思いかい？　とにかく、私はムーラデーヴァ（カルニープトラ）の親友のシャシャ様[16]なんだ。うまく彼女をまるめこんで帰ってきますよ」
そう言って私は出かけてきたのだ。しかし、それにしても、この大通りの路々で会う友人たちと立ち話を交わし、時間をつぶしていけば、ちょうどあのチャンダーリカーがデーヴァダッターと別れて一人でいる頃になりますかな？
（ひとまわりして）
おお、なんと、大地という女性の、閻浮提[17]にあたる顔の頰に描かれた模様化粧ともいえる、このアヴァンティの都、ウッジャイニー[18]の街は、さまざまな財貨で豊かに粧われて、比類なき美しさを誇っているなあ。

この都には、
徳高きヴェーダの頌誦、象の群れ、
馬車の音、馬のいななき、弓弦（ゆづる）の響き、
詩文、演劇に、高論卓説の場、
四海より到来せし財貨をめぐる取り引き、
歌舞、音曲、賭博に、哄笑の渦、
ヴィタの戯言、なべての技芸、
家々に飼鳥はさえずり、腕飾り、腰帯の
触れ合う妙音が充ち満てり。（九）

（ひとまわりして）
さて、この私の用事がうまくいきそうな前兆でも見つけたいものですな。
（見て）
おや、詩に凝っている、カーティヤーヤナ家のシャーララドヴァティーの息子、サーラスヴァタバドラが、自分の家の玄関部屋に立っているぞ。
白く指先を塗りたくって、まるで円盤遊び[19]をしているような様子で眼と眉をしかめて何か考え、また何か考えついてはそれを味わっている。まさにこのような詩的感興の最中に、その流れを妨げるおせっかいをしたならば、この詩人気取りの連中は、たとえ相手が親友だったとしても、機嫌を悪くするに決まっている。

だがしかし、このサラスヴァティー〔言葉の女神〕の蔓草から生じた言葉の花束を耳飾りにしないで〔ただ黙って〕通り過ぎるのは、いかにも残念に思えるわい。とにかく、奴さんに近づいてみましょう。
（近づいて）
ねえ、きみ、カーティヤーヤナ君よ、なんで空に向かって、もぐもぐしているのかね？
「詩の魔物が〔頭に取り憑いて〕私を駆り立てているんですよ、まさに」
ですと。おやおや、古い詩句のすりきれた言葉の断片をつなぎ合わせている靴直し屋さんよ、あなたは、逃げ散ってしまった牛の群れを追う牛飼いのように、新しい詩句〔新しい足跡〕を探し回っているのですかい？　それじゃあ、あなた、どんな題材をとらえて、詩句を作ったのですか？
「この眼の前に広がる、愛すべき春の季節にことよせて、詩節を作ったんです」
ほほう、それではお聞かせ願えませんか？
「ええ、壁に書いてあります。読んでください」
どこに？
（見て）
あ、これですか。

咲きほこる花々の哄笑、蜜蜂の愛の陶酔、
かしましき郭公鳥の喃語、
清浄な汗ばみに心地よき微風、
激しくかつ放恣な愛欲、
それらに満てるこの〔春の〕季節こそは、
幼く、うぶで、いまだ誰のものでもない、美しい乙女子を、
その恋人に取り持つことをなし得べし。
かの世智に長け口説き上手の使者千人をもってしても、
手に余るそのことを。（一〇）

おお、善哉、善哉！　これはまことに吉兆です、あなた。この詩によって、良い息子を持たれることと同様にあなたの名声が高まりますように。どうか、この〔素敵な〕詩にたいして妬みを起こす連中にとっつかまりませんように。
おや、笑っているのは誰かね？
（見て）
やあ、取り持ち役[20]のダルダラカじゃないか。いったい何がおかしいのかい、ダルダラカ君？
「あなたは大海に水を撒き散らしていますよ、詩句の王様を言葉で褒めそやすなんて」
なに言ってるんです、物知らずな人だ。春の〔花咲く〕季節に、花の捧げ物がふさわしくないってことはありませんよ。そのうえ、次のようなことを以前聞かなかったかね。

人々は灯明を捧げて太陽を祀り、
水を捧げて海を崇め、花々を捧げて春を崇める。
我々もまた、聖なる詩句の王なる貴台を、
言葉を捧げて供養せんとす。（一一）

まったく、あんたは取り巻き人根性まるだしだね。とにかく、ここなるお方様にあなたは十分奉仕したというわけだ。それにしても、郭公鳥（取り巻き人）のおしゃべり[21]で、この酣春はさらにいちだんと魅惑を増してくる。きみもどうかそのようにね。じゃあ失礼します。

（ひとまわりして、見て）

おや、また別な男がやって来たぞ。ヴィプラーの恋の相談役で、カーマダッタという、口語芝居で評判をとった男だ[22]。しかも今この男は、なにやら色街での振る舞いの咎で、顔を伏せて立ち去っていくところだ。ああ、わかったぞ。デーヴァダッターとの楽しみに心を奪われたムーラデーヴァがこのごろヴィプラーにすげなくしているので、すっかり自分も面目をなくしたように考えているのだ。このでしゃばり男は、まさに痴話げんかに巻き込まれてしまっている。

さて、それでは彼をからかってやることにしよう。

（身を向けて）

ねえ、きみ、きみはちょうど夜咲きの白睡蓮の花を咲かせない昼間の月のように、さっさと私を行き過ごしてゆきますね。でも、あなたにお尋ねしたいことがあるのですが。

技芸と知識に優れ、
ひたすら誇りたかく、
まことに堅固な、あなたの寛闊（ヴィプラー）なお心[23]が、
悲しみに打ちひしがれることなきや？（一二）

何です？

「あなたのあてこすりの意味はよく解っておりますよ。色事師ムーラデーヴァ君のことについてなんですね」

いや、そんなことをおっしゃるな。デーヴァダッターとの楽しみに浸ってはいるけれど、奴さんの心はヴィプラーのことを決して忘れてはいませんよ。

「いや、そこのところが、ムーラデーヴァ君のずるいところなんですよ」

おやまあ、なんて馬鹿正直なあなた！　どうして、痴話げんかですねているヴィプラーをなだめようとカルニープトラ・ムーラデーヴァがわざわざやって来たのに、あなたの女弟子（ヴィプラー）を教え論さないんですか？

（恵みの）秋の季節のごとく、
雨季の泥に汚された川を鎮めるべく、
来たりし彼（ムーラデーヴァ）は、冷たくさげすまれ、
放り棄てられぬ、
冬の季節の扇のごとくに。（一三）

「いつ、どのようにして？」

とおっしゃるのですか。きみ、お聞きください。実は、数日前にカルニープトラ・ムーラデーヴァは、私と一緒にヴィプラーのご機嫌伺いにおもむいたのです。そして、彼女の家の玄関部屋にたたずんだ

彼は、彼女の怒りの深さの見当をつけようとして、まず私に愛想よくするように命じました。

そこで、私は優しい言葉をかけながら彼女のそばに行きました。すると、やきもちのせいで〔いっもの〕魅力を失っていたかの美女は、私を見て、

「いったいどうしてそんな心づかいをなさるの？」

と言って、顔をそむけてしまいました。そこで私はからかうように言ったのです。

「そなたに誰が何を告げたるや？
してどんな言葉にこのような答えをなされしや？
さあ、こちらを向きて、月のような顔もて、
告げてくだされ、娘御よ。
心鎮まれるそなたを見れば、
私どものいとおしい気持ちは、いや高まるというもの。
雌蛇のごとき怒りしかめし眉は、
私をおののかせるばかりなり」（一四）

〔傍らにいた〕彼女の友アヴァンティスンダリーも、そのとき言ったのです。

「そなた、なにゆえ、ひそめし眉の波にて顔をしかめ、怒りに顔を紅潮させ、
〔愛の〕吐息に唇を燃やすばかり、
そなたを求め来たりしいとしの人に話しかけざるや？
そなたは、「幸せ」を敵にまわしてしまう、さかしら女よ！
すねた女よ、思い上がりを棄てるべし。
すべて、過剰なものは、すぐに〔おのずから〕損ない破滅するものなり」（一五）

これはうまいぐあいになってきたと考えて、[24] ムーラデーヴァも近づき寄って来たのです。すると、足下にひれ伏して下手にでている彼を、怒って振り払って彼女は言ったものです。

「そなたは愛人〔デーヴァダッター〕と喧嘩せしゆえ、ここに参られしに違いなし！
はたまた、かの女に袖にされしゆえか？
そなたにとって、妾は、かの女に会えない時の気晴らしの、[25] 憩いの場に過ぎざるや？
望みも失せ、冷えし我が心に、などか炎が燃え上がるべきや？
苦き薬をいまさら飲みても、何の効用あるべしや？
よくおいでになりしが、さ、お立ち去りなされ」（一六）

と。

「いや、もしそんなことを言ったとすれば、このわきまえのない女を私は叱りつけてやりましょう」ですって。ま、お好きなように。あなたの言うことを彼女が聞き入れますように、存分に諭してやってくださるがよい。私はこれで失礼いたします。

（ひとまわりして）

おや、なんと、滅相もない！　この道筋に障害物の化身がまた現われたぞ。あのダンダシューカの倅のダッタカラシだ。奴さんはパーニニ学派の文法家[26]だ。やれやれ、この私に向かってやって来ます。なんとか奴さんから無事にのがれて、言葉のわなに引っかからないようにしたいものだ。

　奴さん、なんだかいらいらしている様子だぞ。うん、何か論争してやっつけられたに違いない。というのは、彼は何かしゃべりたくてむずむずしているわ！　ちょっとでも触ると、寺院の鐘みたいにガンガン鳴るのが彼の弁舌なんです。

　この男、ぞっこん惚れ込んでいる遊女がいるんだ。ヌープラセーナーの娘のラシャナーヴァティカーという名の女だと聞いている。ラクダの首にぶらさがった竪琴[27]のように[28]、あのラシャナーヴァティカーはまったく気の毒だと私は思うよ。

　奴さん、手を上げて私に話しかけてきたぞ。

　何ですって？

「あなた様は安楽におやすみになりましたか？」

ですって、やれやれどうしようもない。まあ、愛想よく話してみることにしよう。

　言葉のいっぱい詰まったお倉のような生き字引どの、ようこそ。ダッタカラシ君、なんだか、いらいらしておられるようにお見受けしますが、ご機嫌いかがですか？

「カーカー鳴いて供物の肉を食べにやってくるカラスの群れのように、例のカータントラ派〔の文法家[29]〕たちは群れをなすと、その勢い[30]で私に襲いかかってくるのです」

　ああ、カラスとフクロウの関係がまた始まったな。

　きみ、幸いにもまだあなたは羽根をむしり取られてはいない[31]ようにお見受けします。

「そう、今や、私はカータントラ文法派の流れのいんちき文法家たちなんか、問題にするもんです

か！」

　ま、どうかお好きなように。さあ、私は失礼しましょう。何です？

「どこへと御出立召さるるや？　まあ、お待ちくだされ。何故に、かくあたふたされますや？」

ですって。勘弁してください。そんな杖でぶったたくような、厳しい言葉の雷電で脅かさないでください。よろしいか、普通の言葉でお話しなさい。ラクダの口からごろごろ出てくる耳ざわりな音にも似た、毒を耳の中にたらしこむような、あなたがた文法家のうんざりする言葉の耽溺には、私ども辛抱しきれませんよ。何ですって？

「何匹ものいななき散らす牝牛にみまがう雄弁家とのやりとりに鍛えられた、多くの語根（鉱物）からなる百人殺し[32]のような言葉のスタイルを捨てて、この私にご婦人がたの身体のような甘く柔らかなしゃべり方が、いったいどのようにできましょうか？」

　ああ、なんと参りましたな。いやいや、まったくあなたは度しがたい。なぜなら、

　　よしなき世間話、ご婦人がたや友人との礼儀正しき会話、
　　訴訟の場での訴え、世俗の話など口にするとき、
　　花の冠に棘を植え込むごとき、苛烈な語や音などを
　　誰が用うべきや？（一七）

　何とおっしゃる？

「これというわけもなく、あの妓は私が優しい言葉で話しかけても怒ってしまいました。扱いにくい女ですよ」

となっ いったいその性悪女というのは、どこの誰のことです？
「あの子を誰も可愛い子だなんて言うわけがないんです」
（ちょっと考えて）
ははあ、わかった。ラシャナーヴァティカーのことだな。当然なことですな。ふだんはあのマンゴーの茂みを飛び回る郭公鳥みたいな子なのだが、本来硬すぎるピルヴァ[33]の樹の下に安息所を求めてしまったとは、気の毒の至りというほかない。ああ、これはお笑い草もいいところだ。ちょっとからかって、楽しむことにするか。

ねえ、ダッタカラシ君よ、生まれつきたいそう礼儀正しい言葉使いのきみにたいして、いったい彼女はなんの不満があるのでしょうね。そいつが知りたいもんですよ。さあ、全部うちあけて話してくださるのがよろしい、こうなれば。
「あの浮気女ときたら、昨日、月相の変わり目の日に[34]、花街の塀のところにやって来て祭火に供物を献じようとしていた私を、恋心にかられてとっつかまえようとするかのごとくに、近くに寄って座ったんです。そこで、私は彼女に言ったんです。『賤しい女よ、供養中の私に触れるべからず』と」
おやおや、まさにラクダの声音ですね。いやまったく、女を自分に手なずけることは、なかなかにデリケートな仕事だな。でも、こんな喧嘩が、あなたの女に仕えるやり方なんですか？　やれやれ、世間知らずの方よ、そんなことであなたに思いを寄せている女性にすげなくするのは、よろしくありませんよ。女の人たちだって、あなたのきつい言葉で荒々しく、文法的な言いまわしの火矢を浴びせられれば、すっかりおびえてしまいますよ。次のようなことをあなたは聞いたことはありませんか？

ひそやかに愛をあたため、繊細な心情につつまれし、
自然な甘い言葉にて愛されるにふさわしき、
恋する女に、
耳朶を乾し干からびさせる言葉の火炎を浴びせるのは、
まさに竪琴を松明で叩き弾くがごときなり。（一八）

ラシャナーヴァティカーは、まことに厄介な仕事に巻き込まれているな。彼女は、このまるでどうしようもない男と食事をともにする仲なんだ。
いや、あなたは、彼女にかけられた呪いともいうべきだ。ダッタカラシ君よ、まったく耳をとろけさす甘い語り口を十分に聞かしていただきました。まあ、お元気でな。これで私は失礼いたします。

（ひとまわりして）
おお、今度は別な人間の形をしたジャングルが現われたぞ。これは、ダルマーサニカの息子、パヴィトラカだ。彼は隠し女を囲っていて不浄なのに、また一面、清浄行の人とも自称している。この大通りで、見ず知らずの人々と触れ合うことを汚れとして避けようとしているようだが、じめついた衣服を身にまとって、体を丸めて、また鼻の穴を両の指で覆って隠し、辻角のシヴァ像の台座に身を寄せて立っているぞ。
いやまったく、この苦行者ぶっている男こそ笑止千万であるわい。というのは、この男は、マッタカーシニーの娘で、ヴァールニカーという下っ端娼婦の情夫なんだそうだ。でも、この男、どうしてこんな危なっかしいまねをしているのだろう[35]？　よし、この男のいんちきな戒行の目録をあばいてやりましょう。

ねえ、パヴィトラカ君、どういうわけで、熱い砂地にいる亀の身振りみたいな格好をして立っているんですかい？
「この大通りでありがちな、見知らぬ人と触れ合うのを避けようとしてるんですよ」
とおっしゃる。ほほう、あなたは行きずりの人たちとの接触は〔不浄として〕避けている。すると、ヴァールニカーの腰にふさわしい器であるあなたは、ガンジス河の水浴場のように最高に清浄だということですね。
「いや、そんなことはありませんよ」
ですと。では、あなた、どうして牛飼いの家にバターミルクを売りに行ったり、詐欺師のところに行って詐欺を始めようとするような〔無駄な〕事をなさるのですか？
「いや、あなた、失礼しました。あなたのスパイ[36]には恐れ入りました」
えっ、スパイですって？ なんでスパイなんか必要なんです？ そもそも闇の中へ入るのに、太陽は灯火なんか必要としませんよ。私にはスパイなんか要りません。こんなことにかけては千の眼を私はもっているんですから。ごまかしの衣装はさっさとお脱ぎなさい。あなたは一見、行ない澄ましているふりをしているが、そいつは偽りのうわべというものさ。
ねえ、善人ぶり屋さん、それでいて通人の面汚しのようなあなた。清浄行の怪物みたいで、また遊女と付き合うとはね。そいつは矛盾した振る舞いでさあね。〔相性の悪い〕食物の食べ合わせみたいですよ。清浄行の絆に縛られたまま、彼女にしがみついているあなたのやっていることは、マーリカー[37]の花を毛抜きでむしり取っているみたいなことですよ。
「いや、今はもう、そんな迷いから醒めております」
って。いやいや、カラスが断食に入ったなんておっしゃっても、誰が信用するもんですか。

「もしあなたが思いやりのある方でしたら、どうかこの私を弟子の一人に加えてください」
とな。それは、それは！ あなたは正道に戻られましたな。もしも本物の通人になりたいと心を決められたのなら、まずただちに、遊女たちの愛情にたいする鉄格子みたいな、偽りの衣装を脱ぎ捨てなさることが大切ですぞ。それからヴィタと称されるがよい。
「おっしゃるとおりにいたします」
とな。それでは、ご褒美をさしあげましょう。あなたが、ご自分のお好きなように率直に振る舞われますように。私の次の祝福の言葉をお受けください。

　着衣は剝ぎ取られ地に落ち、
　腰帯、腰布は緩み、恍惚となりし彼女、
　両の手を交わして、
　胸のくぼみ、腹の三筋、臍を次々と隠す、
　恥じらいに堪えず座り込み、
　「いいえ、いいえ、いいえ、私を放してくだされ」と
　叫んでいる、かの愛すべき娘を、
　寝台に導いて、汝(なれ)は、
　愛の収穫のお初穂をいただくべし。（一九）

「結構なお言葉を賜わりまして、私はすっかり気分がよくなりました」
とおっしゃるか。さて、もしそうならば、師にたいする謝礼はいかがですかな？

「これ、このとおり、拱手敬礼いたし奉ります」
とな。おお、それはまことに過分のことです。さて、これで私には弟子ができました。しかし実際のところ、あなたは弟子どころか先生ですよ。ご自分のお好きなように気ままに振る舞いなさい。私はこれで失礼しましょう。

（ひとまわりして）
おお、なんとまあ、素晴らしいではないか！　この花市場の混みあった店々のあいだを吹き抜けてくる快い風は、いろいろな花に触れ合って、かぐわしい薫りを満ちあふれさせ、春の真昼の汗ばみに触れて心地よく近づいてきます。それは私を出迎えて、名を告げるかのようです。

（花の並んでいるのを見て）
さまざまな花で体ができている「春」という貴婦人の姿よ！

美しく花開いた蓮という顔、
白き花々の蕾なる歯、
若き青蓮なる瞳、
赤いアショーカ樹の花という震える唇、
蜜蜂のささやきという甘い言葉、
きれいな花束という乳房、
花冠で豊かに身を飾り、美妙な花のつづれをまとい、
輝く花環の帯を締めている、
花市場は、げに、そのような花々にことよせて、
「春」の貴妃の姿で現われ出づる。（二〇）

ああ、このように、いっぱいに立ちこめる花々の香りに魅せられた私には、ここをさっさと通り過ぎるのは難しいことだ。

（ひとまわりして）
おやおや、またもや別な、もの笑いの種が現われたぞ。なんと、昔、役者にして通人だったムリダンガ・ヴァースラカではないか。遊女たちに老牛先生とあだ名をたてまつられている男だ。若くてきれいな唱い手ナーガダッタ氏の家から出てきたぞ。藍で髪を染めて、水浴をして、油を塗りたくり、身を飾りたてて、奴は自分の老齢をぼろ衣で隠そうとしているわい。でもこの男、今でもなかなか皆に人気がある。黙って通り過ぎるわけにもいくまい。とにかく、からかってやろう。
（身を向けて）
老牛先生、ずいぶんお年をおとりになったけれど、結構なお布施の食事にあずかっておられますな。なんとおっしゃる？
「この老いた遊び人めは今の有り様が気に入らないので、ちょうど年とった蛇みたいに、老いのぬけがらを脱ぎ捨ててしまうんですよ」
いや、自分の生気までも脱ぎ捨ててしまっているように見受けられるよ。ま、とにかく、あなたはなんともお若い。若返りの秘術に成功なさいましたね。とすれば、

頭は色染めをして、若造りに見せかけを装い、
口ひげの白毛は毛抜きで手入れされ、
頬をすっかり剃った顔、
かくて丹念な手入れによる美質の威力を備えし躰は、
古い茅屋の白亜で塗り替えられしごとく、
若さを顕示す。（二一）

なんと言われる？
「古いお酒ほど、芳醇なものなのですよ」
となア。そいつは、あなた様の内心の願いというもんだ。三果や、ゴークシュラの実や、銅の粉[38]などお使いになって、せいぜいうまくゆきますように。では私は失礼しましょう。

（ひとまわりして）
おや、いま私がここへ足早にやってくると、賭博場のテラスのかげの石柱の後ろに、身をひるがえして隠れてしまった男がいるぞ。
（見て）
なるほど、なるほど、わかったぞ。シャイシラカじゃないか。いったい、どうして奴さんは私に会うのを避けようとしているんだろう？ マーラティカーからの女使者を強引に自分のものにしてしまった、あの無作法な振る舞いについて、自分自身いささか忸怩となっているのかな？ ひとつ、からかってやりましょう。

おい、バラモンの息子さん！ 知り合いとの出合いからそんなに身を隠そうとしたって、傘で月の光を隠そうとするのと同じではありませんか？〔無駄なことですよ〕
やあ、奴さん、姿を現わして笑っているぞ。なんですって？
「水先案内をしてくださる我が友人、ごきげんよう」
ねえ、きみ、どうしてこの私が〔恋の〕水先案内人なのですか？ 私はそんな男女の秘められた無鉄砲な愛情問題からは、すっかり締め出されているのに。なんですって？
「そんなことはありませんよ」
ですって。まあまあ、色事の落穂拾い人君、そんなふうに言うなよ。シャイシラカの家に仏教の尼さんが住み込んでいることは、皆によく知れ渡っているのだ。あんたのところに、恋に悩むあの華鬘づくりの娘マーラティカーから、あの尼さんが使者として送られて来たのじゃないですか。そして、清楚にして可愛く若く美しい獲物ともいうべき風情に、あなたは眼をつけて、ちょうど先物より目の前の現物だと考えて、手をつけてしまったんですね。なに？
「いや、きみ、将来の幸運を期待して、今、現に目の前にある悦楽を放棄してしまうなんてことは、人間の追求することじゃありませんよ。灯明を手にしながら、火を探しにいくことはないでしょう」
なるほど、そのとおり。今、あなたが詳しくこの件について、しゃべってくれなければ、秘め事としての味も素っ気もなくなってしまいますよ。さあ、詳しく聞こうじゃありませんか。
「でも、自分の不行跡のつぶさを、誰が明らかにしましょうか。けれど、まあ手短かにお話ししましょう。彼女は、力づくでつかまえられて、私に恐れ気もなく次のように言ったのです。

襲いかかりし汝は限度を越えた振る舞いをなせり、悪漢よ。

妾（わらわ）には礼儀を尽くさるべし。
使者として来たりし者にたいして、
汝の扱いは当を得ず、浮気男よ。
人気なき他人の家に来たり、
妾は手荒く拘束さる。
かかることを為さざるべし。許せ、愛しき人よ。
妾を放せ、他人の来ぬうちに。[39]（二二）

と」

おお、それは結構でしたな。ちょうど太鼓の合図もないままに、芝居の幕がさっと開いたようなものですな。愛の突破口を開く[40]ことができて、ご立派でした。ヴァシシュタ家のあなたは、ヴィタの称号を確保されましたな。ご多幸を祈ってますよ。私はこれで失礼しましょう。

（ひとまわりして）

おや、なんと！　愛欲を求めて客が集まっている遊女の館の前だぞ。ここここそは、

愛欲への耽溺の館、手練手管の教え場所、
幻術の宝庫、虚構の温床、
財貨なき者には入りがたく、
かつ、苦患をも歓びと覚えさす、

（ひとまわりして）

はて、あの男は誰だろう？　薄汚れた上衣をひっかぶって、身を縮こまらせて、遊女屋の庭先からあたふたと出てきたあの男は？　あれあれ、あたふたして赤茶色の袈裟（けさ）がずれ落ちているのが見える。うん、奴は法林に住んでいる[41]サンギラカという名のろくでもない仏教僧だ。

それにしても、仏陀の教えはなんと有り難いことか！　こんな見せかけに頭を丸めた悪坊主で汚されていても、毎日、人々に崇められているとは。カラスの食べ残しで汚れていても、聖地の水は清浄なりということかな。

奴さん、私を見たとたん身をひそめて、やりすごそうとしているわい。よろしい、私の言葉の矢に当たらずには逃げられませんよ。声をかけてやりましょう。

（身を向けて）

もしもし、僧院に巣食う屍鬼[42]さんよ。まるでフクロウみたいに、昼日中を怖がって、どこへ逃げ隠れようとしているのですかい、あんたは。なんですって？

「いやなに、今、僧院から出てきたところですよ」

実のところ、この私は、貴僧の僧院生活へのご専念については、よく存じておりますよ。ねえ、行ないすました方よ、花街という池から出てきた鷺のようにびくびくとして、いったいどこへ行こうとなさるので？　ふうん、あんたは愛欲の托鉢に回っているというわけかな。

「私がここへ来たのは、母さんを亡くして悲しんでいる信者の遊女を、仏陀のお言葉で慰めるためなんですよ」

あんたの口から出てくる仏陀の言葉なんか腐りきってますよ、水と間違えて、酒で口をすすいでしまうようなものだ。やれやれ、

迷妄のあまり、あるいはまったく偶然にもせよ、
花街に入り込める比丘は、
ダッタカの教典[43]で用いらるる聖音オーム[44]のごとく、
汚れしもの也。（二四）

「あなた様、お許しください。私どもは一切衆生にたいして情け深くあらねばならぬのではありませんか」
と言われますか。いやまったく、いつも情け深い貴僧は、渇愛を断ち切りなさって、最終の涅槃に到達されるでしょうよ[45]。

ははあ、奴さん、合掌して拝んでいるぞ。

「もう勘弁して、私を放免してください」
とな。うん、わかった、もう無駄な努力はおやめなさい。どのみち、あんたの解脱なんか（あんたを放免するのは）、まったく難しいことさ。え？

「私はもう失礼いたします。非時食[46]は禁じられていますので」

へえ、この男はなんでもやってしまってるんだ。五戒[47]を堅持せんとするこの比丘にとって、適時に食事をするという掟を破らないってこと、それだけがいま残されているというわけだ。

さあ、あんた、どうぞ消え失せなさい。形だけでも剃髪しているので頭皮のまだらが見えているんで、恥ずかしいのですかな。さあ、お行きなさい。いやまったく、あんたは悟りすましておられるわい。

やれやれ、この根性悪め、姿を消してしまった。さてと、ろくでもない、釈迦の比丘を見ていて汚れちまった眼を、どこかで浄めなきゃあならないぞ。

（ひとまわりして）

おや、このヴィタ様の眼を浄めてくれるものが現われたぞ！　あの娘は、たしかヴァサンタヴァティーの娘のヴァナラージカーだ。名のとおり、森の小道のように、花々の集まりを体に取り込んだようなきれいな娘だ。作法どおりに神々に供養を捧げ礼拝し終えて、愛神の神殿から下ってきたところだ。本当に敬虔な態度で受け頂いた花の飾りで粧い、誇らしげにしているわい。これから愛する男のところへと、あの娘は行こうとしているのに違いない。彼女にうまい言葉で話しかけて近づいてみましょう。

（身を向けて）

ヴァナラージカーさん！　春の花の初穂のお供えをなさったあなたは、〔今やって来た〕客人のことを、ないがしろにはされないでしょうね。なんですって？

「まあ、よくいらっしゃいました。手を合わせてご挨拶いたします」
とな。こりゃ、ご愛想のよい、その若芽のようなお手先を受け入れましょうぞ。あなたのお体の中に、今しがたやって来た春の季節が入り込んでしまったんでしょう。

「どんなふうに？」

まあ、お聞きなさい。

香ぐわしきヴァーサンティーやクンダの花とクラヴァカの
入り混じりし花束でいっぱいに飾られしそなたの束髪、
アショーカの花を挿せし髷、
また、豊かな胸はシンドゥヴァーラの花で粧われ、
マンゴーの花をつけし若枝の揺れる耳の飾り、
おお、美しき娘よ、そなたの指に花束が満たされ
まさにそなたは春の化身として逍遙する。（二五）

さて、先へ行こう。

「この姿は、あなた様へのプレゼントですわ」

これは、これは。ま、この場はひとまず、あなたにお預けということにしておきましょう。時機が来ましたら〔どなたかに〕さしあげましょうよ。では、どうぞご機嫌よろしゅう。

（ひとまわりして）

おお、ここは、例のイリマの愛人のターンブーラセーナーの家だぞ。あいつは、毎日ここに入りびたりと聞いている。さて、訪ねてみようかな。

（ちょっと考えて）

ま、声をかけずに通り過ぎるのもまずいだろう。立ち寄ってみることにしよう。

（中に入って）

どなたかいらっしゃいませんか、このシャシャめを取り次いでくださるどなたかが、この友人のお宅に？

おや、ターンブーラセーナーが敬意を表しにあたふたと出てきたぞ。あわてて、ずり落ちた上衣を引きずりながら、自分で玄関にやってきたな。こりゃあ、過分のお出迎えというものだ。なんだか、私を中に入れたくないみたいだな。だから、ここで戸外に用件を済ませに出てきたのだ。なまなましい愛の名残の印を身につけているところを見ると、今しがた情事を味わったばかりに違いない。いやまったく、イリマは昼下がりの一戦を楽しんだに違いない。あの男はさても色好みであることよ。とにかく、彼女をからかってやりましょう。

ターンブーラセーナーさん、どうしてそんなにご丁寧なご挨拶を賜わるんですかな？　色事のお疲れで、息も整わぬままに、「まあ、よくいらっしゃいました」とあなたはおっしゃる。愛欲に溺れているあなた、まずこの扇を取って〔おしずまりなさい〕。

本当に激しく体を使ったに違いない、ターンブーラセーナーは。

もし、抜け目ないお姐さん。少しは力が戻りましたかな？

「〔おっしゃることの意味が〕わかりませんわ」

ですって。あの情人と抱き合ったので、彼女の胸のふくらみから、黒沈香の移り香がしてくるようだわい。ちょっと、聞いてみましょう。

もしもし、欲情に飽くことのない姐さん、絶え間ない夜の戯れ魔のようなイリマを、あんたは昼間も安息させないってわけですかな？　もっとも、夕方にも明け方にも、お護摩[48]は焚きますものねえ。

「まあ、いつも他人をおからかいになることがお好きなのね！」

ですって。いやそんなことはありませんよ。お馬鹿さん！　あんたは「外見をつくろえばつくろうほ

ど、事はあらわになるものぞかし」ってことを、以前聞いたことはありませんか？　なに？
「あなた様、どうしてそんなことを？」
お利口さん、どうして私が気がつかないでいられましょうか。なぜならば、

歪みし額の香印[49]、押しつぶされし黄粉の点彩[50]、
頬にまで垂れし束髪、蓮華の耳飾りもはずれて、
裂(さ)れた紅唇、虚ろな眼差し、その顔はすべて、
そなたの愛人を昼下がりの戯れに
溺れせしめしことを示すのみ。（二六）

なに？
「いいえ、私は今しがた眠りから覚めたばかりなんでございます。それでもお疑いなさるの？」
うん、わかった。様子でわかりますよ。あんたのことなら、ほんのわずかのことだって、お察しできないことはないもんね。

まどろみの果て、爪や歯の跡をお身体に残されしと拝察す。
祖霊たちは喜悦さるべし、御供物をどうぞ！
〔なぜならば〕幸多き女よ、そなたの肩布は右肩にまとわれてあり。
しかもそのうえ、急ぎしあまり、そなたは気づかず、
かのつたなき職人奴、彼によりて、そなたの沓が、
誤りて二つながら左足用に作られしことを[51]！（二七）

さあ、姐さん、盗んだ品物を身につけたまま捕まってしまった小盗人さん、今どこへお逃げなさるのか？
おやおや、彼女、家の中へ逆戻りして、彼氏と一緒に吹き出して高笑いしているわい。
（耳をそばだてて）
なんと、イリマのやつ、
「遊び人たちのお師匠さん、どうか中へお入りください」
と言っているぞ。やあ、きみ、情欲の車につながれた二匹の牛の頸木(くびき)を、誰が分かち切ろうとするもんですか（情事の邪魔なんかしませんよ）。間断なき色事の宴をお続けください。ガールギーの息子さん、私はこれで失礼しましょう。
（ひとまわりして）
あれ、そこの外扉のところに、神々への捧げ物を供えているのは、どこの娘だろう？

顔に生気なく、憂いに心閉ざされ、
目に黛を刷(は)くこともなし。
粗衣を身にまとい、長く豊かな髪も油気を失い、
腕輪は緩みしまま、投花せし指先より指輪は抜け出で、
この細身のむすめ、いや痩せ細りしか。（二八）

うん、彼女は、パーンディーラセーナーの娘のクムドヴァティーだ。まあ、気の毒に。このかわいそうな女は、見違えるばかりの様子になってしまったわ。いったい、この女は、娼家のしきたりに背いて、誰のために別離の誠を尽くしているのだろう？

うん、わかったぞ。彼女はマウリヤ家の世子チャンドローダヤ様にぞっこん惚れ込んでしまったと聞いている。それで、あの身分の高いお方は、いま土侯たちの鎮圧のために、軍勢を率いて出立したというじゃないか。ああ、だから、チャンドローダヤとの別離を悲しんで、クムドヴァティーは生気を失ってしまったというわけだ(52)。

まったく、彼女は良家のご夫人たちもかたなしにしてしまっている。そのうえ、彼女は、自分の家の露台にいて、投げられるお供物をむさぼり食らおうとするカラスをも、歓迎の言葉で迎え入れている、という有り様だ。

「高殿の窓の額印(ティラカ)にも例えらるる汝、
祖霊の式の供物に飽かむ賓客よ、
汝に幸いあれ。
逆旅の客舎いづこなる、
我が君こそは、いつ帰り来まさん、
我が命失せぬ前に。
君帰り来ませしその時には、汝飛び行きて去れ、
他の門のアーチへと。

再会できれば、我は悲しみより救われて、
そして、いとしき人に濃き酸乳の粥を
心から捧げ供えるがゆえに(53)！」（二九）

いや、本当に誠のこもった愛の告白だな。王侯のひそかな持ち物としてもピッタリな彼女だ。からかうに堪えませんな！　彼女が貴妃としてのヴェールをどうか授かりますように。さあ、邪魔しないで立ち去りましょう。

（ひとまわりして）

おや、庭の右手に、環飾りのチャラチャラする音に、驚いて飛び回る小鳥たちのさえずりの混じり合ったような音が聞こえるわい。うん、この小庭の門は開いている。ちょっと、のぞいてみよう。

（見て）

なんと、眼の保養というものだ。ほかでもない、パーンチャーラダーシーの娘のプリヤングヤシュティカーじゃないか。豊かに盛り上がった腰に、若さの思い込みが高揚し、青春という新しい王権にのぼせ上がっているみたいだ。いろんな媚態、悩ましい色気、優しさなど身から振り撒きながら、女友達と一緒に毬つき遊び(54)をしているぞ。彼女は、

揺れ動く珊瑚のごとき指をそなえし手に、
鶏冠石の朱さをもつ毬を弄び、
若芽が花をいらうがごとく、

かがんだり伸び上がったりしながら毬を撞く。
ニーパ[55]の蔓草と見まがうばかりの彼女なり。(三〇)

なるほど、彼女を眺めるのは、まったく眼福の至りというものだ。うん、でもどんなに満足した人でも、甘露については飲み飽きるということはありません。だから、ひとつ彼女に話しかけてみましょう。

(近づいて)

プリヤングヤシュティカーさん！　あなたは毬遊びにこと寄せて、女友達がたに踊りのうまいのを見せびらかそうとなさっていらっしゃるの？

彼女はニコニコ微笑(わら)っていて、なんにも答えず遊び続ける。ああ、お付きの女どもは毬つきの回数を数えている。どうやら、彼女は女友達と賭け勝負をしているらしいや。

ああ、本当に賭け勝負を楽しんでいるわい。いや、まったく、かがんだり、伸び上がったり、回ったり、跳ねたり、身を引いたり、近づいたり、さまざまに動いて結構な見ものだなあ。ちょうど運良く、こんな見ものに出くわしたってわけだ。まったく、多言を要せずだ。

飛び跳ね、かがみ、揺れ動くと、着物が花開くようにふくらんで、色好みの風がその中へ入りたがって彼女を追いかけまわす。まったくのところ、生来かよわいから、片手で支えても、若い乳房は重みで垂れ下がり、背中が折れ曲がってしまわないかと心配になる。知らん顔をして通り過ぎるわけにもいくまい。声をかけてみましょう。

もしもし、若さに酔った娘さん、きゃしゃなご自分をものともせずに、〔遊びに〕熱中されていますね。まあ、ちょっと、休まれたらいかがです。私はあなたに話しかけてるんですよ。

なんと、彼女はますます熱中してきたぞ。それでは、まあ、彼女に祝福を与えてやることにしましょう。

跳ね返り娘よ！
耳環は揺れ、両腕は振り回され、
髪に挿す花は、はらりとずれ落ち、
向きを変え、くるっと回る、すばやい動きに合わせて、
腰帯の鈴飾りも軽やかに揺れし、
毬を追うに夢中なるそなた、
ご無事であれかし。
揺れ動く乳房の重みで、
腰が折れ曲がりませぬように。(三一)

百回、突き終え、立ち止まったぞ。プリヤングヤシュティカーさん、お友達との賭けに勝って、どうもおめでとう！

「まあ、どうも。私の賭けて勝ったぶん、いくらかお裾分けいたしましょうか？」

ですって。いや、娘さん、あなたのお姿を拝見できただけでも、まったく至福というものですよ。どうか私をお忘れなく。それでは失礼します。

(ひとまわりして)

おや、これは、我々の仲間たちのお楽しみの別の場所に通りかかったぞ。チャンドラダラの愛人で、ナーガリカーの娘のショーナダーシーの戸口じゃないか。この私め、中へ入ってみましょう。黙って通り過ぎるわけにはいかぬもの。

（中に入る身振りをして、見て）

ショーナダーシーが、なにやらふさぎ込んで、門口に座っているぞ。どういうわけか、今アクセサリーを付けていないが、そのためかえって姿は魅力的です。うす汚れた被衣で半身を被って、赤栴檀を額に付けて、白い薄布で頭を包み、月の顔をうつむけては、膝に乗せた竪琴を爪で少しばかり掻き鳴らしている。

カーカリー音で甘くゆるやかに、カイシカ調の嘆き節[56]を口ずさんでいるじゃないか。男への恋の想いにひたっているに違いない。だって、カイシカの調べは、すすり泣きのシノニムなんだから。彼らのあいだの愛のいさかいの口論を、私はチャンドラダラ自身から[57]聞いていなかったかな？　愛人に邪慳な態度をとったので、彼女は悔やんでいるに違いない。よし、ちょっと彼女をからかってやりましょう。

ショーナダーシーさん、どうしてそのように花街の中で女苦行者ふうの身なりをなさっているのですか？　ねえ、娘さん、あのチャンドラダラが何か悪さをしたんじゃないでしょうねえ。泣いていらっしゃるのがお答えですか？　まあ、涙をお拭きになって、お話しくださいよ。

「人を高慢ちきにさせる術に巧みな私の女友達のせいで、私はひどい目にあってしまったんですわ」ですって。ショーナダーシーさん、あなたは誰よりも大事な女友達のことで頭にきているのですか？

「だって、彼女の意地悪い忠告のおかげで、こんな苦境を味わっているんですもの」

いや、そいつは愚かというものだ。その彼女にちゃんと言ってやりなさい。次のように。

あなた、女使者よ、
つねに〔かの人に〕冷たき素振りをするは、私の罪なれど、
今、もはや一時たりとも、
私は〔かの人に〕権高くありえざるなり。
『意地を通せよ』とのなだめようとせぬあなたの諫言に従いしゆえ、
非道な友よ！
あなたは、私を恐ろしき愛の秤（はかり）に乗せて楽しむや、
私はかくなりぬ。
柄にもなく、緩みし腰帯を両手もて支え持つほどの〔痩せ細りし〕、
この我が身ぞ。（三二）

「今では、恋愛の神様が私の誇りを打ち負かしてしまいました。でも、幸運に恵まれ、うぬぼれ心のおありの、あなたのお友達（チャンドラダラ様）は、とてもかたくなでいらっしゃるのです」

だったら、どうして逢いに行かれないのです？　恥ずかしがっている場合じゃありませんよ。

顔をうつむけ、吐息つき、涙たたえし眼にて、
汝は何を憂えるや。
恵まれし女よ、
身につけし飾りの緩めるを、しかと直視せよ。

傍観者のよしなき言葉を振り棄て、
〔汝が〕愛人をかき口説くべし。
手をこまねいて何の利得ありや。
愚かな娘よ、
愛の昂まりあるときに、過度に誇り高きことは、
蔑視と異ならざることになりうべし。（三三）

「女のほうが男をなだめよなんて、それこそ高慢ちきではありませんか！」

いや、そんなふうにお考えなさるな。権高い娘さんよ。ガンジスの大河だって、海に注ぎ入るではありませんか。(58) もう恥ずかしがってる場合じゃありませんよ。ともかく、思いをかなえることですよ。私もチャンドラダラによく言い聞かせましょう。さあ、もう十分でしょう。しばらくのお別れのあいだ、預託されていたあなたの恋の祭火を、今日私が再びお点けしてあげましょう。(59)

おや、涙は止まらないが、彼女は微笑みはじめたぞ。雨のそぼ降る季節に月の光が射してきたようなものだ。

美しい娘さん、さあもう泣くのはやめにしましょう。幸せがやって来ますよ。

「どうかその約束を果たしてくださいまし」

ですって。〔明日の〕朝になれば、お分かりになるでしょう。やれやれ、涙がおさまりましたな。それでは、私は失礼いたしましょう。

（ひとまわりして）

おや、またまた愛欲の話題に出くわすことになりそうだぞ。そこにいるのは、ナーガリカーの娘のマガダスンダリーじゃないか。秋の名月のような美貌の持ち主だ。柔らかで、艶やかな、波打つ黒髪の香りかぐわしく、青睡蓮の花びらのように揺れ動くふたつの瞳、珊瑚よりも美しい朱い唇に触れて、薄紅色の光を帯びて、クンダの花の白い蕾のような美しく研ぎ澄まされた歯並びだ。豊かな頬と乳房と腿と腰が素晴らしい。

外門の扉に半分身を隠して、右手の二本の指でカーテンの裾をつかんでは、左の蓮のおみ足のへりで、地面にリズムを踏んでいる。そして、なんとも魅力的な音色で甘く高く、流れるような旋律を響きのよい装飾音で飾って、シャジャ調の耳に快いヴァッラパーという名の四行小唄(60)を口ずさんでいるではないか。

溢れ出る愛欲の情が、あの眼つき、眉のひそみで表わされているぞ。どなたか、幸せな殿方のご到来を待ちかねて、立っているに違いない。いったい、インドラ神のように、愛の祭祀に招かれているやつは誰なんだろう？　よし、彼女に聞いてみましょう。

もし、花街という雲間の中の稲妻のような娘さん、ちょっとお尋ねします。

黒き瞳、白き眼、紅き眼尻、
蠱惑の流し目。
たが果報者のため、想いに満ちた眼差しで、
そなたは戸外に顔を向け、見つめ居るや？
月の顔（かんばせ）の女よ！（三四）

おや、なんとまあ、彼女はおびえている若い牝鹿のようなくりくりとした眼つきで、私を見ているわい。おお、彼女はハッと気を取り直したぞ。
「そんなことではございません。私はただいま梵行中(61)でございまして、『春』の季にあたり、断食をいたしておりますの」
おお、それは、それは。信ずるにたるというべきか。でも、あなたの唇の鮮やかな噛み痕は、何を物語っているのでしょうかねえ？
「残りの雪で冷えびえとした早春の嵐の痕でございますわ」
いや、なるほど。合点がゆきました。

唇は歯痕にてささくれし、そなた、
みずからの戒行をこそと申されしゆえ、そなた、
誓いを破ることなきは明らかなり。
そなたは接吻という、
月の満ち欠けに合わせての行(62)をなせしのみにて。（三五）

やれやれ、彼女は扉のかげに顔を隠して、クスクス笑っているな。とにかく、いっそうご修行お積みなさいますように。どうも失礼いたしました。

（ひとまわりして）
さてと、遊び女連中との由ないおしゃべりの鎖から、どうやらこうやら抜け出て、〔目指す〕デーヴァダッターの家にたどり着いたぞ。デーヴァダッターはもう出かけたかな。誰かに聞いてみましょう。
（見て）
おお、女役者の息子のダルドゥラカが庭の横戸を通って出てきたぞ。奴さんは、芝居の師匠ガンダルヴァダッタの弟子でもある。彼に聞いてみましょう。
（身を向けて）
やあ、ダルドゥラカ君、どこからおいでかね。デーヴァダッターさんはどうしていらっしゃるか、ご存じですか？　えっ、
「デーヴァダッターさんは、ムーラデーヴァ様のところへご機嫌伺いにお出ましになったところですよ。この私は、先生にことづかって、デーヴァセーナーさんに会いにきたのですよ」
ほう、どうして？
「ガンダルヴァ先生が、クムドヴァティーをヒロインとする芝居(63)の役の件で、台本を届けるようにということで」
その届けた台本をデーヴァセーナーは受け取りましたか？
「先生に敬意を表して、受け取りはしましたけれど、そばにいたお付きの女に渡してしまい、クムドヴァティーに礼拝する身振りをしてから、『今、わたくし、体の調子がすぐれませんの』と言うのですよ」
ほう、それじゃ、私の推測どおりだぞ。彼女が恋患いに取り憑かれているのは明らかです。ねえ、ダルドゥラカ君、ところで、その台本には何と書いてあったのですか？
「どうぞ、ご自分でお読みください」

（手に取って読む）

恋に憑かれし奔放な乙女たちは、
腰まわりに付きし秘め事の悦楽の印(しるし)を、しかと保つべし。
その印こそは、なやましき愛の花、
乳房のふくらみに付きし月形、愛欲の樹々に萌えし若芽なり。
閨(ねや)のいくさにて蒙りし創(きず)、
肉欲の戦車の闘いに消耗せし牛馬への一鞭とも例うべく、
〔また〕さまざまな艶(なまめ)かしさのあかしなる、
爪先にて付けられし、その印を保つべし。（三六）

扱いにくい、じゃじゃ馬ならしに出かけてきた私にとって、こいつは、まったくめでたい。この仕事がうまくいくように思えるぞ。

ダルドゥラカ君、今、デーヴァセーナーがどこにいるか、ご存じですかな？

「中の小苑に行ってしまったんです」

とな。ほほう、まさに恋の工房にいるというわけだ。それではあなた、どうぞお出かけなさい。私は中に入らせてもらいましょう。

（中へ入って）

ああ、デーヴァセーナーがいる。

痩せ細り、もの憂げに、蒼ざめうちひしがれ
明け方になって幽けくなった月光のごとき手弱女(たおやめ)、
格別の傷みを秘め、いと優しき妙薬が入用な、
恋の病を抱くなり。（三七）

だから、内証事を守り、友達の分を越えて親身になってくれる女中のプリヤヴァーディニカーに付き添われて、人目を避けてここで風に吹かれてぼうっとしているのだ。彼女は恋の思いにぞっこん取り憑かれてしまったらしいぞ。まったく、恋する人というものは、ひとりぼっちでいたいものとみえる。やっと私の手の届くところに入ってきたのだから[64]、近づいて声をかけてやりましょう。

（近づいて）

デーヴァセーナーさん、内輪でおられるところ、お邪魔してあい済みませんが。

「おや、まあ、ごきげんよう。よくいらっしゃいました」

これはご丁寧なご挨拶。まあ、どうかそのままで。

「どうぞ、こちらへお座りくださいませ」

それでは、ここへ腰掛けさせていただきましょう。それにしても、お身内の方々をどうしてそんなに心配させているのですか？　そもそも、この眼には見えない、隠れた痛みでご自分のみがお気づきの特別のご病気は、何なのでしょうな？

「いいえ、何でもございませんのよ」

ですって？　なんと、小利口ぶっている娘さん、私を避けようとしたってだめですよ。なんと言ったって、あなたは、いつも私におもちゃを欲しいってねだりに来るような、可愛い娘さんなんだから。

しかも、この私は、ムーラデーヴァさんの親友のシャシャですものね。ご遠慮なくお心を打ち明けなさい。この憂鬱の原因をおっしゃってください。

病ならずも身は弱り果て、蓮の掌をもて頬支え、
瞬きもせぬ沈思の眼差し、心はうつろ、
出るはなま欠伸(あくび)ばかり、顔色も蒼ざめたり。
汝が諸々の器官を燃やし、息をあえがせくたびれさせ、
かつ、喜びを与えぬでもなきこの変容。
一途に思い詰めしあまりの、
この初めてかかりし病はいかなるものぞ、
愛の女盗人よ!(三八)

ほんとに、どうしてこの娘はため息ばかりついているんだろう? おお、恋心の炎が掻き立てられているのだ。心の内を探ってやりましょう。

この私をご信頼の受け皿となさらないのでしたら、ご健勝のほどをお祈りのみして、私は失礼いたしましょう。

「まあ、なんて、お気短かでいらっしゃる」

ははあ、いよいよ彼女は事を打ち明ける気になったようだ。

娘さん、こんなあなたのお体のぐあいを見て、どうして平然としていられるもんですか。それにしても、ぐずぐずなさっていると、また厄介なことになるかもしれません。さっさと悩みの種をお話しください。

「いいえ、なにもあなた様に特別の隠し事をしているわけではございません。でも、これは春という季節の本性なのでございますの。目上の方々に厳しくしつけられて、心を動かさぬようにしていますのに、その私の心を、これといった原因もなく、高ぶらせ悩ませるのでございます」

とおっしゃるのですか。ごもっとも、これは病気と名付けるほどのものではありませんな。恋の盗人さん、あなたデーヴァセーナーさん、ご自身がお年頃の乙女に成長なさってしまったことに気がついておられますか? もしそうならば、このうえ悩み続けなさることはありますまい。季節が変われば、(65)自然にお元気におなりになるでしょうよ。

なんと、恥ずかしそうにしているな。

ところで、〔お付きの〕プリヤヴァーディニカーさん、その葉簡に何と書いてあるのですか?

「お芝居の役について書いてございます」

じゃあ、ちょっと拝見。

(手に取って、見て)

クムドヴァティーのお芝居で、シュールパカに懸想した王女を、乳母がこっそり教え諭すところ。

酔い痴れし女よ! 汝の胸の乳房はいまだ熟れずして、
腹の若草も萌え上がらず、情事の駆け引きにもいまだ疎し。
未熟者よ! 乙女心の切ないうずきを鎮めたまえ!
世智に長けた汝の女侍者たちは、
不行跡の手本を絶えず汝に教えんとしている。

早熟の乙女よ！
いかにして、愛神の挑みし戦いに身構えなされしや？（三九）

なに？　デーヴァセーナーさん、
「そんなこと、私、何も存じません」
とおっしゃるのですか。ちらっと本音を漏らされましたな。つまり、私はそんな恋愛にふけっていますとおっしゃっているわけだ。
「まあ、あなた様は、なんて意地悪な……」
いや、私を避けようとなさるな。睡蓮の花が開けば[66]、たとえ雲に隠れていても、月の昇ってきたことが察せられるというではありませんか。さあ、男心への大敵である娘さん、ここから立ち去りなさい。あなたはたいそう悩んでいらっしゃる。

心を打ち明けぬ女よ、
「愛に悩むことなし」と、くりかえし申されるが、
おお、小賢しき娘よ、
生来かぼそき身の、さらに痩せ細りし理由を告げよかし。
手にて支えるその頬よ、緩みし腕輪よ、吐息に色失うその顔よ。
〔愛の〕病に取り憑かれしこの人の、
など平静を保つべきや？
ごまかし屋の娘よ！（四〇）

おお、プリヤヴァーディニカーさん[67]、
「初めて恋をなされて、お嬢様は幸いにも、特別にすぐれた男のかたのことだけ、お思いになってらっしゃるのでございます。普通の殿方など問題になりませんのよ」
とあなたはおっしゃる。では、このアヴァンティの町（ウッジャイニー）で特別にすぐれた男性と呼ばれるかたは、いったいどなたのことなんでしょう？
「あなた様は、どなたとお考えでしょうか？」
うん、カルニープトラさんでしょうよ。他に誰がおりましょうか。というのは、彼こそは、

良き家柄に生まれ、学問を修め、
しかも驕り高ぶることなく、
笑みをたたえて話を交わし、
聡明にして寛仁、語り口は優しく、
容姿端麗にして、若々しさに溢れ、
弓は持たずとも、さながら愛の神の、
化身のごとき丈夫なり。（四一）

おや、どうして、うつむいてしまったのだろう、デーヴァセーナーは？
着物の編み縁をいじくりまわすことはありませんよ。そわそわしている娘さん！　さあ、お話しなさい、私を信頼なさるのでしたら。

それでも彼女は黙ったままですな。いや、恥じらいは、愛に上気している初心な娘さんにとっては特に、魅力の資産といいますからね。なんとか、すすんで答えてくれるだろうか？

もちろん、この特別にすぐれた男性と呼ばれるのは、カルニープトラのことなのだが、本当の深い真相がいまだ私には合点がゆかないから、ここは気を落ち着けて彼女に心の中をしゃべらせることにしましょう。

デーヴァセーナーさん、他人の情事に私が首を突っ込んでも、どうってことはないのですけれど、私の立場は本当に中立なんですよ。ですから、あなたに忠告できたら良いと思ってるだけなんです。カルニープトラ君は、パータリプトラから離れて〔ここウッジャイニーに〕滞在しているので、身内に逢いたくていらいらして、今ちょっと病気になっているのです。今日、明日には、彼があちらへ出かけてしまうでしょうよ。でも私はまたあなたにお目にかかれましょう。どうか、お体をお大事に。私のこともお忘れなく。

（起ち上がって歩き、すぐに戻ってきて）

なんですって？

「ああ、もう私はだめなのでございます」

デーヴァセーナーが泣き出した。

いったい、どうなさったんです、娘さん。泣くことはありませんよ。うん、わかりました。あなた、よかった、あなたの思いはそれにふさわしい方に向けられてますよ。カルニープトラ君も、〔実は〕あなたに恋い焦がれて、病気になっているのですから。だから、あなたがたお二人は、お互い相手をお薬として飲み合われれば良い、ということ。

「あなた様は、どうしてそんなに自信たっぷりおっしゃるんですの？　恋するものの心は切ないものでございます」

さあ、さあ、ふさぎこむのはおやめなさい。

美しき乙女よ！　ダクシャ[68]を同じ父として生まれし
星宿の娘星たちの、〔ひとつの〕月を愛せざることありや？
一本の根より出でし双の蔓草も
一本のマンゴー樹に纏い付くことありうべし。（四二）

なんです？

「そうでございますならば、私たち二人を救ってくださるような手段をなんとかしてくださいな」とおっしゃるのですか。うん、そうですな。妙案がありますよ。明日、お姉様（デーヴァダッター）は、いつものように、お師匠様のところへ踊りのお稽古に行かれるでしょう。そこで、あなた、そのおりをねらって安心して、カルニープトラ君のところを、ご機嫌伺いという名目で、お訪ねになったらいかがです。でなければ、彼がこちらへやって来てもよいですし。

おや、彼女は迷いだしたぞ！

プリヤヴァーディニカーさん、なんと言われる？

「あのう、カルニープトラ様がこちらへお見えになるのは、あまり良いこととは、私にも思えません。むしろ、私の女主人様があちらへいらしたほうが良いと思います。私たち遊女連中は、なにかというと、陰口を言いたてるものです。ですから、私がなんとかいつものように、踊りのお稽古に出かけられるデーヴァダッター様が、私の女主人様（デーヴァセーナー）を、ご機嫌伺いということでムーラ

デーヴァ様のところへご自身で差し向けられるように取り計らってみましょう」
いや、なんと、プリヤヴァーディニカーさん、あなたは名前どおりのお人だ[69]。そのとおり、彼女があちらへ行ったほうが良いのだ。でも彼女が元気を取り戻さなくては困る。なんです、デーヴァセーナーさん？
「あなた様にお目にかかれたので、すっかり元気になりました」
それはうれしいことを言ってくれるね。これで、私も恋の仲立ちをやり終えたというわけだ。さあ、カルニープトラ君を［しばし］元気づけるために、何かお志のよすがを私に託して贈られたらいかがでしょう。
「でも、何をさしあげたらよろしいのでしょう？」
いや、考え込むことはありません。それには、

朱き蓮の花のごとき、清げに美しき女よ、
初めての愛の高揚（ときめき）の贈り物としてこの蓮華を彼に贈られよ。
そなたの歯で優しく嚙まれ、
そなたの乳房にこすりつけられ、
そなたの粉黛のあとをまだらにしるされ、
そなたの吐息にて幽けく萎れ、
そなたの身に塗り込めし栴檀の樹液にてそのしべも色あせ、
両の掌（て）にまさぐられて茎も弱々しげな、
まさに後朝（きぬぎぬ）のかそけき情趣を漂わす[70]、この蓮華を。（四三）

うん、眼をちらりとさせて、彼女はこの提案に賛意を表したな。これこそは、情事のお取り引きの手付け金として、この贈り物をしかとお引き受けしました。早速、私はこの恋の気付け薬を持っていき、カルニープトラを元気づけてやりましょう。
（蓮華の花を手に受けて、起ち上がって）
それでは、これで失礼いたします。どうか、ご機嫌よろしゅう。次の祝詩をお受けください、あなた！

憚りて心せくまま、
揺れ動く腰の飾り、足の環の音も抑え気味に、
恥じらいて、抱き締める力も弱し、
腰紐もすでに緩みし、
げにひめやかに、ひたむきな初めての愛の手合わせに、
かの愛神はそなたを、情熱の武器を掲げて自ら誘い込むべし。（四四）

（ヴィタ退場）

シュードラカ師作『蓮華の贈り物』なるバーナ終わる。

II

極道と通人の対話

あらすじ　雨季の一日、通人は無聊をまぎらわすために家を出るが、博打場や酒亭に行く金もないので、足は馴染みの花街通りへと向く。そこで顔見知りのさまざまな人たちと出合い、機知に富んだ会話を交わしたのち、遊び人ヴィシュヴァラカとその愛人スナンダーの同棲する家に招き入れられ、そこでヴィシュヴァラカの提起するいろいろな色道に関する質問に応答して時を過ごす。

登場人物

男性
ヴィシュヴァラカ　極道の遊び人
クリシュニラカ　豪商の息子
クンジャラカ　若い遊び人
デーヴィラカ　ヴィタ。本篇の語り手
ラーミラカ　遊び人

女性
ヴァールニカー　遊女マダナセーナーの女中
スナンダー　遊女。ヴィシュヴァラカの愛人
チャトゥリカー　バンドゥマティカーの女中
バンドゥマティカー　遊女
プラディウムナダーシー　遊女。ラーミラカの愛人
マーダヴァセーナー　遊女。クリシュニラカの愛人
ラーマダーシー　遊女。クンジャラカの愛人
ラティセーナー　遊女

時　雨期のある一日

場所　花の都、パータリプトラ

（祝禱終わって、舞台監督登場）

学びの途（みち）にいそしめば、誉れは高く広まらん。
有徳の方を尊ぶは、財宝を持つに他ならず。
その方々を楽します、これぞ義務（ダルマ）と心得て、
我ら〔いざこの一幕を〕開くなり。（一）

というわけでございまして、やんごとなき皆様がたのお愉（たの）しみのために、この芝居を始めることにいたします。

おい、おまえ、お金持ちを喜ばすけれども、金がなくて若さにうずいている不幸な人々をますますがっかりさせてくれるような、そして、睡蓮や、青蓮、白蓮、紅蓮[1]、ニチュラ、ケータキー、カクバ、カンダリー[2]などの萌え出るこの雨季のさなか、何か心を浮き立たせるような唄をうたいなさい。

この季節は、まことに、

髪には雨雲という染油を塗り付け、
体はときおり稲妻と触れ合って喜びに震え[3]、
満開のクタジャ[4]の花衣を身につけし[5]、
この雨季こそは、通人（ヴィタ）のごとくに、
人を魅了するものなり。（二）

（舞台監督退場）
（プロローグ終わり）

（ヴィタ登場）
おっしゃるとおりでございます。

長者の館の宴に響く太鼓のごとき高らかな音も巧みに、
雨雲は驟雨を降らせ、
不機嫌な女のひそめし眉の波型のごとく、
稲妻は地へと光り輝く。
冷たき露を含む風は、熱き抱擁を誘わんとし、
愛神は、耳まで引き絞りし矢を、
恋人の胸のうち深く打ち込めり。（三）

さてまた、次のようでもございます。

恋心を抱いて旅路にある人、はた、遠国へ派され帰国せざる人々、
かかる人々はみな消沈しおり。
邪慳な女を御しえぬ人、はた彼女らに常に激怒するのみの人々、
かかる人々はみな未熟なる者なり。

愛するものを御しうる人、はた愛するものに御されおる人々、
かかる人々は幸せなるべし。
この季節は、げに、雨雲なる触れ太鼓の響きもてかかる触れごとを、
世の隅々にまで行き渡らすがごとくなり。（四）

おお、この雨季には、粋な男たちの心を引き付けるさまざまな出来事があるというわけです。
さて、今は陽の光も雨雲に隠されて、大地は湿っており、何日も前のニュースみたいにいささかみずみずしさの失せた昼下がり〔ではあるけれども〕、クタジャの花の香りに魅かれて蜜蜂が飛び回り始めたぞ。孔雀も〔羽を広げて〕[6]踊り始めた。少し冷え冷えとして、しっとりとしている野原を歩き回るのも気持ちよかろう。紅虫たちが這い回り新緑の若芽でいっぱいの森の中は、足に紅をつけた若い娘たちが散歩するのにまったくふさわしい場所というわけだ。河には泥水が流れ、河岸も隠されてしまって、まるで手練手管に長けて付き合いにくい女みたいで、沐浴することはちょっと難しい。しかも、

カダムバ[7]の香りを漂わせ、
森の奥より、驟雨で冷やされ、風は吹き来たる、
あたかも贈り物を届けるがごとくに。（五）

まあなんと、魅力的な季節ではありませんか。そして、〔愛への〕あこがれがみなぎってくるではありませんか。と申すのは、

風がそよぐこの時、
カダムバの香りに森が満てる時、
雨気を帯びた雲で覆われたこの時、
心足りた人々でさえ、
愛への心の高まりを覚えるなり。（六）

こんなわけで、心の高まりには二種類ありまして、つまりはっきりした原因があるやつと、もうひとつは原因がないやつと。原因があって生じた高揚(ときめき)にたいしては、治療法があるでしょう。でも、これといった具体的な原因のない胸のときめきは、まったく治すことが難しいものです。ちょうど、娼婦たちの空涙をなだめることが難しいように。

私も、この数日、お天気ぐあいが悪いので、あまり歩き回ることができず、なんということなく、心がすっきりしないのです。家での女房の甘ったるい声にもちょっと飽きて、外出したくなってきました。

（見て）

〔宴の〕唄や太鼓の響きが静まるごとく、
とどろきは消えて、雨雲はいまし去り行く。
家に飼う孔雀もいま、露台に舞い昇り、双の羽をひろげ、
喜悦の啼き声をたてるなり。（七）

寒い風の中で震えている若い娘のように、頭部が毀れて糸がばらばらになってしまった竪琴(ヴィーナー)は朝日の光に浴しています。お館の屋根の樋からは、真珠の環のように雨水が湧き出てくる。湿気で曇った鏡は、きれいに拭かれて、そして、

壮麗な館(やかた)に閉じこもり、
もの憂げなる女(おみな)たちは、窓辺に身をもたせ、
雨気を帯びて堅くなれる金の腰帯を再び締め直す。
情人たちは、遊女らを林泉に誘い出し、
若草の茂みに遊ぶ女たちは、蓮のごときその足を、
心を惑わす紅にて粧うなり。（八）

さて、こんな気持ちの高ぶりをどこで晴らしてやりましょう？　賭博場[9]に行くとしますか、でなきゃあ、遊女たちのところに行くか？

（ちょっと考えて）

賭事は南無三宝、下着ひとつのほかに身に着けるものさえ何もない身だ。サイコロ[10]の目は、にわか成金みたいに、かならずしもこちとらにいい顔をしてくれないものです。だから、遊女街のほうに遊びに行くことにしましょう。

なぜというに、そこには、

半眼の気を引く眼差し、笑みで飾られた甘言蜜語、

同席すれば豊かな腿と触れ合う愉楽。
恋心をほのめかす、こちたき手先の絡み。
あれこれの悦楽の趣を、
道に通ずる人は楽しむなり、
彼女らとの恋の深淵（ふかみ）に入らずとも。（九）

（傍らの自分の女房に目をやって）

家の戸を閉めておいてくれ。なに？

「こんな、蟻の巣みたいな扉の多い家で戸締りなんて！」

というのか。いや、この町のお役人どものやってくる路はちゃんと別にあるのだが、あの連中は、他人の家にずかずか踏み込んで来るのを得意としてるんだ。だからこの戸口を狙ってやって来るんだよ。さあ、もうつべこべ言うのはやめておくれ。ああ、まったくいやになってしまう。

（ひとまわりして）

ここ花の都（クスマプラ）[11]は、ただ「都（ナガラ）」と言っただけで通用するように、他の町とは比べものにならない素晴らしさだ。立派な建物が立ち並んでいます。人々で賑わい、品物が溢れていて、その繁華の有り様にはびっくりしてしまう。でもそんなことで驚くことはない。そのような繁盛は他の町々でも見られないこともない。でもこの町の本当に優れている点に注目してください。それは、

寛仁の大人が多く、技芸が尊重され、婦人たちはそつなく愛嬌をふりまく。
富者はおごらず、無学な人々も嫉（ねた）みの心をもたず、

人はみな会話の作法を身につけ、恩義に篤く互いの長所を認めあう。
ああ、パータリプトラの都！
天の神さえ天上を去りて、
この都に幸福を求め降臨さるべし。（一〇）

おや！　そこにいるのは、豪商[12]の息子クリシュニラカじゃないか。奴さんは遊女との遊びで若さを満喫していて、私ども仲間での人気者なのです。親父さんは、家庭の破綻を心配していて、気を配って注意しているのですが、この男は、いましがたも遊女屋へ行って馴染みの妓と逢瀬を楽しんだ伊達男の様子そのままで、急いでここへやって来たようです。こいつぁ、ぜひともそばへ近寄って、挨拶をしてやりましょう。

（近づいて）

やあ、クリシュニラカ君、あんたの若さがますます実りのあるように祈ってますよ。マーダヴァセーナーさんの家からのお帰りですかい？

「これはまた、よくご存じで」

そんなこと知るも知らぬもありゃしませんよ。尊き愛神はお似合いのお二人を結び付けるものですよ。そして、この私もあなたがたのお振る舞いに無関心ではいられませんからね。それにしても、まだまだ愛の渇きにあえいでいる彼女をほったらかしにして、どこにいらっしゃるところですか？

「どうして、そんなこと、お分かりなのです？」

いや、それはそんなに難しいことじゃありませんよ。どうしてかというと、

涙ぐむ顔より拭きし粉黛は君の手に、
足元にひざまずきしゆえに乱れし髪の筋は今もそのまま。
身は離れしといえども、
汝(そなた)の心は女(おみな)のもとに今も留まるがゆえに、
汝が足取りは、風に吹かれし小舟のごとく、
たゆたいよろめく風情なり。(二一)

え?

「これから親父のところに行くのです」

って。でもそんな格好で行くんですか? 親父さんにこっぴどくどやされるでしょうよ。

「ええ、こんな様子の私を見たら、親父は嘆いて死んでしまうかもしれません」

うん、抑えきれない愛情をつのらせる女と手を切らせようとして、お父さんが何をなさるかわかりませんよ。父親なんてものは、まったく若い人たちにとって、頭痛の権化みたいなものですからね。

親父がいると、あの、互いに競いあって賭け金を増やし、悪態をつきあう、豪傑への試金石ともいわれる賭博場に、出入りすることさえもままならない。

また、青蓮華の花びらを散らして、マンゴーの香油を月の輪のように浮かべた、恋人の吐息でさざ波の立つ美酒をたたえ、踊る孔雀の姿をしのばせる盃[13]の、香りを楽しむことさえままならないということです。

それからまた、二派に分かれて、しかも馴染みの遊女たちとそれぞれ同席して、敵娼(あいかた)とのことで頭がいっぱいで、賭け金の大小など一向に気にしないで熱狂している連中の詰めかけている闘鶏[14]で、晴

れがましい審判の役を務めることも、控えなければならない。

また、上流の夫人たちが、窓辺で豊かな胸をのぞかせて、興奮して優雅に手を振りながら興味深く見物している、あの発情期の巨象を追い立ててゆく役目も遠慮しなければならない。

また、短衣を着て、抜き身の剣のみを手に構え、ただ向こう見ずなことがしたくて、捕縛されている仲間を救おうと、燃え盛る松明(たいまつ)の光で黄色に映える勇者たちの夜に大通りを勇ましく駆け抜けることもできないし、また、受けた恩を返そうという気持ちでいっぱいになって、驕る心も振り捨てて報恩の思いに胸締め付けられるままに、友達のために全財産を投げ出すことも、差し控えなければならないということなのです。

でもまあ、そういうことは我慢するといたしましょう。だが、あのろくでもない親父さんたちが、自分たちの若い時の楽しみを忘れたかのように、財産なんかを後生大事にと、息子である我々を遊女たちから遠ざけようとすること、そいつが我慢ならないのです。

そう思うと、手に斧を構えて王族を皆殺しにしようとした、あのジャマダグニの息子ラーマ[15]みたいに、この世から親父なるものを抹殺してやりたくなる。あの老いぼれた連中は、若さというものをまったく軽んじているのです。気の毒にも、なんにも分かっていないのです。花開く蓮の中にある水滴のように香り高く、また甘露(アムリタ)[16]のように甘美な遊女の接吻が、死人をも生き返らせることができるということを。そして、

腰紐の鈴は音を立て、あらわに豊かな腰、
親しさに満ちた接吻、
昂(たか)まる息遣いに揺れ踊る乳房、

眉をひそめたあだな流し目、
吐息にあえぎては総毛立てし身の震え、
そして時として怨みをたたえる、
あの遊女たちの艶情への誘いという悦楽を、
おお！　誰か忘れ得べき。（一二）

え？　なんですって？
「あなた、それどころか、もうひとつの別の災難に出会っているんです」
そりゃ、いったいどういうことで？
「実は、父が私を結婚させようとしているのです」
そいつは、まったくやりきれないこった！　そんなひどいことなんて！　そのようなお話しまで聞かなくてはならないとは！　遊女という大路を棄てて、堅気の女たちという狭苦しい横町に入り込むなんて、まったく、もろ手を上げて泣き悲しむに値しますな。
まあ、考えてもごらんなさい。

性愛の場において、生まれつき盲いのごとく、
顔つきも晴れればれとせぬ、
言葉も口ごもりがちの、
喜悦の人をも悲しくさせてしまうごとき、
含羞という衣で身を覆う、

物堅く、みずからの腰に眼をやることさえ憚る、
女の姿をした家畜のごとき良家の子女という牢獄の、
虜に心を、などなすべきや。（一三）

なに？
「私もまさに同じ考えでございます」
ほう、あなたがそう心に決めているとすれば、まことに結構です。まことに仲間としてふさわしい。お行きなさい。私も後で家に戻ったら、またご相談もうしあげましょう。

（ひとまわりして）
この花の都の大通りは人混みで賑やかで、大波の揺れ起こった大海みたいに見るも恐ろしげで、中に跳び入るのも憚るほどです。でも、

人々はみな愛想よく、忙しげではあれど、
私に気づいて言葉を交わさずによそへ過ぎ行くことなく、
雑踏の中でも道を譲る。
しかも仕事の邪魔にならぬようにと、
長くは引き留めぬ。
ああ、これらわけ知りの人々によって築かれし、
この素晴らしき都の、

高き栄光が識らるべし。（一四）

(ひとまわりして)

さて、ここは、通人の心のように色街に通じる街並です。こっちを通っていくことにしましょう。というのは、

ここでこそ、我が若き日々に、諍いをなし、
ここでこそ、女をとらえ、
ここでこそ、虞れを覚え、
眼を閉じて走り去りしこともあり。
若き日に味わいしことどもの思い出に、
我が胸はうち震えつつ、通り行かむ。（一五）

(ひとまわりして)

ああ、生き返ったようだ！　色街に入りましたぞ。

(手で触れる身振りをして)

揺れ動く黒髪も豊かにして、
半眼の眼差しで魅惑する遊女たちの顔を、
吹く風は娯しみて、

花飾りと美酒の薫りを含んで、
煙火の街の吐息のごとく流れ来たれり。（一六）

ああ、女たちは、ちゃらちゃらと腰紐の鈴を鳴り響かせて、遊び人たちの心を浮き立たせます。遊女たちの胸は、あのカイラーサ山(17)の頂きのようにそびえる高楼の丸窓に寄り添わされ、立ち込める沈香(18)の煙で陽射しも薄暗くなる。館の通い戸は贈り物の花で飾られて微笑みかけてくれます。彼女らの足飾りの触れ合う音は、まさに愛にあえぐ声のようです。これこそ愛の神様の仕事場である色里の、えにも言われぬ情緒なのです。

ここではまた、お付きの女たちが、思わせぶりな流し目を投げかけ、花の開くような笑顔から白い歯並びをのぞかせ、ちょっと眉をひそめては、ささめごとを絶えずささやきかけます。豊かな乳房はその上を覆う薄衣を揺らすばかり、色っぽいしぐさのあまり胸があらわになったり、足取りもなまめかしく軽やかにくるくると、あちこち歩き回っているさまは、まさに愛神の勝利の旗指物みたいです。

そして、半玉たちは、いつも笑顔を絶やさず、驚くこともさほどないのに、あどけなく驚いたような眼付きをしてみせます。彼女たちの黒髪は、つややかで長く細く、柔らかで波をうち、豊かなお尻を振りながら、発情期の象をも凌ぐようにゆらゆらと足を運び、ちょうど愛の渇きを癒やすための給水場のように、落ち着きなく色っぽいしぐさを、まわりにふり注いでいるのです。この娘たちのさまざまな容姿は、なんという媚態の宝庫でしょう！

館々は、ひっきりなしに太鼓の音を響かせ、鳩のつがいを驚かすほど、吠え声をたてているみたい。職人たちは指図に従って立ち働き、召し使いの者たちは慌ただしく戸口に花を撒き散らしていきます。香油のさまざまな種類が整えられ、女たちの豊かな胸に塗られるお化粧の顔料が碾かれています。

また、賢い人たちの心のようにデリケートで美しい花束の飾り物が並べ立てられています。竪琴の演奏が愛のささやきのように聞こえ、思わず耳を傾けてしまいますし、恋人の接吻をおつまみとして味わいたくなる美酒が供じられるのです。しかも、

遊女たちは眼を半分閉じて、
わざとらしく理由をつくっては胸元をちらつかせ、
恥じらいの風情の笑みをたたえ、
耳ざわりよき二言三言をささやいては、もの憂げな吐息をつき、
甘美にして拍子よき唄をうたって、
愛の神の弓をつねに引き絞らせたままにする。（一七）

この豊腰の乙女子の、

（ひとまわりして）
おや、あれは、マダナセーナーのお付きのヴァールニカーじゃないか。若さを誇って胸の盛り上がりを隠そうともせずに、薄絹の衣を着けて、きれいな鈴飾りで腰紐の結び目を飾っている。あわてて耳環は片っ方しか付けていないぞ。まるでおびえた若い鹿のような落ち着きのない眼、唇は愉しみのあまり腫れ上がっている。

聖仙の心さえもとろけさすいつもの微笑みを浮かべて、私のほうに近づいて、片方の眉をちょっと上げて、私に気づき、笑いかけて、通り過ぎる。耳飾りを左の指先ではさみながら。

頬辺に産毛立つ見れば、
蓮華の耳飾りこそ、
ひそやかにくちづけの一撃を
与えしごとし。（一八）

声をかけずに通り過ぎるわけにはいかないぞ。さあ、話しかけてやりましょう。
ヴァールニカーさん、ちょっとお立ち止まりなさい。
おや、私の言葉に知らん顔をして行ってしまおうとしている。
娘さん、その知らん顔がたいへん素敵ですよ。
おや、立ち止まって笑っている。
（近寄って）
手など合わせなくっていいのに。ねえ、ちょっとお訊きしたいのですが。秋の蓮の花粉で黄ばんだあなたの双つの乳房、つがいの鴛鴦[19]が首を持ち上げて大空に飛び立とうとしているような、その乳房に初めて触れる喜びをほしいままにしているのは、どこのどなたなんですか？
おやまあ、ひとこと「あら」と言っただけで、彼女はきまりが悪そうに私を見やって、話しもそこそこに急いで行ってしまおうとする。これはまったく、愛というものの粋ですな。
（ひとまわりして）
ああ、パンドゥマティカーが自分の家の戸口にいて、かたわらに座っているチャトゥリカーと話し合っているぞ。眉にかかる前髪を揺らしつつ、夕暮れの睡蓮のようにたおやかな眼差しで腰の帯紐を

締め直しています。
ああ、乙女にぴったりのしぐさというものです。なんとこまやかな仕事ぶり。夢中になっているところがまた愛らしい。あんなに奮闘しているところをみると、よほど〔帯が〕硬いのでしょう。(20)気取って帯紐を締めているあの子については、もう別に言うこともありますまい。たしかに気晴らしのときのあの子の洗練さは、褒め讃えられるでしょう。
（近づいて）
娘さん！　あなたのお仕事がうまくいきますように。あ、いいえ、席は結構です。でもちょっとお尋ねしたいのですが……。

おお、気位高き娘よ、
この腰帯(メーカラー)は何故にちぎれしや？
情人の指先のいとしき女友達、
臍の湖より溢れ流れし水、
軽羅(うすごろも)の青雲から洩れる光る稲妻、
その硬さは〔情炎を〕鑽(き)る木にふさわしく、(21)
愛神の矢をつがえし弓弦にも似たる、
円(まろ)やかなる臀(しり)の甘きささやき、
愛の昂まりの数をかぞえる数珠ともなる、(22)
この腰帯の何故に切れほどけしや？（一九）

それとも、なんと納得いたしましょうか？

心許せし愛(いと)しの君の手によりて、
闇にて剝ぎ取られし衣服の下の、
優しげに見惚れられし汝が腰。
陶酔せし巨象の頭の形のごとき、あでやかな〔臀の〕隆起を支え、(23)
愛撫を待ち望み揺れるその汝が腰の、
帯紐は琴の糸の切れしごとく、
うら恥ずかしくもおのずと断ち切れ、
眼尻赤き娘よ！　腰のあたりは心地悪くなりしや？(24)（二〇）

おや、どうして下を向いてしまうんです？　お返事もなさらずに。そんなら私は立ち去りましょう。なに？
「行ってしまわないでくださいませ」
って？　おや、私の足は呪文にかかった蛇みたいに動かなくなってしまう。(25)はて、どうしたものかな。どうもうまくしてやられたわい。えい、行きましょう。
（ひとまわりして、聞き耳を立てて）
あ、ラーマダーシーの家で女の泣き声が聞こえるぞ。原因はいろいろありそうだが、でも、いったいどうして泣いているのでしょう？

瞋恚の嗚咽は激しかるべく、
失意に泣くときは、かよわく訴えるごとく、
恋しさの悶えはきれぎれに、
畏怖は干涸らびた声で、
喜悦はむせび上げるごとく、
泣くものなり。
かの女は、怒りと恋しさと失意に胸ふたがれて、
初めは荒々しく、次に途切れがちにて、
さらには、かよわく涙するがごとし。（二一）

ラーマダーシーその人〔が泣いているの〕ではないかと心配になってきました。中へ入ってみましょう。

（中へ入る身振りをして）

やっぱり彼女だ。私を見るなり、さらに激しく泣きだしたぞ。

彼女の目尻から、
情人の罪を数え上ぐるごとく、怒りを蒐めて、
涙の滴は一滴づつ流れ落ちぬ。（二二）

（近寄って）

ねえ、誇り高い姐さん、なんでそんなにご機嫌が悪いのですか？

涙は、若さを輝かす蓮華に優る眼にまず溢れ、下唇に流れ落ち、
さらにしたたり落ち、硬く張りし乳房にたゆたいまといつく。
しかも、そこにも留まることなく、
下腹のうっすらした毛脈でかき乱されつつ、悲しみのあまり流れ下り、
かの愛する人の指先の戯れに慣れし臍のくぼみに滴り満てり。（二三）

あのクンジャラカの奴さん、何か身に付いた良からぬ振る舞いを仕出かしたんではないかな。え？
「ほかの娘の接吻の痕を付けたまま、私のところへやって来たのでございます。それで私がなじってやると、怒ったふりをして、出て行ってしまったのです。今日まで何日もたっているのに、戻って来ないのでございます」

おや、おや、まったく罪の上塗りですね。まったく、そんな罪ひとつでも、一家が滅びるような、厳しい罰がふさわしいのに、ましてそのうえに罪を重ねるとは、なにをか言わんやです。しかし、ま、そんな成り行きであっても、この雲に閉ざされた雨季ですから、あの男の高慢な仕打ちを我慢しましょう。なにしろ、争いあっている王様たちも、闘いを差し控えている時候ですから。まして、シリーシャ花[26]のようなデリケートなお心をお持ちの恋人たちの間ではね。もし、私の言うことに重きを置かれるならば、時機を見計らって、今日にでも愛しい方のところにあなたのほうから行ってやってください。

夕暮れに、暗雲の被さり包む館の高殿より下り来たりて、気弱き女よ、
家々の水樋より滴り落ちる水音しげき道を伝いて行くべし。
湿りて寒き風に身をふるわせて、かの君のもとにたどり着き、
かの君の愛撫を受けて、胸の内を語るべし。
暖かき彼の口によりて、汝が唇の震えと蒼白さを治されながら。（二四）

ははあ、頬の産毛の立つ様子を見ると、彼女は私の言葉に納得していないわけがなかろう。では、これで失礼いたしましょう。

（ひとまわりして）

おや、ラティセーナーがいる。奥の部屋に〔夜じゅう〕閉じこもっていたので、顔は汗ばんでいるようだ。半眼に開いた美しい眼で見つめながら、頬のあたりに髪をまつわらせている。たったいま、〔昨夜の〕酔いを残して起き出て、窓からの風に身を任せているというわけだな。まったく、魅力的だな。彼女に声をかけてみましょう。

（近づいて）

娘さん、ご機嫌よう。酔いをほんのり残して、薄紅の夕焼けの残る西の方のような〔赤みの残る〕あなたを見れば、愛の神様さえ、その弓を取り落として、心を乱すでしょうよ。まして、他の男は申すまでもない。

言の葉は明らかならざるなきが、いまだ甘さを漂わせ、

赤みは蓮の瞳を去りがてに、羞の気色も消えやらず。
快楽の追憶還り来て、いまなお色に出にけり、汝が愉悦。
酒、おのずから咎を棄て、
こよなき美徳を汝がもとにて現わさむ。（二五）

ラティセーナーさん、あなたは私なんかから逃げて行きたいのでしょうが、この私はまず話しかけたばっかりで、このまま行かせるわけにはゆきませんよ。なんと！　笑って窓を閉めるとは！　やれやれ、追っ払われてしまいました。

（ひとまわりして）

おや、ぼうっとしていて通り過ぎてしまうところでした。プラディウムナダーシーがいるじゃないか。両頬は色事のくたびれでげっそりとしているし、切れ長の眼はあらぬ方を見渡している。香印は潰れて額に黄赤色に散り乱れ、巻毛も美しく乱れていて、これはお楽しみの跡がそのまま顔に出ているぞ。

薄衣の下の腰にチラリと見える爪跡の生々しさ、そいつはきれいな水中に映るアショーカの花影みたいなものだ。愛の合戦でお化粧もはがれちまって、その気だるさは戦ったあとの牝象のようだ。風の中でランプを扱うように、手のひらで唇を覆って、牝馬を連れているかのように、ゆっくりゆっくり、[27]廓の通りを歩いて、華を添えています。

本当に可愛い女だ。ちと、からかってやりましょう。

（近寄って）

娘さん、恋人の歯跡のついた唇を、どうして隠そうとするんです？　そいつは兵隊さんの体についた刀傷みたいに、誇らしいものではありませんか。ほう、笑っていますね。なんとなんと、私の皮肉の咎ですかな。まったくほのかな微笑みでさえも、歯跡の傷は可愛く歪みますね。

　喜悦のむせびは胸を突き出させ、
　乳房の盛り上がりは腹を圧し狭める。
　眉をひそめて流し目を送り、
　愛咬の痛みに耐えて蓮の手を振る乙女。
　かかる艶然たる笑みをたたえて、
　他者の心を魅了さす乙女ならば、
　愛の傷跡を残す唇もつ顔にも、
　愛しさの笑みが浮かぶこと必定なり。（二六）

え？
「まあ、ずいぶんしばらくぶりでお目にかかります」
とおっしゃる。いや、このところ悪い天気という咎で、家の中にずっとずっと閉じ込められていたのですよ。ところで、あなた今、どなたとお関わり合いになっているのですか？
「私、今、ラーミラカ様のお家からやって来たところですの」
とな。それは結構。[28]お似合いのお二人の仲がこれからもうまくいきますように。ラーミラカ君だけが、この愛の配分にあずかるということだ。なぜならば、

　細腰の乙女よ、彼の若さこそ、
　実り多きものなるべし。
　彼は、そなたの微笑みに歪んだ、
　三日月の影のごとき愛咬の痕を浮かべし、
　口という酒杯を飲み尽くすゆえに。（二七）

ねえ、姐さん、いたずらなよその鳥たちから〔あなたの〕唇を守ってくださいよ。[29]ではお行きなさい。私もこれで失礼いたしましょう。

（ひとまわりして）
おや、ここは、ヴィシュヴァラカとスナンダーお二人の住家だ。この二人の数奇者は、通行人を憚って、まるで〔いつも眠っている〕クンバカルナの顔みたいに、戸口をいつも閉め切っている。[30]ヴィシュヴァラカの奴、すっかり財産をすってしまって、今じゃ、裸形の沙門[31]みたいに、身ひとつ残すだけだ。でも、遊蕩の趣味が棄てきれず、貯えをすり減らされても、なおスナンダーと別れずに、人里を好んで村の境をうろうろするカラスみたいな有り様です。[32]
　スナンダーのほうだって、年増になって、森の中の干上がった川みたいに潤いをなくし、男の気をそそることがなくなって、ヴィシュヴァラカの後を追うしかないというわけだ。この二人に声をかけずに行ってしまうわけにもゆくまい。大きな声でわめいてみましょう。
　やあ、どなたかいらっしゃいますか？
（耳をそばだてて）

歩き出した馬の蹄の音のような、木靴の音が一歩一歩聞こえてきます。ヴィシュヴァラカが近づいてきたのだな。

「驢馬みたいに、そこでわめいているのは、どなたですかい？」

と言っている。

私はスナンダーさんのためにやって来た閻魔様の使者ですよ。

ははあ、私の声を聞き分けて黙ってしまったな。

でも、どうして戸を開けてくれないのですか？　さあ、それなら、お気をつけなさいよ、今、呪いの火矢を放ちますぞ。

〔愛の〕争いの時、戯れに蹴り上げて、
足環の揺れ響く、かの遊び女の左の足に、
もはや、汝が頭、近づくことなかるべし。（二八）

あ、戸が開いた。中へ入ってみましょう。

（中へ入る身振りをして）

なんです？

「あなたとは親しい間柄なのに、そんな呪わしい言葉をおっしゃるなんて」

ですか。おっしゃるとおり。このような呪いの言葉は、最上天[33]の人たちをさえ、震え上がらせるでしょう。まして、あなたをやだ。今、この呪いを解く罪滅ぼしをしてあげましょう。つまり、

花開く青蓮を飾りに浮かべ、
また、せわしく注がれて浪立てる、
この酒はかの女に与えらるべし。
青蓮の瑞々しき印を額に付けし、
汝の心の妻なる、かの女に。[34]（二九）

さて、座らせてもらいましょう。

（座って）

足を清めるお水は、いりませんよ。この花の都の大通りは、まさに大廈高楼の床にもまさって清潔ですからな。私の両足を清めようとして、いじりまわさなくても結構ですよ。え？　なんですって？

「実は、ラーミラカの宴席でいろいろ愉快な議論があったのです。ヴィシュヌダーサさんや、その他のお集まりの方々が、愛の聖典について、いくつかの疑問を出されたのですよ。そして、全部が全部、解明されたわけでもなかったので、私の考えはどうかと聞かれたのです。そこで自分の意見を述べましたが、デーヴィラカさん、あなたにも聞いていただきたいんです。また、あなたのおっしゃることは十分尊重されるでしょうから、このことをあなたにお伝えしようとして、お宅に伺おうとしていたのです。でも、ちょうどここにお見えになったので、お時間おありでしたら、お話しいたしましょう」

そりゃ、結構ですな。拝聴いたしましょう。また、分かることは申しましょう。それにしても、甘やかされた子供のように、風がまとわりついて吹いてきますね、この庵には。あまり長く座っているのも応えます。もしよろしければ、そこらを歩きながら、お話ししましょうよ。このほうが広々とし

た会堂ですよ。なに？
「それで差し支えございません」
ですって。
（立ち上がって）
　さあ、どうぞお聞かせください。
「もし、実利（お金）だけが、遊女たちを殿方に結び付けるものだとするならば、いったいどのようにして、彼女たちの、良さ、悪さ、またその中間かを見分けるべきでしょうか？」
とおっしゃる。そりゃ、もちろん、贈り物こそは、一般的に世俗の人々を引き付けるものだし、まして遊女たちには特別に魅力的なものです。でも、そこには多少の違いもありますよ。わけ知りの人々はこう言っています……

　下品の遊女らは、贈り物とあらば心を奪われて、
　ほかに由なくも、身を任すべし。
　中品の遊女らは、若く容姿よき者よりの贈り物にのみ喜悦し、
　上品の女たちは、まさに、物惜しみせず、こだわらず、容儀端正にして、
　年頃もよき、節度あり、礼儀正しき男たちにのみ応うべし。（三〇）

「それでは、遊女たちの惚れ心を見抜くには、どうしたらよいのですか？」
とお訊きですか。それには、こう言えましょう……

　半眼のあだな眼差し、顔を輝かす笑みを湛えし眉の媚び、身振り伴うささやき言、
　掌を打ちながらの哄笑もまたふと途絶え、
　臍、腋、乳房のほのかな露出、ときおり腰帯に手を触れ、
　長き吐息に悶えるさまこそは、
　愛神の矢に射られし女の心を顕わすものならむ。（三一）

なんです？
「愛の兆候など、いろいろあるものだと言われますが、それが遊女たちの不誠実な手練手管のためなのか、それとも本当に実のあるものなのか、誰が確信を持てましょうか？　いったい、女が惚れているかどうか、どういうふうに見分けたら良いのでしょうか？」
とお尋ねですか。では、申し上げましょう。

　涙にむせぶ吐息、慕わしげな眼差し、
　やせ細り蒼ざめて、しかも上気して汗ばむ風情、
　乏しくなりし財貨にも心動かさぬ慕情、そはすべて、
　愛に憑かれし女性の心の清らかさを告げるものなり。（三二）

（ひとまわりして）
「それでは、初手の逢い引きのとき、なかなかうまく事を運べないのは、いったいどういうわけなのでしょうか？」

とお訊きですか。いや、初会では、女を好きなように扱うことはできませんよ。[35] 男たちは気の毒にも、おずおずしてしまうのが、最初の出会いなのです。なぜならば、

睦み合いの言葉は〔羞恥で〕語り継ぐこと難く、また答えを得ることも難し。
言葉をしげく交わし得ても、心を通い合わすこと難く、
心通わせ合うても、みずからの嗜好に合った性愛の昂まりを享受し難く、
すべてこれらを成就し得ても、
なお、遊女の情けの燃え上がること、必ずしもなかるべし。(三三)

しかも、そのうえに、

うら若き娘たちとの馴れ初めにては、
大王の御前、賢者たちとの面会と同じく、
心は畏れ震え、常には心利きたる人も、
その言葉の響きもなくすばかりなり。(三四)

「それでは、あまり取り柄のない女にたいしても、一目惚れすることがあるのは、どういうわけでしょうか？　それから、なにかとげとげしい態度に出る女たちについては、どう取り扱ったらよいのでしょうか？」

とお尋ねですね。明らかな一目惚れについては、理由なんか何をか言わんやです。ま、これは愛の神様のご活躍どころですからね。でも、取り柄のない女に惚れたとしても、その女がとげとげしい態度だったら、さっさと別れてしまったほうが良いですよ。なぜなら、

別離の悲しみを、
心剛き男は耐え得るものなり。
されど、蔑まれし情人の傷心は、
癒やされることとなきがゆえに。(三五)

「では、次にいったん女と懇ろになってから、その女が少々うとましくなってきたら、手を切ってしまったほうが良いのでしょうか？」

いや、いや、とんでもない。別な女たちと付き合いながら、礼儀を踏み外すことなく、前の女にも時に応じて愛を注いでやるべきですよ。なぜならば、

美点を備え、若さに溢れ、愛を注ぎかける女を、
いたずらに軽んじて棄て去る男、
かかる男こそは、
農夫の叱咤の下にあえぐ牝牛とともに、
太刀の犂に括り付けらるべし。(三六)

(ひとまわりして)

え？
「もし、恋人を傷付けるようなことをしてしまったら、どうなだめすかしたら良いんでしょう？」
うん、そいつはなかなかに面倒なことですね。女の人たちが怒ってしまうと、まるでしつこい熱病[36]みたいに治しにくいものですね。ですけれど、彼女たちの怒りを押し留めるやり方があるはずです。今の若い男たちは、ただ、足下にひれ伏して〔謝るしか〕手がないと思っています。でも、そんなことしたって、しょうがないと私は思いますよ。よぼよぼの学者先生の固くてしわくちゃの老いた蟹みたいな足、しかも靴たこでざらついていて、古くさい乳酪を塗ったような悪臭紛々たる足に取り付くこともあるんだから、若芽のようなたおやかな恋人の足に取りすがっても、あまり自慢するほどのことではありません。そのうえ、まずいこともある。というのは、

足元に取りすがられし女人は目に涙せん。
この落涙こそ、憂愁を催さむ。憂愁より、
など、恋情は燃え盛るべしや？（三七）

また、「誓いを立ててやれば、機嫌がよくなるものだ」という人もあります。でも、それも確かではないでしょう。堅気の婦人がたでさえも、恋人たちの口先だけの誓いなんかでごまかされないんだから、遊女がたは、とてもとても。信じやすい人ならば、なだめすかすまでもないでしょう。次のように言われているじゃありませんか。

田舎暮らし、老師のお説教、
卑屈な振る舞い、金づまり、そして、
生真面目な女。
みなすべて、男心の情火を掻き消すものなり。（三八）

それからまた、「とにかく、なんとかして女を笑わせてしまえば良いのですよ。笑えば、かたくなな心も和むものです。深さが分かっている河みたいに、安心して彼女の心の中に踏み込んでいけるものです」と言う人もいます。そりゃそうかもしれませんが、それでは怒ったあとの甘い果実が必ず得られるとは限りませんよ。なぜならば、

ずれ落ちし薄衣をわずかにたくし上げ、
唇震わせしかの女の、
きつき言葉も響きは柔らかく、怨みごとすらあだめきて、
蓮にもたとうべき左の足を、
怒りにまかせて我が頭に蹴り上げる、
そのことこそ、褒むべき若さの捧げ物とて、
性愛のいくさの果実なりと、
愛の勝利者は語るものなり。（三九）

ですから、怒っている女を、ただ笑いだけでなだめすかすわけにもまいらんでしょう。[37] ま、それはそれとして、女の不機嫌を治す手だてを考えてみると、とにかく力づくでも接吻(くちづけ)してしまうのが速効

ありと私は思います。というのは、

左手は、濃き薫香の匂う髪に添え、
右手は女の双手をしばし捉え、
激しくも愛しき女の月の顔に口づけるならば、
喜悦は溢れ、その喜悦にて愛の神は満足なされ、
かくして、男は年老いても、衰えなかるべし。（四〇）

「もし、うっかりして、恋人の前で、他の女の子の名前を不用意にも口走ってしまったら、どう取り繕ったらよいでしょうか」
とお尋ねですか。いやいや、他の女の名を出してしまうなんて、風流男としてはとんだ失敗ですな。毒蛇に噛まれた人と同じで、なかなか治す薬が見当たらない。ま、ちょっと考えてみましょう。
（考え込んで）
あ、そうです。

居丈高にもすべてを否定し、
あるいは、呆然とした体で狡猾に黙り込む、
あるいは、かの女を口先でただ褒めそやす、
あるいは、時をおかずに笑いで取り繕う、
あるいは得べくんば、
他の事どもに話をそらして、さらにまた他の話へつなげてしまう、
あるいは、その他のもろもろの女の名を並べ立てる、
などなどが、うかつにも異なる女の名を口にせし時の
治療薬なるべし。（四一）

さて、次は、
「〔愛の〕爪傷、歯の嚙み傷は、たとえ痛くても快感を誘うのは、どうしてでしょう?」
とお尋ねですか。あっはっは！　なんと、うぶなご質問ですね。愛の掻き傷、嚙み傷は、痛くはあるけれど、愛しあっている二人に快楽をもたらすものですよ。お分かりでしょう。

御者のひと鞭こそが、
慎重な馬も駆り立てるごとく、
愛の爪傷、嚙み傷こそは、
愛撫に熱中する心を性愛の喜びへと誘うものなり。（四二）

（ひとまわりして）
「遊女が本当に燃えているのか、そうではなくて、ただそのように振る舞っているのか、どう見極めたら良いでしょうか」
うん、そいつは、お迷いになることはありませんよ。教訓があるでしょう。真に惚れている女の情は色に出るものとね。そのとおりですよ。考えてもごらんなさい。大丈夫でも、外見を取り繕うのは

とても難しい。ましてや、心の堅固でない、学識もほとんどない女の人たちにおいておやですよ。とにかく、その素振りをよく観察することです。

「どういうふうに？」

ってお尋ねですか？

意味なき高笑い、問われもせぬに饒舌、
慌ただしき立居、話の筋を理解せぬこと、
乙女のはにかみだに示さぬ振る舞い、
抱擁からの脱れ、愛の営みのさなかの放心、
愛し終えてから、女はいかに賢く振る舞えども、
かの花を咲かすも実を結ばぬ不毛の蔓草のごとく、
識られ得るものなり。（四三）

「愛想づかしされたときは、どうしたら良いのでしょう？　それとも打つ手がないものですか？」

ま、お聞きなさい。そもそも、恋心は二様に燃え上がるものなのです。つまり、はっきりした理由があっての恋心と、ただわけも分からずのぼせ上がってしまうのとの、ふたつです。わけあっての愛情なら、その愛情が冷めてしまうのも、理由があってこそのことなのです。また、これといった理由もなく生じた愛には、理由もない別れがおこるものなのです。ま、そのように、恋の炎の燃えるのも、冷めるのも、いろいろと難しい中で、うまく対処するなんてとてもできませんよ。

でも女心が冷たくなってきたときに打つ手をお教えしましょう。

別な女へのお追従（ついしょう）、さま変わりした愛の営み、
無関心を装うこと、喧嘩をしかけること、
〔ついで〕寛容の態度を示し、時宜を得て相席、
さらには親類、縁者を褒めそやす、
巧者な言葉を使う、遊女がらみの都落ち、
あるいは、別の都に上ること、はたまた、
何かの冒険を企てる、そしてあるいは贈り物ぜめ、
などなど、馴れ醒めし女心を再び掻き立てるには、
これらのことをば為さるべし。（四四）

それから、また、

少女は若々しく取り扱い、
財を好む女には財を与え、
教養高き女には賢智をもって、
怒れる女にはなだめの言葉を投げかけ、
高慢な女にはひたすら追従、
柔和な女には優しき態度もて接すべし。
それぞれの性（さが）にふさわしく、

女を取り扱うことこそ良けれ。（四五）

（ひとまわりして）

え、何です？

「情愛の徴しは示すものの、なにも語らぬ女、
『もう十分、結構よ』と言って、
傍らに寄り添いたがらぬ女、
そして、肝心の時に身をかわしてしまう女、
かかる女たちをいかに靡かせるべきや？」（四六）

とお訊ねですか？　よいご質問ですな。そもそも、恋する者は相手のご婦人の本性をまず見抜かなければなりません。これこそ女の本性だというべきものがあるはずです。誇り高き女は、無策であれば、一生かかってもうまく統御しきれないものなのです。女の本性にたいする奥義を説き明かしてみましょう。

蔓草を採みしだき取る象のごとく、
人気なきところで女を搔き抱き、素早く連れ去る。
あるいは、女の酔い痴れしことを察知せしときは、
おもむろに由なき言の葉並べ立てて魅惑し、ものにする。

あるいは、その他さまざまな手管を弄する。
またあるいは、ひたすら感情を押し隠す。
かかること為さば、必ずその労は報われ成果は得らるべし、
げに女たちの性は、ねじれたるものなるがゆえに。（四七）

（ひとまわりして）

あなたは、

「痴話喧嘩おさまれるとき、
初会の一目惚れのとき、
外つ国へ旅立ちのとき、
そして旅より立ち戻りしとき、
遊子たちは、
この四時を愛を交わすべき好機というなり。
このうちで、
いずれを最良の機と尊台は思量なさるや？」（四八）

とお訊ねですか？　申し上げましょう。

まず、初めての出会いでの愛の営みは、相手の信頼がまだ十分に得られていないので、ちょうど深さの分からない池へ飛び込むみたいに、不安なものです。

また、遠国へ旅立つさいに愛を交わすことも、みじめであまり愉しいものとは私は思いませんよ。なぜならば、悲しくうちふさがれていては、情熱は弱まっていて、目は涙ぐみ、心は打ちしおれて、まるで月食のお月様のような状態ですから。

それから、旅から戻ってすぐ愛を交わす場合も、愛人の身づくろいも整っていず、恥じらいの気持ちが先に立って、ちょうどじめじめした雨の日の管弦のように、恋心も浮き立たないと思いますよ。

でも、喧嘩がおさまったときの愛の営みは素敵なものです。それは、神や阿修羅がマンダラ山を攪拌棒に使って掻き乱し、いろいろな薬草を投げ混ぜて活性化した聖なる大海から出てきたアムリタという名の不老長寿の妙薬[38]、あれをも遙かに凌ぐ強烈なものなのです。なぜなら、

怒り過ぎ去りしといえども、
女らの胸の内なる恨みつらみの懐いは残りて、
大胆に爪を立て、歯にて噛む、
いと激しき愛欲の場こそ生じなむ。(四九)

(ひとまわりして)

「極道男たちは、遊女にだまされている男を笑いものにするものですが、伊達男はいったいどうしたら遊女にだまされないでいられましょうか」

とお訊ねですね。うん、遊女や裁判所の書記たちは、弱味を見せると、そこを狙ってくるという点で似ています。書記たちはこちらの手元しだいの賄賂を取れば、なるほどちょっとの間は〔法廷で〕良い立場にしてくれましょう。一方、遊女は、ちょうど痛風病[39]のようにひどくお金のかかるものです。

でも、私の振る舞い方を見習いなされば、色街に出入りされても安心ですよ。私は、

年増の女には気を許さず、
若き妓は十分に品定めしてから付き合い始め、
母親つきの妓には、
怪魚の潜む河と同じく、
あまり近寄ることを憚るなり。
おとしめらるとも、あえて憤りを見せず、
媚びらるるも、有頂天にならずして、
遊里にて年を経にけり、
いささかの由なき費えなすこともなく。(五〇)

(ひとまわりして)

「では、二人の女友達がいて、二人ともに同じに言い寄られたならば、どちらの女を選び、どちらを捨てたら良いでしょう? 昔からの馴染みの女のほうを取るか、新しい付き合いのほうの妓を取るか、どっちでしょう? 教えてください」

ですか。いや、こいつは厄介なご質問で、答えは難しい。あなたご自身では、どうお考えですか?

「いや、この点については私はさっぱり分からないんです。とても難問題で。あなたでなければ、教えられませんよ」

とおっしゃる。では、

若き女にのぼせ上がりて、年来の愛を育みし女を捨て去るは、
良からぬことなり。
されど、古き愛のためにのみとらわれて、
みずから恋心もて飛び入りきたる妓に冷たくするも、また望ましからず。
すげなくせしことより、馴染みの女、怒りて立ち去らせ、
次なる女を人目にたたぬままにものにしてのち、彼女の同意のもと、
かの馴染みの女をなだめすかすべし。（五一）

（ひとまわりして）
「廓をそぞろ歩いて様子を眺めるだけで、女たちのどれが色事に長けているかどうか、見抜けるでしょうか？」
とお聞きですね。ええ、手練れた男は知り尽くしていますよ。女を見て、男はまずその眼差しを試みることです。眼差しこそ、すべての感情が反映されているものなのです。まあ、お聞きください。

横目をつかい、ゆっくり瞬きを交わす。
流し目、いとしさに潤み、大きく見開く。
もの憂げの色もなく、瞳をよく動かす。
かかる眼差しを見せる女こそ、
愛の技にも巧みなるなり。（五二）

それから、頬がほっそりして緩やかな曲線を描き、眉を動かし、流し目をつかう女は、閨では激しく振る舞うし、下唇が乾きかげんで、体に爪や歯の痕がついていて、チラチラ笑みを見せる女は、大胆な男勝りの愛の技巧に長けていると察せられます。
また、左手を尻に置き、右手は下に垂らし、腰の片側が特に肉付きのよい女も、気にかけるべきですね。でもそのような女は、慎ましくはありませんが。
それから、片胸を着物で覆い、すんなりとした片足を敷居にかけ、扉のかげに身を隠すように立っている女性は、まったく婦人に化身している〔誘惑の〕罠そのものと思ってよいでしょうよ。そんななまめかしい素振りこそ、彼女のすべてを表わしているのです。
また、扉の掛け金の突起[40]に身をもたせ、両腕を罠をかけるように丸めて伸ばし、腰帯も緩め加減、お臍をちらりと見せているような女は、愛の前戯とでもいえる誘いの風情[41]で、測りようもありません。
その他、このようなことについては、もっといろいろとお話しできますよ。ま、かいつまんで申し上げれば、

指先朱く、白き爪、手は片頬に、
身振りまじえて語を交わす。
足どりも艶に、揺れる唇にたたえし微笑み、
瞳動かす、憂いの影なき面。
腰紐も低く臍下に締めおる女こそ、
男たちへの罠なりと心得よ。

そは閨の戦(いくさ)の比類なきヒロインなるべし。（五三）

（ひとまわりして）

「女というものは、その愛情をあらわにしたり、また隠したり、二通りあるようですが、どちらのほうがより優れているといえるのでしょうか？」

とお訊ねですか。うん、あらわな態度を示すことは遊女たちにふさわしく、それは時には見せかけでもあるのです。一方、思いを隠そうとすることは、遊女たちにも淑女にも見られます。それは、ひたすらなる愛情から生ずるもので、特に遊女の場合、あまり難がないゆえに、本当に喜ばしいことです。

良家の婦人たちは、なかなか男と出会うことが難しいので、見つけたならどんな男であろうとも追っかけ回そうとするかもしれません。でも、遊女は男なら誰でもべたべたするというわけではありません。遊女が愛戯にふけるのは、別に咎めだてされることではないから、彼女らが隠す態度に出る必要はない、と誰か言いましたけれど。

私はこう言いたい。つまり、以前から憎からず思っていた男や、王様の寵臣や、日頃とても親切にしてくれる男、献身的な男、優しい男、そういう男たちは、女の母親（抱え主）たちにも何かと気を使ってくれる人たちです。そういう男たちには、遊女たちは格別惚れ込んでいなくても、言うことをきくものだということです。なぜかといえば、そういう人との付き合いは、利益をもたらすからです。ですから、そんなわけで、遊女たちから秘めやかに愛をささやかれる男は、人生の至福の果[42]を楽しめるというわけです。

それから、ちょっと逢う機会がなくて、たまらなくなって、取り持ちの女を介さずに自分で慕い寄ってくる女が、手を合わせ、涙ながらに声を詰まらせながら語る、優しい言葉を聞けるなら、それ以上の幸せはないでしょうよ。

また、ひたすら男を思い焦がれ、病みついたかのように、顔色も青ざめて、月の出を見ては泣き、寝もやらず眼を赤く腫らし、痩せてしまって腰の飾りも緩めになっている女についても同じでしょう。

彼女が、「ああ、ひどいかた！　私がこんなになってしまったのも、あなたのせいなのです。お達者でね！」と恨みがましく訴えながら、「ああ、愛しい方、お願い！　私の体のことを忘れないで！」とあえぎあえぎ語る言葉を聞いたり、あるいは〔愛の営みのときに〕「早くして！　ああ、そんなに早くしないで」などと、爪や歯を立てて鼓舞しながら、「どうせ私はこんな女よ。信じてね！　誓った仲じゃないの！」と訴える、媚薬[43]にまさる口舌を聞かされては、男として、自分のせいでこうまでなったかと思い当たり、また取り持ち女からも聞かされて、ひとしお愛と同情の念に溺れてしまうでしょう。もし、それほどの歓びが他にもあるとおっしゃるなら、いやまったく、私は通人(ヴィタ)の役なんか御免を蒙って、ヴェーダを唱えるバラモン僧になってしまいますよ。

そして、

手にて腰帯を支え、暮夜ひとり、
足取りもひそやかに腰かがめつつ、
思いをつのらせ逢瀬へ束の間(つかのま)来たり、
恐れ憚り、瞳も落ち着かなげにたたずむ女に、
立ちしまま接吻を与えるその御殿(おんとの)。
かの君にこそ、蓮華の日傘を、
われ手を差し伸べて、差し掛けむ[44]。（五四）

そして、また、
愛の交わりを求めつつ、
おそるおそるも女は口走る、
「あなた、早く、早く!」と。
かの男の命は彼女によりて購われるものなり、
望みどおりの価を付して。(五五)

(ひとまわりして)
「器量が良い子と、性根の良い子がありますが、あなたは、このふたつのどちらをお取りになりますか?」

ええ、容貌と資質は、ふたつとも婦人を飾り立てるものです。不器量な女が賢く振る舞っても、暗闇の中での踊りのように無意味です。また美人でも振る舞いが粗野だったなら、まるで密林の中での月の出のように、ちっとも人を楽しませてくれません。

私は、どちらかといえば、人柄のほうが容貌より大切だと考えます。どうしてかというと、賢さは不美人をも飾り立てますが、馬鹿な態度は美人を台無しにしてしまうからです。別嬪さんを捨てて、あまり美しいとはいえないが良い気質の女の人に惚れ込んでいる男は、多いものですよ。

だいたい、美しい女は独善的であることが多く、高慢さは愛情の交換での大敵です。謙虚さこそ、愛を支えるものです。そして、それは人柄からこそ生じるものなのです。容色だけで愛情が生ずるならば、画に描いた女でも役に立つでしょう。謙虚な人柄の中には、あらゆる女の美徳が含まれています、容貌の美以外の。なぜかといえば、

言葉づかい正しく、身ごしらえ整い、
謙虚にして、報恩の念に富む。
情緒こまやかにして、怨みの思い永くとどめず、
貪欲に溺れることなく、従順の気溢る。
資質すぐれし女性はかくのごときなり。(五六)

「遊女たちの尽くす礼節は、うわべだけだから、君子は彼女らから遠ざかるべきだと言う人もありますが、この点はいかがですか?」
とおっしゃる。そもそも、尽くすということは、やはり何か特別の願いがあってこそ尽くすわけです。男に尽くすのは女性には自然なことですが、それには二通りあります。遊女の場合は作為の産物からくるものでしょう。

でも、手管で尽くすのも、作為的ではあるけれど、決して咎めるべきではないとの考え方もあります。なぜかといえば、たとえ手管で尽くすとはいえ、それは情人の心を魅惑してしまうものだからです。それに、本心からの誠といっても、それが迷惑をかけるような男への尽くし方であったなら、男はどうしてうれしく思うでしょうか?

手練手管というのは、〔ある意味で〕何かの目的を成就するための、賢い分別ともいえるでしょう。自分の目的をもっぱら追求しようとする女は、すぐれた男を何としても追い求めてゆくべきです。ま

た、男というものは、男の特性をよく見極めている女を好むものなのです。

つつましさ、優しき言葉、
寛容、たえざる気配り。
技巧の産物なりとしても、
この世の誰か、それらを咎めだて得べきや？（五七）

「手練手管はつまるところ、〔相手を〕たぶらかすということではありませんか。恋する女にだまされているとしたら、男は苦しくなるでしょう。何か対策はないものでしょうか？」
と言われますか。ああ、どんな人でも、どんな事由を考えても、だまされてしまうことがあるものです。その事由を取り除けないとしたら、それはその男自身の咎でなくてなんでしょう。だますことは、決定的に悪いとはいえません。だまされたって、ますます強く愛情を抱く人も、たくさんおりますよ。

さて、次に、

たゆたい揺れる乳房、
涙たたえて心の内をささやきかける流し目、
優しき言葉で口ごもりつつ語る口舌——。
愛の技巧（たくらみ）といえど、そは、まことに、
いみじきこととして受け入れらるべし。（五八）

「遊女に注（つ）ぎ込んだものは、全部なくなってしまうものですと、しばしば言われます。あのダッタカも『愛（カーマ）は男を一文無しにしてしまう』と言っていますが(45)、先生、あなたはどう思われますか？」
とお訊ねですね。そもそも、富には三つの使い方があります。与える、楽しみに費（つか）う、それから貯め込む、この三つです。そのうち、与えることと、楽しみに費うことが良いのであり、貯め込むことは感心しませんね。なぜなら、

死蔵せし財は果実をもたらさず、
果実生ぜぬがゆえに、不満の種とならん。
しかるがゆえに、貯蓄のみは適当ならず。
来たりし財貨は、はやる馬の足取りのごとくに疾く去るべし。（五九）

実利（アルタ）と理法（ダルマ）は(46)、肉体的な幸せをもたらします。その場合に、望ましき音声などなど(47)を知覚することが、幸福というものです。そして、遊女たちと上手に付き合えば、そういうものが得られます。あらゆる音声のうちで、特に愛の言葉は最上の至福を与えるもので、遊女たちはそれを話すのです。他の人々からは聞かれません。なぜかというに、

愛すればこそ優しき言葉を、
かつ愛すればこそ過酷な言葉を、
かの遊女らは、時にしたがい、
語を選びて、告ぐるものなり。

洗練されし彼女らは、
愛なき時には、過酷なことも、甘美なことも、
ともに語りかけることなからむ。（六〇）

あるいは、遊女のなめらかな腿や尻、少したくし上げ気味の上衣(うわぎ)、緩やかに締めた腰帯、そういうあらわな腰のあたりを撫でる時の手触わり、男にとって、この快感は命と引き換えても良いではないでしょうか。ましてや、富など問題じゃない。また、あらゆる味わいの中で、飲酒の楽しみは非常に非難されているようです。しかし、遊女と杯をともにするのは格別で、実に楽しいことです。まあ、考えてもみなさい、

急ぎ注がれて揺れ動く酒、
女の口より含みこぼれる余り酒、
はた、唇なる甘き肴とともに楽しみつつ飲む酒、
青楼にてそれらを楽しむ者こそ、
味わいを真に知る者なり。（六一）

また、唇がかすかに震え、眼も半ば閉じ、長い睫毛とちょっと汗ばんだ頬で迫ってくる遊女の顔を見つめることができるなら、まったくそういう男の眼は果報に恵まれています。さらに、

水浴終えて油気なき前髪、

花飾りで粧える豊かな束髪、
ひとたび着てはまた脱ぎし衣服、
あるいはまたかぐわしき薫りのする朱蓮の唇、
ほろ酔いて朱みを帯びた眼、
栴檀水に湿りし体。
げに、愛の神は、
これらもろもろの、遊女のかぐわしさを嗅ぎし情人のもとに、
鼻を通りて飛来す。[48]（六二）

さて、理法(ダルマ)については、私どもなんか何の口出すこともありませんが、でも、理法の実践についてちょっと申し上げてみましょう。

この世で、忘恩は最悪の罪です。遊女たちと付き合って望みどおりの比類なき幸せをかち取りながら、その遊女らに報恩の念を抱かない人たちは、まさに最も悪い忘恩の徒というべきなのです。恩義を知る人こそ、天国を手中にする人です。ですから、天国の安楽を得るためには、彼女たちに惜しみなく財貨を報いるべきなのです。

「良家の優雅な婦人たちは礼節をわきまえているのに、彼女たちと付き合っても、遊女たちとの付き合いのような楽しみが得られないのはどうしてでしょうか」

とお聞きですね。まあ、お聞きなさい。良家の婦人たちは、とても優雅な物腰で振る舞いますけれど、それは遊女たちの優雅さとは異なっています。奥様がたは世慣れず純朴ですから、殿方にたいして甘い言葉をかけられる時も、えてして、時宜を得ず、または度を過ぎて申されることもあり、あるいは

耳ざわりな話し方をされることもありましょう。一事が万事、まあそんなものですよ。
愛欲というものは欲望の一種ですし、欲望とは求めることです。これは満たされてないから生まれます。自分が手に入れた遊女たちの場合でも、やきもち心から口説きが始まることもあります。遊女というものは多くの人の共有物でもありますから。嫉妬は貪欲を生むのです。ですから、遊女との関わりの愛欲は、なかなか醒め果てない。そして愛欲の根から、愛の情熱は芽生えるのです。そして、

遊女の腰なる馬車に乗りし正気の誰(た)が、
好んで奥方のもとへと赴くや？
馬車を乗り捨てて、
牛車に替えて旅する男など、よもあるまじ！（六三）

「遊女にのめり込んでしまった男を世間は軽蔑し、彼の評価は悪くなります。遊女との付き合いがそんなに価値のあることなら、どうして世間のみんなが、そろってそれを実践しないのですか？」とおっしゃる。これは、まさにヴィタの極致をうかがったご発言ですね。ちょっと考えさせてください。
（考えこんで）
世間から崇められるのに、二種類の仕方があります。つまり、本当に実(み)のある崇敬と、そうでない単なる誉めそやしの二つです。実のない賞賛なんか、裸ん坊で飛び回る人の動きみたいに、笑止千万なものです。
遊女に熱中しない人にどんな果報があるでしょうか？　確かに、「遊女たちに入れ込むなんて、恥ずべきことだ」という考え方もあるでしょう。でも、これには賛成しかねます。うまくやっている人

たちは、どこでも妬まれるものですよ。他人の女房と情を交わしてはいけないとは誰でも申しますが、遊女についてはそんなことは言われていません。
また、「そもそも女性に執するのは良くないことであり、遊女は女性にほかならない」という意見もあります。それにたいして、私はこう申しましょう。世間の人は女性に頼っているのだから、非難する資格などありません、と。そして、

自尊の気概、立場を心得た勇猛心、当意即妙の会話、
巧者な振る舞い、意気の輝き、洞察力、快活さ、
愛する人を歓喜させる性愛術の精通、
さらには、絵画等々の技芸のたしなみ、
そして何にもましての安楽な境地。
かかるもろもろが、遊女らとの交歓により成就されるものならば、
人よ、などかかる交流にふける男を貶(おとし)めることやあらむ。（六四）

（ひとまわりして）
さて、お次のお訊(たず)ねは、
「ブリハスパティとか、ウシャナスとか、またその他の法典の著者たち(49)は、みな『女色に溺れるべからず』と述べていますが、この点どうお考えですか？」
ええ、それはきみ、単なる教訓にすぎませんよ。実際のところ、女色に惹かれない男なんて見たことはありませんし。あのインドラだってアハリヤーへの情熱のとりこになってしまった(50)、などと言われ

るではありませんか。

とにかく、感官の対象は理法（ダルマ）や実利（アルタ）よりも素敵なことです。そこには、望ましい感覚的体験という果報があるからです。そして女こそ、この感官の対象の中核なのです。遊女たちを捨て去って、天上的な愛だけを楽しもうとするようなお人は、私に言わせれば、自分を偽っている人なのですよ。

この世で現在と未来、この二つのうちでは、現在がより重要なのです。[51] 現在こそ眼に見える果報をもたらすものですから。まして苦行をしてもなかなかに得難い他生での身体獲得など、そもそも疑わしいことに努めて、何の喜びがあるもんですか。

[52]まあ、考えてもごらんなさい。月光も雨雲に遮られ、ますます暗い闇の荒涼としたたたずまい、うそ寒い風が吹き、冷え冷えして外を行き来するのも憚られる雨季の闇夜に、愛神の矢で射られて心乱れている愛人のこっそりと通ってくる、その足飾りの音に眼を覚ます男こそ、まったく人生の最良の恵みに浴していると言うべきではありませんか。

「足飾りをつけることは、逢い引きのためにやってくる女たちにとって、とても役立つってわけですね」

ええ、まったくそのとおりです。なぜならば、

初めての逢瀬にて、
臆したる女の、みずからの着到せしことを、
彼の君に告げる術、他にありや。
震える足にまつわる足飾りの、
高鳴り触れ合う音の他に。（六五）

こんなふうに、足飾りの音で眼を覚まし、降りしきる雨に額の香印は洗われ、黛はにじみ、唇は愛情のたかまりで震えている、そんな女の顔を接吻で受け入れるならば、〔来世で〕逆さ吊りにされて[53]何劫年もの地獄の責め苦を蒙ろうとも、その責め苦さえ、娘たちに愛情を贈られる男にとっては、本当にありがたいことなのです。

空を覆っていた雲が散り去って、風も止み、月が額飾りのように清らかに輝き、アサナ[54]の花の香りが四方に漂う秋の夕べに、腰飾りの揺れる響きが鶴の声と交じり合い、額の印はパンドゥーカ[55]の花みたいに鮮やかな女性が、鴛鴦の愛の教えのままに情炎を燃やして[56]近寄ってきて、一緒に蓮の花咲く池で水浴をともにする、これ以上の天国など必要でしょうか？

あるいはまた、冬の頃、クンダの花が咲いていて、吹く風の中にロードラ[57]の花の香が匂う頃、髷にプリヤング[58]の花櫛を女が飾る頃、恋しい女性が寒さで少しひび割れた唇を守ろうと、接吻をちょっと横に避けようとする、その口に愛するがゆえに強引に接吻する愉しさに比べられる何かがあるでしょうか。

そして、寒の日、沈香を焚きくべて薄暗き、またアティムクタ[59]の花びらが散り敷かれた奥の部屋の中で、真珠のような氷雨まじりの風吹く宵に、愛人の豊かな両の乳房の感触を胸に受け、その激しい抱擁で汗ばんでしまってかぐわしい体を、ベッドに横たえ、愛の戯れの束の間、しばしまどろむ心地、男にとってこれ以上の至福があるものでしょうか。

下唇を守らんとする、
かの女（おみな）の髪をつかめば、

つり上がりし瞳は揺れ動く。
堪えがての吐息のうちのその顔に、
愛に渇えし男によって接吻がなさるべし。（六六）

こんなまどろみとまったく縁のない天界に行ったたって、何の良いことがありますかね。

あるいは、愛の使者（郭公鳥）がやってきて飛び回る春の一日、じっとりと玉の汗がしたたって額の香印がにじみ乱れ、女たちに宝玉の腰紐を結わえ直させる春の日、マンゴーの若芽が目立ち始めて香り高い風が吹く春の日々に、男になだめられてよいのに、プライドを投げ捨てて、知らずしらずのうちにみずから愛を求めてやってくる女によって優しくされる男、こんな男にとって他に羨むべき何者があるでしょうか。

あるいはまた、〔耳にかけた〕シリーシャの花飾りのおかげで女たちの頰は陰り、玉晶[60]や真珠の首飾り、栴檀やウシーラ香草[61]や払子[62]の送る風〔を受ける〕という悦楽に浸れる、陽射しの強い夏の季節、そんな日に、花で飾られたベッドに横たわり、開いたばかりのマーリカーの花を挿した髷に片手を当て、栴檀の香液で乳房のしっとりとしている愛人とともに、風通しのよいテラスにいて、芭蕉扇[63]の風を愉しみつつ昼下がりのひとときを過ごしている男、あるいは床にかぐわしい水が撒かれ、バクラ[64]やマーリカーや青蓮の花びらが散り敷かれている、風通しのよい内房の一室に彼女によって足止めされている男、そのような男たちこそ、まさに圧倒的な青春の喜びを思う存分味わっていると言われましょう。

軽く噛まれて、打ち震える下唇、その蓮華の顔の味趣、
衣服を脱がされて、腰紐のみ輝く腰のあたりの悦楽、
豊かな頰に愛の爪痕をたたえる魅惑。
これらの興趣に染められし心は、他生に至りても、
その色、あせることなかるべし。（六七）

ところが、苦行なんかに精出している連中は、あの〔遙か遠くの果実を目指して歩き続ける〕黒蟻[65]みたいなものです。彼らは互いに互いの振舞いをまねしあい、自分自身の生命を危険にさらしては、「天界だ、天界だ」などと、まるで蜃気楼を追っているように、歪んだ妄想に取り付かれているのです。そして、絶壁から身を投げる、火定に入るなど[66]、いろいろ恐ろしいことをしたり、念誦や、護摩や誓戒や勧戒[67]とか、見かけだおしのいんちきを追求したりすれば、天界に到達すると思い込んでいるのです。彼らは、究極の目的を追求しようとしないのです。

天国では、女たちはいつでも手近にいるものだと言われます。でも、そんな天上の仙女とは、男たちは人間であるがゆえに、互いに反発しあって、愉楽の到来なんかあり得ませんよ。

また、いつも近くにいて、離ればなれになることがなければ、どんな愉しみがあるでしょうかね。しかも、お互いの性格も知り合えないので、互いに美点を見出し合って楽しむことなどできないのです。

そして、言われるように黄金の館や、黄金の樹々で天界が飾られているならば、そいつは神様たちのまことに気の利かない投資だといえましょう。もし、天界が金の館、金の樹々でいっぱいならば、女たちはいったい何で装いを飾りたてたら良いでしょうか。貴重さなんか、なくなってしまうからね。建物の材料となってしまった黄金が、どうして女の人の装いをきらびやかにできるでしょうか？

〔この地上では〕自分のいとし子のように、女性自身が大切に育てた庭の若樹、その花々は乙女の髪の花櫛にも使われますが、そのような樹々に取り巻かれる喜びは、〔天国での〕本来固く冷たい黄金の樹々に取り囲まれていては、どうして味わえるものですか。

若々しい愛情で結ばれている愛人たち[68]は、〔この世では〕互いに逢瀬を求め合い、郭公鳥の声を聞いて渇愛の情をおぼえたり、お互いに誇り合ったり、愛の果実をむさぼり合うでしょうが、あの天国では女たちは、呪いの言葉にいつもおびやかされていて[69]、そんな悦楽なんかとても味わえませんよ。〔この世では〕、愛の痴話喧嘩が生じたとしても、男たちは友人と一緒になってその時その時の焦がれぐあいに応じたなだめすかす手段を楽しく討論しあって、思わず時を過ごしてしまうでしょう[70]。ところが、やきもちやいさかいのない天界では、そんな愉快な時を過ごすこともできません。〔この世では〕、女たちは体のすみずみにまで愛の情緒を行き渡らせ、男の胸もとに臥せっては、バクラの花の香のようにかぐわしい吐息を匂わせて、甘いまどろみの添い寝を楽しませてくれます。でも、あの眠りが存在しないといわれる天国では、そんな陶酔は味わうことができません。酒にほんのりと酔ってろれつ怪しく、恥ずかしそうに恋人が彼氏にささやく、途切れとぎれの甘い言葉、そんな言葉は、美酒を飲むことのない天国では決して聞かれないでしょう。

私は、天界で天女（アプサラス）[71]と一緒にいるよりも、この世で年老いた学者先生とともに座っているほうが、よほどましだと思います。天女たちは、とても長命で、サンスクリット語を自由に操り、とても威厳があると言われていますもの。あのヴァシシュタやアガスティヤ[72]などの聖賢を生んだという女たちとねんごろになったって、どこまでうち解けた仲になりえましょうか。まあ、お聞きください。

たくらみ、だまし合い、乱痴気、
やきもち、さげすみ、痴話喧嘩。
愛欲のまことの源泉なる、これらの妙趣も、
生ずることとなかるべし、天界にては。（六八）

ですから、もしも、愛の楽しみを存分に享楽しようとするならば、そいつはまさに、この世で楽しむべきなんです。特に遊女たちとご一緒になってね。この現世でこそ、

遣手女[73]は、男を戸口まで追いかけ、目に涙して凝視（みつ）める。
機嫌をそこねたふりをして立ち去らんとする男は、
裳裾に取りすがらる。
かたくななまでに機嫌をそこねた男は、
女になだめられても静まり得がての風情。
そんな男こそは、
征旗たなびく戦車のうえの愛神さえも、
こなごなに打ち砕かん。（六九）

おや、スナンダーさん、
「すっかり拝聴いたしましたわ」
とおっしゃる。そうです、すっかりさらけ出しましたよ。あなた、私は決してでまかせを言っているのではありませんよ。

「そう、闇はお月様から生じませんものね」
ですって。そうです、スナンダーさん、あなたにふさわしい良いことをおっしゃいましたね。さあ、中へちょっと入らせていただきましょう。
（中に入って）
そろそろ、私は立ち去らねばなりません。それというのも、今や、

気位高き女性よ、
緩みし腰帯を締め直し、いくたびか酒を口にして、
いとしき人の手の愛撫を待つ黒髪を花で飾り、
腰帯をその手に支える乙女の、
愛の流し目でくりかえし急き立てられ、
太陽も金色に光る亀のごとく、
その足なる光の線を縮めつつ沈み行く。（七〇）

「いいえ、半歩もおみ足をお運びになりませぬように！」
とおっしゃる。いやいや、行かねばなりません。でないと、うちの女房が私に厳しく当たるようになりますから。[74]
「私が奥様に言い訳してあげますわ」
いや、王様の機密にあずかる良からぬ連中と同じように、あの性悪の女房の奴めを言いくるめることは本当に難しいんですよ。さあ、失礼します。

おやまあ、彼女はヴィシュヴァラカと一緒に、私の足元にすがりついてしまったぞ。
これじゃあ、私は足が萎えてしまったも同然だ。ねえ、スナンダーさん、

大洋の浪が浜辺を乗り越えることなきがごとく、
我もそなたがたを無視して、
行き過ぎること〔今後も〕なかるべし。
大海が腰帯のごとく取り巻くこの大地を、
賢き王よ、いつも守りあれかし。（七一）

（ヴィタ退場）

イーシュヴァラダッタ作『極道と通人の対話』なるバーナ終わる。

III 逢い引き

あらすじ

友人クベーラダッタから、不機嫌になってしまった愛人ナーラーヤナダッターをなだめる役目を依頼された通人は、道すがら花街を彩る遊び人や遊女たちと会話を交わしたのち彼女の家の近くへ行くと、爛漫の春の季節に誘われて、当の愛人ふたりが互いに相手を求めてすでに逢い引きしている現場に出くわし、お役目を果たす必要もなくなっていることを知るのであった。

登場人物

男性

ヴァイシカーチャラ　ヴィタ。本篇の語り手
ヴィシュヴァーヴァスダッタ　竪琴の師匠
クベーラダッタ　豪商サーガラダッタの息子
サハカーラカ　クベーラダッタの用人
サムドラダッタ　交易商ダナダッタの息子
ダナミトラ　交易商パールタカの息子
ダニカ　商人
ナーガダッタ　大官の息子
ラーマセーナ　王の寵姫の兄弟

女性

アナンガダッター　遊女。チャーラナダーシーの娘
ヴィラーサカウンディニー　女遊行者
カナカラター　ナーラーヤナダッターの付き添い女中
スクマーリカー　男娼（「第三の性」と呼ばれる）。ラーマセーナの愛人
チャーラナダーシー　遊女。ラーマセーナーの娘。ダニカの愛人
デーヴァダッター　遊女・踊り子
ナーラーヤナダッター　遊女。クベーラダッタの愛人
プリヤングセーナー　遊女・踊り子。ラーマセーナの愛人
マーダヴァセーナー　遊女。サムドラダッタの愛人
マダナセーナー　遊女・踊り子
ラーマセーナー　老遊女。チャーラナダーシーの母
ラティセーナー　遊女。ラーマセーナーの娘。クベーラダッタの愛人
ラティラティカー　遊女の付き添い女。ラーマセーナの愛人

時

春のある一日

場所

花の都、パータリプトラ

（祝詞終わって、舞台監督登場）

「おお、不実なきみよ！
あなたはこの私にとって何でありますや？
はた、私はあなたにとって、何者なのでしょうか？
どうか、衣の裾をお放しくだされ。
なにゆえに我が顔を凝視めらるるや？
あなたにかかずらう私ではありませぬぞ。
はてさて、御唇に刻まれし愛しのきみの歯痕には、とく気付いておりますぞ。
ここな果報の殿方よ！
機嫌そこねしは、我にあらずして、かの女ならずや？
移り気の殿御よ、はや行きて、意中の姫の〔怒りを〕鎮めたまえよ」
などと、このように、愛のいさかいに怒りし恋煩いの美女たちが、
あなた様がたに告ぐることこそいみじけれ[1]！（一）

このように、やんごとなき皆様がたに申し述べておきましょう。おや！　そう申し上げているこの私に、何か声が聞こえてきます。さて、気を付けて聞いてみましょう。

（舞台裏で）

春立ちにけるこの季節に、ロードラの樹はその輝きを失えり、
友に託されし任務に心落ち着かぬ、気の毒なヴィタのごとくに。（二）

（舞台監督退場）
（プロローグ終わり）

（ヴィタ登場）
ああ、まさに爛漫の春でございます。すなわち、

郭公鳥、マンゴー、アショーカの樹々、
鞦韆（ぶらんこ）、美酒、そして月影。
みなすべて、春の趣き添えて美わしきこと、このうえなく、
愛神の心をさえも惑わすらむ。（三）

ああ、恋人たちは、お互いのだましあいを許しあっていますし、お使いの女は、拒みきれない〔恋の〕伝言をたずさえて飛び回っています。春はまさにたけなわです。珊瑚、真珠や宝玉、腰帯、薄絹布、しなやかな服、首飾り、栴檀〔の香粉〕などなどの、華やかさが増すばかり。
この、世の人すべてに愛され、また世の人すべての心に愛の気持ちを起こさせる春の季節が、今まさに花開こうとするその時に、あの豪商サーガラダッタの息子クベーラダッタと、ナーラーヤナダッターとのあいだに、何か、もめ事が起こったようなんです。

その件でクベーラダッタさんは、用人のサハカーラカを私のもとに遣わして、こう言ってきたのです。
「ナーラーヤナ神の神殿で[2]、マダナセーナーが愛の神様への供養の音曲を情調に合わせて演じたのですが、あの妓（こ）（ナーラーヤナダッター）は、自分をさしおいて、私が彼女を褒めそやしたと言って、私の心変わりをうたぐり、怒ってしまったのです。私が彼女の足元にひれ伏しても聞き入れず、家へ帰っていってしまいました。
そこで、こんなふうな恋のなりゆきで、私の胸は悩み苦しんでおり、今宵一夜は千夜の苦しみとならないようにと願い、この街に四季を問わず春の趣きを盛り上げてくださるあなた、ヴァイシカーチャラ殿にひと骨折っていただいて、〔私たちの〕仲を取り持ってくださいませんでしょうか」と。この伝言を聞いて、私は昨晩すぐにも出かけようとしたのです。というのは、その事情もよくわかり、また愛するがゆえの苦しみの耐え難さも私にはよくわかるからです。
ところが、私の年齢には気をとめず、自分の若さばっかり気にしている家の女房（かみ）さんが、あらぬことに気をまわして、私の〔夜の〕外出を差し止めてしまいました。それで、今になってやっと、あの〔ナーラーヤナダッターを〕なだめるという約束を果たすべく、出かけてきたわけなのです。でも、この私がわざわざ約束を果たす必要があるんでしょうか？　なぜというに、

マンゴーの若芽が耳を傾ける、
郭公鳥の甘きさえずりの声。
その声をたよりに、
春は諍（いさか）う愛人たちの心を静めたもう。（四）

また、

　姿うるわしく、若々しく、物腰端正にして、
　気前よく、親切にして、言葉は優し。
　かかる美徳の輝く殿御の想われ女は、
　この世のいかなる〔他の〕男によりて、
　機嫌を取り結ばるる由ありや？（五）

（ひとまわりして）
おお、花の都（クスマプラ）の大路のなんて素敵なことでしょう！　ここでは路々は、水を撒かれ、きれいに掃かれ、さまざまな花の束で飾られて、よその屋敷の中にある内房のように整えられています。
いろいろな商品を売買する人たちで、奥の市場の正面はたいへん賑やかです。ヴェーダの詠誦、音曲の響き、弓弦の音など聞こえて、並み合う屋敷はお互いにおしゃべりしているようです。ちょうど、十面のラーヴァナ[3]の顔のように。
　雲のようにたなびく館の、どこかの高窓が開けられて、通りを眺めようとしている美女たちの姿は、稲妻にも似てきらびやかです。まるでカイラーサ山の奥に住む天女のように。
　そしてまた、貴顕たちは、立派な馬や象や車に乗って、あちこち行き来されて、華やかなものです。走り使いの若い女たちも、身に飾りをきちんと付けて、若い男の眼と心を奪い取るべく、いたずらっぽく走り回り、天の都の美女たちすらをも嘲り笑い飛ばすばかりです。

　すべての男たちの眼という蜂でその蓮の顔容（かんばせ）を吸われている美しい半玉さんたちは、大通りに祝福を与えてやるように、足どり軽く、さんざめき歩き回っています。

　衆人、恐れなく、顔も朗らかに、祝祭に明け暮れ、
　吉祥の宝玉にて身を飾りたて、香、花環、美服をまとい、
　遊興にふけりつつ、世に名高きさまざまな美徳を身につける。
　かかる衆々の方々のお蔭にて、パータリプトラなる華飾を額に頂きたる、
　この大地は、今まさに天国とぞ見ゆるかな！（六）

（ひとまわりして）
おや、こちらに向かってやって来たのは、チャーラナダーシーの娘、アナンガダッタージゃないか。
あの娘は、情事のくたびれでいささかけだるそうだが、〔それでも〕優雅に足を運ばせ、男たちの眼に甘露を注ぐような美しい姿をして、こちらにやって来ます。きっとあの妓は、恋人に情け容赦なく楽しまれたに違いありません。どうしてかといいますと、

　歯の痕も鮮やかに残る唇、
　常によく動く瞳も眠たげな顔、
　腰のまわりの帯紐も、
　秘め事の名残に〔今も〕しどけなし。（七）

おお、この妓に出会ったことこそ、私の役目のうまく運ぶ前兆でしょう。おや、私に気付かずに行ってしまうぞ。ひとつ声をかけてやりましょう。あ、進んでこちらに戻って来ます。

（近づいて）

やあ、娘さん！　どうして知らん顔して行こうとされたのですか？　なに？

「今、やっと気付きました。あなた様、ご機嫌いかがでいらっしゃいますか」

ま、あなた、この祝福の言葉をどうか、お聞きください、

良き乙女よ、
若さに溢れ、自主独立の、
気前の良い、姿も端麗にして、裕福な、
しかも、強運に恵まれて、物事に巧みで、
性愛にも長けたる殿御が、
そなたの手に入りますように！（八）

娘さん、ま、それはそうとして、

愛神はかの人の思いのままなるべく、
かの人の人生は実り多かるべし。
花街の女神なるそなたとともに、
その一夜を過ごせしかの人の。（九）

なんと言われる？

「私、大宮[4]の息子さんナーガダッタ様のお屋敷から戻って来たところでございます」

娘さん、あの男は、昔は金持ちだったのですがねえ。さだめし、お母さんはご機嫌ななめでしょうね。おや、なんと、恥ずかしそうに顔を伏せて、笑っているぞ。私の察しどおりですね。別嬪さん、まあまあ、そんな顔をなさるな。というのは、

母の欲深[5]の思惑を退けて、
ひたすらに愛欲の歓びに心を向けて、
遊女にとって捨て難き、
利をもたらす売笑の教えも意に介せず、
愛しきひとの家へと赴き、
さまざまの情趣ある愛の宴を、そなたは楽しめり。
かくして遊女稼業なるものは、
そなたの美しき徳行にて、足蹴にされたり。（一〇）

いや、あなたが恥じ入られるのも、もっともです。ぶつぶつ言ったって、何にもなりません。ま、私がお家へ行って、あなたのお母さんをなだめてあげましょう。なにしろ、遊女の道にもとることを、あなたはなさったんですからね。さ、お行きなさい。

「よろしくお願いいたします」

この験直しの詞を聞いておいてください。娘さん、

すべての良き特性は、そなたに備わりたるも、
そなたの内にとどまれば、
それは賞賛さるべからず(6)。
汝が若さなる特性の、世の人の眼を娯しませて、
いよいよ確固とならんことを祈る。（一一）

彼女は立ち去りました。私も先へ進みましょう。

（ひとまわりして）

おや、こちらへ来るのは、ヴィシュヌダッターの娘、マーダヴァセーナーじゃありませんか。お供連中が後を追っかけるのを無視して、まるで虎に追われて脅えて突っ走る子鹿のように、急ぎ足でこちらへやって来ます。女将さんの欲深のおかげで、気に入らぬ男と愛の交わりをもたされて、ふさぎ込んでるに違いない。ご覧なさい、

その顔に〔愛の〕くたびれの様子なく、
髷にも、花飾り乱れ落ちし輝きなく、
下唇も、歯で嚙まれ吸われし甘美さを湛えず、
双の乳房のふくらみも、

ひしと抱擁を交わせしとは見えずして脂粉剝げ落ちし優美さなく、
また腰の帯も、寄せては返す愛の高揚にて緩み乱れしさまは無し。（一二）

ああ、いやな男と無理に付き合わされて、心も滅入っているこの妓は、私を無視して向こうへ行ってしまおうとする。よし、追いかけて、ご不興の理由を問いただしてやりましょう。おや、自分からこちらへ戻って来たぞ。なに？
「私としたことが、あなた様に気付きもしないで……」
いや、気になさるな。難儀にあわれて、心がくさくさしていなさると、気もそぞろになるものですよ。
「ほんとに、ごめんくださいまし」
では、この祝福の言葉をお受けなさい。

富める者たちこそ、汝が愛人なるべし。
汝に心を寄せざる者たちは、みな貧者なるべし。
母の貪欲のために、
恋心を抱かぬ人との愛の営みあらざらんことを祈る。（一三）

で、あなたはどちらからおいでで？
「交易商(7)ダナダッタ様のご子息サムドラダッタ様のお屋敷からの帰りでございます」
お、それはうまくなさいましたね。なにしろ、あの人は今の世の毘沙門様(8)ですからね。なんと、熱

い吐息を長くついて、若芽のような唇を震わせ、眉をひそめ、眼を細め、彼女は蓮の顔をそむけてしまった。ははあ、私の考えていたとおりです。というのは、

　厭わしげに汝がビンパ果の[9]〔紅〕唇を与え、
　甘き言葉も数少なく、快い笑い声立てることもなく、
　ときに欠伸と熱きため息を交えつつ、
　かき抱く腕も力なく、愛の昂まり覚えず、
　いやいやながら臥床に赴き、見せかけの愛の手管を、
　心燃えずして、ただ務めるのみ。
　娘よ！　そなたは夜の闇の中で、
　暁の陽の出づるをひたすらに待ち望みいたりしか。（一四）

さあもう、くよくよするのは、おやめなさい。醜男でも、金持ちは身を委せるのにふさわしい種類の男の中に数えられておりますからね……

　「〔交わりにては〕惚れた男であろうと、なかろうと、
　熱情を燃えたぎらさせ、実利を得るのが義務ぞ」とは、
　その道の教典[10]の教え定むるところなり。（一五）

「では、あなたも私の母の考えと同じでいらっしゃいますね？」

まあ、そう言いなさんな。でもね、これには理由があるのですよ。まあ、お行きなさい。あなたのお家に私が寄ったとき、教典についてあなたにちゃんとご説明しましょう。

やれ、お説教じみたことを言ったので、あの妓はお辞儀もしないで行っちまった。かわいそうに、気も動転してますね。じゃ、私も先へ進むことにしましょう。

（ひとまわりして）

おや、こちらへ向かって来るのは、例の女遊行者[11]ヴィラーサカウンディニーだ。足取りも軽く優雅で、彼女の美しい姿は男たちの眼に甘露を注ぐばかりです。彼女の香粉の薫りに酔って、飛び回っている蜜蜂たちも、マンゴーの梢すら離れ去って、あの女の回りを取り巻くのです。さあ、声をかけてやりましょう。目と耳が見たり聞いたりしたがっていますから。

もし、あなた！　ヴァイシカーチャラです。ご機嫌よう！　何ですって？

「ヴァイシカーチャラ様には、用なんかございませんわ。ヴァイシェーシカーチャラさんならいいんだけど[12]」

とおっしゃる。うん、それはごもっとも。というのは、

　そなたの、大きく愛らしく輝かしき眼は、ひとつ処に留まらず、
　愛欲にくたびれて、下唇もやや腫れたるやつれ顔は、いよいよ美し。
　汝が足の運びの覚束なさは、〔過ごせし〕愛の宴の名残[13]を示す。
　幸多き女よ！　汝が情人は、さまざまの性愛の相を汝に、
　しかと語りたるに違いなし。（一六）

「まったく、奴隷の身にふさわしいおっしゃりようですわね」
と言われましたな。

恵まれし女よ、そなたの蓮の御足の奴隷は、みな幸せ者ならずや。
美しき女よ、余のごとき福徳うせはてし者、
いかで、さこそありうべしや？（一七）

何です？
「私のお師匠様は、六句義から外れている方[14]とお話しをしてはいけないと申しております」
とおっしゃる。いや、それはまったくごもっとも。というのは、

そなたの五体は財産（実体）にして、
美しき容姿等は長所（性質）なり。
そなたの若さは共有物（普遍）にして、
若者らはそなたの行状（運動）を讃うなり。
眼すずやかなる娘よ！
人は、そなたと縁を結ぶこと（内属関係）を願うなり。
そなたに素晴らしさ（特殊）備わるがゆえに、
そなたの交合（ヨーガ）はひそかに慕いし若者とのみ為さるべく、

忌み嫌う者たちよりは解放（解脱）さるべし。
気高き女よ！（一八）

ははあ、彼女はただ笑いで私に答えるだけだ。私の考えどおりでしたね。
「私、サーンキヤ[15]は存じてます。プルシャは汚れなく、無属性で知田者ですわ[16]（男というものは、化粧もせず、徳もないのに、女には通じてらっしゃる）」
やれ、これでは黙ってしまうほかないな。私のおしゃべりのせいで、あなたはそわそわされているご様子。若者との愛の契りへの邪魔を、私がしてはいけませんね。さあ、どうぞお行きなさい。
彼女は去りました。私も先へ行きましょう。

（ひとまわりして）
おや、あれは、チャーラナダーシーの母親、ラーマセーナーだ。あの女は、かなり年とっているくせに、色っぽさ、眼の配り方、歩き方、笑い方で、若い女の子のしぐさを真似しながら、こっちへやって来ます。いや、まったく、彼女ときたら、たいしたものです……

情夫たちと、望むままに愛を楽しみ、
おのが気だてで男を惹き付け、
芯の髄まで吸い取り尽くし、
年若き男たちの、敵意と競争心の因となる。
今、まさに彼女は、娘の恋人までも搾り取らんと、

立ち赴くところぞ！（一九）

やれ、それでは、色男たちにとっての死神様みたいなあの女の、死ぬまで続く色っぽい趣きを楽しむことにしましょうか。うやうやしくも、愛人たちへの雷電様に敬礼[17]！

もしもし、ラーマセーナーさん、娘さん以上に若々しくきれいなお姐さん、あんた、これから、どこの男のご家庭をぶっこわしにお出かけになろうとしているのですかい？　あんたとの出会いで、私へのご返事は、ただ呪いのお言葉だけということですな。え？

「あなたのふだんの行ないが、そうさせるんですよ」

と言うのだね。いや、よけいなおしゃべりは、よしときましょう。ま、どこへお出かけか、言ってください。

「娘のチャーラナダーシーときたら、昨日からダニカさんのところに行ったきりなんで、音曲の集いがあることにして、連れ戻しに行くところなんですよ」

ほほう、そいつはチャーラナダーシーとしたことが、心得違いの振る舞いだね。情夫たちの身代を召し上げるのが上手で、骨の髄までしゃぶり尽くしてから棄ててしまう技を持っているあんたの、その娘なのに、教典の教えを身につけていないとは、いやまったく、哀れにも嘆かわしいかぎりですな。というのは、

　身を委せるにふさわしき男を得て、
　狙いどおりに実利をものにし、
　その男の財の底をつきたるを、しかと見極めて、
　〔なお〕愛欲ゆえに執着する男を遠離する術を、
　彼女が心得ぬとあらば、
　彼女には、教典の大切な教えさえ、役立たぬものか！（二〇）

「〔とにかく〕音曲の集いがあるという口実で、あの娘を家へ連れ戻そうとしているのですよ。あなた様も帰り道にそちらに寄って、教典の肝心なところをあの娘に教え込んでやってくださいな」

と言うんですか。ようござんす。でも、急ぎの、友達の用事をかかえているので、そいつを片付けてから、あんたのお役に立つようにしましょう。さあ、お出かけなさい。さあ、私も先へ急ごう。

やれやれ、まったく信用できないのは、遊女の連中の胸の内ですな。というのは、

　いと優しき愛撫の戯れもて籠絡し、
　男たちの財産を情け容赦もなく、
　奪い取る欲深な遊女らは、
　次なる男を喜ばせるために、
　〔今の〕男たちの体を厭いて、
　魂が肉体を厭離する[18]がごとく、
　棄て去るものなり。（二一）

いや、まったく、遊女の母さんたちときたら、色男連中にとっては、なんとも手の打ちようがない災厄ですな。色男のみなさんがたに、あらゆる点で幸運が恵まれますように！　そして、遊女という

百発百中の飛び道具を巧みに放って、情夫たちの財産をかっさらうことに長けている、女将連中が死に滅びますように！

（歩き回って）

おや、スクマーリカーがこっちへやって来るぞ。あの大通りの化け物[19]、第三の性[20]のあいつが！　なんとも不吉な出会いです。よし、着物に隠れて、黙って知らん顔して、やり過ごしましょう。

（そのようにして）

あれ！　私に追いすがってくるぞ。さてさて、逃げ場はあるかな？　やれやれ、運命は厳しいぞ。なんとか彼女にうまいことを言って、虎の口のような運命から逃げ出るようにいたしましょう。

「ご機嫌よう」

ですって。娘さん、どうか、お子さんがたくさんできますように、やもめなんかになりませんように祈りますよ。そしてまた、

ひそめし眉、動く瞳、震える唇、差し出せし両の腕、
粋な歩きぶり、あだな笑みもて、
〔並の〕女たちの媚態を打ち負かせしそなた、
腰の帯もあらわにしどけなく、
揺れずり落ちしままの豊かな腰もてるそなたは、
愛欲の満たされぬ胸のうち抱きて、いずこの館より参られしや？
円らな眼の女よ！（一一）

え？

「王様の寵姫のお兄さん、ラーマセーナ様のお家から戻って来たところでございます」

と。やれ、あの男の人生は、まったく実り豊かなもんですわい！　で、別嬪さんよ、つがいの鴛鴦みたいなあなたがたお二人が、どうして今、別れておられるのですか？

「〔実は〕御殿へ赴く遊女の付き添い女、ラティラティカーという名の、甘く巧みな笑顔と、色っぽい姿態をもつ女の、誘いかける色っぽい流し目の滴りを心に浴びせられて、あの男は身の毛も総立つ有り様で、恋心をあらわに見せて、その女の愛の誘いに乗ってしまったんです。頭を垂れ下げて。

で、私はそんな彼のあからさまな裏切りに我慢できなくて、はねつけてやったところが、あの男は私の足元にひれ伏して〔許しを乞うのです〕。でも、私はお恵みを与えてやりませんでした。なにしろ、やきもち心でいっぱいでしたもの。すると彼は力ずくで私を〔自分の〕家へ連れて行き、寝台へ寝かせて、自分も一緒にいつづけました。

それでも、あの男といったら、夜分、私が色事に疲れて寝入ってしまうと、淫らな心を起こして、私をそのままに捨て置いて、こともあろうに、あの女の家へ出かけて行ってしまい、何日にもなるのに、まだ帰って来ないのです。

そういうわけで、彼がなだめすかしても許すことができなかったんですが、〔今は〕それを悔やんでじりじりしています。それで、あなたのもとにお伺いする途中、たまたまあなたに出会いました。なんとか、あなた様、私のいのち同然のあの男との仲を取り持っていただけないでしょうか」

うん、娘さん、ラーマセーナ君は、へまなことを仕出かしたね。なぜというに、

いかにひしと抱き合いても、
汝が双の乳房は、愛の交わりの妨げにならず、
月ごとに障りが来て、汝が色情を断つこともなし、
恵まれしきみよ！
容色の美と潑剌たる青春の気の顕現への大敵なる妊娠も、
汝には無縁のことなり。
かかる美点に恵まれし汝を棄て去りしかば、
かの男、性愛の宴を〔一切〕放棄するに等しけん。（一二三）

さてと……ね、すねている娘さん、彼の家で私を待っていなさい。友達の用事をなんとか早く片付けなくちゃならないところなんで、それを終えてから、あの、自分の妹の景気の良いのを鼻にかけて、あんたのような心優しい娘さんたちの気持ちを踏みにじる男を家に帰らせて、あんたの足下にひれ伏せさせてあげますよ。さあ、もうお行きなさい。

やれ、彼女は行ってしまった。先へ進みましょう。なんとか辛うじて、あの男娼君から逃げることができたというわけだ。私も本来の用件を片付けてゆくことにしましょう。

（ひとまわりして）

あれ、こっちへ近寄ってきて、私に挨拶しようとしているのは、誰だったっけな？

や、ご機嫌よう、ご無沙汰いたしましたな。交易商パールタさんのご子息、ダナミトラさんじゃありませんか。召し使い連中や、乞食どもや、親類縁者、友達などの貧乏という闇を吹き払い、若い乙

女たちの胸の白睡蓮を目覚めさせる、花の都の空にかかる満月のようなあなたに、なにか月食のような災いの影がさしているのは、どういうわけですかな？

大儲けしようと考えて、一家の全財産を注ぎ込んで調達した商品をもって他国へ行こうとする途中、泥棒に襲われて〔全部巻き上げられて〕しまったんですかい？　それとも、王様に何か不始末を仕出かして、全財産を王様に召し上げられてしまったんではないでしょうね？　それでなければ、もしかしたら、博打で身代をすってしまったのでは？　あの財の神様でさえ、骰子のひと振りで財産をなくしてしまうという賭事で？

つまるところ、

髪や爪は長く伸び放題、身体は垢染み、
もの思いに沈んで蒼ざめてやつれた顔、
ごわごわし、すり切れて、塵にまみれ、
ぼろぼろの衣服をまとって、
聖仙の呪いに打たれたかのごとく、
汝はふさぎ込みて見ゆるなり。（一二四）

「私は、ラーマセーナーの娘、ラティセーナーにぞっこん惚れてしまいました。あの妓も私に首ったけなんです。ま、これはあなたご存じでしたね。それで、私は彼女の母親の欲深さを知っていても、彼女は私を棄てることはないだろうと思って、友人たちの諌めるのにもかかわらず、家の全財産をあの妓に一度にくれてやってしまったんです。

すると、彼女はそれを受け取ってから、二、三日たって、水浴に行こうという口実で、水浴着を着せて、私をアショーカの苑の池に入らせ、門を閉じてしまいました。そのアショーカの苑の門衛たちが、事情を悟って、私を門の隙間から外へ出してくれたのです。

そして、いままでこの町で結構な暮らしをしてきた私としたことが、こんなみじめな生き方を何日もできるものかと考え、いっそ荒れ野に入ってしまおうとしていたこの私に、偶然あなたは出会われたのです。

内聞にしておきたい事だったのですが、ほかならぬあなたゆえ、お話ししてしまいました。ですから、もうあなたにお別れを乞うて、〔荒れ野の中で〕自分の魂(アートマン)の至福について、考えてみようと思っています」

なんとまあ、遊女たちの欲に凝り固まっていることよ！　まったく、遊女たちは根性悪だ！　さあさあ、あなたを抱き締めてあげましょう。とにかく、あなたは生命までは失くさなかったのですからね。なぜというに、

蛇どもの毒は、あらたかな薬草の効き目にて、徐々に鎮められ、
その額が発情液に満ちた森の巨象[21]から、身を救うことも能うべく、
綿津海(わたつみ)で鮫[22]の口から、辛くも脱することもあり得べし。されど、
遊女なる牝馬の口より出でし業火[23]の中をくぐり抜け得し人をいまだ見ず。(一二五)

それで、あなた、あなたの厭世のもとは、ラティセーナーなんですか？　それとも、彼女の母さん？

「さてさて、あなたにうそをついてもはじまらない。ラティセーナーは、私にぞっこん惚れているんですが、あの妓の母さんの仕業でこうなったのですよ。ですから、もしもあなたがあの妓の母さんに気付かれずに、ほんのちょっとでも私があれにまた会うことができるように、お手を貸してくだされば、私は息を吹き返すことができるわけです」

はい、あの妓があなたに惚れてるってことは、よその人からも聞いて承知しておりますよ。

おや、奴さん、泣き出したな。

ま、そう嘆きなさんな。私、いま友達のための急ぎの用事を抱えていますが、それを終えてから戻ってきて、あなたのお役に立つことにしましょう。さあ、お行きなさい。

やれやれ、遊女どもの手管の上手なこと！　というのは、

本性のねじ曲がった王たちが、
おのが悪行を大臣どもの責めに帰すがごとく、
ずるがしこいあばずれの遊女らは、
おのが非道を女将どもになすりつける。(一二六)

あ、このかわいそうな男は行ってしまった。奴さん、〔もとはといえば〕性根の悪い連中の先生格だったのに。さ、私も先を急ぎましょう。

(ひとまわりして)

おや、春の森でさえずる郭公鳥みたいな、優しく甘い声で私の名を呼び掛けてくるのは、誰かな？

〈見て〉
ああ、プリヤングセーナーだ。
やあ、プリヤングセーナーさん、そちらへ参りますよ。
「ご機嫌よう」
娘さん、この祝いの言葉を受けてください……

臥床(ふしど)にて、柔らかき手と脚にて、
愛人を叩き遠ざけるも、
彼のいと激しき愛欲の念で、
太り肉(じし)の腰を激しく押し潰されて、
そなたは、愛の幸せに達すべし。(二七)

娘さん、くたびれ果てた腰を奮い立たせる、いろいろな香りの焚きしめられて香ぐわしい香油にたいして、あなたはご自分の肌を触れさせて、お恵みを与えてやるのですかい？　別嬪さん、飾りの鈴や、首輪や腹帯をすっかり剝ぎ取られた、王車の牝象みたいに、飾りものを一切取って、無垢な容姿で魅力的な、あなたの美しいお体に目を留めようとしない男なんか、まったく空しい人生を過ごしていると言うべきですよ。なぜって、

装身の具をすべて取り捨てて輝ける、汝が美しき姿態かな！
〔愛の〕爪痕のしるし散り、香油の粧いもほのかなり。

目尻に淡く赤みたたえ、微笑み絶えぬ面(おもて)、
若さに燃える双の乳房、薄き短袴をまとい、帯を取り外せしゆえに、
腰のふくらみもいとあらわな、そなたの姿態の美しきを眼にすれば、
愛神すらも、自制の心を揺り動かされ、〔恋の〕病に取り憑かるべし。(二八)

「まあ、お世辞のお上手なこと！」とおっしゃる。どうしてこれがお追従でありましょうか。ま、恥ずかしがりなさんな。で、お声を私にかけられたのは、何かご用事で？
「はい、聞いてくださいまし」
では、うかがいましょう。娘さん。
「ご政道に刃向かうものなき、あの花の都(クスマプラ)の王(プランダラ)様[24]の宮殿で、『プランダラ（インドラ）の勝利』と題しての音曲が、しかるべきラサに従った演技[25]にて上演されることになっています。それについて、私はデーヴァダッターさんと賭けをしたのです。で、私が賭けに勝つ鍵は、あなた様なんですよ」
とんでもない！　満月の光の冴えわたる夜には、灯火なんかいりません。また、強い人には友人の財力の必要もないでしょう。あなたご自身こそ、こんな場合の鍵なんですよ。この件については、あなたに首ったけのラーマセーナ君から私はよろしく言われてますものね。
ははあ、色っぽく眉をひそめて、ちょっと眼と頬をかしげて、内心の娯しさを漲らせ、若芽のような唇を震わせながら、蓮華の顔を振り向け、お供の連中をながめやりながら、彼女は笑っているぞ。ラーマセーナ君の、恋の骨折りも報われたというべきですね。
〔それにしても〕デーヴァダッターは、愚かでしたな。あなたと競い合うなんて。なんといったって、

あなたは容姿麗しく、若さに恵まれていますし、そのうえ、四種の演技法を会得しており、三十二種の手の振り、十八種の眼の使い方、六種のポーズ、三種の歩き方、八種のラサ、三種の歌唱や器楽演奏でのリズムなどなどの舞踏技法[26]は、あなたが演じると、より優美になります。
　また、そのうえ、このままの衣服でおられても、あなたは、あの神々や悪魔や聖仙たちの心や眼を魅了する天女（アプサラス）たちさえも、見下すことができると思いますよ。そして、

　艶やかな身振りもて、人々の眼と心を、
　常に踊らしめるそなた、
　なんの舞い踊ることを要するや？
　幸せな娘よ、愛らしき所作のみにて、十分なり。（二九）

　おや、恥ずかしそうにしているわ。こうして彼女は照れた様子で私を追っ払おうとしています。さ、先へ急ぎましょう。
（ひとまわりして）
　おや、あれは、なんと、〔これから行こうとする先の〕ナーラーヤナダッターの女中、カナカラターじゃないか。引き締まった乳房のあたりを香粉でかぐわせ、髷にいろんな花飾りを挿して、そのうえ愉しそうな顔でほろ酔ったような足取りで、こっちへやって来ますぞ。彼女に声をかけてやりましょう。おや、私に擦り寄ってきて、挨拶しようとしているぞ。
「こんにちは！」

ですって。娘さん、あんたの好い男にせいぜい可愛がってもらいなさいな。あんたの蓮のようなおみ足で、どうしてこの道にお恵みを与えているのですか（何の用で歩いているのですか）。
「まあ、なんてお口のお上手なこと！」
　いや、決してお世辞じゃありませんよ。
「どうもありがとうございます」
　それで結構、結構。ところで、鴛鴦のつがいのようなあの二人に、どうして喧嘩別れが起こったのかね？　なに？
「私の女主人は、嫉妬心にのぼせ上がって、水浴もせず眠りもせず食事もとらずおめかしもしないで、アショーカの苑に行って、アショーカの若木の蔭の石に腰を下ろしていると、満月のおぼろな眺め、蜜蜂のうるさいうなり声、春の花々の薫りの焚き込められた強い南風などで、心の痛みが増すばかり。
　お供の者たちが優しく言葉をかけてお慰めしていると、そのアショーカの苑の近くで、どなたか殿方が、愛の神様から言い付けられたように、カーカリー音がほのかに響く調べに竪琴を調律[27]し、ヴァクトラ律、アパラヴァクトラ律[28]の唄をうたいながら、歩いて行くではありませんか。

　若さも、美貌も、富も空しかるべし。
　春の季節に、愛する人と結ばれて、
　戯れに耽らざる者は。（三〇）

そしてまた、

輝く月を仰ぎ、
郭公の甘き鳴き声を聞きえても、
愛する人と和みあえぬ者の、
この世の生は不毛なるべし。（三一）

それで、この唄を聞いて、私の女主人の、やきもちで、かっとなった気持ちもいくらかおさまって、旦那様のおいでになるのを待ちきれず、私を呼びつけて（お供を命じられ）、旦那様のお家へ歩いて向かわれました。
また、旦那様も、春めいた気分でかたくなな心が和まれて、どなたかとご一緒に、私の女主人の機嫌を直そうと戻ってこられ、竪琴の先生ヴィシュヴァーヴァスダッタ様の戸口のあたりで、私の女主人に出会ったんです。
そして、出かけようとしていたヴィシュヴァー＝ヴァスダッタ様は、なんとなくぎくしゃくしている両人をたまたま見て、自分の家にあがらせました。そして、今朝、女主人は私に、ヴァイシカーチャラ様をお連れするようにと言い付けたのです。ですから、どうか、おいでくださいまし」
いや、それは耳を喜ばすような結構なお話しを聞かせてくださいました。それ以上の喜ばしいことが、私にできましょうか。次のお祝いの詩をお受けなさい……

そなたに若さが輝き、
常に愛する御方の最愛の人となりますように。
愉しく、快き悦楽の幸せで、
そなたが絶えず満たされますように。（三二）

さ、先に立ってご案内頼みます。
（ひとまわりして）
なに？　カナカラターさん？
「このお屋敷へお入りください」
それじゃ、中へ入りましょう。
（中へ入って）
あ、どうかそのまま。お二人（クベーラダッタとナーラーヤナダッタ）、座っていてください……

春の季節が、その美徳にて、
お二人の仲直りの出会いを、
今、取り持ちしがごとく、
すべての季節は、争い起こせし者たちの、
睦みあいを取り持てよ！（三三）

自らの美点を誇っている「春」に、私はだまされていたわけです。あなたがたお二人の逢瀬から、のけ者にされていたのですからね。なんと申し上げてよいやら？　でも、「春」のせいばかりにしてはいけませんね。というのは、

〔美しき〕苑、月の輝く夜、琴の妙なる調べ、
友の集い、使いの女たちのささやき言、
さまざまな季節の情趣、
これらは、恋人たちの愛の契りの原因ならず。
お互いの、美質のなせる、至心の愛の高揚こそ、
その原因なるべし。（三四）

こういうわけで、私は、あなたがたお二人の、この花の都を輝かせる愛情、それは他の人たちには見られない、お互いのすぐれた徳性の重ね合わさったもので、かつまたご自身の美点によって得られたもの、そして愛の道の奥義に通じるものなのですが、それにすっかりごまかされていたのです。なに？

「私どもの契りだって、あなた様のお骨折りのおかげで、こうなったのですよ。先生、ですから、仲直りできたのは、まったくあなた様がもとなんです。このパータリプトラすべて、先生のお上手なお言葉の綾を楽しく味わわせていただいている現在、どうして〔私どものような〕恋に耽る者の弁舌のたぐいが、あなた様を打ち負かすことができましょうか」

さて、愛欲でうずいている、つがいのお二人におしゃべりを続けて、愛の邪魔をすることもありませんな。私はこれにて、お別れ申して、失礼いたしたく存じます。

（終誦）

花開く蓮華のごとき愛らしさ、
酔いに甘き口舌、魅力に溢れる美しさ、
それらに満てる愛しの女の顔見れば、
汝が心、今、喜悦に震えるごとく、
五穀に豊饒をもたらし、大洋の帯を腰に巻き、
メールとヴィンディヤ[29]の双つの峰を乳房となし、
もろもろの美質を賦与されし、
大地のすべてをしろしめす我が大王に、
喜悦の得られますことを祈るなり。（三五）

（ヴィタ退場）

ヴァラルチ師の作『逢い引き』なるパーナ終わる。

IV 足蹴にされた男

あらすじ

サールヴァパウマの町で、ヴィタたちの集会が催されることになった。議題は、大臣のタウンディコーキ・ヴィシュヌナーガが、愛戯の一時、尊かるべき頭を遊女マダナセーニカーに足で蹴られた汚辱を、いかに浄めるべきかという難題である。さまざまなしかつめらしい提案が揶揄半分になされたあと、長老のヴィタ、パッティ・ジームータによる裁定――ヴィシュヌナーガの面前で遊女が長老パッティ・ジームータの頭に足を載せること――が下されて決着する。

登場人物

男性

アーリヤカ　ヴィタ。詩人
アーリヤラクシタ　ヴィタ。シビ族の詩人
インドラヴァルマン　＝インドラスヴァーミン
インドラスヴァーミン　ヴィタ。アパラーンタ侯。山地部族出身。コーンカナ大守
インドラダッタ　＝インドラスヴァーミン
ヴァラーハダーサ　蕩児。マーラヴァ人。シャールドゥーラヴァルマンの息子
ヴィシュヌダーサ　ヴィタ。裁判官
ヴィシュヌナーガ（タウンディコーキ）　王の顧問官。遊女に足蹴にされた男
ウパーヤ・ニランタカタ　＝ダーラヤキ・アナンタカタ
ウパグプタ　肥満した遊び人
ガーンダルヴァ・セーナカ　＝スターヌミトラ
グプタローマシャ　ヴィタ。詩人
サウヴィーラカ　老ヴィタ
シヴァスヴァーミン　絵の師匠
ジャヤナンダカ　ヴィタ。スラーシュトラのシャカ族の太子
シャーンディリヤ・バヴァスヴァーミン　学者
シュヤーミラカ　ヴィタ。本篇の語り手。触れ役
スールヤナーガ（タウンディコーキ）　スパラ人。ヴィシュヌの義弟
スカンダキールティ　ヴィタ。軍の司令官。アヴァンティの人
スカンダスヴァーミン　＝スカンダキールティ
スターヌミトラ　ヴィタ。太鼓打ち
ダイタヴィシュヌ（ムドガラ家の）　ヴィタ。王軍の長官
ダドルナマーダヴァ　ヴィタ
ダーラヤキ・アナンタカタ　ヴィタ
地方語を話すダーシェーラカ人　ダーシェーラカの王の息子グプタクラの下男
トリナピシャーチャ　シャルカラ侯の下男
ニラペークシャ　在家の仏教徒
バヴァキールティ　ヴィタ
バーシュパ　バクトリア人の酒飲み
ハスティムールカ　ヴィタ。ガンダーラ人
バッティ・ジームータ　ヴィタの頭目
バッティ・マカヴァルマン　ヴィタ。アーナンダプラの王子。将軍セーナカの息子
バッティ・ラヴィダッタ　老ヴィタ
バドラーユダ　衛兵長官。ヴィタ。北バクトリア・カールーシャ・マラダの大守
ハリシュチャンドラ　ヴィタ。バクトリア人の医者
ハリシュードラ　ヴィダルヴァ居住の警察官
ヒラヌヤガルバカ　インドラスヴァーミンの部下

マッラスヴァーミン　ヴィタ。コーグラの孫
マヘーシュヴァラダッタ　ヴィタ。詩人
マユーラクマーラ　ヴィタ。アービーラ族。王の義弟
ラーマ　蕩児
ルドラヴァルマン　ヴィタ。ダーシェーラカ人。詩人
若葉ヴィタ　豪商の息子。蕩児

女性

アナンガセーナー　遊女。ヴィシュヌダーサの愛人
カーヴェーリカー　遊女。ドラヴィダ人。ハリシュードラの愛人
カルプーラトリシュター　遊女。ギリシャ人。ヴァラーハダーサの愛人
クスマーヴァティカー　遊女。シヴァスヴァーミンの愛人
クタンガダーシー　インドラスヴァーミンの払子持ち
シューラセーナスンダリー　遊女。シュヤーミラカの昔の愛人
せむし女　ルーパダーシーの女中。スールヤナーガの愛人
ダラニグプター　老遊女。スターヌミトラの愛人
パラークラミカー　遊女。カーシー出身。インドラスヴァーミンの義弟カウシカ・シンハヴァルマンの愛人
プシュパダーシー　遊女。パータリプトラ出身。マカヴァルマンの愛人
プリヤングヤシュティカー　遊女。ハリシュチャンドラの愛人
マダヤンティー　女神神殿の払子持ち。ウパグプタの愛人
マダナセーニカー　遊女。ヴィシュヌナーガの頭を足蹴にした女
マユーラセーナー　遊女・踊り子。スリランカ人。ハリシュードラの愛人

ラーカー　遊女。マユーラクマーラの愛人
ラーディカー　遊女。ニラペークシャの愛人
ラーマー　遊女。ラーマの愛人
ラーマダーシー　遊女。シュールパーラカ出身。パドラーユダの愛人
ルーパダーシー　遊女。スールヤナーガの従兄弟ハリダッタの愛人

時　帝都サールヴァバウマ（ウッジャイニー）

場所　ある一日（季節の特定はなし）

（祝禱終わって舞台監督登場）

シヴァ神の眼の炎の中に、
身を投じてかの大神の怒りをなだめ、
インドラを肇（はじめ）とする神々たちも、その指示を、
頭上に頂く花冠のごとく恭持するその愛神こそ、
あなたがたを守護するべし。
かの愛神の弓は、女の拡げし眼の縁（ふち）のごとく、
かの矢は感官を狙いて、戒行の人の心をも、
打ち破り、砕くものなり。（一）

そして、

眉をひそめ、笑みを湛えつつ、
傍らの、胸に手を置く女神を見つめながら、
恐懼して言葉も発しえぬ随神たちやナンディン[1]の尊崇を受け、
片腕を牝牛の王の背瘤にもたせかけたるシヴァの大神によりて、
怒りにまかせて外部器官[2]は奪われしも、
その霊能は剝奪さることなき、かの愛神こそ、
あなたがたを守護すべし。（二）

ということで、皆々様がたに叩頭してご挨拶いたして、口上を申し上げます。すなわち、シュヤーミラカ先生作のバーナ一幕、『足蹴にされた男』を私ども上演いたす次第でございます。なにとぞ、かの作家の溢れる知的な努力に十分注目され、ご鑑賞くださいますよう、お願い申し上げます。なぜかと申しますに、

「この詩句をここに入れるは不可」
「これは別の語を用うべし」
「ここは仕出かしたり」
「この作品は、まさに意にかないたるなり」
などと、詩作にて、詩人は心を砕き、
労苦を重ぬるものなり。
〔されど〕良き読者のこれを読みて、
涙を催し総毛立つほどの感動を享受するを〔見れば〕、
かかる労苦は雲散霧消するものなり。（三）

そしてまた、

鷲や猫のように〔狡猾に〕立ち回る[3]貴紳連中や、
立居振る舞いとも物静かな高官連は、お立ち去りあるべし。

遊芸人、風流の芸域に通ぜる人々よ、お留まりくだされ。
〔我ら〕極道の遊び人の群れは、甘き蜜を心ゆくまで味わうべし、
うるさき蝿どもに煩わされずに。（四）

それから、

苦行者とて、ただ嘆き悲しむことで解脱を得ることはなく、
風流話に親しみても、天国という果報の道の妨げになることなかるべし。
かかるがゆえに、安心なされて、賢人たちも偽善の行を放棄して、
おおいに笑い〔楽しみ〕たもうべし。（五）

さて、かような口上に忙しい私〔の耳〕に、なにやら物音が聞こえてまいります。
（耳をそばだてて）
ああ、分かりました。あれは、今ちょうど、ヴィタ連中の集会所に入ってきた遊び人のお触れ役、禿げのシュヤーミラカ[4]が鐘を叩いて、触れ事をしているのです。彼はまさに、

情事に耽る恋人たちの快楽を妨げ、
夜明けを告げる〔不粋な〕使者なる、太鼓を鳴らす王家の司祭なり。
その声のかん高きに、暁、
驢馬が喧（かまびす）しきいななき声で鳩の柔音に輪唱することもなし。（六）

いったい、何のお触れなんでしょうか。
（耳をそばだてて）
（楽屋から、詠唱聞こえる）

　愛の神の旗印として、
　愛しき男にたいし掲げられ、
　その頭上に勧請さるべき、
　紅塗られ足飾りつけし、
　艶やかな女の御足、
　その御足にこそ勝利あれ！（七）

（舞台監督退場）
（プロローグ終わり）

（ヴィタ登場）
や、これはこれは！　いったい何を触れているかといいますと……

　愛の諍いの亢まりて、
　衣服はだけて太腿あらわに、

　足飾りの音響かせ、
　優しく愛をささやく女の、
　高く上げし足こそ、
　〔その諍いに〕勝利せしなり。（八）

はて、そこで笑っているのは誰だろう？
（見回して）
そこにいるのはダドルナマーダヴァじゃないか。
おい、ダドルナマーダヴァ君、なんで笑っているんですかい？　え？
「実は、昨日、スラーシュトラ出身のお職遊女、あのマダナセーニカーさんが、恋心のあまり、人もあろうにタウンディコーキ家のヴィシュヌナーガ先生の頭に、蓮のおみ足でお恵みを与えたという珍事が、私の目にとまったんですよ」
　まったく「愉悦は人の生のあるかぎり、〔いつか〕来たるべし、たとえ百歳の末にでも」とは、うまく言ったものですね。ヴィシュヌナーガの奴さんも、とうとう色男によくある、例の「足蹴」という灌頂の儀式[5]を頭に受けたというものだ。え？
「まったく、そんな幸運がどうやってあの人のところにやって来たんでしょうかねえ。そのような恋の諍いというお祭りごとがふさわしくなるなんて！〔ですが〕彼はそんな廓の女神さまからの特別な尊崇を、むしろ侮辱と受け取って、目を赤くして怒ったそうですよ。額にしわよせ、眉毛を震わせ、頭を振って、唇を噛みしめては、両の手を打ち鳴らしながら、ため息しては、こんな悪態をついたそうです。「この売女め、身のほど知らずの女め！　お前は、この俺さまの、

もったいなくも母上が、手ずから心をこめて念入りに、
また、足下にひざまずくとき、父上が、
「良き子よ」と宣いつつも口づけを与えられし、
この弁髪の頭、
〔さらには〕バラモンたちが、花浮かべたる聖水を撒き散らせしその頭に、
よくも汝は足を乗せたるや、思い上がりて、敬いの念いもなく！』（九）

こういうふうに言われたので、彼女は夕焼けの赤さが消え行く夜のように、色を失って蒼ざめて、まるで明け方を過ぎた頃の月みたいに生気をなくした顔を〔彼に〕向けたのです。そして、

陶酔の紅潮は消え、節度を失い、
悲しげに、細身も汗ばませ、
『まあ、なんとしたことでしょう！』と叫びたり。
恐縮のあまり色を失いしかの女は、
花飾りのずれ落ちしその頭を、
かの男の両脚にこすりつけて、
『二度と、かかることなさぬべし』と許しを乞うばかりなり。（一〇）

こんなに平身低頭する彼女を振り払って、あの男は罵ったのです。『俺に触るな！　性悪女！　猫なで声をして、俺に寄り添ってくれるな！』なんて、怒鳴ったんです」

やれやれ、郭公鳥はフクロウの後を追っかけるものだと言いますがね。あのマダナセーニカーでさえ、あんな卑しく女々しい、屍鬼みたいな男に未練があるなんて、不思議ですね。ま、高官の息子で王の勅令を司る立場の男だから、愛情とか、贈り物の有無だとか、そんなことは問題にならないのかもしれませんが。遊女たちは、肩書きには弱いものです。愛情の動機はいろいろあるって言われます。
なんですって？
「称号好きの彼女は、肩書きだけの男をつかまえようとして、とんだ悪口雑言を浴びせられた[6]ということです。まったくあの女は気の毒にも、

羞恥の心で斜めにうつむけし睫毛、
その奥よりにじみ出で、したたり落ちる涙によりて、
浄められし唇と乳房もつこの女は、
ただ身をすくますのみなり。
そは、忽然と現われて雷鳴を轟かす雨雲におののく白鳥[7]のごとくなり」（一一）

なるほど、しかしこれは驚くことではありませんな。こういうことになると思ってました。私は事をわきまえてますから、過ぎたことを詮索したりはしませんが。さあ、そこでどうなったんですか？
なに？
「そこで、私は彼を怒鳴りつけてやったんです。どうしようもない文法家先生[8]！　棍棒で花を叩き潰しちゃだめ、琴を松明の棒で弾いちゃだめ、若芽のように優しい乙女を言葉の剃刀で切り刻むなんて、とんでもないことだって。そう言われて、あの男は私を見向きもせずに、例のヴィタの頭分バッティ

・ジームータさんの家のほうへ立ち去ってしまったのです。

おお、気の毒にも彼女は若枝のような手を頬に当てて、顔を伏せて泣き出してしまいました。そこで私は抱き起こしてやりました。「かわいい娘さん、そもそも、猿には冠は似つかわしくないし、驢馬は美々しい馬車を引くにふさわしくないもの。さあさあ、もう泣きなさるな。あのどうしようもない男は笑止千万だ。奴さんの頭なんか、ご丁重に扱うに価しませんよ。

そも彼は愛さるべき人なりや？
かよわき女たちが恋情もて、
激しく髪をつかみて打ちこらしめ得ず、
あるいは、腰紐もて縛りつけ得ぬ、
かつは耳の蓮の飾りにて打擲し得ぬごとき男は。
むしろ、愛の神は別の男の側にあり。
その別の幸せな男にとりて、青春は祝祭なるべし。
女たちはその男とともに、規矩を踏み外しては、
あたかも奴隷とともにあるごとく、
こっそりと楽しみに耽るものなるがゆえに。』（一二）

こう言ってやると、彼女は私の言葉にうなずいて、微笑んで、流し目をくれてから、寝台を頭から足元まで、被布をかけてきれいに整えてしまいました。

さ、それで私も、恋人の風上にもおけぬこの男の非道な振る舞いが気にかかりはするけれど、ちょ

うど夜明けを告げる王の早朝祝禱の音に目を覚まされましたので、〔朝の〕お勤めを済ませ、バラモン僧たちの集会場に出かけてゆきました。悪夢のような昨夜の出来事を払うためにも。

ところがその集会で、髪は乱れ、いかにも思い悩んでいる面持ちのヴィシュヌナーガに会ったのです。奴さん、先に来ていて、自分の徳行について述べてから、次のように言ったのです。『ああ、卑しい女の足で、こんなに徳行高い私の頭が汚されてしまった。三学に通暁する長老がた、どうかこの私を救ってください』と。

これを聞いてバラモンたちは、頬をニヤリと緩めて互いに目配せしながらも、間をおいてから、こう彼に言いました。『いやいや、賢者どの、私たちはマヌや、ヤマや、ヴァシシュタ、ガウタマ、パラドヴァージャ、シャンカリキタ、アーパスタンバ、ハーリータ、プラチェータス、デーヴァラ、ヴリッダガールギヤ[9]など、もろもろの聖仙がたの著わされた法典を読みましたが、このような大罪にたいしての贖罪[10]はどこにも見当たりませんぞ』と。

これを聞いて、彼はまた両腕を上げて、いちだんと悲しげに訴えるのです。『ああ、賢者さまがた、私を卑しい種姓[11]みたいに放っぽり出さないでください。と申しますのは、

身分高く、行ないは清浄、貴き家柄に生まれ、
文法の法則、また論理学にいそしみ、
王の布告を起草する、この我は卑俗なる者にあらず。
その我が庇護を求めるなり。
この嘆かわしき苦境から、我を守りたもうべし』（一三）

この彼の言葉を聞いて、いあわせた人たちは、
　あるいは互いに肘を突き合わせ、牛のごとき男ぞとささやき合い、
　あるいはしばらく見つめて、正気を失いしかと憫笑をもらし、
　あるいは蔑むも、恋の魔性に取り憑かれしかと、憐れみを心に覚え、
　あるいは、さるにても、彼女の振る舞いも良からずと嘆きたり。（一四）

そんな雰囲気の集会になってしまって、並みいるバラモンたちは、見せかけの贖罪を求めてわめきたてるヴィシュヌナーガを前にして、弱りきってしまったんです。

　そこで、やっとひとりのバラモンが口を開きました。この人はシャーンディリヤ・バヴァスヴァーミンといって、導師の息子で、自分も導師なのですが、法律、論理などの諸学に精通し、いろいろな技芸にも詳しく、雄弁でもあって、多くの弟子に取り囲まれ、かつまた、ユーモアを解する御仁なのです。右手を上げて、なだめるように笑みをたたえながら、満座の人々の中で彼はこう言いました。『ああ、ヴィシュヌナーガさん、怖がらなくてもよろしい。そんなにお嘆きなさるな。法にはこう定めてあります。つまり、地方、素性や家系などにもとづく然るべき人々による合意は、聖典の趣旨に背かないかぎり、権威づけられますと。したがって、あなた、ヴィタの連中を集めて、その頭株の人々から、贖罪の決定をしてもらいなさい。彼らはきっと、あなたをこの罪から救い出してくれるでしょうよ』と。

　この言葉を聞いて、集会の人たちのあいだから『ブラヴォー』という叫びと指を振り立てての賛意のしるしが起こりました。ヴィシュヌナーガはこれを耳にして『ありがとうございます』と言って、

そこを立ち去ったのです。それで、あなたもまたヴィタ衆を集める役を命ぜられたってわけですよ」

なるほど、なるほど。何ですって？

「このあたりにおられる皆さんのうち、どなたがヴィタと目されるんでしょう？」

ああ、もちろん貴方こそ、まずヴィタその人ですよ。

「どうして、この私がヴィタの称号にふさわしい男なのですか？」

それには疑いありませんよ。まあ、お聞きなさい……

　昼ひなかには、公事の談合に忙しく、
　夕べには、朋友の館での会食を楽しみ、
　夜に至れば、美妓と戯れ〔愛の〕矢を放つ。
　おのれの家に薪水すらなくとも、矜持たかく嘯くのみ。（一五）

　そんな貴方ですから、ヴィタでないとは言わせませんよ。

「そのとおりでしたら、ありがたき幸せでございます。で、その他のヴィタとよばれる連中をあなたは呼び集めることになるのですが、ヴィタにふさわしい特性とは、いったいどんなものかお聞きしておきたいのですが」

とおっしゃる。それは結構なお尋ねですな。申し上げましょう。

　愛しき女たちが苦境に陥らば、我が身を賭しても、その敵から救い出し、
　自ら窮すれば、剣をとる我が腕のみを頼りとし、

情けにほだされし遊女の太夫から、争って慕われ、
おのれの財を請う者たちに、常に惜しみなく与える者、
かかる男をこそヴィタと言うなり。（一六）

それから、また、

美女たちの蓮のごとき脚を頭に受けて、
その頭が王冠で飾られているように満足している人、
その財宝をば、渇きに悩む人々によりて、
水が持ち去られるごとく、双手にて持ち去られる人、
かかる人こそ、まことのヴィタと、
その道に詳しき人々は、褒めそやすものなり。（一七）

というわけです。え、何ですって？
「ヴィタの特性について良く分かりました。そういうヴィタの人たちの名前を挙げてくださいませんか？」
とおっしゃる。分かりました。次のような人たちですよ。
まず、カーマチャーラ・バーヌ、ローマシャグプタ、大臣ヴィシュヌダーサ、シビ族のアーリヤラクシタ、ダーシェーラカの人ルドラヴァルマン、アヴァンティの人スカンダスヴァーミン、医者のハリシュチャンドラ、アービーラ族の王子マユーラダッタ、鼓打ちのスターヌ・ガーンダルヴァセーナカ、ウパーヤニランタカタ。
それから、山地部族出の最初のアパラーンタ侯インドラヴァルマン、アーナンダプラの王子マカヴァルマン、スラーシュトラのジャヤナンダカ、ムドガラ家のダイタヴィシュヌ。
まあ、こういった人たちを、できるだけ集めれば良いでしょうな。[12]
「ははあ、良く分かりました。でも、ダイタヴィシュヌさんもヴィタと考えて良いのでしょうか？」
とおっしゃる。もちろん、そうですよ。え？
「あの、王軍の長官で、詩人でもある、私生児の彼がですか？」
ですって。そうですとも！　なに？
「ですけれど……

かの人は王の寵臣なるも、謙譲の人、
起床、臥床は吉祥の讃誦に従い、
神の礼拝のため衣服に香を焚きこめ、
額にも膝にも〔礼拝による〕胼胝を生じ、（一八）

そのうえに、

神殿から王邸へ、そして王邸から神殿へと、
双つの宮居を行き戻りして日々を過ごす、
恭謙なる人におわします。（一九）

そんなお方も、ヴィタと呼んで良いのでしょうか？」
まあ、そうですね。あの方には、古くなったギーの香りみたいに、まったくヴィタらしからぬ鼻につくところもありますが、でも、

かの人は、東アヴァンティにて、
遊女をめぐる争いに巻き込まれ、
指先を失いしことあり。
パドマナガラにては、闘いの中、
両腿を敵の矢に刺されしこともあり。
さらに、ヴァイディシャにて、
射機よりの矢は彼の腕を貫きて、
地に刺さりたり。しかも、今日もなお、
強精の薬(13)を求めて、医師たちに財を投じおるなり。（二〇）

かの人は、遊び女たちのため、財貨の蕩尽を辞せず、
たとえ、感官衰えたりとも、猥談を娯しむ人なり。
かかるがゆえに、かの人はヴィタの頭目と称さるべし。
げに、富者の心に満足を与うるものは、
精力にあらずして、情念なるがゆえに。（二一）

こういうわけですから、あの人がヴィタでないってことはありませんよ。え？
「それでしたら、確かにあの人はヴィタの頭分ですね」
とおっしゃる。そうです。だから、ヴィタの筆頭として記されるんです。さあ、どうぞ、お出かけください。ご機嫌よう。私も先へまいりましょう。

（ひとまわりして）
さあ、街の大通りにやって来たぞ。まあ、全大地を統べる王のお膝元、この帝都(14)のなんと素晴らしいこと！　閻浮提の額の飾りとしてこの街は、さまざまな宝石類でその富を誇示している。ここでは、

管弦の調べ、女の装身具の響き、
愛玩の鳥たちのさえずり、ヴェーダ声明や、
弓弦の音、あるいは肉切り包丁の高鳴り、
さらには、屋敷内で飼い慣らされし鳥の羽音と、
食卓の什器の触れ合う音が重なり合いて、
白亜の館の環は、互いにさざめき合うがごときなり。（二二）

そしてまた、

山地、森林、海辺の地、はたまた、砂漠の地域から、

百指に余る諸王侯は上洛し来たりて、それぞれの邸を構えおり。
壮麗にして、前代未聞、完全無欠の、
創造者の創造せし〔美の〕諸相の一か所への結集が、
この都に見らるるなり。（一二三）

シャカ人、ギリシャ人、トカラ、ペルシャの人々、
マガダ、キラータ、カリンガ、ヴァンガ、カーシーからの人々、
さては、マヒシャカ、チョーラ、パーンディヤ、ケーララのもろもろの人々、
集い来たりて、街のすみずみにまで、賑わいて華やかなり[15]。（一二四）

（見て）
おや、あそこにいるのは誰だったかな？　覆いをはずした白い駕籠に乗って、まるで金持ちの後家さんのようなふりをして、こちらへやって来るあの男は？
（ちょっと考えて）
うん、そうだ。あれは、籐の杖と水瓶で分かるように[16]、賤民の汚れを嫌う、ヴィシュヌダーサ顧問官だぞ。あの人は、裁判官という大事なお役目に任じられたのに、王から命ぜられた仕事も、あまり熱心には、やらないそうだ。瞑想にいそしむと称して一向にお勤めをしない仏教の坊さんみたいに。
というのも、

訴人たちが、彼の席の半ばを占め、彼の膝を揺すり、

あるいは頭を垂れて彼の足にすがりつくも、
かの人は公事の場に入りてさえ、
泣き泣き請願する訴人の声に耳傾けず、
市場の牛のごとく、ひたすらに黙思し、
あるいは睡りに沈潜するばかりなり。（一二五）

そんなあの人の様子はヴィタにふさわしくないとも言えますが、でも法を司っていると考えられる人ですから、どうしたもんでしょうかな？　近づいてみましょう。ああ、遠くから私に気付いて、駕籠を降ろさせて、降りてきました。
やあ、ご免ください。そんなにご丁重になさっては、こちらが恐縮いたします。なんですって？
「ご丁重だなんて、とんでもない。当然のしきたりですよ」
とおっしゃる。では申しますが、そんな礼儀をわきまえたあなたが、どうしてあなたを慕っているあのアナンガセーナーさんを、あの愛神からの軍勢みたいに、避けよう避けようとなさるのですか？
え？
「いやいや、私が彼女を愛情にこたえて優しく扱わなかったことなんて、ありませんよ。なぜなら、

『ご機嫌よろしゅう』と恭しく応接して、
席につくとヨーガの聖典[17]を読み聞かせ、
彼女の瞳の、風の気の乱れしごとく回るさまを見て、
『娘よ、乳酪を飲まれよ』と申し聞かせたり[18]。（一二六）

このようなわけで、どうして私があの女を丁重に扱わなかったなんて、ありえましょう」
ははあ、それでは恋人として優しく受け入れていたわけですね。
彼は私に笑顔を見せて、レモンの実という清めの贈り物で私を喜ばせようとしています。
さてさて、あなた、お弟子の身の私をこんな件だからってそんな賄賂でだまくらかそうったってだめですよ。いずれにせよ、しっかりおやりなさい。じゃ失礼します。

（ひとまわりして）
さあ、帝都（サールヴァバウマ）の市場通りに来たぞ。市場の中は、ほうぼうから海産物やら、農産の品々など、高い品、安い品を売ったり買ったりしに、大勢の男女がやって来て、たいそうな賑わいだ。
おお、ご覧！

巣の中で騒ぐ鳥たちのように、
牧場にいる雄牛たちのように、
商いの人々のざわめきの声よ！（二七）

そして、

唸り響く物音は、鍛冶屋の軒並みに飛び交い、
砥石に載せられた白銅は、みさご[19]の鳴き声に似て音を立てる。

法螺貝の器に置かれた剣は、馬の鼻息のごとく、響きを発する。
人々は辺邑より来たり集いて、売り買いに忙しげなり。（二八）

そして、今また、

その華やぎに、微笑みをたたえしごとき花々は売られおり、
酒亭にては杯が飛び交い、飲み干され、
草束を手にしている肉商人の横目で見るままに、
街の鳥たちは、包丁の輪でいっぱいの肉屋の内へと舞い降りる。（二九）

それから、

肩を触れ合わせ、商談の駆け引きにあれこれ口論をたたかわせる人々の群れ、
そは畑の黍の穂むらのごとく揺れさざめくなり。
博奕でせしめた泡銭（あぶくぜに）を手にした男たちは、いそいそと娼家へ足を運び行く、
花、菓子、肉やら酒などを携えた僕（しもべ）たちを伴って。（三〇）

私も、この人混みで賑わって歩きづらい市場通りから抜け出ましょう。あの花の小路へ入り込んで、酒場の並びを右に見て進むことにしよう。プールナバドラの辻に入り、マカラ小路を抜けて、花柳の街に入りましょう。

さて、しかし、金をふところにしないで色里に足を踏み入れるのは、武具なしで合戦に赴くのも同然、無用なことです。恥をかき、損をすることになるだけですから。でも、友達の意に副わぬわけにもいきません。なにしろ、ヴィタの集まりが、ここで行なわれるというのですからね。

(ひとまわりして)

おや、あそこで、ローヒタカの太鼓打ちたちがシンバルや笛を交えてヨーデーヤカ調のしらべで囃し立てている[20]あの男は、いったい誰だったかな？　片耳に黄色のアマランサス[21]の花飾りをぶら下げて、裾がほつれ、だらしなく逆に巻きつけた被衣が回るたびにはね上がって、お尻が片っぽ何度も見えてしまう。奴さんが左手に杯を差し上げて踊り回るたびに、酒場の人たちがどっと笑っているわい。

(目を凝らして見て)

ははあ、分かったぞ、あれはバクトリア人の息子のパーシュパじゃないか。極道者たちの笑いもの、花街の牡鶏野郎のパーシュパだ。まったく、あいつが飲みもせず酔っぱらってもいないのを、見たことがない。おまけに、あいつときたら、半文だって手にしたことがないんだ[22]。いったいどうして、あの男は、いつもこれで通っているんだろう？

(ちょっと考えて)

うん、なにしろあいつは厚かましくって、恥知らずで、何にでも首を突っ込む。立ち回るのがうまい奴だからな。

円座の酒宴の中へ、
酒のつまみをわしづかみにして、

かのパーシュパは、
踊り方の男女、下僕、馬丁の群れに混じり込む。(三一)

いや、まったく、奴さんの酒のありつき方は、堂に入っているな。口出しをする必要もなかろう。先へ行きましょう。

(ひとまわりして)

おやおや、また、ヴィタ連中にとっての古びた遊びの園の化身に出くわしたぞ。あれはダラニグプターという年増の遊女だ。愛神のお寺で、神さまへの願掛けを終えて、出てきたんだな。花穂をつけたカーシャ草[23]のように白い髪の先を肩から背のほうに垂らして、洗いたての着物を着て、その上に上衣をゆったりと片方の肩に羽織っています。

お供物が投げられるたびにカラスが舞い降りる、そんなカラスたちに囲まれてパタパタしている孔雀、そんな有り様を横目で見やりながら、彼女はマカラの旗柱[24]を右回りに、こちらへやって来ます。ああ、年とった今でもなお、彼女の残りの色香は、なかなかに昔の若い頃の浮かれたさまをしのばせます。

白い爪の条目(すじめ)の跡を残して垂れている両の乳房、
口元も〔今は〕緩み、かつては吸われし唇も、今は肉瘤と化すれども、
習い覚えし眉のひそみにつれて、今になお、巧みな受け答えを投げ与え、
老いて容色衰えたりとも、あだな気色を振り撒く彼女なり。(三二)

とても無視して通り過ぎるわけにはいきませんな。とにかく、あの女は私たちの親友、太鼓打ちのスターヌミトラと懇ろに付き合っていると言っていて、クラウンチャの回春法(25)の役に立てているのだと言わぬばかりなんです。さて、どういうふうにして彼女に近づきましょうか？
（考え込んで）
ああ、そうだ。二日前に、スターヌミトラは気の毒に彼女にくちづけしようとして、まったくとんでもない目にあったんだっけ。惚れ込むってことは、同情の余地などないよ。というのは、

接吻の甘き酔いの最中、
女の緩みし歯は歯茎より離れて、
男の口の中に入り、舌の根に触れしゆえ、
男はたまらず、その歯を、
戞(かつ)とばかり吐き出したり。（三二）

この花街に入ろうとしながら、あの功徳を積んだ女を無視することは、背信に通ずるとも言えますが、スターヌミトラの口の中に歯が落ちた一件を蒸し返すことにもなりかねない。話しかけて彼女に恥の上塗りをさせないように、ここは黙ってお辞儀するだけで、通り過ぎることにいたしましょう。
（ひとまわりして）
さ、花街に来ましたぞ。なんてまあ、素敵なところでしょう！　ここでは、主だった遊女たちの素

晴らしい家々という飾り物が、地面から天空にそびえ立つかのようです。
それらは、おのおの思いおもいに配置され、美しい外壁(ヴァプラ)、ベランダ(ネーミ)、壁(サーラ)、高楼(ハルミヤ)、尖塔(シカラ)、張り出し(カポータパーリー)、獅子耳(シンハカルナ)（窓飾り？）、曲線の垂木(ゴーパーナシー)、別棟の窓庇(ヴァラビープタ)、小塔(アッタータカ)、望楼(アヴァローカナ)、楼門(プラトーリー)、庇(ヴィタンカ)、露台(プラーサーダ)などに満ちています。
それらは、広々とした間取りをもち、釣り合いよく設計されています。そして、見事に作られた美しい種々の形の何百という〔彫刻や絵画に〕被われている。それらは、彫られ、一面に塗られ、吹き付けられ、風穴が通り、また突起があり、塗られ、描かれ、繊細であり、また雄大です。
壁、扉、窓、テラス、中庭、回廊、バルコニーを備えています。家の〔樹園と中庭の〕中間の場所は、一本または二本または三本の樹木で飾られ、それらの家はまた特別の目的のために植えられた、樹や草や果実や花の群れで彩られています。
家々の澄んだ池の水は、白蓮の花でまだらになっている。水辺に作られた木組みの築山や、地下室や、東屋、そして画亭が趣を添えるように並んでいます。また、高価な真珠、珊瑚、金鈴のついた網など、燦然と輝く装飾がつけられ、吉祥の旗や幟が空高くひるがえり、まことに華やいだ眺めと申せましょう。(26)
今、ここらを見ると、

車の輻(や)に背をもたせかけ、
目をつぶり座しおるアヴァンティの男たちに担がるべき駕篭車。
その長柄に登りしキラータ人(27)、
さらにまた、カンボージャ馬(28)や牝象の敷布は二つに畳まれて、

象使いも居眠りに耽る。
これみな、殿御の青楼の内へと入り行きしことを告ぐるなり。（三四）

さて、楼の内では、

流れ落つ涙は、到来の客人を楼へと誘い入れ、
また同じ涙をたたえつ、他の客を楼から家へと追い立てる。
富める者は彼女らにより歓待さるるも、富を使い果たせし者は、
〔遊女の〕母によりて罵られ、無理やり追い払わるるなり。（三五）

（ひとまわりして）

瞋恚(いかり)の炎を燃やす情夫をなだめんとする女ここにあり。
また、かしこにては、情夫の口舌により怒りをおさめし女あり。
はたまた、七弦琴を爪で奏で、カーカリー音と第五音をもっぱらに[29]、
慕情をひそやかに口ずさむ女もありき、美しき調べに事寄せて。（三六）

鏡を手に掲げて、かしこの女は、
愛人によりて化粧をなされつつあり。
また、こちらにては、情人の髪を結いてやる女あり。

シャーリカー鳥[30]に言葉を言わせんと教えおる女あると見えしが、
かしこでは、上気せる孔雀が、
女の持てるマンゴーの花束にて叩かれては、踊り始めるなり。（三七）

かの、鞠遊びに熱中しおる女は、腰をいささか痛めしと見ゆるぞおかし。
また、こなた情夫と並び座りて骰子(さい)を振り、遊びに耽る女あり。
ひとりで画を描き、また物語を誦しいる年増の女の姿も見らるるなり。（三八）

「お急ぎなさるな、お掛けくだされ、娘御よ、
しばらくぶりでお目にかかれて」
「今日こそ、あの方を問い詰めてくださいませ、
この愚かな私をあのようにおだましなさった、あの方を」
「ま、私に免じて気を鎮めなされ、首尾よくまいりますように。
私はこれで失礼します」などの会話があちこちに。[31]（三九）

（ひとまわりして）
さて、また、遊び友達の群がっている別の角へ来ました。や、あそこにいるのは、バクトリア人、カーンカーヤナ派の医者イーシャーナチャンドラの息子、ハリシュチャンドラ[32]じゃないか。まるで花街という白睡蓮の池を照らす月(チャンドラ)のようにあたりを煌めかせて、こちらへとやって来ます。何の用で、ここへ来たんだろうか？

（考えて）
ああ、読めたぞ。奴さん、この私の昔の彼女ヤショーマティーの妹のプリヤングヤシュティカーに、いま首ったけなんだ。私の目をくらまそうったって、そうはいきませんぞ。見過ごしてやるわけにはいきません。声をかけてやりましょう。
（近寄って）
ねえ、きみ、色里の蓮の林に降り立った一羽の鴛鴦（おしどり）さんよ、どこからいらしたのかい？　え、なんですって、
「いや、あなたのお気に入りの女友達の妹さん、プリヤングヤシュティカーさんにお薬を処方してあげて、いま戻って来たところですよ」
とおっしゃる。あの色気たっぷりの姐さんの恋の病の炎は、ちょっとやそっとじゃ、治まることはないでしょうな。あなたは〔むしろ情炎の〕消化剤を処方してあげたんではありませんか？
「ご冗談おっしゃってはいけません。あの人の頭の痛みは本当にひどいのです」
きみ、それは本当かね？　え？
「本当ですとも。治りにくい病気なんです」
ま、それはそうかもしれませんがね。頭痛とは、遊女たちにとって、うわべを取り繕う病気として、手持ちの代物なんですよ。いいですか、あなた、

額に、血にも紛う栴檀の樹液をつけ、
青睡蓮の茎、葉、花などをもてあそびつつ、
なまめかしく眉をしかめて、遊女は、
機嫌を取り結ばんとする男をあしらいながら、
頭の痛みを訴えるものなり、
惚れていようと、冷たき心でいようとも。（四〇）

「いつもながら、あなたはきつい冗談をおっしゃる。本当に彼女に薬をやってきたところなんですよ」
と言われますか。いや、それは結構。信じましょう。

腕環をつけし若芽の〔ごとき〕手を揺らせ、
足にてモザイクの床を踏み鳴らし、
臍下にずり落ちし腰帯と衣を手にて支えいる、かの女。
髪をとられ眼を細める、かの女。
その口を貴君は吸いたるにあらずや？
あるいは、汝が唇なる汚れし薬を、
かの若き女に飲ませたるにあらずや？（四一）

なに？
「あなただったら、そうしかねないでしょうね」
だって？　泥棒君よ、これ以上、こそこそとして私を馬鹿にしないでもらえたら……ま、それはさておき、今日はヴィタ連中は、みなヴィタの頭目バッティ・ジームータの屋敷に集まって、何か相談事

をすることになっているのですよ。だから、あなたも遅れずにおいでなさい。え？
「あ、それは存じています。ヴィシュヌナーガの贖罪を相談するために、午後ヴィタ連中の集まりがあるってことは。それじゃ、どうぞ行ってください。私もまいりますから」
それでは、ご機嫌よう。失礼します。

(ひとまわりして)
ヴィタのみんな、なんとこの件をもう知っているようだな。やれやれ、これなら労することもない。馴染みの女や友達にでも会って、暇をつぶすことにしましょう。
おや、あそこにいる、匈奴産でもないのに匈奴風の飾り物のつけてある、(33) 純インド産の駿馬は、誰の馬なんだろう？ パータリプトラから来ているプシュパダーシーの家の門口に立っているのだが。
(見て)
あ、そうか。あそこに、白木の耳環をきらめかして頬に笑いをたたえ、手を組んでいるラータ人のディンディン連中(34)が、一向に用意もできてないのに「準備万端」なんて合掌しながら答えているところを見ると、セーナカ将軍(35)の愛息バッティ・マカヴァルマンに違いない。黙って見過ごしていくわけには、いかんでしょう。知らん顔して行ってしまえば、友達甲斐がないことになるでしょうから。声をかけてやりましょう。
(近くへ寄って)
やあ、お宅にどなたかいらっしゃいますか？
(耳をそばだてて)
マカヴァルマンの若旦那、私を呼んでますな。なんですって？

「おおい、きみ！ いつもと違って、門番にとりつがせるみたいなやり方で、私をまだ王侯貴族あつかいするのですか、絶えて久しいというのに。そこにいてください。すぐにまいりますから」
と言っている。はいはい、ここにおりますよ。
(見て)
こちらですよ、きみ。
おやおや、この旦那は、砂の河原に下りた牡牛が足を持ち上げるみたいな堂々とした足取りで、館の内房を色めき立たせて、こっちへやって来るぞ。なかなか、身についた優雅な物腰ですね。花柳界では、立居振る舞いがかなっていなくてはいけない、と言われるとおり。しかも、

　腕を揺らせて振り、肩から胸の肉付きは悩ましくも豊か、
　眉は色気たっぷり、流し目を周りにくれている公子こそ、
　今、王侯の館へ入るなり、その足の運びもゆったりと。
　げに琴鼓の伴奏なき独劇が演ぜらるるごときなり。(四二)

では、話しかけてやりましょう。
マカヴァルマン殿、昼間のお娯しみに耽り過ぎたあなたのご様子を見て、友人としてのこの私も、いささか心が乱されてしまいますよ。ま、結構です。ちょっとお顔だけでも拝見したいものですな。
あ、奴さん、慌ただしく右肩へ着物を羽織って、笑いながらこっちへ出てくるぞ。あえぐように挨拶の言葉を言って、手を合わせて。それにしても、プシュパダーシーは今日ちょうど生理日だと、(36) 彼は私に言っていたのに、どうして彼女とのお楽しみができたんだろう？

（考え込んで）
あそこのラータ人のディンディン連中ときたら、小鬼みたいな奴らだな。ラータの男ときたら、

あたり憚ることもなく、裸になりて水浴びて、
汚れし下着を自ら濯ぎ、髪はざんばら、足も拭わず床に就く。
歩きながらに物食べ散らし、破れ衣に身を包む。
敵の弱みにつけこんで、やっと一撃与えしときでも、
「ラータ人、我なり」と、いつまでも自慢にあげつらう輩なり。（四三）

まったく、彼は自分の出身地にふさわしい振る舞いをしているわけです。
やれやれ……あなた、

実がなる前に、あの〔美しい〕蔓草の花を手折らざりしや？（四四―A）

え、「どういう意味で？」とお聞きかね。

その花粉に汚れしお召し物をご覧なされよ。（四四―B）

「いや、この着物の〔紅い〕染みは、ベッドに掛けておいたとき、キンマ(37)のかすで汚しちまっただけですよ」

ま、そうおっしゃいますな。その額の小粒の真珠の玉の汗で分かります。
奴さん、横を向いて笑いだしたな。
ねえ、きみ、品の良くない好き者さんよ！　どんなふうに、あの女は君の目をごまかしたのですかい？
「ごまかされたなんて、とんでもない。私は歓待されたんですよ。まあ、聞いてください。あの女プシュパダーシーは、

前髪束ねあげて額はさらに広くなり、
太腿なかばに届く衣で飾られし豊かな腰、
帯飾りも初めより外されて、
あらわにもほっそりとした姿態の女なり。
告げたまえ、花をつけし蔓草〔のごとき〕あの女の、
なにゆえに近寄り抱かれざることありうべしや？（四五）

そしてまた、お聞きください、先生、

館の日覆いの下に立ち、傍らを向く、かの女は、
〔愛の〕爪痕に目を凝らし、我が視線受け顔伏せて、
双の手もて、揺れて固くなりし乳房をかき抱き、
戸口の門を手で閉ざして、内房へと入り行きぬ。（四六）

で、私も彼女の後を追って、中へ入りました。そして、

　そが髪をつかみて、かの女の眼は拡がり、
　激しく揺すられて乳房は揺れ、
　『何なさるや？』『やめて、やめて……』と口走りたる、
　かの艶女をひしと抱き締めたり。（四七）

というわけです」

　なるほど、そいつは恐れ入りましたな。では、私も〔後で〕彼女に聞いてみましょう。で、それからどうなさったんですか？

「ええ、そこで、

　腰を抱けば、帯ほどけ落ち、
　肉置きも豊かに触らるるばかりなり。
　いと恥じらいて、かの女は、
　両の手で我が眼を閉ざしたまいたり」（四八）

　やれやれ、まったく、あなたは恐るべき人ですな。自慢にもならない。品の良い紳士がたから非難されますよ。そんなふうでは。

「ま、そうなっても、どうかお見捨てなきように。あなた、『マハーバーラタ』の中にも、

　敵の数少なくて人にも恐れられず、
　行き逢うても咎められざる男。
　かかる男は、まことに取るに足らぬ男なり、
　パールタよ。[38]（四九）

と謳われているのは、ご存知でしょう」

　うん、これがディンディン気質というものだ。

　しかし……ねえ、きみ、あなたのそのディンディン気質が気に入りました。すべての点で、あなたはヴィタの親玉となるにふさわしいお方だよ。祝福いたしましょう。え？

「しかと承っております」

とおっしゃる。お聞きなさい、

　曙近く眠りおりしそなたの背をかき抱き、
　はだけし片腿を大胆にそなたの脇腹にからみ乗せて、
　黒髪をつかみて、蓮の顔を引き寄せて、
　汝が女は、自らの口を吸わしめ、また自らも汝が口を吸うべし。（五〇）

「まことに、どうもありがとうございました」

と言って、奴さん向こうへ行っちまった。殿様に一礼いたして、私も先へ行くことにします。
（ひとまわりして）
おや、あそこの家の高窓に寄り添っている女は誰だったかしら。まるで天女が天の馬車に華を添えているように、高窓に花が咲く風情だ。うん、あれはカーシーからの遊女パラークラミカーじゃないか。あの妓は、陽気でピンチョーラー(39)の名手、そして魅力的な姿態と、色っぽい素振りで、私たちの目をいつも楽しませてくれます。なんて素晴らしい。

黄金の肩飾りの下には豊かな乳房、
腿なかばの腰布の下には、むっちりとした臀をちらつかせ、
げに、かの女は、遊里という蔓草のそよぐ若枝のごとく、身をくねらせて、
愛人たちの心を掻き立て、迷わせる。（五一）

そして、

片頬のあたりに垂れ下がる耳飾りの影も揺れる顔、
口蓋下より出づる「ヒー」という、熟練せる息づかいで、
ピンチョーラーを唇に当て、甘き楽の調べを奏でる、かの女なり。
家孔雀は、蛙の声と取り違えて、かの女の周りを、
しかめ顔して歩き回れり(40)。（五二）

おや！　彼女の館から出てきて、こっちへと来るのは、インドラスヴァーミン(41)の腹心の部下、ヒラヌヤガルバカではないか！　こいつは驚いた。インドラスヴァーミンとヒラヌヤガルバカが二人そろっては、この花街に灼熱した金属どうしを混ぜ合わせるも同然ですな。彼は手を合わせて私のほうに近寄ってくるぞ。
やあ、ヒラヌヤガルバカ君！　この色里のご神殿を、アパラーンタからの鬼(42)の方々に蹂躙させせようということですかい？　え？
「実は、ご主人の異国趣味のおかげで、私は仕事を言い付けられてしまったんですよ。この館の姫は以前は五百金(43)も積めばよかったのですが、今では千金でお座敷をかけても、また、抱え主が指図しても、やんごとなき方のところにご降臨してくれないのです。ひとつ、なんとか、うんと言わせるように、お手助け願えませんか、あなた！」
とおっしゃる。いや、あなたは、とてもお人がよろしい。十万金を積まれたって、生命は購われはしませんよ。
「［とおっしゃるのは］あの妓の生命にかかわるような危険の原因が、私どもの主人にあるとでもお考えですか？」
［そのとおり］ご主人の払子(ほっす)持ち(44)の、あのクタンガダーシーさんが、ご主人と関わりを持たれたときに味わわれたご難儀については、広く知られているではありませんか。
「私の体に触れてください(45)。そんなことが本当でしょうか！」
とおっしゃるんですか。嘘だったら、そんなふうには言われないでしょうよ。
「いや、私どもの主人の永年身につけたやり方でもございますので、なにしろ……」

まったく、別な扱い方をさせようったって、そうはいかないって？　でも、そんなものでもありませんね。お聞きください。

詩、音楽、舞踊の作法に精通し、
わけ知りで、気前よく、慇懃にして、南方育ちの、
コーンカナの太守なる閣下に、などか靡かざる遊女ありうべしや、
彼が誠意もて、女たちと交わるならば。（五三）

それにまた、

幼き象や、芸を仕込まれんとする象を、
かのバガダッタ[46]のごとくに、娼楼の前庭にて、
操り追い立てるインドラダッタの姿は、
胸に蓮の手を当てし花魁たちの、
牝鹿の群れが牡虎を凝視するごとき、
視線を受くるものなり。（五四）

特にあの妓は、私どもの御大の義弟にあたる庶子、カウシカ・シンハヴァルマンとの仲のよい関係をほのめかそうとして、〔他の〕情人たちにすげない素振りをして、辱めようとしているだけなんですよ。

「いや、あの妓は、あのお方のただならぬ色事の振る舞いを、特にさげすむのですよ」
とな。しつっこい異常な愛の手管は、あなたがたのお国ぶりだと、みな言っていますよ。
「それが、お国の習わしなのかどうか、私には分かりません。ずばり言ってくださいまし」
ま、そうお気にかけてくださるなら申しましょう、

突き棒で調教されし野象のごとく、
彼の耳のあたりは、爪痕でみみずばれ。
牝牛を追う牡牛のごとく、彼は彼女に迫り、
腰飾りも剝ぎ取られ、彼女は裸にむかるるなり。（五五）

「では、このお言葉のおしるしを持って、あの方のところへ戻りましょう」
いや、それならば、インドラスヴァーミンの殿に、次のようにも、うやうやしくお伝えください……

百、千の黄金もて乞われても、
かの娘は、あなた以外のどなたにも、
自らの腰をあらわにすることなかるべし。
丸い歯痕で彩られし腰のくぼみ、
恋人からの花環を腰帯として着けし、その腰を！（五六）

さ、私は幸運をお祈りして、これで失礼します。

（ひとまわりして）
おや、シュールパーラカ人の遊女ラーマダーシーの館から、こっそり抜け出してきたあの御仁は誰だったかな？　ディンディンの連中に取り巻かれてしまい、この色里を華やかにしているわ！
（見て）
ああ、あれは衛兵長官バドラーユダ殿[47]じゃないか。北バクトリア、カールーシャそしてマラダの太守でもあり、また、あの人はその道ではヴィタたちにとっての生きた聖地ともいわれている奴さんですぞ。あの人は、

頭に髷を結い上げ、
耳には白く大きな水瓶をかたどる木の飾りをつけ、
「ジャ」の音まじえて、人々に話しかけ[48]、
かのラータ人のふりして戯れる。（五七）

いや、まったく、あの人はラータの連中〔の特性〕を見事に捉えていますな。ラータ人は、みんな、そのようなもんですよ。〔ラータの人たちは……〕

両の腕を寛上衣にくるませ、
腰を、縄のごとく絞りし布にて締め付けて、進み出ては、
行き交う人々に「シャ」の音で対応し、

傀儡のごと、肩をかがめて足踏み鳴らし、行き歩く。（五八）

そして、

両の手を胸に当て、子鳩[49]の形を結び、
「ヤ」の音出さずに、「ジャ」の音を高く言う。
腰のあたりに双の布を緊縛し、
指先が土塊に触れんばかりに〔かがまり〕歩く。（五九）

どんな権力にだって、〔多少の〕鬼っ子の存在は、やむを得ないということです。あるいは、あの殿はお一人で異郷をうろつくのがお似合いということですか。なぜというと、あの手の男は、

アパラーンタ、シャカ、そしてマーラヴァの王たちの御頭の上に、
両足をのせて、気ままにのし歩く。
時来たれば、母なるガンジスまた母御のもとに罷りいで、
マガダの王家の隆盛を広く告げ知らせるゆえなり。[50]（六〇）

そして、

海辺のそよ風に、額髪をなぶらせ、

アパラーンタの乙女らは、かの男の生きざまを唄うなり。
樹々にからむ蔓草に身を寄せて、もの思わしげに、
わだつみの、椰子[51]の取り巻くその海辺にて。（六一）

どんな唄かと申しますと、

なんと素敵な殿御だこと！
バッダーユダさまに刃向かう者がおるじゃやら？
比べようもないあのお方のご治績を、
ヴィタの人たちは、たやすくできたことのように、
ぬくぬくと味わい楽しんでおること[52]！（六二）

（ひとまわりして）
おや、プラディウムナ[53]の神殿の幟に何か描いている奴がいるぞ。これはディンディンふう（のやり方）だな。ディンディンの連中ときたら、お猿さんとあまり変わらないんだものな。おやおや、なんとまあ、あいつは、ディンディンの連中には、人気がありそうですな。ディンディン人たちは、つまり、

自らの画筆で、絵をだいなしに汚し、
白亜の館に画刷毛の汚れを撒き散らす。

刃先鋭き鉄器を携え、
宮殿の床を蛆虫のごと這い回る。（六三）

ところで、彼は何を書いているのだろう？
（見て）
おや、「離欲（ニラペークシャ）」と書いている！　まったく、この名は奴にぴったり合っているというもんだ。名は体を表わすと、よく言うではありませんか。このろくでなしめ、私たちの可愛い姐さんに冷たくして、おかげで姐さんは花街の女苦行者が誓戒を守っているみたいに、痩せ衰えてしまったというわけです。かわいそうに彼女は、

黒く長く濃き縮れ睫毛にて涙を、
その涙に洗われし腕環をはめたる手にて顔を、
そして胸奥にて深き悲しみを、
ひとしく支え耐えるなり。
かく、三重の腹の襞に毛の筋もあでやかな女[54]は、
三重（の重み）に三様に耐えるなり。（六四）

さ、そこで彼をたしなめてやりましょう。
おい、ニラペークシャ先生、生まれつきたいへん慈悲深く、情けにあついきみに、ぞっこん惚れ込んだ女を、そんなにそっけなく扱って喜んでいるなんて、良いことですかねえ？　え？

「あてこすりのお言葉、おっしゃる意味はよく分かります。が、私は優婆塞（在家信者）の身と運命づけられている者です。〔釈迦〕如来さまも、『輪廻の理法は、かくあるべし』とおっしゃっておられますので」

如来さまのお言葉は、あの彼女についてのみ守るべきで、その他のことには当てはまらないんでしょうかね？ なに？

「いったい、いつ、どこで、この私が如来さまのお言葉に副わなかったことがありましょうか？」

そうあなたは言い切れるのですかな。

「何の疑いありましょうや！」

では、あなた、お聞きなさい……

疲れ果てて、顎は上がり、舌垂れ下がり、
心臓深くずぶりと矢を刺されたる、
かくのごとき鹿を見れば、きみ想わずや、
如来も〔前世に〕野鹿なりしを。[55]（六五）

奴さん、笑いだしたぞ。

「如来さまの教えには、何の疑いも挿しはさむことはありません。ただし、教典は教典であって、人の本性は、また別のものです。私どもとて、愛欲がないわけではありませんから」

いや、そうならば、あのように〔ふさいでいる〕ラーディカーさんを悲しみの淵から引き上げて救ってやるのが、あなたのつとめですよ。

「あなた、おっしゃるとおりで、まことに恐れ入りました。どうか私を行かせてください」

あなたは放しがたいが〔済度しがたき人だが〕、ま、〔次の〕祝福の詩をお受け取りください……

異郷より帰り来たりて、恋い焦がれつつも、慎ましやかな愛人を、
膝に抱き上げ、肩近く顔を引き寄せ、
いと啜り泣くをなだめよ！
水牛の角のごとくざらつく編髪を解き放し、
涙に濡れし長き髪の一房を、
おのが手で断つことこそよけれ。[56]（六六）

あ、笑いながら、奴さん行ってしまいました。私も先へ行きましょう。

（ひとまわりして）

おや、こっちへやって来るのは誰かな？

ぼろ衣まといて秘所を覆い、
顔は山羊面、褐色で毛深き太り肉の肩、
猿のごとき朱い眼、大根をかじりつつ、
こなたへやってまいる、かの男。
ダーシェーラカ[57]の輩ならずば、

まさに悪鬼なるべし。（六七）

あ、分かった。私どもの兄弟同然の友達ダーシェーラカの王の、玉のような息子グプタクラの館で、あの男を以前見かけたことがあったぞ。はて、この男、このあたりで何をしているんだろう？　あ、こちらに掌を組んで近寄って来ますぞ。なに？

「グプタクラさまから言いつかって、おいらはこっそりとここへ来たんじゃ。この街で、五パナの前金くれてやって、良い遊女さ見つけてこいってな。街中の市場を探し回って見つからにゃ、お女将さん見つけて、そう言えって。太夫のねえさんは、ええとこの娘御みてえにすましてるから、自分じゃ、いいともわるいとも言わねぇこともあるし、自分で行っても有り金はたいて追っ払われるし……」[58]

ははあ、あの田舎っぽい着物を着て、田舎言葉でペラペラしゃべっているあいつは、グプタクラ若殿の恋のお使者だな。この色里にやってきて、色里のことを「市場」はどこかと尋ね回っているわい。

〔あんな奴に〕この珠玉の花街を教えてしまって、〔ここを〕台無しにするわけにはいきません。奴は放っておきましょうか。ま、こう言ってやりましょう。

おい、きみ、遊女たちを探すなら、大通り沿いの塩の市場[59]で探しなさいよ。

ははあ、奴さん、喜んでペコペコ頭を下げて、〔そっちへ〕行ってしまったぞ。やれやれ、私も先へ道を急ぐといたしましょう。

（ひとまわりして）

さて、あのダーシェーラカ人の面を見て不浄になったこの眼を、どこでお清めするといたしましょうかな？

（見て）

うん、そうだ、あそこは、私めの以前の馴染み、シューラセーナスンダリーの住居じゃないか。でも、どうしたことか、脇の扉が開けっ放しですぞ。ちょっと、入ってみましょう。

（中へ入るしぐさをして）

歩き疲れた足を、どこでひと休みさせようか。あ、ここらでよかろう。このプリヤング並木の敷石が、恋人の膝みたいに私を招いているわい。さ、ここに座りましょう。

（見て）

おや、ここに何が書いてあるのだろう？

（読み上げる）

「女友達よ、初めての逢い引きは、
争いの場にあらざるべし。
かつはまた、かの君の心虚ろげなる、
あるいは病みたりしことも、いまだ聞かず。
永く慕い求めしかの若殿のもとに赴きて、
香粉の化粧も剝げ落ちずに帰り来たれるは、なにゆえぞ？」（六八）

（考え込んで）

誰かに冷たくあしらわれた、どこかの女の不運が、あからさまに書かれているな。こりゃあ、誰に聞いてみようかな？

（耳をそばだてて）
あ、足環が鳴っている。シューラセーナスンダリーがこっちへやって来るようです。あの女は、

美しき傘の柄に、若枝のごとき柔らかな片手を添え、
宝玉揺るる帯結びし腰裳に、いまひとつの手をめぐらせ、
裳裾ひきずりがちに、笑みをたたえつ近寄り来たる。
宝飾の輝きに包まれて、光を放つがごときその身は、
月と星と鳥のさざめきに囲まれし、
夜の女神とまがうばかりなり。（六九）

まあ、なんと、彼女の気品があること、この私も座ったままではおれません。手をそろえて子鳩のしぐさをして、私に向かって来ます。
そんなご丁寧な身振りで、私を敬礼してくださらなくて結構です。なんですって？
「久しぶりにお目にかかれた旦那様に礼を尽くすのは、この私の幸せということでございます」
まあまあ、そう皮肉をおっしゃるな。ま、ここに、頃合いの座席があります。どうぞ、どうぞ。
「恐れ入ります」
と言って、彼女は私の座り石の片端をその腰まわりで圧倒するかのように腰を降ろそうとする。
あ、そこに腰を下ろしてはいけませんよ。
「まあ、どうしてですの？」
というのは、そこには、誰かにふられた、どこかの女の恨みつらみが、詩のかたちで見られますので。

なんと！　彼女は手で拭き消してしまうぞ。
小泥棒さん、そいつは消してもだめですよ。この私の心の中に書き留めてしまいましたからね。
彼女は何を隠しているのだろう？
「旦那様は、私の友達の、例のクスマーヴァティカーが、あなたのお親しい絵の師匠のシヴァスヴァーミン様にぞっこん惚れ込んでいるのをご存じでしょう」
ええ、確かに承知しています。しかも、あのお方のところへ、あのクスマーヴァティカーさんが、わざわざ出向いたそうですな。なに？
「恋しさで燃えている女心にとって、それは当然のことですわ。軽率な振る舞いですけれど、女にはありがちなことですもの」
こいつはおもしろい話の幕開きだな。彼女に尋ねてみましょう。
ねえ、姐さん、懇意な仲だからお聞きするので、別によそさまの内緒ごとをほじくり出そうというのではありません。でも、あのお二人の、永年の思いの出会いの宴は、どういうふうだったのでしょうか？
「まあ、聞いてくださいまし」
はい、しっかりと。
「あの女が、お神酒に酔ったふりをして、あのお友達にお恵みを授けようとしたその時、まあ、あの方といったら、

初めの一刻[60]は、
おもしろくもなき格闘技の話で費やされ、

次の一刻は、
胡麻菓子や糖蜜のうわべの交歓にてうち過ぎ、
その次なる一刻も、
筋肉作りなど由なき話などにて失せ去りぬ。
かくなりしゆえ、その先の次第については、
もはや告ぐるべきこともなし、
たとえ御身に語らんとするも」（七〇）

なるほど、で、姐さん、どこからそのお話を、あなたはお聞きになったのです？
「あのお方のお屋敷からやって来た用人のパドマパーラさんから、私は一部始終を聞いて、ご機嫌伺いの使いに託して、あの詩句をお送りしたのですわ。それで彼女は、そのお付きの人と一緒に私のところにやって来て、いささか恥ずかしそうに、苦笑いしながら、私に言うのです。『内緒のこと、黙っていたら、あなたに恥をかかすことになるわね。まあ、聞いてちょうだいよ。こんなことって、あるかしら』って。で、彼女、全部私にしゃべってくれたのですわ。ですから、旦那様も、この粋なお話しのお裾分けにあずかってくださいませ」
手をたたいて笑いながら言っています。姐さん、それで何ですって？
「まあ、私の親友の話してくれたこと、聞いてください。私にこう言うんですよ。『ねえ、あなた、あの彼は私に、

抱かれても、
接吻をくりかえされても、
腰に乗せられても、
爪を立てて気を引かされても、
丸太のように、私を求めることなし。
くたびれ果てし我が身は、
寝台の片端を抱きて、ただ眠りしのみ』（七一）

なのですって！　で、私は、
『なんてまあ、ひどい話ね。いったい、どうしたっていうの？』
と聞くと、ため息まじりに彼女が言うには、

『ありとあらゆる口舌・仕掛けを、我は試み、
彼も努め励まんとせしも、
彼の心に我への愛の情念奮い立たず。
かくして万策尽きし我は、我が身の不幸の身にしみて、
どっとばかりに、胸ふるわせて泣き崩れたり。（七二）

それで、かの人は、泣いている私を膝にかき抱いて、何度も何度も無駄に接吻したり、抱き締めたりして、私をなだめすかしては、なんとか自分に鞭打って、励もうとするのよ。私、言ってやったの。あんた、手で触ったって、何になるのって。すると、恥ずかしさのあまり怯え、冷汗かいて震えなが

ら、あの人は、渇き切ったような声で、言葉も遠慮がちに言うんです、

汝れ自らの魅力〔足らざる〕をそしるなかれ、
咎なき女よ！
目前の宝を見つめるも、我が眼は失せしごとし。
まことに、肥満を取り去らんとし、
まえもって服みし、かのグルグル[61]こそ、
そなたとの甘美なる交わりを、
我より奪い去りしなり。（七三）

そこで、私は考えました……

もし痩せんがために服みしグルグルの、
感官を痺れさすことあらば、
グルグル服みの愛人は、
香煙の役にもたたぬ〔能無し〕ならん！（七四）

私たち二人が、長いあいだ待ち焦がれ、やっとその機を得た愛の交わりを空しく求めている時、

夜の終わりを告ぐる、
王家の太鼓・鐘を司る吟唱者は、
讃誦・祝禱を朗々と唱いあげ、
鐘を鳴り響かすではありませぬか、
友よ！（七五）

それで、私は親切な友達のようなその方のおかげでその窮地から逃れられたのです。でも、あの人も、ばつが悪そうにちょっとのあいだ、付き添ってきてくれました。そして家に戻ったら、あなたのご機嫌伺いのお使者の口上で、からかわれてしまったのよ。これで全部、余すことなくお話ししたってわけ。じゃ、これから不毛の徹夜を埋め合わせるため、私はお昼寝します』と言って、私にことわって、彼女は帰っていったのです。そのあとすぐ、旦那様がいらっしゃって、一部始終、今お聞きになったのですよ」

そういうわけでしたら、この諧謔の小舟にうち乗って、私はシヴァダッタ様のご子息シヴァスヴァーミンなるこの男の、見栄という底知れない虚名の大海に飛び込んでみましょう。つまりですねえ、

肥満せし体に、グルグル服めば、
贅肉たちまち削がれ落つ。
熟女のきみよ、若さ溢るる娘らは、
そんな殿御を、画の中の夜叉[62]とばかりに、
ただ観て楽しむばかりならむ。（七六）

彼女は、声を立てて笑って立ち上がって、ではこれで失礼します、と言っています。手を合わせてのお辞儀なんて結構。私もここから立ち去りましょう。

（ひとまわりして）

おや、あの娼家の軒の並ぶ花街通りで、若い妓たちが群がって、何を見ているんだろう？　あの妓たちは、茎をぴんと立てた白蓮の茂みとそっくりに頸を伸ばして、蓮の顔を驚いてクルクル回る瞳の環で彩らせていて、若芽のような手を胸に置き、お互いに目配せしては、毬や笛やお人形さんの男の子や女の子で遊ぶのをすっかり止めてしまいましたぞ。ははあ！　なんと……

水瓶がころころ動きおるや？　はた、
水袋が引き寄せられて来たるや？
双の穀倉もつ樽[63]が立ち上がって歩き来たれるや？
この奇怪な代物は何ものぞ？　今や識るべし、
これこそ、ウパグプタと名乗る太鼓腹のお出ましなり。（七七）

なるほど、極道者の集まりで、よく言われるように、

ハリクリシュナは、貢ぎ物に喉を鳴らす、
黒い森の野牛なり。
ハリブーティは、水牛にして、
ウパグプタは、風で膨らんだ水袋なり。（七八）

それにしても、あのガンガーとヤムナーの払子持ち[64]で、吟誦役も務めるマダヤンティーが、気の毒にも、あのヴェーダ学に詳しい、吟誦役の我が友を袖にして、あんなウパグプタなんかに惚れ込んでしまい、奴さんのぶくぶくした腕に抱かれるというのは、いったいどういうわけなんでしょう？

もっともあの娘は抱擁なんかに用はありゃしません。なぜというに、あの哀れな娘は、生理の障りで愛の営みをやめており、家計のために、ただ言葉での愛しか[65]、いたしません。あの男は彼女にお似合いですね。ダッタカのお弟子さんたちも、言葉だけの愛は不能者の愛だと教えていますもの[66]。

（見て）

それにしても、奴さん、ふさぎ込んでいるようですが、どうしたんでしょうか？　あ、そうでした。彼女のお母さんが、勘定の支払いの件で、奴さんを法廷に訴えたって、花街で噂を聞いております。それで彼は義母と言い争いをしてたに違いない。こいつは願ってもない、からかいの種でございますな。黙って通り過ぎるわけには、いかんでしょう。近寄ってみましょう。

（近づいて）

こんにちは！　花街の夜叉さん。どこからお出かけですか？

彼は歩き疲れて、カラスみたいな息遣いで「恐れ入ります」ととぎれとぎれに言って、立ち止まりました。

ご機嫌よう。え？

「ご存じのとおり、私はあの婆あ芸者との訴訟の件で、顧問官の役所[67]へ行って、そこから帰ってきた

とこなんです」
はて、なんと、あなたの勝訴をお祝いいたしましょうかね。それとも、罰金払いのお手助けでもいたすことになりますかな? なんとおっしゃる?
「なんとも、勝訴も罰金もあったもんじゃありませんよ! まったくひどい話なんです!」
それはまた、どうして? なに?

「ヴィシュヌダーサは黙想に耽るのみ。
かのコーンカナ生まれの弟は我を脅すことしきりなり。
我は彼によって、ただちに打擲されしが、
ヴィシュヌ〔ダーサ〕は『むむ』とうなづくのみ、
再びその場にて眠りに入りにけり。(七九)

そのうえ、

法官らは〔我に〕迫りて、
文書官や書記[68]の輩も、〔我を〕追及す。
警棒を持つ警吏長らに追い回されて、
我はしばしば拘束されたるなり。(八〇)

だから、私は悟ったのです。つまり、

遊女らと、法廷の吏らとを、
つくづく秤量すれば、
遊女らにこそ、金を与えることぞ良けれ、
彼女らには、せめて愛欲の愉しみ存するがゆえに。」(八一)

おやまあ、書記どもの罠から、なんとかご無事に逃れられて良かったですねえ。あなたは、とにかく、正気に戻られました。そこで、どうか〔次の〕祝福の詩を〔お受けください〕……

その声は甘く優しく快く、
酔いほんのりと、情け深き閨の技、
ヴァクトラ、アパラヴァクトラ律の歌にて、
花の遊女が、汝れに言い寄るべし。(八二)

奴さん、手をたたいて笑って、向こうへ去って行っちまった。私も先へ進みましょう。

(ひとまわりして)
おや、あの別な男は、

誰ならむ? 酒に酔い、よろめく肢に、

ラータ風に香土を美々しく塗り付け、
　こちらへ来たるあの男は？
　眼をきょろきょろし、笑みも頬ひきつるばかり。
　この天国の色里に、何を求めて入り来たりしや？（八三）

あ、分かりました。彼は、

　シャルカラの藩王の館にて、キーラ人の皮職人が(69)、
　コーンカナ人の下女、ピシャーチカーに産ませし、
　トリナピシャーチャに他ならず。（八四）

しかも、

　かの男は、シャルカラ侯を父、
　ニラペークシャ殿を兄と呼びて憚らず。
　げに、下賤の血をひく者は、
　生来、虚妄の言をなす性ありとか。（八五）

（ひとまわりして）
さて、奴さんが、この花街に入り込んで何をたくらんでいるのか、訊ねてやりましょうかな。お

や！　年寄りのヴィタ、バッティ・ラヴィダッタさんが、こちらへやって来ますぞ！　じゃ、まず彼に聞いてみましょう。
やあ、バッティ・ラヴィダッタさん、あんた、あの屍鬼男がこの色里に何をしに来たのか、ご存じですか？　え？
「あなたこそ、それをご存じではないのですか？」
あ、いや、それではいいです。どうぞお通りください。
（ひとまわりして）
やれやれ、こんな連中のはびこる森の中に迷い込んで、ぐったりとした気分を、どう晴らすことにしたものかな？　さてと、おお、あそこに、

　我が友ラーマの屋敷見ゆ。
　友の訪れを恐れて、錠前かたく閉ざしたり、
　遊び女たちとの、途切れざる快楽をむさぼらんがために。（八六）

さて、立ち寄ったものかどうか？
（耳をそばだてて）
　腰帯の鈴の音は、足飾りのたてる音にて途切れがち。
　拳を振り降ろす音は腕環の一撃のさまを匂わせ、

喘ぎと吐息洩れ来たる、奥なる一間より。
かの女ラーマーがラーマを、役割を交換して、(70)
楽しませおるにぞ違いなし。（八七）

だから、中に入っていくのは止めにしましょう。愛の営みという車の軸受けをぶち壊そうとする人なんかいませんものね。さっさと行ってしまいましょう。

（ひとまわりして）

あれ、誰だろう、あそこにいる、
梢の先にわずかの小枝を残すのみの、
焼け焦げしシャールマリ樹(71)のごとき、
色里なる蓮池に出没する、
痩せぎすの色黒のヴィタなる鷺にして、
砂漠の妖怪のごとき、あの男は？（八八）

あ、分かったぞ。あれは、スパラ人、タウンディコーキ・スールヤナーガ(72)です。いったい、ここで何をたくらんでいるんだろう？　なんと、奴さん、私を見るやいなや、上衣の裾で顔を隠して、愛神の寺院を左回りして、行ってしまったわ。

うん、そうだ、私の友達のヴィシュヌさんが私に言ってました。二日前にあの男は、南門の外のあばら家に住み付いている安女郎たち(73)といちゃついたので、下賤の馬方連中に目撃した証人として、訴えられ、裁判所に引っ立てられた。けれど、軍の司令官のスカンダキールティ(74)が、この方は自分の主人のヴィシュヌ様の義弟だと言ってくれて、辛うじて助け出してくれたのだ、と。

だから、奴さん、この花街での出会いを、なぜ今になって、恥じるかのように、身を隠そうとするんだろう？

（考えて）

王家の息子とつきあいがあることで、あの男はこの失態に恥じ入ってるのでしょう。驚きですね。徳ある人との交際は、まさに美徳となるということです。そんなに徳行に気をつかうように奴さんがなっているとしたら、それこそ知らん顔をして、望みどおりにして喜ばせるわけにはいきません。私も寺院を右回りして、彼に出会いがしら、からかいのつぶてを雨あられと叩きつけてやりましょう。

（ひとまわりして）

奴さん、私と顔を合わせて、笑いだしたな。

やあ、スールヤナーガさん、この花街に新しくご降臨になったというに、暗闇の中の踊りのように、友達を無視して甲斐ないものにしてしまうことはありませんよ。え？

「私がここにいるのは、何のためなのか〔ご存じですか〕？　じつは、母方の叔父マウドガリヤの庶子ハリダッタが、いま牢屋に閉じ込められているのです。で、病気しているもとの愛人の近況を聞いてきてくれ、と私に頼むので、ここへ来たというわけなのです。でも、あなた、私の言うことを納得していただけないようですな」

いやいや、これはまことに驚きいりました。あなたがお友達のことについて、変わらぬ気遣いをなさること、また、あのお職遊女が、以前の情人たちが苦境に陥ってもなお、彼らをなおざりにしない

こと、まったく恐れ入りました。
ですから、そのような、

化粧にふさわしく派手やかに装い、
画布に姿をとどめるラクシュミー女神のごとくでありし、かの女、
愛する男たちに情けの細やかなる女なれば、醜くとも、片端[75]でも、
蕩児たちは、彼女をいとおしく思うなり。（八九）

しかも、あの女は、なかなかに難しいことをしようとしているように、私には思えます。なぜかというと、彼女は疑いもなく、

牢獄に囚せられ、通気変わらずして顔色蒼ざめ、
その額には、神への〔たびたびの〕礼拝による胼胝生じ、
濃きひげの一面に密生したる、
あたかも、黒き骨に押し潰されたるがごとき、かの男の顔をなめる。（九〇）

あなた、
「だからこそ、私はあの女を立派だと思ってるんです」
とおっしゃる。いや、ごもっとも。ご友人にたいするあなたのご厚情を、私は世に広めましょう。
「そいつは、ご勘弁ください」

と言って、私の足元にかじりついてきましたぞ。なんですって?
「あなた、どうか、この私が遊廓のあたりに入ってきたことは、ご内密にお願いします」
と言われる。ねえ、きみ、月の昇ってくるのを、いったい誰が〔ことさらに〕ふれまわるでしょうか? 実際のところ、あなたがあのルーパダーシーさんのお付き女中、せむしのあの女に惚れてしまったとたんに、もうその評判はこの界隈じゃ、油の一滴が水面に拡がるように、知れ渡ってるってことですよ。ご心配なく。

抱き締められて胸投げかけるも、大きな瘤にて、
背の曲がりし女は腰を近づけることかなわず、喜悦の瞬間にも、
かのティッティビ鳥[76]のごとく、閨に身を横たえて、
蓮華の顔をうつむけし、かのせむしの娘を、
汝は、いかにして愉ませしや?（九一）

「や、もうご勘弁を。くわばら、くわばら! 〔こうなったら〕詳しくご講釈をお願いしたいもんですよ。まあ、あなた、ご覧ください……

頼りなげな足取りで、幼きラクダのごとく振る舞い、
水面を泳ぐごとく、くりかえし両の腕を伸ばし広げ、
天空の星々を数えるごとく、顔を上へ向けるかの女に、
虫に蝕まれて病む蔓草のごときものよとて、

分別ある誰が触れるものならむ」（九二）

なんとひどいことをおっしゃる。味わい娯しんだ婦人のことを悪く言うなんて、あなたのような法に通じなさった方にふさわしくありますまい。それに、

友よ、せむしにして、
蓮の茎のごとく痩せて、
折り曲がりし姿の女にもせよ、
口での愛の営みは、
よこしまな男たちの歓喜にふさわしからずや。（九三）

とにかく、彼女は、森のあたりにたむろして、幟（のぼり）を立てている安女郎連中よりは、決して悪くありません。え？
「どの連中よりですって？」
や、ご存じでしょう、あの、

情熱にあふれ、わずかな小銭(77)でこと足りて、
身分いやしき者どもが交わるにふさわしく、
品よき人々にとっては控えらるべき、あの女たち。
遊び心に燃えるとき、世間の眼に隠れて、
激しき愛の営みを果たさんと望みて、
おぬしが通う森蔭の遊女よりは。（九四）

「そんなこと、どこからお聞きになったんです？」
その手のことについては、地獄耳の私でございます。おまけに、あなたは次から次へと乗り換えてゆく……

友よ、かの美貌で生きている遊女(78)を捨て去って、
〔今〕おぬしは、せむし女に愛を注ぐ。
そのせむし女を捨て去って、
〔まもなく〕かの女の仕える女主人に、
おぬしは近づくに違いなかるべし。（九五）

奴さん、笑いだして向こうへ行ってしまった。では私も先へ急ぐことにいたしましょう。

（ひとまわりして）
おや、あそこのスリランカ生まれの遊女マユーラセーナーの家から出てくる、肩に衣を引っ掛けている男は誰だったかな？　美々しい反り太刀を手にしている南部人らしき連中に取り囲まれて。きれいな飾りのある薄手の上衣を引っ掛け、アンドラふうの帷子を着込んでいて、サフランの粉で肌を化粧して、キンマの葉を手で忙しく扱いながら、こちらへやってきます。

うん、分かりました。ヴィダルパに住む、警察のお偉方、ハリシュードラさんだ。[79] あのとき、この私の見ている前で、彼女の脚にとりすがってなんとかなだめすかしているにもかかわらず、あのマユーラセーナーは彼があのカーヴェリカーに惚れてしまったと思って、こう言った……

「あの女のところに行っておしまい！
私なんかに用はないのでしょう！
月の光の前に、灯の明りなど何になりましょう！
ひとつの手で、ふたつのビルヴァ樹を、
いちどきに抱えるのは止めなさい！」（九六）

さて、彼はどうやって彼女をなだめすかすことができたんだろう？　男が惚れた彼女を捨てて、ほかの女に愛をあらわに移したということが、色街でおおやけになれば、自分の不運が自分にとっての不名誉なことになると考えて、彼女が進んで彼を許したんでしょうか？　それとも、女というものは、人に愛されている男を、誘惑するものだという女の本性から、彼女はただやきもちを起こしたのでしょうか？　それでもなければ、出銭がかさんで弱りきっている彼女の母さんに、なんとかなだめすかされてしまったんでしょうか？　いずれにせよ、あの男に聞いてみましょう。
（掌を合わせ近づいて）

獅子のごとき人よ、かの美しきシンハラびとの女を、
獅子が住む穴を捨てるがごとく、
ドラヴィダの女との愛の悦楽のために捨て去るは、
きみにふさわしき所業なりや？（九七）

「私はマユーラセーナーをなだめましたよ。それで、ちょうど、あの妓の家から戻ってきたところなんです」
とおっしゃる。ほほう、ではお聞かせください、どんなふうに、壊れかけた間柄を修復なさったかを。
「じつは、二日前に、遊女長官、警衛司[80]のドラウニカ氏の屋敷での歌舞の催しに、私、招かれました。そこに、マユーラセーナーによる踊りが組み込まれていると聞いていたのです。管弦の楽が始まり、最初に神への讃歌が捧げられれ、そして、歌や踊り子たちの舞踊が始まったのですが、そのとき、初っ端の演目でマユーラセーナーの踊りにたいして非難が浴びせられたんです」
なんですって！　そんなことはありますまい。マユーラセーナーの踊りにけちがつくなんて！　誰ですか、そんな断崖から身をおどらせるまねをしたのは？
「酒の女神ヴァールニーのなせるわざですよ」
なるほど、あの警衛司の屋敷には、いつも酒の女神が鎮座ましましているからね。で、酒に迷って誰がそんなことを言いだしたのですか？
「あなたの友達の踊り手ウパチャンドラカですよ」
あの手の男にそんなことを言う資格がありますかねえ。でも、踊りは奴さんの専門ですからね。で、どうなったんです？
「それで、見物人たちは、みんなウパチャンドラカの側についてしまいました。でも、私だけはマユーラセーナーをかばってやりました」

やあ、それは結構でした。まことに時宜に適したお振る舞いでしたね。で、それからどうなりました？

「会衆を説得することはできませんでしたが、皆さんが納得しないまま、論書にしたがって、判定役は私の肩をもってくれました」

それは良かった。まことにただならぬ代価を出されて、あなたはあの女性をあがなわれたというべきでしょう。でも、それから？

「大勢の遊女たちの眼の前で、褒賞が〔彼女に〕授けられたとき、微笑みながらマユーラセーナーは私に流し目をくれたみたいでした。でも、一方、カーヴェリカーは、やきもちをあらわにして立ち去って行こうとし、ひどく私を非難する態度でした。片方の怒り、片方の恵みを眼にして、両岸のあいだに落ち込んで、迷いの流れで、身をもみくちゃにされたような心地のまま、やっとの思いでその困った状況から抜け出して、なんとか家へ戻りました。そして座り込んで、いったい、この二人のどちらかが何をしでかすものやら、思案のぶらんこを揺らしていましたら、突然に愛人がやってきて、私の眼を手で隠すんです。で、私は笑って言ってやりました……

眼隠し上手の小盗人さんよ！
忍び笑うも無用なり。
双の手のいみじう、ただならぬ感触に、
そなたと知らるるが故に。（九八）

こう言われて、香ぐわしい息使いで分かるように、酔ってたどたどしい口調で私に『あたしが誰だ

か当ててごらんなさい！』と言うではありませんか。で、私、言ってやりました……

我が両頰の産毛の逆立ちは、
そなたに答えを与えておらずや？
されど、乙女子よ、そなたみずから、
そのお尋ねには『これは他ならぬわたくしよ』と答うべし。（九九）

で、女は私の眼を開かせて、『この産毛の立ち震えるやり口で、このあたしをいつも蕩かせるったら、ありゃしない！』と言って、ほっぺたに口づけしてから、行っちまおうとするのです。そこで私は言ってやりました……

抱擁して、この胸の懐いを奪い取り、
そなたはいずこへ去らんとするや？
小盗人よ、我が頭にてこの双のみ脚は支えられ、
そなたは、ここにしばらくとどまるべし！（一〇〇）

そう言われて、彼女はベッドへ近づいて、そこに腰を下ろしました。私はそこで彼女の脚を濯いでやりました。彼女は、『足濯ぎのお水、どうもありがとうございました。さあ、どうぞ、こちらへおいでなさい。ほんとに色事師さんねえ』と言うのです。そして、ほころびかけた蕾の群れをたわわに付けているジャスミンの蔓のように微笑みながら、腰帯を結んだ落ちそうなガウンを片手で押さえま

した。
ベッドの掛布にからまれて、腰は二重にくびれ、腕は蓮の茎のように〔ほっそりと〕、背をねじるように横向きに伏した悩ましき風情です。その時、腰がねじれて歪んだ腹の襞の中に円い臍が埋まり、産毛は不ぞろいに並びます。
片方の乳房に垂れ下がった真珠の首飾り、もうひとつの水瓶のような乳房の脇近くに、頬づたいにマカラ形の飾りも垂れ下がり、それらの飾り〔の華やかさ〕に引き立てられて、額の栴檀の印がことさらに美しく見え、また、肩のくねりも魅力を添えています。そんな彼女は、まるで含羞をたたえた官能（ラティ）の化身[81]に見えました。
蔓草のような片眉を引き上げて、彼女は青蓮の花を撒き散らした水を注ぐかのような視線を私に投げかけ、そして言うのでした。『どうぞ、あなたのお好きなように……』と。私は、手近に置いてあった化粧箱を窓辺から手に取って、彼女の蓮の足を彩ってやろうと、近づいていきました。
それで、あなた、紅を塗ってやりましょうと眼を向けると、踵を投げ出したために、足首の飾りがふくらはぎのところにかかってしまい、その絹の下着は新調の品なので太腿になじまず、さらさらと衣ずれの音をたてては、彼女の身をよじくねらすしぐさのたびに、ずれてしまうのです。
それで、彼女の内腿の奥、まるで若い象の牙の間の口奥みたいな、そしてバナナの木の樹芯のようなものが、私に見えてしまったのです。すると、見ている私を押し戻して、彼女は言いました。『お行儀が悪い、貴方の眼』そして、片足を伸ばして私の胸を蹴ったのです。
そこで私は〔喜びに〕逆立った産毛の鎧で肌をざらざらにしたまま、『ねえ、きみ、まだ紅を塗り終えていないのに、そんなに邪慳にしなさんな』と言うと、彼女は『いいわ、眼をつぶって、仕上げてくださいな』と言います。で、眼を閉じたままで、両足に紅を塗り終えると、彼女は私の髪をつか

んで接吻するのです。そうなって、また前と同じように総毛立っている私に気付いて、『あなたはアショーカの樹みたいに、燃えていらっしゃるのね[82]、色事師のあなたには参りました』と言って、私を抱き締め、ベッドに沈み込んでしまったのです。
さ、それから後はどうなったかは、神様がたのお気に入りのあなたにも、よくお分かりでしょうな」
もし、そういうことだったとしたら、あなたもまた、タウンディコーキ・ヴィシュヌナーガ君の贖罪のためのヴィタ連中の集会に出席しなくちゃいけませんよ。え？　なんですって？
「とんでもありませんよ！　もし私の頭で彼女の蓮の御脚（おみあし）の蹴りの恵みを受けたとしたなら、それこそ私の贖罪そのものですよ」
とおっしゃる。もしそうなら、ヤムナー河の水の奥深く住む、クリシュナの脚のあとを額に付けている、あのカーリヤ竜が、ガルダにたいして無敵なように[83]、あなたもヴィタ連中みんなにひけを取らないわけだ。
あ、彼は笑って、「ありがたき仰せです」と言って、向こうへ行ってしまいました。やれ、私もヴィタの集まりに出かけましょう。ああ、友達連中とおしゃべりに耽って、時のたつのも忘れてしまったわい……

花閉じる蓮華によって、去り行く名残を惜しまるるごとく、見守られつつ、
深まる陰りによって蝕まれゆく陽射しは、高楼の甍に這い登り、
かつは、その光の条にて、園生の上を向く梢に長く触れなずみ、
その鮮やかな紅色を、櫓に憩う鳩の眼にかすめ取られ、かくして、

太陽は西へと沈み行く。（一〇一）

そして、今、
猫は、
あちこちの小鳩のさえずりに誘われて、
高窓を通って、楼壁の上に跳び下り、
孔雀は、
テラスの並みより戻り来たりて、
常の止まり杭に近づき、
鹿は、
夕べの礼拝に捧げられし花々を蹴散らして、
地の上にて眠りに就かんとし、そして、
白鳥は、
水中より出でて、
館の蓮池をめぐる欄干のもとへと進み行く。（一〇二）

（ひとまわりして）

猫目石の微粒のごとき香煙は、

窓を通って濃さ深めつつ立ち昇り、
甍に漂いけり。
大路を、上になり下になり、飛び進む蜂の群れは、
夕べの沐浴の灌ぎ水の流れを追って、
さまよい飛び交う。（一〇三）

ああ、いまや、前庭は、掃き清められ、水を撒かれ、花々で飾られ、召し使いたちは、夕方の服務で忙しくしていますし、お姐さんがたはそれぞれのお国ぶり、年格好や、財力にふさわしいお化粧に余念がありません。行き交う情事（いろごと）のお使者たちの愛らしい動き、酔い心地でやってきたヴィタたちは、気の利いた軽口をとばしては、楽しみに色を添え、四つ辻や広場は沐浴を済ませ身づくろいをして、一杯飲んで陽気な若者たちでいっぱい。花街の大通りは、最高に素晴らしいではありませんか！　ここには、

跪坐せられたる牝象は、ゆっくりと、
背に人を乗せられて、いななきの声をたてる。
戸口に待てる被布牛車に女人が乗り込む。
ちゃらちゃらと足飾り、腰帯飾りを鳴らし、
耳飾りを揺らせる遊女を乗せ、
その豊かな腰の重みに耐えかねるごとく、
かしこの馬は並み足で進み行く。（一〇四）

そしてまた、このあたりでは、

灯火の光は蔓草のようにくねりあって窓から映え出て、
孔雀の頸の黒地のごときぬばたまの闇が、いずこともなく忍び寄りて、
処々新しき白亜も鮮やかな館の壁は、
タマーラと雌黄の泥で隈取りされた(84)かのごとし。(一〇五)

(ひとまわりして)

さても、この「夕暮れ」という名前の、昇って行く月を主(あるじ)とする、現し世の宴のさまは、すべての点で素晴らしいではありませんか。今しも、お月さまは人々の眼に、差別なく不死の仙薬を注ぎつつ昇って行きます。それはちょうど白睡蓮の池へ、微笑みかけるかのようです。それは、

「あなたさまは、青睡蓮の葉の穴を通って私にキスしにいらっしゃったの?」
「ローヒニー(83)は〔今〕あなたを見てませんよ! ね」
「私におっしゃって!」
「震えなんか棄ててしまいなさいな!」
などなど、嬌声まじえての由なきおしゃべりを立ち聞きせんとするごとく、
ほろ酔いの女子たちの酒杯の中に、月は急ぎ昇り初めぬ。
その光は耳飾りの尖の宝玉にて散り乱されつつ。(一〇六)

(ひとまわりして)

かしこの女子は、愛人とともに、甘き唄を歌い、
かの弦琴は、甘美な音で爪弾かれ、
祝宴が開かれ、杯は飲み乾され、
かかる楼上高く、出でし月は昇りぬ。(一〇七)

そして、お月さまは、さらに、

光の条にて、池の水面に橋をかけ、
バナナの樹の上に、輝ける錫杖の束を投げかける。
さらにまた、真白き家々の連環に、その光の漆喰を塗り立てて、
若枝に真珠を撒き散らすかのように〔月光が降り注ぐ〕。(一〇八)

(ひとまわりして)

ああ、なんとまあ、乳の海から溢れ散らされた波のうねりのような、この「月光」と名付けられたしたたる乳色の液で、俗界は恩寵にあずかっているみたいです。今、

若者たちは、馬を、象を、駕篭を、幌牛車を駆っては、

娘たちに、ひしと抱き付かれて、
天界を往くガンダルヴァやシッダの一組[86]にも見ゆるなり。（一〇九）

（ひとまわりして）

女を乗せしあの漢（おとこ）、酔っていちゃつき戯れては、
背を彼女の引き締まりたる胸元にて抱き締められ、
振り返りざま、彼女に接吻するも、
その「馬」は、迷うことなく、馴れし道を家路へ向かい行く。（一一〇）

おや、あそこの男は誰だったかな？　あの、廓の通りで、月明かりにもかかわらず、まるで暗闇の中みたいに閨房の愉しみに耽っている図々しい奴は？　うん、分かりました。あれは、スラーシュトラのシャカ族の若殿、ジャヤナンダカです。彼はバルバラ人の水汲み女郎[87]にぞっこん惚れ込んでいるわけです。それにしても、奴さん、どうしてこの花街全体よりも、女を買うならバルバラ女郎が良いなどと考えるのでしょうか？　それとも、

闇の女神のごとくに、
黒き瞳と白き歯、
細き弦月かかりし夜のごとく、
バルバラの女は映えて見ゆ。（一一一）

ま、スラーシュトラ人、猿、それにバルバラ人、みんなひとつの同類みたいなものだから、驚くことはありませんや！　そんなわけで、

野牛にも似たバルバラ女に、
眼を奪われしあの男。
その眼差しは、
恋の憶いでやつれいて、
かの月の光も、
闇と思わるる。（一一二）

まあ、いいでしょう。それが彼の道なんですから。さ、ここから立ち去りましょう。

（ひとまわりして）
おや、あそこの女は？

両耳に黄金の棕櫚の葉形の飾りを付けて、
編みし髪さきには、
玉、真珠、そして金の飾りを下げ、
胸当てで、胸と両腋を被い、

裾を折り返し腰裳をまとえる、
あのラータの女は誰なるか？（一一三）

（考えて）

あ、分かりました。あれはラーカーだ。王の義弟のアービーラ族のマユーラクマーラ、孔雀(マユーラ)みたいに踊りを踊るあの男と、花街通りに面した切妻窓(きりづままど)で抱き合って、幸せを見せびらかしています。あの男は、やれやれ、哀れにもその愚直さを彼女に買われたみたいですね……

しかも、黒く、弱々しきマユーラクマーラを、
色白でたくましきかの女は、
自らの影の端きれのように、胸のあたりに抱きかかえる。（一一四）

（ひとまわりして）

おや、また別の女がいます。あれは？

（考えて）

彼女は、おそれおおくも、その名も高きシャールドゥーラヴァルマンさまの息子、そして私たちの良い友、ヴァラーハダーサの愛人、カルプーラトゥリシュターという名のギリシャ系の女だ。月の顔(かんばせ)を映す酒杯を、三つ指で彼女は支えています。頬に影を揺らす耳環を垂らして、まるで肩のあたりに光線でゆらゆら揺れているお月さまを背負っているようです。彼女の、

チャコーラ鳥[88]に見紛う、その揺れ動く目は、
酒に映りし顔を凝視め、長き蔓草の額髪を爪先にて梳き散らし、
ギリシャ女は、白くたおやかな、マドゥーカ花[89]のごとき双頬に、
浮かび出でし酔いの紅潮を、紅の痕と虞れて、拭き取らんとす。（一一五）

で、ギリシャ人の遊女と牝猿の踊り子にたいして、マーラヴァ人の情夫と唄いいななく驢馬、こういったものは属性において共通しているものと、私は思うのです。創造神は似たものどうしを、あらゆる点でお上手に組み合わしたもんですな！　そんなふうですから、

アートマグプターの蔓草はカディラ樹に、
パトーラ蔓はニンバ樹に、纏いすがりつく。[90]
ギリシャ女がマーラヴァ男にくっつくと、
はてなんと、ぴったり、結びからみつくことよ！（一一六）

いや、まったく、あの娘が私の女友達だったとしても、話しかけることはありませんや。あのような牝猿の金切り声そっくりに、やたらにスィートという音をたて、わけの分からぬ子音を混じえ、なんだか特別な意味ありげに、人指し指を振り立てるだけでほのめかすような、ギリシャ人の遊女のおしゃべりなんか、誰がすすんで聞いてやるもんですか！　もう、結構、結構。

（ひとまわりして）

あ、あそこの男は誰かな？

　顔に向かって吹く風は、
　かの女の巻き毛の先から上衣の裾までさわに吹き乱し、
　ヴァーサヴァダッターを連れ去るウダヤナ[91]のごとく、
　象によりて彼は愛人をすばやく抱き運ぶ。（二一七）

（考えて）

分かったぞ。あの男は、豪商の息子で、ディンディンの連中から「若葉ヴィタ[92]」というあだ名で取り沙汰されている奴だ。恋の営みの戦場に腰布一枚で出ていく輩の頭領ともいえる若者です。

色事にのぼせ上がって、親御さんのご説教も意に介せずに、この花街の美女、私の娘に熱を上げている男です。まったく、あの男はあまりにディンディンふうに過ぎる。でも、私は舅という呼び名の役回りとなっているわけです。声をかけることもないでしょう。会釈して立ち去りましょう。

（ひとまわりして）

それでは、やっと私もヴィタの集会にたどり着くことになりました。花街の大通りを心愉しく通り過ぎて、ここなるヴィタの頭領、バッティ・ジームータさんのお屋敷に着きました。この家の門前は、各所から集まって来たヴィタたちの乗り物がいっぱいでごったがえし、玄関先には銀の足濯ぎ鉢を持って召し使いたちが待ち受けています。

いや、まったく、豪勢なかたがたは豪勢な催しをなさるってのは、よく言ったものですな。五色の

花がばらばらに撒き散らされたり、花輪に結われたりしています。香煙がたなびき、灯火が光り輝いています。挨拶が交わされ、乗り物が帰され、色っぽい風情が見られます。唄がうたわれ、楽器が奏でられます。

手が伸べられては、ひそひそ話しも洩れてきます。いとしげに抱き合ったり、優しく寄り添っている人々。また、丁寧にお辞儀している人もいる。背に触れられる人、眉をひそめて色っぽくにらまれる人、頭に接吻される人、艶っぽいしなをつくっている人。栴檀香が贈られ、お化粧が直され、香油が塗り付けられ、香粉があちこち散っています。ヴィタは冗談を飛ばし、遊女はそれを楽しんでいるのです。いや、なんとも言いようがありませんな……

　膝まで届く草花にまといつかれ、
　矮人の足はからくも差し上げられ、
　女たちは目をくるくる回しながら、スィートと息を吐いて、
　足元にまつわるケータキーの葉を振り払う。（二一八）

そして、ヴィタの頭領たちは、

　いと晴れやかに、座を彩る寵姫と相席を占め、
　気の利きたる刺々しからざる冗句を飛ばし合う。
　遊女たちの、四方より一度に彼らを取り囲むさまは、
　牧場にて牝牛の群れに取り巻かれし牡牛さながら。（二一九）

それで、この集まり(93)は、

女たちの月の顔によりて、
百の月の輝く空と見紛う、
投げかけられる流し目によりて、
かの空の果てはまだらなり。
若者たちの腕の押し合いによりて、
閂(かんぬき)なされしごとく、
かつは、栴檀にまみれし胸によりて、
石の積まれしごときなり。(一二〇)

それからまた、ここにいる、

豪傑たちは、女たちにとっての如意樹にして、
財を蕩尽せる、刹那主義者。
年老いたる者も、若き日の格闘の想い出を、
スヨーダナとヴリコーダラ(94)のそれのごとくに、
声張り上げて物語る。(一二一)

さあ、それでは、友人たちの指示をいただいたこの頭上で心の王様(愛神)に合掌してから、友人たちの頼み事ですので、この任務大事と、あのお触れをしましたタウンディコーキ・ヴィシュヌナーガさんの贖罪について、お集まりのヴィタの皆さんに、お諮りすることにしましょう。

(ひとまわりして)

さあ、さあ、各地よりお集まりの、討論好きの皆さん、そしてさまざまな争い事を提供なさる伊達男の皆さん。どうかお聞きください……

力を愛せる、愛神カーマは、
禁欲の輩に勝利せり。
感官の馬を乗りこなすかの方は、すべての人の心の支配者なり。
いかなる偉大な生類といえども、
その冠の宝玉の光もあせるばかりに、
頭を垂れて、かの神の仰せに従うものなり。(一二二)

(ひとまわりして)

さても、笑いさざめき、耳環を揺らし、
千鳥足でここかしこに流し目くれる、
遊び女たちの酔態の何ものにも勝ることよ!

続いては、若さに溢れる媚態が卓れたり。（一二三）

そこで、位の高い遊女さんたちのおみ足の埃で清められたこの頭を、伊達男の皆さんの前に深々と垂れて、お告げいたしましょう。
「何のお話しでしょうか？」
とおっしゃる。まあ、お聞きなさいまし……

かのヴィシュヌナーガは、蛇のごとく、
胸を地につけ、ひれ伏すなり。
悲しげに贖罪を願う彼に、
救いを与うることこそ良かるべし。（一二四）

え、あなたは何とお訊ねですか？
「彼はどんな失態をしでかしたのですか？」
お聞きください……

額髪を振り乱し、目尻消え、
怒りに眉つり上げ、下唇を噛みしめ、
きらりと震える歯をのぞかせしその顔をぶるぶる震わせて、
足環を高鳴らせ、紅き衣ずれ落ちるを手にて引き上げて、

彼への恋に狂いし情婦は、足環つけしその足を、
彼の頭の上に載せしなり。（一二五）

え、なんですって？
「男心を解さぬどこの女の、不注意ともいうべきそのような不名誉を、あなたはお触れになっているのですか？」
スラーシュトラ出身の、あのマダナセーニカーさんのことですよ。おや、ヴィタの皆さん、やれやれ、ここにいる他の誰のことでもなくて良かったとばかり、とまどいつつも、

手を振り、忍び笑いを洩らし、
非難の言葉をつぶやき、渋面をつくり、
顔見合わせては、考えをめぐらせ、
憐愍の情けを浮かべるごとし、
並み居る極道の面々は。（一二六）

この場に列席の連中から、ヴィタの頭目と推されているバッティ・ジームータ先生は、憐れみをおぼえ、困り果てているみたいです。彼が、

なんとしたことぞ！　なんとしたことぞ！　と、
吐息をつくさまは、くたびれ果てし象のごとし。

ジームータは雨雲のごとく、
双眼より涙を雨降らす。（一二七）

お、私を呼んでいます。
はい、はい、ただいままいります。
バッティさん、何を言いたいのかな？
「きみは私が前もって聞いてきたことを〔皆さんに〕またしゃべっているね。〔ヴィシュヌナーガ君が〕贖罪のために、このバラモンがたの集まりにやって来たってことを。私がここにこうして席を占めているのも、それだからだ。だから、まず誓いの言葉を述べて、ここの皆さんに祝福を与えなさい」とおっしゃる。バッティさんの仰せのとおりに〔いたしましょう〕。
さあ、さあ、皆様がた、お聞きください……

決して、賭場で賭けに勝つことなかるべし。
母御の〔教え〕に耳を傾け、
父御のもとに、うやうやしく仕えるべし。
温乳を飲み、菓子を食せよ。
しかして、迷妄のあまり、女の正式な夫となるべし。
この場において、適切ならざる発言をなす者は。（一二八）

それから、また、

老師がたに奉仕して、社交の集いよりは身を引くべし。
年寄りのごとく、礼儀を弁えた若者となれ。
老者に気をつかいて、静謐を旨とすべし。
ここに座りいて、場違いの言葉を発する男は！（一二九）

（まわりを見渡して）
おや、ダーラヤキ・アナンタカタさんが、急に立ち上がって、私を呼んでいるぞ。
「この件で罪があるのは、恋の道に通じていない女のほうで、ここにおられるお方ではないと思います。お聞きください、

その足が触れるとアショーカ樹に時ならぬ花が咲き、
その足に愛神も弓に矢をつがえて潜む、
その足が野獣の頭に誤りて載せられしか！
かかる軽はずみな遊女は永く贖罪に服すべし」（一三〇）

行き届いたおっしゃりようですな。まったく同様に、

ここなる驢馬は竪琴に合わせて唄い、
かしこの猿は韻律に合わせて誦し、

水牛の乳の温められたる中に、
マンゴーの果汁は、したたり混じりあう。（一三一）

それにしても、罪過を犯した人は、その罪過をあがなわなければなりません。この男は思い悩んでここに来たのですから、皆さん、お情けをかけてやってください。お、会衆の中で、コーグラさんのお孫さん、どちらかな？　あ、情事に耽って乱れた髻を片手で結い直しながら、汗の玉をさながら真珠の小粒を散りばめたように額に浮かべ、指で拭いつつ、

「彼の贖罪を聞きなさい」

と私に叫んでいます。

いま、そちらへうかがいます。

や？　そこらのヴィタ連中は「見てくれはヴィタの面汚しのくせに、このヴィタの集いでヴィタの首領面をして立ち上がって罪滅ぼしを命じているあの男は、いったい自分を何と心得ているんだ」と怒っていますな。

もし、マッラスヴァーミンさん、お聞きになりましたか、皆さんがおっしゃってることを？　なんですって？

「どうして、どうして、皆さん〔黙って〕お聞きなさい……

父の死後、五夜にして、
友人たちは嘆き悲しみ、
縁者等の〔なお〕心おさまらざる時に、

泣きわめく赤子を傍らにしつつも、
女奴隷とともに、余は酒を啖いしぞ。（一三二）

そんな私がどうしてヴィタの面汚しであるものですか！」

あ、それでしたら、皆さんもあなたをヴィタの頭領株とお認めになるでしょうな。ま、腰を下ろしなさい。で、なんとおっしゃる？

「ですから、彼に罪滅ぼしが与えられるべきなのです」

はいはい、分かりました。では、もう一度、皆さんにその旨くりかえしお伝えしましょう。[95]

おや、あそこで、シビ族の詩人アーリヤラクシタの奴さんが、風の気の乱れたゼイゼイ声で私に向かって声をかけ、

「だめ、だめ、そんな罪滅ぼしでは、だめ」

と反対している。あの漢も、また、並のヴィタではありませんぞ。というのは、

碩学のバラモンの家々にて、
酒盃を得んがために詩をひさぐ、
シビ一族として生を享け、
彼は、バルトリスターナにて歳を経にけり。[96]（一三三）

そして、

さもあらばあれ、今の世の詩人は、
　一杯の酒を求めて、
カーシー、コーサラ、バルガ、
はたニシャーダの街々にて、詩を売るなり。（一三四）

さ、近寄ってみましょう。はい、御前に。なんと言われる？

「蜂が蓮の花に閉じ込めらるるごとく、
頬の窪にたたえらし、かの糖蜜酒の一杯、
浮気女によって吐かれ、バクラ樹に花咲かしめ、
眼に悦楽をもたらし、青きマンゴーの実にも似合いたる[97]、
そが一口が、なにゆえに野獣の頭に届くことあらむや？」（一三五）

おや、また別に、パヴァキールティが手を合わせて、この贖罪について、私に呼びかけています。
あの人も、まだ若いのに、人並みはずれたヴィタのひとりです。というのは、

剃髪の老比丘尼、破れし袈裟まとい、
乞食のため、憚ることなく入り来たりしを、
彼はこの哀れなる老女を地に押し倒し、
震える彼女をほしいままに愛の慰みものとしたり。（一三六）

では、近寄ってみましょう。
「彼女への罪滅ぼしは、こうして、

髪を引っつかみて引き寄せ、
彼女は腰の帯にて彼を縛り上げ、かくしたるうえ、
眠らんとする彼女の両脚を彼は撫でさするべし」（一三七）

おお、この提案も否決されましたぞ。
あれは、金持ちのどら息子で、召し使い連中の話の種とされている、ガーンダルヴァセーナカです。
手を上げて私を呼んでいます。あの男の手は、

三様の楽曲を、さまざまな弾き方で[98]、指先にて掻き鳴らし、
紅蓮華の葉を散り撒くごとく弦を操る。
女の腰に竪琴を置きて、琴の胴部にそえし[99]彼の手は、
豪家の内房の美女の爪弾きを心ゆくまで味わう。（一三八）

彼のそばに行ってみましょう。
（近づいて）
なんと言われます？

「腰なる車の後ろにひるがえる旌旗に見紛う、
かつ愛の合戦の乱闘に音を立てる魔法の竪琴[100]のごとき、
美女たちの宝玉散りばめし腰帯と、
不潔な驢馬の両の足と、
さて、いかばかり隔たりあることよ！」（一三九）

（向きを変えて）
あそこで、南部からやって来た、詩人のアーリヤカさんが、罪滅ぼしの仕方を提案しているぞ。なに？

「気まぐれな流し目をくれてやるごとくに、
くりかえし、くりかえし、
蓮華の耳飾りもて、恋心に酔える女は、
彼の頭を打擲すべし」（一四〇）

でも、この〔提案〕も、ガンダーラ人のハスティムールカによって退けられましたな。あなたは何と言われるのですか？

「女によりて、耳もとに着けられ、爪の掻き痕を有し、
目尻ごしに注がれし流し目によりてまだらになりし、
かの耳飾りが、香ぐわしい花粉とともに、
かの野獣のごとき男の頭に降臨さるるとせば、
そは、はたして、かの漢の贖罪となりうべしや？」（一四一）

「いや、ごもっとも」と言って、ヴィタのお偉方たちも納得したようです。
（向きを変えて）
お、あそこの二人が私を呼んでいます。

彼らこそ、席を同じくする朋友、
グプタとマヘーシュヴァラダッタなり。
ヴァラルチの詩風[101]を慕いて、
詩才を得し、かの二人。（一四二）

はい、そこへまいりましょう。
（近寄って）
さて、グプタローマシャさん、何と仰せですかな？

「かの女の足濯ぎの水にて、
彼の頭を洗うべし」（一四三―A）

となっ。どっこい、これにもまた、三学に通じている友達から結構な御名で呼ばれているマヘーシュヴァラダッタさんが反対なさる……

「かの女の足濯ぎの水を、
飲むことさえも、彼には許されまじ」（一四三―B）

と。

あ、私どもの友人、老ヴィタのサウヴィーラカが、あそこで思わず微笑を洩らしながら、いちだんと声を張り上げて叫んでいます。何と言われます……

「沐浴終えて濡れ解けし髪の房を腰に垂らし、
飾り着けざる身のまま、
ひときわ艶めかしき細軀の彼女を
余はここに連れ来たる。
かの男は、その彼女にたいし、
その瞳の輝きのまだらに映える、姿見を掲げ保つべし」（一四四）

この案もまた、ダーシェーラカ人の詩人、ルドラヴァルマンによって、退けられました。彼が言うには、

「コーキの豪家に生まれ、学識もある、
王中の王者の顧問を務める大臣、かの男は、
遊女の穢れし足蹴によりて、
凌辱されたる髪をたくわえること許されまじ。
剃髪せざるべからず」（一四五）

「それは、まことにありがたい思し召しです」

と、当のヴィシュヌナーガは言って、しゃべり始めましたぞ。

「この〔私の〕常に喜びであった頭に、賤しい女の足が置かれて汚されてしまっては、髪の毛どころか、頭を切り取ってしまいたく存じます」

いや、これも、お頭のパッティ・ジームータによって、反対されました。おっしゃってるのは、

「たわみし蔓草の〔ごとき〕眉もてる麗人たちの、
腕環のたゆたう音たてる、爪の輝きに指輪の煌きまじれる、
若枝のごときたおやかな手にて、
彼の髪の愛撫さるること、今後ながくあるべからず。（一四六）

ですから、次の贖罪を言い渡したらいかがでしょう……

酔いて陶然となりて瞳を揺らし、
腰に置かれし片手にて帯をまさぐる、
かの美女の、紅黛塗りて足飾り着けしその御足にて、
この私の頭、祝福さるるをこそ、かの男、注視すべし」（一四七）

おお、並み居るヴィタ連中は、「ブラヴォー」と叫んで、
「これぞ、まさしく贖罪なり」
と、口々に親玉のバッティ・ジームータさんのことを褒めそやしています。タウンディコーキ・ヴィシュヌナーガは、
「まことに行き届いた御裁定、ありがとうございます」
と述べて、退がっていきました。
おや、バッティさんが私に声をかけている。
はい、はい、ここにおります。何です？
「ごらんのように決まりました。その他に何かあなたのお役にたつこと、ありますかな？」
はい、お聞きくださいまし……

口説き上手のやり手女たちが、ますます健やかでありますように！
極道諸兄に、百パナをこえるお金が恵まれますように！
この街にて、親愛なるヴィタの皆様がたの集いが、さらに盛んになりますように！
〔そして〕花の遊女たちの愛の宴が、夜ごとに繰り広げられますように！（一四八）

（ヴィタ退場）

かくして、詩人にして、北インド生まれ、ヴィシュヴェーシュヴァラダッタの息子のシュヤーミラカ作のバーナ『足蹴にされた男』は終わる。

訳註

一　蓮華の贈り物

（1）ルドラ神　Rudra. ヒンドゥー教の三大神の一人シヴァの別称。リグ・ヴェーダ時代の強烈な破壊力をもつ暴風雨神ルドラが、他のさまざまな要素を融合し、ヒンドゥー教のシヴァに発展した。特に世界の破壊を司るとされる。

（2）愛神カーマ　Kāma. 別名 Madana. カーマは西欧におけるキューピッドと同じで、愛、エロスの象徴神。花でできた弓と五本の矢（蓮・アショーカ・マンゴー・マーリカー・青睡蓮）を持ち、それで心臓を射抜かれると、恋心が生じるという。

（3）ヒンドゥー神話によると、カーマは神々の依頼を受け、シヴァにパールヴァティーへの恋情をおこさせるため、苦行中のシヴァを射ようとし、シヴァの怒りをかう。怒ったシヴァの額にある第三の眼から発した火に焼かれ、カーマは肉体を失う。この詩節はこの神話をもとに、肉体を失ったカーマが、女たちのなまめかしき風情を現身（うつしみ）とする（vilasamūrti）と想像し、カーマの本来の体を焼いたのは、シヴァの怒りではなく、むしろ恩恵を授けたのだと考えている。「足蹴」詩節一、二参照。

（4）クラヴァカ　kuravaka. Amaranthus. インド産のヒユ属の植物。赤紫色の花をつける葉鶏頭の類と思われる。

（5）郭公鳥　parabhṛta. コーキラ（kokila. 学名 Eudynamis scolopaceus. オニカッコウ）の別称。啼き声の美しさと他鳥の巣に卵を置いて育てさせる寄生性との二つの点で、詩句にしばしば登場する。parabhṛta は「他者に養われる者」という意味で、寄生性による呼称である。

（6）アショーカ　aśoka. Saraca indica. 無憂樹と漢訳される。紅い花（がく）をつける灌木。インド古典文学に最も多く現われる。美しい娘に足で蹴られると開花するという。

(7) 花を付け浮かれた　svakusumahṛṣita. 花がたくさん付いているので、喜びに体毛を逆立てているかのように見えるという意味である。

(8) シンドゥヴァーラ　sinduvāra. Vitex negundo. 白くて小さい房状の、真珠の首飾りのような花をつける。紫色の花をつける種類もある。M.B.Emeneau, "The sinduvāra Tree [and the śephalika] in Sanskrit Literature," *Sanskrit Studies of M.B.Emeneau : Selected Papers*, ed. by B.A.van Nooten, Berkeley : University of California, 1988, pp.1-10 参照。

(9) クンダ　kunda. Jasminum multiflorum. ジャスミンの一種。小さな白い花をつける。

(10) 年老いて……来ましたぞ　ここでは、老齢―冬、ヴィタ―年、若返りの薬―雪、若さ―春という各二項が同置されている。

(11) ティラカ樹　tilaka. クマツヅラ科クサギ属の一種 (Clerodendron phlomoides)、またはハイノキ科ハイノキ属の一種 (Symplocos racemosa)。白い花をつける。ティラカは通常、額の香印を指し、ここでもその意味を含んでいる。松山俊太郎『インドのエロス』(白順社、一九九二年) 一四一―四四ページ参照。

(12) チャンダーリカー　Caṇḍalika. チャンダーラ階級出身の女という意味。チャンダーラはカースト外の最下層階級で、法典類によると、婆羅門の女とシュードラの男の間に生まれた者。ここでなぜこの名が使われているのかは不明。幼名か。彼女はデーヴァダッターの実妹ではなく、妹分の遊女と思われる。

(13) 若者の恋の……はずの　vyutpannayuvatikāmatantrasūtradhāra. 直訳すると「若い娘に関して性愛の論書に通じた舞台監督」となる。tantra「横糸」、sūtra「縦糸」を生かすならば、「愛の横糸と縦糸を巧みに操るあやつり人形使い」という意味にもとれる。

(14) 神様……のきみ　devānām priyaḥ. 元来は王の尊称としてよく使われた表現であるが、後に「間抜け、阿呆」の意味になる。ここではまだお世辞として機能しているが、多少からかい気味の意あり。この表現の意味の変遷については、M.Hara, "A Note on the phrase *devānām priya-*," *Indian Linguistics* 30 [Katre Fel. Vol.], pt.2 (1969), pp.13-26 参照

(15) 二人の愛の……お使者　anyonyamanorathamūkadūtakānām nayanasaṅgatakānām. 直訳すると「互いの思いの唖の使者である目の交わし合い」。「唖の使者」という矛盾した表現を使う言葉遊び。

(16) ムーラデーヴァ・カルニープトラ (またはカルニースタ) は、インド説話中のヒーロー。伊達男かつ侠客、大盗であり、「窃盗教典」の作者とも伝えられる。ヴァーツヤーヤナ作『カーマ・スートラ』(Ed. by Śrī Devduṭṭa Śāstrī, Varanasi : Chaukhambha Sanskrit Sansthan, 3rd ed., 1982) 二・四・二五に対するジャヤマンガラ註は、理想的な遊女と愛人の例として、デーヴァダッターとムーラデーヴァを挙げる。また二人の恋愛は、H.Jacobi, *Ausgewählte Erzählungen in Mahārāshṭrī* (Darmstadt, 1967), VIII. Mūladeva にも語られる。バーナ作『カーダンバリー』(Ed. by Kashinath Pandurang Parab & Wasudeva Laxmana Shastri Pansikar, Delhi : Nag Publ., 1985. Rep. of Nirnaya Sagar Pr. Ed.) 四〇ページには、カルニースタの物語にヴィプラー (またはヴィプラ) とシャシャが登場することが述べられる (Karṇīsutakatheva saṃnihitavipulācala śaśopagatā ca)。その注によると、この物語は現存しない大説話集『ブリハットカター』に含まれていたらしい。

(17) 閻浮提　Jambūdvīpa. ヒンドゥー神話によると、聖山メール (須弥山) を取り巻く七つの大陸の一つ、中心にある大陸。仏教では須弥山の南側にある大陸を指す。ジャンブ (ムラサキフトモモ Eugenia jambolana) の樹があるので、この名で呼ばれるという。定方晟『インド宇宙誌』(春秋社、一九八五年) 七四―八六ページ参照。

(18) ウッジャイニー　Ujjayinī. 中インド、アヴァンティ国の首都。古代より北インドと南インドを結ぶ交通の要衝として栄えた。グプタ朝第三代チャンドラグプタ二世が、四〇〇年前後の頃に、当時シャカ族が支配していたこの都を占領し、以後五一〇年に匈奴(フーナ)と呼ばれるエフタル族が侵入、破壊するまで、パータリプトラと並ぶグプタ王朝の二大王都として栄華を誇った。

(19) 円盤遊び　cakrapīḍakakrīḍā. Loman と M&A の註によると、線溝を彫った小円盤に糸を巻きつけ、その一端を指につけて上下に円盤を動かす遊び。ヨーヨーのごときものと思われる。

(20) 取り持ち役　pīṭhamarda. ピータマルダは、ヴィタ、ヴィドゥーシャカと並んで、遊閑市民(ナーガラカ)の遊興を取り持つ通人。『カーマ・スートラ』一・四・三一の定義によると、「財なく身ひとつで、背もたれ用の杖と石鹸と黄褐色の衣のみを身につけ、尊い地方から訪れ、さまざまな技芸に通じ、それを教えて社交界や遊女の慣習の場で身をたてるのがピータマルダである。」

(21) 郭公鳥……おしゃべり　parabhṛtalāpa.「寄食者（すなわち取り持ち役のダルダラカ）のおしゃべり」という意味もかけて皮肉っている。註(5)参照。

(22) ヴィプラーの……とった男　vipulāmātyaḥ kāmadattaḥ prākṛtakāvyapratiṣṭhānabhūtaḥ. ここで pratiṣṭhāna という語が特に使われているが、この語は通常「役所、オフィス」という意味であり、amātya と呼ばれる官吏がその役所を官理する。地方の役人が大都市の役所の吏に任命されても、うまく役目を果たせないように、この男は日常的(プラークリタ)な身の上相談にはほどほどの知識を持ち、助言もできるが、ヴィプラーのような高級遊女の相談相手には力量不足だということを示唆した言い回しであろう（M&A 註より）。

(23) 寛闊なお心　vipula matiḥ. vipula に「広い、寛大な」という意味と遊女ヴィプラーの名をかけた言葉遊び。遊女の名ととると、「技芸と……堅固なヴィプラーが悲しみに打ちひしがれることなきや？」という意味になる。

(24) すべて……と考えて　sarvam acirād atyāyatam chidyate // iti // atha guṇavatī pariṣad iti kṛtvā. guṇa には「美徳、長所」の他に「弓弦」の意味があり、ここでは「強く張りすぎた弓弦は切れる……まだ切れてないと考えて」という弓弦の比喩が含まれている。

(25) 彼女に……気晴らしの　kāntalābhavinodane. Kuiper に従う。Loman と M&A は、kāntalāpavinodane「彼女の睦言という楽しみからの」という読みを採用している。

(26) パーニニ学派の文法家　pāṇinīyapūrvako . . . vaiyākaraṇaḥ. サンスクリット文法の最古の原典は、紀元前四、五世紀頃、パーニニにより編まれた『アシュターディヤーイー』であり、それに基づくパーニニ学派は、カーティヤーヤナ、パタンジャリの註釈を経てインド文法学の主流となった。

(27) 堅琴　vallakī. ヴィーナー（vīṇā）の別称。古典インド音楽の主要な弦楽器。この時代にはハープ型のものであった。後に北インドではスティックチター型に、南インドではリュート型に発展する。弦数等にいくつかの種類があったらしい。A.K.Coomaraswamy, "The Parts of a vīṇā," *Journal of American Oriental Studies* 50 (1930), pp.244-53 参照。本作品集では、「蓮華」と「足蹴」では主に vallakī が、「極道」と「逢引」では vīṇa が用いられている。

(28) ここでは、ダッタカラシの耳障りながらがら声をラクダの声に、ラシャナーヴァティカーの美声を堅琴の音色にたとえている。この節のダッタカラシのせりふは、古語的で、文法的にはアオリスト、意欲動詞を多用し、子音が多い。

(29) カータントラ派〔の文法家〕　Kātantrika. シャルヴァヴァルマン作の文法書『カータントラ』を信奉する一派。作者は仏教徒であり、この文法書は仏教徒の間で主に用いられたと思われる。辻直四郎『ヴェーダ学論集』（岩波書店、一九七七年）四四〇—四二ページ参照。ここではカーカーと鳴く（kātantrika）カラス（balibhuj = kāka）とかけている。

(30) カラスとフクロウの関係　kākolūka. 仇敵の間柄。古典説話集『パンチャタントラ』第三巻に、互いに殺し合うカラスとフクロウの挿話がある。田中於莵彌・上村勝彦訳『パンチャタントラ』（大日本絵画、一九八〇年）参照。

(31) 羽根をむしり取られてはいない　alūnapakṣa. pakṣa は「羽根」という意味の他に「自説、立場」という意味があり、ここは「自説が砕かれていない」「論争で負けていない」という意味にもなる。

(32) 百人殺し　śataghnī. 武器の名。Newid によると、鉄製のとげを車輪状に植えつけた横棒型で、籠城戦の時に城門の上にとりつけ侵入する敵の上に落とすものと、手で投げる鉄とげを植えた棍棒型のものがあったようである。Mehr-Ali Newid, "Remarks on *Śataghnī* and *paṭṭiśa*, Two Old Indian Weapons," *South Asian Archaeology* 1987, pt. 2, Roma : IsMEO, 1990, pp.627-41 参照。

(33) ビルヴァ　bilva. Angle marmelos. ベルノキ。マンゴーと同じく柑橘類であるが、その実の外皮は石

のように固い。この樹の下で休むのは、頭上から固い実が落ちてくるので危険。

(34) 月相の変わり目の日に parvakāle. 新月日、第八日目、満月日、第十四日目を指す。この日には性交が禁じられている。渡瀬信之訳『マヌ法典』(中公文庫、一九九一年)三・四五参照。

(35) この男……いるのだろう? kim ayam āmakumbhaṃ vahati. 直訳すると、「この男はどうして焼いてない瓶を運んでいるのか?」

(36) スパイ cāra. スパイは gūḍhapuruṣa, apasarpa とも言われ、古代インドの王政において重要な機能を果たしていた。上村勝彦訳『実利論』(岩波文庫、一九八四年)一・一一—一二参照。

(37) マーリカー navamālikā. mālikā, mallikā の別称。ジャスミンの一種 Jasminum sambac. 茉莉花などと漢訳される。雨季に白い花を咲かせる。

(38) 三果や……銅の粉 三果 (triphalā) は薬効の高い三種の木の実、アーマラカ (āmalaka. 学名 Emblica officinalis. アンマロク) とハリータキー (harītakī. 学名 Terminalia chebula. ミロバラン) とビビータカ (bibhītaka. 学名 Terminalia bellerica. セイタカミロバラン)。ゴークシュラ (gokṣura) は学名 Triburus terrestris. いずれもインド伝統医学アーユル・ヴェーダで使われる薬用植物であるが、特に養毛剤、発毛剤、髪染めとしての効能がある。岩本裕「インド医学序説 (10)」(日本臨牀三一・三、一九七三年)、二二七—三〇ページ参照。銅粉 (lohacūrṇa) は鉱物性の薬物であり、同様の効能があったと思われる。

(39) この第二二詩節では、男への呼びかけが最初は「悪漢よ」(śaṭha)、次に「浮気男よ」(capala)、最後に「愛しき人よ」(priya) と、徐々に軟化していくことに注目されたい。

(40) 愛の突破口を開く suratasandhiccheda. sandhiccheda は窃盗術で、他人の家に忍び込むために壁に穴をあけることを意味し、シュードラカ作『ムリッチャカティカー』第三幕には、この穴のさまざまな形態について述べられている。田中於菟彌「盗賊指南書」(『酔花集』、春秋社、一九七四年、二一四—一八ページ)参照。Schokker はこの句について、ここでは「結合を切る」という古い意味で使われているとし、本篇が『ムリッチャカティカー』より古い作品である根拠の一つとするが (Schokker I, p. 27)、文脈からみてその意味でとるのは無理である。

(41) 法林に住んでいる dharmāraṇyanivāsin. araṇya は人里離れた荒野であり、伝統的に聖仙が隠棲処を営む場所である。仏教の僧院もこのような場所にあったため、この僧は、「ダルマを修めるために荒野に住む」と言われている。同時に、洗練された都会人で快楽主義者のヴィタから見て、この僧は、「ダルマという(未開の野蛮な)荒撫地に住む」者である。

(42) 僧院に巣食う屍鬼 vihāravetāla. ヴィハーラ (vihāra) は、本来は「散策、気晴らし」を意味したが、仏教およびジャイナ教では、特に出家者の修行道場を指す。屍鬼 (vetāla) は古代インドの土俗信仰に起源をもつ鬼神であり、ヒンドゥー教、仏教に採り入れられ、各種説話に登場する。死体に憑いて、怨みに思う人を殺させるという。「足蹴」一六九、二一九ページにも言及される。上村勝彦訳『屍鬼二十五話』(東洋文庫、平凡社、一九八七年)参照。ここでヴィタは、ヴィハーラという語で、「散策、気晴らしの場所」という意味から花街を暗示し、この僧を皮肉っている。同様に、次のヴィタのセリフの「貴僧の僧院生活へのご専念 (vihāraśīlatā)」は、「あなたが遊んでばかりいること」または「あなたが花街に入り浸っていること」という意味になる。

(43) ダッタカの教典 Dattakasūtra.『カーマ・スートラ』一・一・十一によると、ダッタカはパータリプトラの遊女たちに請われて、性愛学のうち特に遊女に関する教典を作ったというが、現存していない。これに対するジャヤマンガラ註は異説として、ダッタカが呪いをうけて女となり、後に男に戻ったため、男女両性に通じ、教典を作ったとも述べている『カーマ・スートラ』第六篇「遊女学」は、このダッタカの教典に基づいている。

(44) 聖音オーム oṃkāra. ヴェーダ等の聖典の朗誦の初めと終わりに発せられる語。創造主プラジャーパティが、ヴェーダから a・u・m の三音を搾り出し、最高原理ブラフマンの象徴としたという。ヴェーダの精髄とみなされる。『マヌ法典』二・七四、七六、八三、八四参照。

(45) いつも情け深い……到達されるでしょうよ nityaprasanno bhadantaḥ tṛṣṇācchedena parinirvāṇam

avāpsyasi. prasanna は「清酒」を意味し、ここでヴィタは、サンギラカが「一切衆生に対して情け深く（prasannacitta）あらねば」と言ったのにひっかけて、「いつも酒ばかり飲んでいる（nityaprasanna）あなたは、喉の渇き（tṛṣṇā）をいやして、御満悦（parinirvāṇa）なされるでしょうよ」という意味を暗に含んで皮肉っている。

(46) 非時食　akālabhojana. 僧が非時（正午から翌日の暁方まで）に食事をとること。正午以降に食事をとらないことが、仏教初期から僧院の定めとされた。

(47) 五戒　pañcaśikṣa. 不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不飲酒の五つが仏教の五戒。

(48) 夕方にも……お護摩は　sāyamprātarhoma. 毎日朝夕、家庭祭火にギー、粥等の供物を投じること。婆羅門の家長の義務である。

(49) 額の香印　viśeṣaka. 額にさまざまな顔料で付ける印、額飾。ティラカ（tilaka）の別称。また頬の模様化粧の意味で使われることもあり、その場合には、次註の「黄粉の点彩」が額飾を指すと思われる。

(50) 黄粉の点彩　rocanābinduka. 額または頬に黄色顔料で描いた点状の模様化粧と思われる。黄粉は牛の尿から精製された牛黄（gorocanā）であろう。額飾および頬粧については、松山俊太郎「古代インド人のよそおい(二)―(一三)」（『化粧文化』第四―一五号、ポーラ文化研究所、一九八一―八六年）に詳細に論考されている。

(51) この第二七詩節は、ターンブーラセーナーが昼間の情事をとぼけて隠そうとしているのをからかっている。着物は通常、左肩から右脇に掛けるが、祖霊祭の時には逆に右肩から左脇に掛ける。ここでは彼女があわててふだんと逆に羽織って出て来たのを、祖霊祭を行なっていたとみなして揶揄する。また彼女が自分の左沓と情夫の左沓とを突っかけて出て来たことにも目を留めている。

(52) クムドヴァティー（Kumudvatī）は「クムダの群生」を意味し、チャンドローダヤ（Candrodaya）は「月の出」を意味する。クムダ（kumuda）は夜開性の白睡蓮で、月光を浴びて開花するという。ゆえに、月が出ていないので（チャンドローダヤと離れているので）、クムダの群生は（クムドヴァティー

は）美しさを失ってしまっている。

(53) この第二九詩節については、松山俊太郎『インドのエロス』（白順社、一九九二年）一四七ページに紹介されている。額印（ティラカ）の色には一般的に白、朱、黒があるが、ここでは黒いカラスにたとえられている。『カーマ・スートラ』六・二・六二―七一は、愛人が旅に出たとき遊女はどのように振る舞うべきかを規定するが、その中に、「愛人が旅から帰った時には愛神の礼拝供養、神々への献供、女友達連が遊女の贈る衣や身装具などを奪い合う祝儀、およびカラスの礼拝供養を行なう。愛人と別離後最初の逢瀬をはたした後は、カラスの礼拝供養以外のこと（愛神の礼拝供養等）を行なう」という記述がある。

(54) 毬つき遊び　kandukakrīḍā. 毬を使う少女の遊び。木または氍青で作った毬が用いられたらしい。ダンディン作『十王子物語』後篇第六章に詳しく描写される。田中於菟彌「毬戯術（Kanduka-tantra）について」（『酔花集』一八八―九六ページ）参照。

(55) ニーパ　nīpa. カダムバ（kadamda. 学名 Anthocephalus cadamba）の別称。アカネ科の樹木で、雨季に香り高いオレンジ色の球状の花をつける。

(56) カーカリー……嘆き節　kākalīmandamadhureṇa svareṇa kaiśikāśrayam. 古典インド音楽では一オクターブを二二のシュルティに等分し、そこにドレミに相当するサリガマパダニの七音（svara）を配置する。カーカリー音（kākalī-niṣāda）は正音より二シュルティ高いニシャーダ音。正音では、ニ音とサ音の間は四シュルティあるので、カーカリー音はその中間の音程をとることになる。また当時の音楽関係文献では、五または七種類の旋律（grāmarāga. 現代のラーガに相当する）、ṣaḍjagrāma, madhyamagrāma, pañcama, ṣāḍava, sādhārita, kaiśika, kaiśikamadhyama が言及される。カイシカ調の旋律はその一つであり、カーカリー音を使う。井上貴子「クディミヤーマライ刻文をめぐって――古代インド音楽の記譜法」（『インド音楽研究』第二・三号、四―一〇四ページ）、Emmie te Nijenhuis, *Indian Music : History and Structure*, Handbuch der Orientalistik 2-6. Leiden/Köln : Brill, 1974, pp. 13ff., 32 参照。

(57) チャンドラダグラ自身から　テクストは「チャンドローダヤその人から」（candrodayād eva）であるが、

文脈に合わないので candradharād eva と訂正する。

(58) ガンジス河は女性名詞で女神と考えられ、一方、海は男性。女性のほうから男に逢いに行く例として使われている。

(59) 恋の祭火を……あげましょう madanāgnihotrasya punarādhānaṃ karomi. アグニホートラ (agnihotra) は毎日、日の出時と日没時に、祭火に牛乳等の供物を注ぐ儀礼。またはその祭火そのものを指すこともある。家長が旅に出る時には、妻に祭火の世話を託すが、家長が妻を伴い、祭火を携えずに旅に出た時には、帰ってから再点火の儀礼 (punarādhāna) を行なわなければならない。P.V. Kane, *History of Dharmaśāstra*, vol. 2, Poona : Bhandarkar Oriental Research Institute, 1974 (2nd ed.), p. 1008 参照。

(60) なんとも……四行小唄 raktasvaramadhuratārasaṃyuktām asaṃkīrṇavarṇām avaghuṣṭālaṃkārālaṃkṛtāṃ śrotramanoharāṃ ṣaḍjagrāmāśrayāṃ vallabhāṃ nāma catuṣpadām. raktasvara はある旋律の中で最も印象的な音、tāra は高いオクターブに含まれる音、varṇa は旋律の上昇・下降線、alaṃkāra は装飾的な旋律を意味する。シャジャ調 (ṣaḍjagrāma) は、註(56)に挙げた七種の旋律の中で最も基本的なもの。三種の基本音階 (grāma) の一つの名でもある。ヴァッラバ (vallabha) は十三世紀のシャールンガデーヴァによって、マンタ (maṇṭha) という形式の曲に六種類ある中の一つとして挙げられる。catuṣpadā は M&A によると、女性舞踊(ラースヤ)に伴って歌われる恋愛歌曲の一種。ただし本篇成立時に近い文献には、ヴァッラバーという名の四行小唄についての言及はまだ見つけられない。Nijenhuis, 前掲書、三二、六五ページおよび註(56)参照。

(61) 梵行中 brahmacāriṇī. 精進潔斎し、貞潔を守り、清浄な生活を送ること。梵行はヒンドゥー教において、人生の四住期の最初の段階で特に修すべきものとされる。

(62) 月の満ち欠けに合わせての行 cāndrāyaṇa. 満月のときに、十五口の食事をとり、月が欠けるにつれて一口ずつ食事の量を減らし、月が満ちていく時には一口ずつ食事の量を増していく断食法の一種。『マヌ法典』一一・二一七—二二一参照。

(63) クムドヴァティー……芝居 kumudvatībhūmikāprakaraṇa. M&A によると王女クムドヴァティーが漁夫シュールパカに懸想する主題の芝居が当時あったという。アシュヴァゴーシャ作『ブッダチャリタ』(Ed. by E.H. Johnston, Delhi : Motilal, 1984 [Rep. of 1936]) 一三・一一、『サウンダラナンダ』(Ed. by E.H. Johnston, London : Oxford Univ. Pr., 1928) 八・四四にこの物語が言及される。プラカラナ (prakaraṇa) は十種の主要な劇形式の一つで、主人公が王・王仙・神より低い身分のもの。

(64) 私の手の……きたのだから asmadviṣayagatā. 「私の近くに来た」という意味と、「私の専門領域（すなわち恋愛問題）に入ってきた」という二つの意味を含む。

(65) 季節が変われば ṛtupariṇāmena. 「生理が終われば」という意味も含む。

(66) 睡蓮の花が開けば kumudvatīprabodhaḥ. 「クムドヴァティーが（恋に）目覚めれば」という意味を含む。月は男性。註(52)参照。

(67) 初めて恋をなされて sati pravṛtte kāmatantraprakaraṇe. 直訳すると、「愛の教典の話題（または序章）が始まった時」。「恋愛に関するプラカラナ劇（クムドヴァティーの芝居）が始まった時」という意味も含む。クムドヴァティーが卑しい漁夫に恋したのに対し、うちのお嬢様は幸いにも、すぐれた男性に恋したということである。

(68) ダクシャ dakṣa. ヒンドゥー神話によると、ダクシャは創造主ブラフマンの十人の息子の一人で、五十人の娘を産ませ、そのうち二十七人を月の妻とした。彼女らは二十七星宿を形成した。『マハーバーラタ』一・六〇・九—一五参照。

(69) プリヤヴァーディニカー (priyavādinikā) という名は「親切で愉しい言葉を話す女」という意味である。

(70) 後朝の……漂わす prātarnirmalyabhūta. 前日神に捧げられ、朝、信者に下げ渡される花輪、または、前夜身につけられ朝捨てられる花輪、その花輪のようだということである。

（1）　睡蓮や……紅蓮　kumudakuvalayakalhārakamala. インドにはさまざまな種類の蓮があるが、大きく蓮（Nelumba 属）と睡蓮（Nymphaea 属）に分けられる。サンスクリット文学には以下のような蓮が見られる。padma, kamala（薄桃色の蓮。最も一般的な蓮であり、女性の手足・顔の比喩によく用いられる。『蓮華の贈り物』の蓮華は padma である）、puṇḍarīka（白蓮）、kokanada（紅蓮）、kuvalaya, utpala, nīlotpala（青蓮または青睡蓮。女性の眼の比喩によく用いられる）、kumuda, kalhāra（夜開性の白睡蓮。「蓮華」註(52)参照）。ここでは kalhāra は kumuda と並列されるので、M&A の註に従い、白蓮ととった。

（2）　ニチュラ……カンダリー

ニチュラ　nicula. Barringtonia acutangula.

ケータキー　ketakī. Pandanus odoratissimus. タコノキ。白または黄白色の芳香ある花をつける、常緑の小高木。

カクバ　kakubha. アルジュナ（arjuna. 学名 Terminalia arjuna. サダラ）の別称、またはクタジャ（註(4)参照）の花。アルジュナは緑白色の小さい花をつける高木。

カンダリー　kandalī. リュウキュウバショウ。白い花をつける。

以上はいずれも雨季に開花する樹木。註(4)クタジャ、註(7)カダムバも同じ。これらの多くはカーリダーサ作『リトゥ・サンハーラ』第二章「雨季」に登場する。田中於莵彌訳詩集「季節のめぐり（リトゥ・サンハーラ）」（『酔花集』所収）参照。

（3）　ここで稲妻は女性の細い肢体の暗喩である。

（4）　クタジャ　kuṭaja. Holarrhena antidysenterica Wall. ジャスミンの一種で、山のジャスミンとも言われる。雨季に白い花をつける。

（5）　M&A 註によると、通人（ヴィタ）は通常、花模様をあしらった派手な生地の衣服を身につけるという。

（6）　紅虫　indragopa. ダニ目 Trombidiiae 科の無害な一種。字義通りには、「雨季に地面をはうもの」。雨季の初めに大量に湧き出る。柔毛におおわれ鮮かな赤色をもち、しばしば野の緑との対比の美しさが描かれる。ここではさらに女の足の紅を連想させている。Siegfried Lienhard, "On the Meaning and Use of the Word *indragopa*," *Indologica Taurinensia* 6 (1978), pp. 178-88 参照。

（7）　カダムバ　kadamba.「蓮華」註(55)参照。

（8）　頭部が……堅琴　sandaṣṭopavīṇāviyuktaviralatantrī . . . vīṇā. 竪琴（ヴィーナー）については「蓮華」註(27)参照。M&A 註はヴィーナーの腕木の頭部を指すらしい。M&A 註はヴィーナーの下胴部とする。Coomaraswamy によると、upavīṇā はヴィーナーの腕木の頭部を指すらしい。Coomaraswamy, 前掲論文参照。

（9）　賭博場　dyūtasabhā. 古代インドでは、賭け事は dyūta（サイコロ等の賭け）と samāhvaya（闘鶏・闘羊など生物を対象とする賭け）に二大別される。これらは法典文献では悪徳とされるが、『実利論』三・二〇・一―一三には、公設の賭博場に関する管理規定が記され、都市民層の娯楽であったと思われる。また賭博場は遊閑市民（ナーガラカ）の溜り場的機能も果たしていたのであろう。賭博は遊女の修めるべき六十四芸にも含まれている。

（10）　サイコロ　akṣa. ビビータカ（「蓮華」註(38)参照）の実を使う。賭場にこの実を撒き、賭博者が手につかんだ数、または場に残った数で判定する。その数が四で割り切れる時がクリタで最高の目、一余る場合がカリで最悪の目である。シュードラカ作『ムリッチャカティカー』第二幕には、胴元と博打うちと客の賭博をめぐるいざこざが生き生きと描かれている。また『マハーバーラタ』第二巻の賭博の場は有名である。

（11）　花の都　Kusumapura. パータリプトラ（pāṭaliputra）の別称。現パトナ。ガンジス河とソーン河の合流点に位置する。古くからマガダ国の首都であり、マガダ出身のグプタ王朝の第一の王都であった。

（12）　豪商　śreṣṭhin. 金融商。都市の金融全般を管掌する官職として、王国の官僚機構の一部でもあり、当時存在したさまざまな同業者組合の中で、最も富裕で経済的にも政治的にも重要な役割を果たしていたようである。またさまざまな同業者組合の長を指すこともある。これらの組合は組合内で一定の自治権を有

していた。R.N. Saletore, *Early Indian Economic History*, London : Curzon Press, 1973, pp.574-83 参照。

(13) 青蓮華……しのばせる盃　「月の輪」はここでは孔雀の尾羽の円形の模様を指す。盃の酒が、青蓮華の花びらによる青さと香油によって生じた月の輪とさざ波のために、踊る孔雀の尾羽のようにみえるという意味である。

(14) 闘鶏　pakṣiyuddha.『カーマ・スートラ』一・四・二五は、都市遊閑市民の娯楽の一つとして闘鶏を上げている。また牡羊、雄鶏、鶉による闘技術は、遊女の六十四芸に含まれる。註(9)参照。

(15) ジャマダグニの息子ラーマ　Jāmadagnyasya Rāmasya. ヒンドゥー神話によると、カールタヴィールヤ・アルジュナという王がブリグ族の聖仙ジャマダグニの庵に狩りの途次に立ち寄り、如意牛で饗応された。王はこの聖牛が欲しくなり、聖仙を殺して牛を奪い去った。これを知った息子ラーマは王を殺して牛を取り戻し、聖仙も蘇生術で生き返ったが、復讐を誓う王の息子たちは、再び聖仙を殺した。ラーマは父の死を知り、この世から二十一度王(クシャトリヤ)族を皆殺しにすることを誓い、実行した。このラーマはパラシュラーマ「斧を持つラーマ」と言われ、ヴィシュヌの化身の一つともされる。

(16) 甘露　amṛta. 字義通りには「不死」を意味する。不老不死を与える、神々の飲料。註(38)参照。

(17) カイラーサ山　Kailāsa. ヒマラヤ山脈中の山でヒンドゥー教の聖地。神話では、ガンジス河の源であり、シヴァ神とクベーラ神が住むと考えられている。

(18) 沈香　agaru. Aquilaria agallocha Roxb. aguru, kālāguru, kaleya ともいう。ジンチョウゲ科ジンコウ。樹脂を薫香として使う。

(19) 鴛鴦　cakravāka. Anas casarca. Casarca ferruginea (Pallas). アカツクシガモ（英語名 Ruddy Sheldrake, Brahminy Duck)。体長六〇センチほど、頭部と翼は淡黄色、体毛は黄褐色、羽の根もとは黒と緑、尾羽は黒。しばしば首に黒い輪があり、翼の裏が白い。そのつがいは昼間は水辺で共に過ごし、夜は別々に餌を求める習性がある。サンスクリット文学では、このつがいは睦まじい夫婦、恋人とみなされ、夜になると引き離されて、互いに求め合って啼くという。また女性の双つの乳房の比喩としてもよく使われる。

(20) あんなに……硬いのでしょう　aho, kārkaśyam prakāśayate yatnaḥ. M&A 註は「硬さ」(kārkaśya)を体の硬さ、体がひきしまっていることととるが、第一九詩節第六行の「硬さ」と共に、ここは帯の硬さととるのが自然である。ただし後者の「硬さ」について M&A は、肉体の激しい運動を意味すると述べるが、一〇三ページに「閨では激しく振る舞う」(ratikārkaśya) という表現があることから、ここでもこの意味が暗示されていると考えることはできる。すなわちここでヴィタは、暗に「彼女の奮闘ぶりは房事の際の激しさを露わに示している」と言っているのである。

(21) その硬さは……ふさわしく　kārkaśyayogyāraṇiḥ. araṇi は二種の木を摩擦して火をおこす時に使う木を指す。この鑽火儀礼（アグニ・マンタナ祭）では、現在では下部鑽木にアシュヴァッタ (aśvattha. 学名 Ficus religiosa. インドボダイジュ)、上部鑽木にカディラ (khadira. 学名 Acacia catechu. カテキュー) を用いるようであるが、『シャタパタ・ブラーフマナ』の伝えるウルヴァシー神話では、上部鑽木にアシュヴァッタ、下部鑽木にシャミー (śamī. 学名 Acasia sundra) を用いる。摩擦で火をおこすには一方が硬い木でなければならず、カディラとシャミーは共に硬い木として知られている。ここでは比喩的に、愛の火をおこすと考えられている。田中於菟彌「天女うるわしい」(『酔花集』一九七一二一三ページ）参照。
　M&A 註は、前註にも述べたように、kārkaśya を「肉体の激しい運動」、araṇi を「母、産むもの」という意味にとる。それによるとこの行は、「閨の荒々しい振る舞いにふさわしい産みの親である（帯)」と訳すことができる。

(22) 円やかなる……数珠ともなる　この二行は、腰帯についているチリチリ鳴る鈴飾りのことであろう。

(23) 陶酔せし……隆起を支え　象の頭頂部にある二つの瘤状の隆起が臀部にたとえられている。

(24) 帯紐は……悪くなりしや　tantrīcheda ivākarod virasatāṃ tāmrākṣi kāñcīpathaḥ. ここで tantrī は帯紐と竪琴の糸という二重の意味をもつ。演奏中に竪琴の糸が切れると、音楽の妙趣(ラサ)（「逢引」註(25)参照）が壊れてしまうように、帯紐が切れると不快になるということである。

(25) 蛇みたいに動かなく　bhujaṅgamo 'jaṅgamaḥ. bhujaṅgama は字義通りには「地面を進むもの」とい

う意味であり、蛇を指す。ここは、jaṅgam を繰り返す言葉遊び。第一詩節第二行にも同様の言葉遊びがみられる（sajjanārādhanaṃ dhanam）。これはヤマカ（yamaka）と言われる修辞法の一種であり、この作品集には時々使われる。他に「逢引」第二六詩節、「足蹴」第六五、八六、九七詩節等。

(26) シリーシャ花　śirīṣa. Albizzia lebbeck. ビルマネム。夏から雨季にかけて開花し、緑白色の絹毛の飾り房のような花をつける。耳飾りとして好まれたらしい。

(27) ゆっくりゆっくり　padāt padaśatam. padāt padam は「一歩一歩」「次から次へ」という意味であるが、この表現がどのような歩き方を示しているのかはよくわからない。

(28) 愛の配分　madanāgrahāra. agrahāra は、王によるバラモン、僧院、寺院への村落・土地の施与、または施与された村落・土地を指す。グプタ期にはバラモンに対する村落・土地の施与がさかんに行なわれ、バラモンはその村落の地主として主に租税収入を得ることができた。ここではラーミラカだけが愛神によって土地（プラディウムナダーシー）を施与されるということである。

(29) いたずらな……守ってくださいよ　唇はしばしばビンバ（bimba. 学名 Coccinia indica. ヤサイカラスウリ）の赤い果実にたとえられるため、ここでは彼女の唇をビンバの実とまちがえてつつきにくる鳥たちと、他の男たちをかけている。

(30) まるで……閉め切っている　kumbhakarṇavadanam iva nityanimīlitabhavanadvāram. クンバカルナはランカー島に住む魔王ラーヴァナの弟の羅刹。彼が激しい苦行を行ない、ブラフマン神に願いをかなえられようとした時、その力を恐れた神々の要請で言葉の女神サラスヴァティーが彼の舌の上で踊った。そのために彼は舌をすべらしてブラフマン神に「いつも眠っていること」を願ってしまった。その結果彼は六か月眠り、一日だけ起きるという。ここでは「クンバカルナの顔のように、いつも眼を閉じている（戸を閉めている）戸口」ということである。

(31) 裸形の沙門　nagnaśramaṇaka. ジャイナ教空衣派の出家修行者のことであろう。

(32) 遊蕩の趣味……有り様です　「遊蕩の趣味が棄てきれず」と「人里を好んで」は同じ語 priyagaṇika-tvāt の訳。比喩の両項ヴィシュヴァラカとカラスは、同音異義語で示される理由をもつ。両項を対比させると、ヴィシュヴァラカは／カラスは、遊女が好きだから／人の集まる所が好きだから（priyagaṇikatvāt）、スナンダーを／村の境を、離れない（両項に共通）。

(33) 最上天　brahmaloka. ブラフマン神の住む世界。satyaloka ともいう。この世界の住民は甘露（アムリタ）を飲み、不死であるという。地上も含めた大地より上の七つの世界（bhū, bhuvar, svar, mahar, jana, satya/brahma）の中の最上天界。定方晟、前掲書、一〇二―四ページ参照。

(34) この第二九詩節の第一行と第四行は同じ語 vikacanavotpalatilaka の訳であり、一方は酒を、一方は女を形容する。すなわち、「開花したばかりの青蓮を飾り（ティラカ）とする（酒）」と「開花した蓮華形の青く新しい香印（ティラカ）を額につけた（女）」とである。M&A 註は、酒を形容する場合に tila「胡麻」から tilaka を「胡麻菓子」ととるが、その必要はない。

(35) 好きな……できませんよ　aniyogasthāna. ニヨーガ（niyoga）とは、子どもが生まれないうちに夫が死んだ時、子孫をもうけるために、一族の長によって指名された夫の弟または近親と寡婦が交わる権限。『マヌ法典』九・五九―六八、P.V. Kane. 前掲書、五九九―六〇七ページ参照。ここでは、最初の逢瀬の時には、女に対してまだニヨーガのような交わる権限が、確立していないということである。

(36) しつこい熱病　viṣamajvara. 規則的な間隔をおいて熱がぶり返す熱病。G.J. Meulenbeld, *The Madhavanidāna and its chief commentary : Chapters 1-10*, Orientalia Rheno-Traiectina 19, Leiden : Brill, 1974, pp. 616f. 参照。

(37) なだめ……でしょう　M&A テクストは manayitavyaḥ. Ghosh は na mānayitavyaḥ と訂正するが、ここは mānunayitavyaḥ と訂正して読む。

(38) 神や阿修羅……の妙薬　ヒンドゥー神話によると、かつて神々と阿修羅たちは協力して、ヴィシュヌ神の化身の亀を支えに、マンダラ山を攪拌棒に、蛇王ヴァースキをマンダラ山に巻きつけて綱にして、乳海（または塩海）を攪拌し、海から美・富・繁栄の女神シュリー（ラクシュミー）、不死の飲料アムリタ

（註(16)参照）を初めとする、多くの宝物を得た。その後神々と阿修羅はアムリタを求めて争い、神々は阿修羅たちをだましてアムリタを得、これを飲んで不死となった。不老長寿の妙薬（āyurvaso 'vasthāpanaṃ rasāyanam）とは一種の錬金薬であり、不老長寿の秘薬であるという。インド古典医学八科の一つである。

(39)　痛風病　vātaroga. インド古典医学は三種の体液（風 vāta, 胆汁 pitta, 粘液 kapha）の平衡調和状態を健康とみなし、その乱れを病気の主因と考える。vātaroga はこの中の風の乱れから起こる病気。『チャラカ・サンヒター』総論篇二〇・一一―一三に八十種の風性の病気と全般的な特質が述べられる。矢野道雄編訳『インド医学概論』（朝日出版社、一九八八年）、一三八―三九ページ参照。ここではとりあえず「痛風病」と訳しておいた。

(40)　扉の掛け金の突起　kavāṭagostanaka. M&A 註によると、敷居の上部にあり、扉をしめるための締め金。gostana は字義通りには「牝牛の乳房」を意味するので、牝牛の乳房のように四つの丸い突起をもつ形状であったと思われる。

(41)　愛の……風情で　akṛtiratipūrvaraṅgā. 現存のサンスクリット戯曲にある冒頭の祝禱（nāndī）の位置で、かつてはさまざまな儀式、歌舞音曲を含む長い予備劇（pūrvaraṅga）が行なわれていたらしい。この作品集の現存テクストも含む、現在の南インドの伝統では、戯曲台本は「祝禱終わった後」（nāndyante）から始まる。ここでは女の姿態が愛戯の予備劇を思わせると述べている。

(42)　人生の至福の果　janmajīvitayoḥ phalam. 直訳すれば、「生まれたことと生きていることの果実」。同じ表現は一一四ページ（「人生最良の恵み」と訳した）にもみられる。

(43)　媚薬　rasāyana. 不老長寿の秘薬（註(38)参照）。ここでは文脈から「媚薬」と意訳した。媚薬の類については『カーマ・スートラ』七・二に記されている。

(44)　蓮華の日傘を……差し掛けむ　蓮華形の白い日傘は、王の象徴でもある。ここではヴィタがそのような男をヴィタの中の王と認めるということである。

(45)　あのダッタカ……言っていますが　ダッタカについては「蓮華」註(43)参照。ここの言説については典拠不明。

(46)　実利と理法　arthadharmau. 古代インド以来ヒンドゥー教の基本的なパラダイムとして、実利(アルタ)と理法(ダルマ)と性愛(カーマ)が人間の実現すべき三つの人生の目的であり、この三つを調和させること（トリヴァルガ）が最も優れた生き方であると考えられてきた。原実「トリヴァルガ」、上村勝彦「『カウティリヤ実利論』におけるダルマ・アルタ・カーマ」（岩波講座東洋思想第七巻『インド思想3』、岩波書店、一九八九年、二六四―三一四ページ）参照。この前後ではヴィタの快楽主義にのっとって、性愛(カーマ)と他の二者の関係、および性愛(カーマ)、特に遊女との交際が他の二者より優れていることを論じている。

(47)　音声などなど　人間の五種の感覚器官（眼耳鼻舌身）に対応する五種の感官の対象について、音声・触感・味覚・色形・香の順に述べていく。

(48)　飛来す　M&A テクストは abhipatato. Ghosh は abhipatito とするが、ここは abhipatati と訂正して読む。

(49)　ブリハスパティ……著者たち　ブリハスパティ（Bṛhaspati）、ウシャナス（Uśanas）は共に伝説的な聖仙の名で、法典を編んだと考えられている。「足蹴」註(9)参照。

(50)　あのインドラ……なってしまった　アハリヤーは聖仙ガウタマの妻。夫に化けたインドラ神に誘惑されるが、それを見つけた聖仙の呪いをうけ、インドラ神は性器を失い、アハリヤーは石にされた。後に『ラーマーヤナ』の英雄ラーマの足がこの石に触れ、アハリヤーはもとの姿を取り戻した。

(51)　この世で……重要なのです　この節ではヴィタの現世中心主義、経験主義が強調されている。同じ考え方は「蓮華」二九ページにもみられる。

(52)　以下では、雨季、秋、冬、極寒期、春、夏の順に、各季節ごとの恋愛の妙趣が述べられていく。インドでは一般に一年をこの六季節に分ける。各季節の情景の描写はサンスクリット文学で好まれる主題であり、カーリダーサ作『リトゥ・サンハーラ』がその代表といえる。註(2)参照。

(53) 逆さ吊りにされて　avakchiras. ヒンドゥー教ではさまざまな種類の地獄（naraka）が想定されているが、その中に「逆さ吊り」（adhaḥśiras）という名の地獄がある。Willibard Kirfel, *Die Kosmographie der Inder*, Hildesheim : Georg Olms Verlag, 1990[Original ed., Bonn/Leipzig : Kurt Schroeder, 1920], pp. 148-152 参照。あるいは人が地獄に落ちる時には、頭を下にまっさかさまに落ちていくと言われるので、そのことを指しているのかもしれない。

(54) アサナ　asana. Pterocarpus marspium. マラバルキノカリン。マメ科ソラマメ亜科に属する落葉樹。黄色の花をつける。

(55) バンドゥーカ　bandhūka. Pentapetes phoenicea. bandhujīvaka ともいう。ゴジカ（午時花）。赤い花を日中咲かせ、翌朝日の出とともに凋む。

(56) 鴛鴦の……燃やして　cakravākopadiṣṭānurāga. 註(19)参照。

(57) ロードラ　lodhra. Symplocos Racemosa. 黄白色の花をもつ。樹皮からとる赤い粉はホーリー祭で用いられる。

(58) プリヤング　priyaṅgu. Setaria italica. アワ。または Aglaia roxburghiana. 他に数種の植物の名として使われる。蔓草の一種で、女性の手が触れると開花するという。

(59) アティムクタ　atimukta. Hiptage benghalensis. 字義通りには「真珠を超える」という意味にとれるので、白い花をもつと思われる。

(60) 玉晶　salilamaṇi. 字義通りには「水の宝珠」。M&A 註は水さし（jalapātra）と解しているが、他の並列されているものとつりあわない。とりあえず「玉晶」と訳しておいた。ここではこの「玉晶」以下、涼を与えるものが列挙されている。

(61) ウシーラ香草　uśīra. Vetiveria zizanoides. ベチバー、クスクスカヤ。イネ科の多年草。根に白檀に似た強い芳香があり、この根を水に浸したものは、解熱効果があるという。根から芳香精油が作られる。

(62) 払子　vyajana. vyajana は一般に扇を意味するが、ここでは後に芭蕉扇が出てくるので、払子（bala-

vyajana）の意味にとった。払子はヤクの尾の毛を束ねたもので、虫を追い払ったり、風を送ったりするのに使われる。

(63) 芭蕉扇　tālavṛnta. tāla（学名 Borassus flabellifer. パルミラヤシ）の葉で作った扇。

(64) バクラ　bakula. Mimusops elengi. ミサキノハナ。オレンジ色の香り高い花をつける。女性が口に含んだ酒を吹きかけると開花するという。

(65) 黒蟻みたいなもの　pippīlikadharma. ブパネーシャ作『ラウキカニヤーヤ・サーハスリー』（Ed. by Thakuradatta Sharma, Varanasi : Vyasa Prakashan, 1989）五一五に「黒蟻の歩みのことわざ」（pippīlikāgatinyāya）がある。それによるとこのことわざは、黒蟻が樹木の頂きにある甘い果汁を味わおうとして、すぐには無理でも、努めて歩き続け、長い時間をかけて必ずその果汁を味わうように、無知な人が、聖典等に定められた儀礼、瞑想などによって心を清め、繰り返し生まれ変わっていつかあらゆる知を備え、必ず究極の真理の歓びを経験することを示している。ここではこの黒蟻の属性が否定的にとらえられている。

(66) 絶壁から……入るなど　marutprapātāgnipraveśādi. M&A は、marut と prapāta を別の語とし、marut を「風を食べること」すなわち断食ととるが、ここでは風（marut）と火（agni）が対比されているので、「風に向かって断崖から飛び込むこと」と「火に入ること」ととった。

(67) 念誦や……勧戒　japahomavratanityama. 念誦はヴェーダ等のマントラを低声でつぶやくように唱えること。護摩は祭火の中に供物を注ぐこと。誓戒は純潔、断食等の誓いを守ること。勧戒は正しい生活を送るために守るべき規定（『マヌ法典』二・一七三以下）。「ヤージュニャヴァルキヤ・スムリティ」（Delhi : Nag Publishers, Rep. of Nirnaya Sāgara Press Ed.）三・三一二―一三は、ヤマとニヤマ各々の内容を列挙しているが、ここの誓戒はニヤマに対するヤマに相当すると思われる。

(68) 若々しい……愛人たち　tāruṇyabaddhakāmatantra. 直訳すると「若さによって性愛教典を編む」という意味である。カーマ・タントラはカーマ・スートラ（シャーストラ）と同じで、性愛に関する教典を指し、この作品集ではしばしば使われる用語である。「蓮華」註(13)、(43)参照。

(69) 呪いの言葉……されていて　ヒンドゥー神話では、聖仙の呪いは神話の定型の一つとなっている。天女(アプサラス)に対する聖仙の呪いでは、バラタ仙に呪われウルヴァシーが蔓草になった話、ヴィシュヴァーミトラ仙に呪われランバーが石になった話などがある。

(70) 思わず……しまうでしょう　M&A テクストの sāyāma を sayāma と訂正して読む。ここは sayāma iva divasā vrajanti となる。直訳すると「一日が一ヤーマであるかのように日々を過ごす」。一ヤーマ(yāma) ほぼ三時間。sāyāma の場合は「日々を長々と過ごす」となり、意味が逆になる。また、これに先立つ語 cintayatah は cintayantaḥ に訂正して読む。

(71) 天女　apsaras. 天界に住む美しい女性たち。ウルヴァシーが有名である。踊り子であり、時に聖仙や苦行者を誘惑する役目を果たす。

(72) ヴァシシュタやアガスティヤ　Vaśiṣṭhāgastya. 共に伝説的な大聖仙の名。ミトラ・ヴァルナ両神と天女ウルヴァシーの間に生まれたという。

(73) 遣手女　śambhalī, kuṭṭanī, jaratī ともいう。芸妓置屋の女将に相当する。この作品中、母といわれるのは芸妓の実の母ではなく、この女将のことである。「逢引」註(5)、田中於莵彌訳『遊女の手引き』(平河出版社、一九八五年) 一八〇ページ参照。

(74) うちの……ますから　me bharyā kalevaram anyathā grahīṣyati. 直訳すると「私の女房が私の体を別のやり方でつかまえるだろう」。

III　逢い引き

(1) この第一詩節は、本篇の発端となった出来事を示唆している。すなわち、ここでは女主人公ナーラーヤナダッターが愛人クベーラダッタの浮気をなじり、彼のなだめに応ぜずに立ち去る情景が描かれている。

(2) ナーラーヤナ神の神殿で　bhagavato Nārāyaṇasya bhavane. ナーラーヤナはヒンドゥー教の二大神の一人、ヴィシュヌの別称。T. Venkatacarya は訳註で、この表現は神殿ではなく、ナーラーヤナという名の王の王宮を指しているのではないかと述べている。

(3) 十面のラーヴァナ　daśamukha. ラーヴァナ (Rāvaṇa) はランカー国の王で、十の顔と二十の腕をもつ羅刹。叙事詩『ラーマーヤナ』の敵役。ラーマの妻シーターを誘拐するが、ラーマ軍との大戦争の末、ラーマに殺される。「十の顔をもつ者」(daśamukha) はラーヴァナの呼称の一つ。ラーヴァナはサーマ・ヴェーダと音楽と弓術に通じているという。

(4) 大官　mahāmātra. 仏陀在世期のマガダ国以来、高級官僚を指す用語として使われ、『実利論』でも高級官僚の総称として、用いられている。詳細は、Schokker I, p.151 参照。

(5) 母の欲深　この母というのは、遊女の抱え主、置屋の女将、遣手女を意味する。「極道」註(73)参照。本篇には母の貪欲さに関する話題がいくつかみられるが、『カーマ・スートラ』第六篇は、遊女の母が金銭に貪欲で男を冷たく扱い、遊女が母に嫌悪を示し、時に男の前で母といさかうこと、男に会えないのを母のせいにすること等を、遊女が男をひきつけるための手管として述べる。原則として、遊女は母に従順でなければならず、また客に惚れることなく、惚れているようにみせなければならない。

(6) すべての……さるべからず　svaguṇāḥ sadguṇāḥ sarve na stotavyāḥ sthitās tvayi. この部分は作者の意図するところが明瞭でなく、いく通りかの解釈が可能である。W&V の訳は「自分の特性はすべて美点であり、(故に) あなたに備わるそれらは賞讃される必要がない」。A.K. Warder は訳註で別の解釈として「あなた自身の特性はすべて良いものであるが、あなたの中にとどまるならば、それらは賞讃に値するものではない」という訳を示す。本訳では、後半は次行との関連から Warder の解釈が妥当と考え、それに

従ったが、前半部は sadguṇāḥ sarve を主語として訳してみた。

（7）交易商　sārthavāha. 当時都市に存在したさまざまな同業者組合の中で、金融商（śreṣṭhin）、手工業者（kulika）と並列されることのある重要な組合の一つ。R.N. Saletore, 前掲書、五八一—八二ページ、「極道」註（12）参照。

（8）毘沙門様　Vaiśravaṇa. 財宝の神クベーラの別称。日本では七福神の一人となっている。

（9）ビンバ果　bimba.「極道」註（29）参照。会津八一の短歌に「あせたるをひとはよしとふびんばくわのほとけのくちはもゆべきものを」（鹿鳴集）と歌われる。

（10）その道の教典　śāstra. 性愛（カーマ）に関する教典、またはその中に含まれる遊女学の教典を指す。この種の教典で現存最古のものはヴァーツヤーヤナ作『カーマ・スートラ』であるが、ヴァーツヤーヤナはその中で斯学の多くの先人の教えを引用しているので、これに先立つ教典がいくつか存在したと思われる。この作品集では先人の一人であるダッタカの名が挙げられている。「蓮華」註（43）、「極道」註（68）参照。

（11）女遊行者　parivrājikā. 遊行者（parivrājaka）とは全財産を捨てて遍歴放浪生活を行ない、乞食によって食を得る人々を指す。『実利論』一・一二・四—五は女遊行者と比丘尼を移動スパイの中に挙げている。その記述によると、女遊行者は貧しいバラモン階級の寡婦で、世智にたけ、生活の糧を求める女で、後宮で尊敬され、大官の家に出入りできる。サンスクリット文学では、女遊行者の類は、ヒロインの相談役、恋の取り持ち役として登場することがある。また遊女のなれの果てとみなされることもある。

（12）ヴァイシカーチャラ……いいんだけど　na Vaiśikācalena prayojanaṃ bhaved vaiśeṣikācalena. acala は「不動」を意味し、ここではその道の権威という意味で使われている。ヴィタの名ヴァイシカーチャラは「遊女学の権威」、ヴァイシェーシカーチャラは「ヴァイシェーシカ学の権威」を意味する。ここでは両者の言葉の響きの類似が意識的に使われている。ヴァイシェーシカは、六種のインド正統哲学学派の一つで、多元的実在論を説き、六つの句義を立てて、現象界の諸事物を分析する。開祖はカナーダ（紀元前後頃か）。カナーダ作とされる『ヴァイシェーシカ・スートラ』（二—三世紀頃に現在の形に編纂）を根本聖典とし、四—五世紀頃にプラシャスタパーダがこの聖典への註釈『句義法綱要』（Padārthadharma-saṅgraha, 別名 Praśastapādabhāṣya）を著わし、この学派の教理を確立した。註（13）（14）参照。

（13）さまざまの性愛の相　ratyarthavaiśeṣika. vaiśeṣika は viśeṣa から派生した語であり、viśeṣa は個物、特殊、種類、卓越を意味する。ここでヴィタは、ヴァイシェーシカ学派が六つの句義（padārtha「カテゴリー」）を立てるのにひっかけて、「さまざまな種類の（またはすぐれた）性愛の対象（または意味）に関すること」（ratyarthavaiśeṣika）と言う。

（14）六句義から外れている方　ṣaṭpadārthabahiṣkṛta. 六句義とは、実体（dravya）、性質（guṇa）、運動（karman）、普遍（sāmānya）、特殊（viśeṣa）、内属関係（samavāya）である。実体とは事物そのものを指し、地・水・火・風・虚空・時間・方角・アートマン・思考器官の九種に分類される。性質は色・味・香等、事物の静的な属性であり、二十四種に分類される。運動は上昇・下降等、事物の動的な属性で九種に分類される。普遍は多数の事物に共通する属性、特殊は個々の事物を他から区別する属性であり、両者は相対的な関係にある。性質・運動・普遍・特殊は実体と不可分離の関係にあり、これを内属関係という。これら六句義の研究とヨーガ（yoga）の実修によって、解脱（mokṣa）は達成できるとされる。早島鏡正他著『インド思想史』（東京大学出版会、一九八二年）一一三—八ページ参照。

第一六詩節でヴィタがヴァイシェーシカを別の意味で解したのを受けて、ここでこの女遊行者は、そのようなヴァイシェーシカを知らない方とはお話しできないと言うが、さらにヴィタは次の第一八詩節で、ヴァイシェーシカの用語と愛の交歓とを二重の意味をもつ言葉で結びつけて、自分の博識をひけらかしながら女をからかう。

T. Venkatacharya はこの表現について、著者が意図していたかどうかは疑わしいがと断わりながら、次の解釈を示す。六句義は実在する事物を分類したものであり、「六句義から除外されているもの」とは、非存在、無（abhāva, asat）を意味する。ヴァイシェーシカ学派で第七の句義として「無」（abhāva）が立てられるのは、ほぼ七世紀以降であるが、『ヴァイシェーシカ・スートラ』にも asat としてこの概念は言

及されている。asat には「無」の他に「悪者」という意味があり、また abhava は、bhava が二人称の尊敬として用いられることを考えると、その否定、すなわち二人称の蔑称と考えることができる。したがってここでは「六句義から外れている方」という遠回しな表現で「あなたのような尊敬できない方」と言っていると考えられる。W&V、二五—二七ページ参照。

(15) サーンキヤ Sāṃkhya. 六種のインド正統哲学学派の一つ。イーシュヴァラクリシュナ作『サーンキヤ・カーリカー』(四世紀頃成立)を根本聖典とする。知を本質とし、行動しない観照者、享受者である純粋精神 (puruṣa) と、宇宙の質料因である根本物質 (prakṛti) の二つの基本原理をたてる二元論を説く。「未分なるもの」(avyakta) とも呼ばれる根本物質は、三種の様態 (純質・激質・暗質) から成り、その均衡が崩れると、これから全宇宙が展開、分化する。その際まず根本物質から統覚機能と自我意識が順に生じ、そこから心と五感覚器官、五行動器官、五微細元素が生じる。五微細元素から五大元素が生じ、これによって物質界は構成される。早島鏡正他、前掲書、一〇九—一三ページ参照。サーンキヤはまた、理論のヨーガとも言われ、実践論を説くヨーガ学派と相互補完関係にある。サーンキヤ・ヨーガ思想は一種の通俗哲学として、大きな影響を与えた。ここでは第一八詩節で、ヴィタがヨーガに言及したので、それを受けてサーンキヤを持ち出している。

(16) プルシャは……知田者ですわ alepako nirguṇaḥ kṣetrajñaḥ puruṣaḥ. この言説は『バガヴァッド・ギーター』(上村勝彦訳、岩波文庫、一九九二年) 第一三章の内容にほぼ相当する。この章はサーンキヤ思想を大きくとりいれている。特に一三・三一に「この最高の自己（アートマン）は……要素（グナ）を持たないから (nirguṇatvāt) 不変であって……汚されることもない (na lipyate)」と述べられているが、一三・二三には純粋精神プルシャが自己（アートマン）とも言われると述べられるので、この自己（アートマン）はプルシャと言い換えることができる。kṣetra は「土地、田畑」を意味するが、ここでは一三・五—六に根本物質（プラクリティ）から展開したものが kṣetra であると定義され、さらにプルシャが知田者 (kṣetrajña) であると述べられる。一方、puruṣa は「男」、guṇa は「美徳」、lepa は「身体への塗油」、kṣetra は「女」という意味も持ち、これらの意味でこの女遊行者はヴィタを暗に皮肉っている。「女」という意味の kṣetra については、『マヌ法典』九・三一—五五に、男は種、女は畑であることが詳しく述べられている。

(17) 娘さん……きれいな duhitṛsaṅkrāntayauvanasaubhāgya. この合成語は「娘に若さと美しさが移ってしまった」ともとれる。この意味を暗に込めたヴィタの皮肉であろう。

(18) 〔今〕の男……棄て去るものなり dehān vairāgyād dehivat santyajanti. dehin「肉体を有するもの」とは、不生不滅の自己アートマンを指す。『バガヴァッド・ギーター』二・二二に「人が古い衣服を捨て、新しい衣服を着るように、主体（デーヒン）は古い身体を捨て、他の新しい身体に行く」と述べられている。自己（アートマン）は輪廻転生を超えて不変であるという意味である。

(19) 化け物 kali.「極道」註(10)で述べたように、カリは賭博の最悪の目を意味する。またヒンドゥー教の宇宙観では宇宙は生成帰滅を繰り返すが、その一単位をクリタ、ドヴァーパラ、トレータ、カリの四期に分け、この順に劣化すると考える。すなわちクリタは黄金時代、カリは暗黒時代である。現在はカリ期にある。この用語は賭博用語と同じである。

(20) 第三の性 tṛtīyā prakṛtiḥ. 男、女に次ぐ三番目の種類という意味。『カーマ・スートラ』一・五・二七および二・九・一以下に言及される。前者では、交わるにふさわしい四種類の女性 (処女、再婚した寡婦、遊女、人妻) を述べた後、五番目の候補としてこの第三の性を挙げる。後者では、第三の性を女性の姿をとるものと男性の姿をとるものに二大別し、女形のものは遊女のように生活し、男形のものはマッサージを生業とせよと述べる。また両者は共に口唇性交を行なうとされている。本篇のスクマーリカーは、女性の姿をとるものに当たるが、『カーマ・スートラ』の記述からは、この第三の性が半陰陽か、去勢者か、男娼かはわからない。

(21) その額が……森の巨象 象は目と耳の間にある側頭腺から「マスト」と言われる液を出す。サンスクリットでは、マダ (mada) といわれる。マスト期の象は攻撃的になるが、これは発情期とは一致せず、なにか強いストレスを受けた時などにこの液を流すらしい。サンスクリット文学では、戦争の時に象がこ

の涙を流すことがよく知られている。ロベール・ドロール著、長谷川明・池田啓監修『象の物語——神話から現代まで』（創元社、一九九三年）二八ページ参照。

（22） 鮫 grāha. 海に住む獰猛な生物。鮫や鰐などを指すと思われる。

（23） 遊女なる……業火 veśastrībaḍabāmukhānala. ヒンドゥー神話によると南極の海底にある牝馬の口（baḍabāmukha）という名の穴には、かつてアウルヴァ仙が世界を燃やし尽くしてしまわないように海中に投げ込んだ、牝馬の頭の形をした火（baḍabāgni, baḍabāmukhāgni, aurvāgni）が燃え続けているという。上村勝彦『インド神話』（東京書籍、一九八一年）一五七—六一ページ参照。

（24） 花の都の王様 kusumapurapurandara. purandara は、字義通りには「（敵の）砦を破壊する者」を意味し、神々の王インドラの呼称の一つであるが、ここでは「花の都のインドラ」から「花の都の王」という意味になる。続く音曲の名『プランダラの勝利』（Purandaravijaya）のプランダラと共鳴させている。

（25） ラサに従った演技 yathārasābhinaya. ラサ（rasa）は本来「味わい」を意味するが、転じて芸術作品を鑑賞する時に味わう感動、美的快感を指す術語となり、インドの美学の最も重要な概念となった。特に総合芸術である演劇では重視され、演劇論においてさまざまに論じられる。演劇論の古典であるバラタ作『ナーティヤ・シャーストラ』第六章は、このラサ論を扱うが、そこでは八種のラサ、恋（śṛṅgāra）、滑稽（hāsya）、悲（karuṇa）、忿怒（raudra）、勇猛（vīra）、恐怖（bhayānaka）、嫌悪（bībhatsa）、驚異（adbhuta）が挙げられ、これは基本的にその後の演劇論に受け継がれていく。上村勝彦『インド古典演劇論における美的経験』（東京大学東洋文化研究所、一九九〇年）三—三九、三六六—四〇二（第六章の和訳）ページ参照。

（26） 四種の演技法……舞踏技法 これらはバラタ作『ナーティヤ・シャーストラ』に記されているが、完全に一致するわけではない。演技法（abhinaya）とは身体的（āṅgika）、言語的（vācika）、外的（āhārya）、内的（sāttvika）の四種。ポーズ（sthāna）は vaiṣṇava, samapāda, vaiśākha, maṇḍala, pratyālīḍha, ālīḍha の六種。歩き方（gati）は静止（sthita）、並の速度（madhyama）、早足（druta）の三種（ただし二種という読みもある）。八種のラサは前註に述べた。歌唱や器楽演奏でのリズム（gītavāditrādilaya）は緩（vilambita）、中（madhyama）、急（druta）の三種。三十二種の手の振り（hastapracāra）は、バラタは三十二種の四肢の動き（aṅgahāra）と記している。また十八種の眼の使い方（nirīkṣaṇa）は、バラタの記述とは数が一致しない。W&V、一六—一八ページ参照。

（27） カーカリー音が……調律し avyaktakākalīm racanāmūrcchanām vīṇām kṛtvā. カーカリー音について は「蓮華」註（56）参照。ムールッチャナー（mūrcchanā）は三種の基本音階（実際には二種）の主音を変更することによって得られる派生音階。古典音楽文献では各基本音階について七種、計十四または二十一の派生音階が知られている。基本音階はいずれもサリガマパダニの七正音を使うが、移調によって得られる派生音階では、派生音を用いるものがある。ここでは派生音の一つであるカーカリー音を用いるいずれかのムールッチャナーに、ヴィーナーを調律したということであろう。井上貴子、前掲論文、六三—六四ページ、Emmie te Nijenhuis, 前掲書、三二—三三ページ参照。

（28） ヴァクトラ律、アパラヴァクトラ律 vaktrāparavaktre. ヴァクトラ律（vaktra）はピンガラ作『チャンダス・シャーストラ』（Ed. by Paṇḍita Kedāranātha and Vāsudeva Laxmaṇa Śāstrī Paṇaśīkara, Varanasi : Chaukhambha Orientalia, 1987）五・九—二〇に規定されている。八音×四句、計三十二音より成る。正規のヴァクトラ（pathyāvaktra）は一般にシュローカ（śloka）といわれる韻律であり、第三〇詩節はこの韻律で歌われている。他に数種類の変種（vipulā）がある。アパラヴァクトラ律（aparavaktra）は、奇数句十一音・偶数句十二音の四句、計四十六音から成る韻律として五・四〇に規定される。第三一詩節がこの韻律で歌われている。サンスクリットの韻律については、V.S. Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Kyoto : Rinsen, 1986 [Rep. of Poona, 1957], Appendix A : Sanskrit Prosody に簡潔にまとめられている。

（29） メールとヴィンディヤ Meruvindhya. インドの神話的宇宙誌では、メール（またはスメール、須弥山）は世界の中心にそびえる山。「蓮華」註（17）参照。ヴィンディヤは中インドにある山脈で、北インド

とデカン高原の境となる。

IV　足蹴にされた男

(1)　随神たちやナンディン　saha gaṇapatibhir Nandinā. 随神（gaṇa）は半神半獣的存在であり、シヴァ神の眷属としてヒンドゥー神話によく登場する。象の顔をもつガネーシャはその代表であり、シヴァの息子とみなされている。ナンディンはシヴァ神が乗り物とする瘤牛の名。次行の「牡牛の王」と同じである。

(2)　外部器官　bāhyaṃ karaṇam. 五つの感覚器官（眼耳鼻舌身）と五つの行動器官（両手・両足・生殖器官）を指す。ここでは肉体を意味する。第一・二詩節はシヴァ神が愛神の身体を焼いた神話に基づいている。詳しくは「蓮華」註(3)参照。

(3)　鷺や猫の……立ち回る　bakabiḍālasamapracāra. バカ（baka）は、灰色サギ。水辺にじっと静かに立っていて、魚を見つけるとすばやく嘴で捕える習性のために、忍び足で歩く猫とともに、狡猾でずる賢い、裏表のある生物と考えられている。『マヌ法典』四・一九五―九六参照。

(4)　禿げのシュヤーミラカ　khalatiśyāmilaka. 本篇の作者の名と主人公のヴィタの名が同一である。

(5)　灌頂の儀式　abhiṣeka. 王の即位式の際に、聖地の水を祭官がマントラを唱えながら、王となる祭主の頭にふりかける儀礼。

(6)　称号好きの……浴びせられた　labdhaṃ khalu śabdakāmaya śabdapramāṇārjanāc chabdasya vyasanam. śabda には「称号、言葉」という意味があり、ここでは同一の単語を多義的に使用する技巧を用いている。śabdapramāṇa はここでは「肩書きを主とする男」という意味で訳したが、「たいそうな肩書きを持つ男」とも訳せる。また pramāṇa はそれだけで高官の意味も持つので、「名ばかりの高官」と訳すこともできる。また同語反復を用いる punaruktivāda という技巧は、第一二四、一二七詩節、また散文部分にも随所に見られる。

(7)　白鳥　rājahaṃsī. 白鳥（haṃsa）はサンスクリット文学で最も愛好される鳥である。ヒマラヤ山中のマーナサ湖がその故地であると言われ、冬期に北西インドに飛来する。rājahaṃsa は白鳥の一種（Cygnus davidii）。またハンサの別称としても使われるようである。

(8) 文法家は「蓮華」二〇ページ以下でも、その古語的厳格な言葉使いを揶揄の種とされる。ここでは文法家の言葉使いをまねたのか、アオリストを使った指令法が多用される。

(9) マヌや……ガールギヤ Manuyamavasiṣṭhagautamabharadvājaśaṅkhalikhitāpastambahārītapracetodeva-lavṛddhagārgya. いずれも古代の聖仙の名。『ヤージュニャヴァルキヤ・スムリティ』(Rep. of Ed. of Nirnaya Sagar Press, Nag Publishers 1985) 一・四―五に列挙される法典の著者名の中に、この多くが含まれる。またマヌ、ヴァシシュタ、ガウタマ、シャンカリキタ、アーパスタンバ、ハーリータの法典はヴェーダ文献中に現存する。「極道」一一三ページには、法典の著者としてブリハスパティとウシャナスの名が挙げられる。

(10) 大罪にたいしての贖罪 mahataḥ patakasya prāyaścittam. 大罪 (mahapataka) は最も重い罪であり、バラモン殺し、スラー酒を飲むこと、黄金泥棒、師の妻との姦淫、以上の罪を犯した者と交際することが、その代表的な五大罪と言われる。この大罪以下の罪を犯した者は汚れた者として社会から排除され、贖罪を行なうことによってのみ再び社会に復帰できる。そのためには、ここに描かれているように、ヴェーダに精通する者その他の必要な構成員から成る集会に行って、罪にふさわしい贖罪の宣告を受けなければならない。渡瀬信之『マヌ法典』(中公新書、一九九〇年)、一五二―九九ページ参照。

(11) 卑しい種姓 caturtho varṇaḥ. 直訳すると「第四ヴァルナ」。古典インドの理念によると、社会は四つの身分(ヴァルナ)、婆羅門、王族(クシャトリヤ)、庶民(ヴァイシャ)、奉仕者(シュードラ)から成る。第四ヴァルナはこのうち最も下位の、ヴェーダ学習から排除されたシュードラ階級を指す。

(12) 以上に列挙されている人たちは、いずれもかなりの社会的地位を有する人名であり、『カーマ・スートラ』に定義される寄生的な生活を営むヴィタには当てはまらない。ここではヴィタを拡大して、当時の遊興者(ナーガラカ)階級を含めている。ここに列挙された人物の多くが、後段に登場する。またこの中の人名のいくつかは、同時代の実在人物に比定されている。それについては Schokker I, 一六二―六六ページに詳しい考証がなされている。

(13) 強精の薬 vājīkaraṇa. 強精法はインド古典医学八科の一つ。『チャラカ・サンヒター』治療篇第二章に詳しく述べられている。

(14) 全大地を……この帝都 Sārvabhaumanarendrādhiṣṭhitasya Sārvabhaumanagarasya. サールヴァバウマ (Sarvabhauma) は「全大地を有する」という意味であり、ここでは帝王と帝都両方の称号として使われている。この帝都はウッジャイニー(「蓮華」註(18)参照)を指す。帝王は Schokker の推定する本篇の制作年代によるならば、グプタ朝第五代スカンダグプタである可能性が強い。

(15) この第二四詩節は、ウッジャイニーを中心として、一行目はインド北西の民族、二行目は東インドの国々、三行目は南インドの国々を挙げている。

(16) 籐の杖……分かるように vetradaṇḍakuṇḍikābhāṇḍaśūcita. 籐の杖と水瓶は、ヴェーダの学習をきちんと終えた、正統的な学識ある婆羅門(スナータカ)を象徴する持物である。『マヌ法典』四・三六参照。

(17) ヨーガの聖典 yogaśāstra. パタンジャリに帰せられる、ヨーガ学派の根本聖典『ヨーガ・スートラ』(二―四世紀頃成立)を指すと思われる。あるいはヴィヤーサ註を含む『ヨーガ・シャーストラ』か。ヨーガ学派はインドの六種の正統哲学の一つ。ヨーガの実修法を説く。『チャラカ・サンヒター』総論篇二一・三三によると、ヨーガの実践はやせすぎに効果があるらしい。矢野道雄編訳『インド医学概論』一四四ページ参照。

(18) 彼女の瞳の……聞かせたり インド古典医学では、体内の三種の体液の不均衡により病気が生じると考える。ここではヴィシュヌダーサは、女の媚態を三体液の一つである風(vāyu)が乱れた症状と考えている。『チャラカ・サンヒター』総論篇第二〇章によると、風の作用の特徴として、振動・回転・運動がある。また風が最も拠り所とする体内部位は腸であり、浣腸が基本的な治療法である。ヴィシュヌダーサはおそらく整腸剤として溶かしバター(sarpis)を女に勧めていると思われる。Schokker 註によると、溶かしバターは風の病気の治療の間のダイエット食として用いられる。「極道」註(39)参照。

(19) みさご kurara. Pandion haliaetus. 魚を常食とする水鳥。その鳴声は短かくかん高いピーという音を

繰り返す。

(20) ローヒタカの……囃し立てている　rohitakīyair mārdaṅgikaiḥ kaṃsapātraveṇumiśrair yodheyakavarṇair upagīyamānaḥ. ヨーデーヤカ調のしらべ（yodheyakavarṇa）とは、ヨーデーヤ地方（東パンジャブ）の民謡風の旋律と思われる。varṇa は旋律の上昇・下降曲線を指す。ローヒタカはヨーデーヤ地方の都市の名。太鼓打ち（mārdaṅgika）は両面太鼓ムリダンガの奏者。ムリダンガは現在でも南インド古典音楽で用いられる。

(21) アマランサス　kuraṇṭaka. Barleria prionitis Linn. 黄色の花をつけるアマランサスの一種。

(22) 半文だって手にしたことがないんだ　amṛkṣitahasto māṣakārdhenāpi. 直訳すると「半マーシャカによってさえ手を拭おうとしない」。マーシャ（māṣa）は元来リョクトウ（Vigna radiata）のことで、この豆が重さを計る分銅として使われたために重量単位となった。『マヌ法典』八・一三四—三六等によると、一マーシャ＝五クリシュナラ（グンジャ即ちトウアズキ Abrus precatorius）＝一六分の一スヴァルナであり、約〇・五九グラム。また一銀マーシャ＝二クリシュナラ＝一六分の一銀ダラナ。貨幣としてのマーシャカ（māṣaka）は金貨と銀貨と銅貨があったらしい。第三〇詩節の「泡銭」、その後の散文の「金をふところにしないで」の金もこのマーシャカである。グプタ期にこの貨幣の交換価値がどれほどであったかはよくわからないが、『ジャータカ』の記述によると、銀貨の一マーシャカまたは半マーシャカが労働者の一日の賃金であったらしい。R.N. Saletore, 前掲書、六〇九ページ以下参照。

(23) カーシャ草　kāśa. Saccharum spontaneum. カーシュ。イネ科の多年草。雨期の終わり頃に銀白色の絹毛に包まれた花穂を出す。

(24) マカラの旗柱　makarayaṣṭi. マカラは鮫のような怪魚で、愛神カーマの紋章の一つ。カーマ神殿の前には、このマカラを旗印とする旗竿、またはマカラを柱頭につけた柱が立てられる。詳しくは Schokker I, 一八七ページを参照。

(25) クラウンチャの回春法　krauñcarasāyana. 回春法（rasāyana）とは不老長寿法であり、インド古典医学八科の一つ。『チャラカ・サンヒター』治療篇第一章に詳しく記述されている。クラウンチャ（krauñca）は、秋から春にかけてインドに渡る鶴、もしくはヒマラヤ山脈中の山の名。このクラウンチャの回春法がどのようなものであるのかは不明。

(26) 以上の段落に列記されている家屋の部分の用語については、正確なところは分からない。詳しくは Schokker I, 一九〇—九六ページを見よ。この段落の訳は、上村勝彦「インド古典における都市の情景」（『比較文明』五号、一九八九年）七七—九〇ページ所載に従った。

(27) キラータ人　Kirāta. 主に狩猟で生計を営む山地民族。都市に出て、家畜の世話、馬丁などをする。

(28) カンボージャ馬　kāmboja. カシュミールの北西にあたるカンボージャ地方産の馬。馬の中で最高級のものとされる。

(29) カーカリー……もっぱらに　kakalīpañcamaprāyam. 第五音（pañcama）は、ドレミに相当するサリガマパダニの五番目のパ音。カーカリー音（kākalī）については「蓮華」註(56)参照。

(30) シャーリカー鳥　śārikā. ここではムクドリの類（英名 Grackle または Talking-Myna）。九官鳥を指すこともある。おうむやシャーリカーを飼って言葉を教えるのは、遊女の六十四芸の一つである。

(31) 第三六—三九詩節は、ダンダカ（daṇḍaka）という韻律で書かれた一つの詩節であるが、長いので、M&A と Schokker のテキストに従い、句ごとに詩節番号をふった。ダンダカは六つの短音の後に長短長より成る組をいくつか続けたものを一句とし、その四句より成る韻律で、ここでは一句が六十音に達する。

(32) バクトリア人、カーンカーヤナ……ハリシュチャンドラ　bālhīkaḥ kāṅkāyano bhiṣag aiśānacandriḥ hariścandraḥ. Schokker によると、このハリシュチャンドラは古典医学書『チャラカ・サンヒター』の註釈者ハリチャンドラに比定される。ハリチャンドラは詩人でもあり、チャンドラグプタ二世の侍医であったらしい。バクトリアの医者カーンカーヤナの名は『チャラカ・サンヒター』に言及される。またイーシャーナチャンドラは『ラージャ・タランギニー』に名の出る、カシュミールの医者である。Schokker I, 二〇〇—二ページ参照。

(33) 匈奴風の飾り物のつけてある Hūṇamaṇḍanamaṇḍita. 匈奴 (Hūṇa) は中央アジアの遊牧騎馬民族であるエフタル族。五世紀後半にしばしばインドに侵入を繰り返し、一度はスカンダグプタに撃退されたが、四八五年までにはマールワー東部と中央インドの大部分を占領し、五一〇年にはウッジャイニーを壊滅させた。R・S・シャルマ『古代インドの歴史』(山川出版社、一九八五年) 二三八ページ参照。匈奴風の馬具、馬飾りについては、Schokker I, 二〇六—八ページを見よ。

(34) ラータ人のディンディン連中 Lāṭaḍiṇḍin. ラータはインド西部の部族名。ディンディンまたはディンディカ (ḍiṇḍin, ḍiṇḍika) は、この作品によると、粗衣をまとう放浪の大道遊芸人のような人々を指す。本来は体中に灰を塗り、粗衣をまとったパーシュパタ派の遊行者を指す言葉であったらしい。Schokker I, 一四三—四四ページ参照。

(35) セーナカ将軍 senāpateḥ Senakasya. Schokker は、このセーナカは、ヴァラビーのマイトラカ朝のダラセーナ一世 (在位期四七五—五〇二) に比定できるという Dasharatha Sharma の論を引いている。Schokker I, 二三—二四、一六六ページ参照。

(36) 生理日 puṣpavatī. 字義通りには「花を持つ女」という意味であるが、花は月経の意味ももつ。以下の叙述 (第四四詩節等) で花という語はこの月経の暗喩として使われている。また四四—B詩節の花粉 (rajas) には月経の血の意味がある。生理中の女性との交わりは禁じられている (『マヌ法典』三・四七、四・四〇—四二、一一・一七四等)。

(37) キンマ tāmbūla. キンマ (Piper betel) の葉にビンロウジュの実と他の香味料を包んだもの。嗜好品であり、口の中でくちゃくちゃ嚙み、赤くなったつばと共にかすを吐く。熱帯地方に古くからある習慣で、現在も続いている。ヒンディー語ではパーンという。

(38) この第四九詩節は、Schokker, Ghosh, M&A いずれも、『マハーバーラタ』の中に見当たらないと述べている。Janaki によると、『バガヴァッド・ギーター』一二・一五に、「人に恐れられず、人を恐れず、喜びも怒りも、恐れも動揺もなき人、そのような人は我が友である」と述べられており、この第四九詩節の前半二行は、これを反映した、立派な人の描写であって、ここで作者はマカヴァルマンを揶揄するべく、後半で意味を逆転させた引用をさせている。S.S. Janaki, "Caturbhāṇī—Literary Study," *Indologica Taurinensia* 2 (1974), p. 102 参照。

(39) ピンチョーラー piñcholā. フルートのごとき管楽器。

(40) 家孔雀は……歩き回れり 孔雀は、蛙の声とまちがえて、雨季が来たと思う。蛙も孔雀も雨季の風物詩であり、孔雀は雨季が来ると、喜んで羽根を広げて踊るという。

(41) インドラスヴァーミン Indrasvāmin. 一七五ページにヴィタの一人として挙げられている、「山地部族出の最初のアパラーンタ侯インドラヴァルマン」(pārvatīyaḥ prathamo 'parāntādhipatir Indravarmā) と同一人物。インドラダッタとも呼ばれている。Schokker によると、トライクータカ朝の王インドラダッタ (在位期四一五—五五年) に比定されうる。第六〇詩節に述べられるように、バドラーユダに征服され、グプタ朝の支配下に入ったと思われる。Schokker I, 二一、二三、一六五ページ参照。

(42) アパラーンタからの鬼 aparāntapiśāca. アパラーンタはインド南西部、西ガーツ山脈の西側の海岸地帯。ピシャーチャは人肉を食べるという悪鬼の一種である。同様の表現としては、第一四詩節の「恋の魔性」(kāmapiśāca) 第八八詩節の「砂漠の妖怪」(marupiśāca)、「蓮華」一四ページの「詩の魔物」(kāvyapiśāca)、二四ページの「清浄行の怪物」(caukṣyapiśāca) などがある。

(43) 金 suvarṇa. 金貨の一種。一スヴァルナは十六マーシャカ (註(22)参照)。グプタ期の金貨は、最初はクシャーン朝以来の、ローマ的重量体系に合う一二一グレインのものであったが、次第により重いものが鋳造されるようになり、スカンダグプタ以降はインド本来の重量体系に合う一四六グレイン (ほぼ一スヴァルナ、九・四八グラム) のものが主流となる。ただし、純金の含有率は低下する。R.N. Saletore, 前掲書、六一九—二五ページ参照。

(44) 払子持ち cāmaragrāhiṇī. 払子 (cāmara) はヤクの尾の毛などを束ねた、蠅や虫を追い払う道具。王侯の印として、側近の官女に保持させた。

(45) 私の体に触れてください alabhasva tāvad idam me śarīram. 誓言をたてる時、自分もしくは相手の体、体の一部、持物などに触れる。

(46) バガダッタ Bhagadatta.『マハーバーラタ』七・二五・一九以下に、カーマルーパ国の王バガダッタが、インドラ神がかつて魔神たちとの戦いに使った同名の象バガダッタに乗って、パーンダヴァ軍およびパーンダヴァ兄弟の一人ビーマと戦う場面が描かれている。

(47) 衛兵長官バドラーユダ殿 mahāpratthāro Bhadrāyudha. 衛兵長官（mahāpratthāra）は字義通りには「門衛長」を意味し、グプタ朝の官職名の一つである。バドラーユダの名は『カターサリットサーガラ』に言及され、Schokker によると、彼はスカンダグプタの衛兵長官であり、スカンダグプタの遠征（四五五―五六年）の中心人物と考えられる。Schokker I. 二二一―二二三、二二三ページ参照。

(48) 第五七―五九詩節によると、ラータ人はヤをジャ、サをシャとなまる、プラークリット語の一種を話すらしい。

(49) 子鳩 kapotaka. 両掌を組まずに、側面で接触させ、上向きに保持する形。挨拶、尊敬等を表わす、印契の一種である。

(50) Schokker によると、この第六〇詩節は、スカンダグプタの遠征を記念するビタリー碑文と発想・表現が類似し、ビタリー碑文をまねて、バドラーユダの遠征を歌う。また「母なるガンジス」という表現は、スカンダ神がガンジス河の息子とみなされることがある点から、スカンダグプタの母を暗示している。Schokker I. 二二五―二二六ページ参照。マガダ王家は、マガダを発祥の地とするグプタ王朝を指す。

(51) 椰子 hintala. Phoenix paludosa Roxb. ナツメヤシの一種。

(52) この第六二詩節はプラークリット語の一種で書かれており、韻律はギーティと思われるが合わない部分がある。意味不明の部分もあるが、ここでは Schokker の解釈および英訳に従って訳す。

(53) プラディウムナ Pradyumna. クリシュナ神の息子で、愛神カーマの生まれ変わり。ここでは愛神の別名として使われている。

(54) 三重の……あでやかな trivalījihmitaromarājī. 乳房と臍の間の腹にある三条の皺（trivali）とその中央を通る産毛の筋（romarāji）は、サンスクリット文学では、美女の印である。田中於莬彌「トリヴァリーについて」（『酔花集』一八二―八七ページ）に詳しい考証がなされている。

(55) この第六五詩節は、仏陀の前生話『ジャータカ』の一情景を想起させると同時に、恋わずらいにある女の姿を暗喩している。「矢」は愛神の矢を暗示する。この詩節後半の「かくのごとき鹿を」と「如来も野鹿なりしを」は共に、mrgam tathāgatam であり、ヤマカという技巧を用いている。「極道」註(25)参照。

(56) 夫が旅に出ている間、妻は装身具を一切つけず、化粧、水浴もせず、髪を一房に編んだまま解かない。遊女も愛人の心をひきつけるためには、貞節な妻の振る舞いをまねるのが良いとされる（『カーマ・スートラ』六・二・一、六三）。

(57) ダーシェーラカ Dāśeraka. インド西部マールワー地方（砂漠地帯）に住む部族名らしい。Schokker は次に出てくるダーシェーラカ王を一七五ページにヴィタの一人として名の挙げられるダーシェーラカの人ルドラヴァルマンと同一人物とみなす。Schokker I. 一六三ページ参照。

(58) このグプタクラの下僕のせりふはプラークリット語の一種で書かれており、テクストに疑わしい箇所も多く、正確な意味をとることは不可能。Schokker は英訳を放棄している。ここでは Ghosh, M&A の訳を参考に、推測をまじえて大まかな訳を試みた。このプラークリット語の特色については Schokker が詳しく分析している（Schokker I, 一三四―一三六ページ）。

(59) 塩の市場 lāvaṇikāpaṇa. lavaṇa には「塩」と「美しい、魅力的」という意味があり、lāvaṇika は「塩商人」、lāvaṇika は「美女」の意味になる。ここでは「塩商人の市場」と「美女の市場」（すなわち遊郭街）とをかけてからかっている。

(60) 一刻 yāma. 約三時間。夜は三刻であるとされる。この詩節では夜をどのように過ごしたかを各刻ごとに語っている。

(61) グルグル gulgulu. または guggulu. 芳香性の樹脂（Commiphora mukul Engl. の樹脂）で、インド古

典医学で重用される薬剤の一つである。ヴェーダ文献にも現われる。矢野道雄編訳『インド医学概論』二七八ページに図版がある。また Schokker I. 一六七―六八ページ参照。

(62) 夜叉 yakṣa. 財の神クベーラの眷属である半神的存在。樹木の聖霊とみなされることもある。

(63) 双の穀倉もつ樽 kabandham . . . kusūladvayam. 太腿が穀倉に、肥満した腹が樽に喩えられている。

(64) ガンガー……払子持ち Gaṅgāyamunayoś cāmaragrāhiṇī. ガンガーはガンジス河。ヤムナーはプラヤーガでガンジス河と合流するその支流。一対の女神と考えられている。払子持ちについては註(44)参照。この女は両女神を祀る神殿に仕える女性であろう。

(65) 家計の……しか kevalaṃ kuṭumbatantrārthaṃ śabdakāmam. 性愛 (kāmatantra) のためではなく、家計 (kuṭumbatantra) のためということである。śabdakāma は「言葉による性愛」あるいは「名ばかりの性愛」ととることもできる。言葉で戯れるだけで、実際の行為には至らないという意味であろう。

(66) ダッタカについては「蓮華」註(43)参照。この言説の典拠は不明。

(67) 顧問官の役所 kumārāmātyādhikaraṇa. kumārāmātya は字義通りには「皇太子の顧問官」を意味するが、高級官僚を指す、グプタ朝の最も重要な官職である。kumārāmātyādhikaraṇa は、その高官の役所、官職を意味し、当時の印章にしばしば刻印されている。詳しくは Schokker I. 二四七―四八ページ参照。

(68) 文書官や書記 pustapālakāyastha. pustapāla は文書記録を保管する官職名。kāyastha は裁判所の書記。『ムリッチャカティカー』第九幕の裁判の場面にも登場する。

(69) シャルカラ……皮職人が シャルカラ (Śarkara) は Schokker によると、北西インドの部族名として『マールカンデーヤ・プラーナ』に言及される。キーラ (Kīra) はカシュミールの近隣の部族名らしい。Schokker I. 二四九―五〇ページ参照。

(70) 役割を交換して yuvativiparītam. 男女が役割を交換して、女が上になり男のように振る舞う性交法。一般に puruṣāyita と言われ、『カーマ・スートラ』二・八に詳しく記述される。

(71) シャールマリ樹 śālmali. Bombax malabaricum. キワタ (パンヤ)。若い木には樹幹にとげがあるが、成長して高木になると消える。春先に赤い花を咲かせ、夏に実をつけ、その実から白い綿毛のついた種子を吹き出す。

(72) スパラ人……ナーガ sauparaḥ Tauṇḍikokiḥ Sūryanāgaḥ. スパラがどの地方、民族かは不明。M&A 註は sūrpālaka の短縮形ではないかと述べる。スールパーラカ (またはシュールパーラカ) はアパラーンタ地方の都市。タウンディコーキ・スールヤナーガは、以下の記述によると、ヴィシュヌの義弟 (妻の妹の夫) である。Schokker はこのヴィシュヌを同じコーキ家のヴィシュヌナーガとみなすが、本篇の登場人物中、他にヴィシュヌの名を持つ人物には、ダイタヴィシュヌとヴィシュヌダーサがいる。ヴィタの友人であり、軍の司令官スカンダキールティの上司であるという記述から考えると、ダイタヴィシュヌの可能性もある。

(73) 南門の外……安女郎たち bahiḥśibike kuṭaṅgāgāraniketanābhiḥ paṭakāveśyābhiḥ. 「南門」の意味の śibika は śibika-dvāra として、エジャトン『仏教梵語辞典』に登録されている (Schokker I. 二五三ページ)。南は死者の方角である。安女郎 (paṭakāveśyā) は、字義通りには「幟女郎」。第九四詩節に詳しく描かれるが、それによると、都市の城壁外の森近くに小屋住みし、旗幟を立てて客を呼ぶ下級娼婦、夜鷹のようなものである。都市内の遊郭が王の保護・管理下にあるのに対し、もぐりの私娼と思われる。インドのヴァルナ制 (註(11)参照) の下で、上位身分の男が最下層の女に近づくことは罪とみなされている (『マヌ法典』一一・五九、一七九)。この安女郎は、通常は目撃者として登場する下賤の馬方連中 (mlecchāśvabandhaka) などを相手にする、下層階級の女と思われ、そのためにスールヤナーガは訴えられたのであろう。

(74) 軍の司令官のスカンダキールティ Skandakīrtinā baladarśakena. 一七四ページにヴィタの一人として挙げられる、アヴァンティの人スカンダスヴァーミンと同一人物。Schokker によると、この人物を皇太子であるスカンダグプタに比定しうる。Schokker I. 一六四ページ参照。

(75) 醜くとも、片端でも arūpāṃ virūpām api. 遊女の名ルーパダーシー (Rūpadāsī) にかけた表現と思

われる。Schokker はルーパダーシーを名前ではなく、遊女の種類ととるが、ここでは固有名である。Schokker I, 二五六ページ参照。

(76) ティッティビ鳥 ṭiṭṭibhi. 千鳥の類。赤い肉垂のあるタゲリ (Lobivanellus indicus. 英名 Red-wattled Lapwing)。人間が巣に近づくと騒々しくさわぐのを特徴とする。また片足または両足で立ったまま眠る習性があるため、utpāda-śayana と呼ばれる。この呼び名からこの鳥は、天が落ちてきた時に身を守るために、足をまっすぐ上にあげて仰向けになって眠ると空想されるようになった。ここでもこの鳥の眠る時の姿勢が比喩されている。

(77) 小銭 kākiṇī. 一カーキニーは四分の一マーシャカ。銀貨または銅貨。銅貨の一カーキニー、半カーキニーは最も小額の貨幣のようである。註(22)参照。

(78) 美貌で生きている遊女 rūpājīvā. 遊女の種類の一つ。『カーマ・スートラ』六・五・二九によると、最高級の遊女ガニカー (gaṇikā) の次の階層の遊女である。これに対するジャヤマンガラ註によると、ガニカーにはさまざまな技芸が要求されるのに対し、ルーパージーヴァーは技芸を身につけていなくても、容姿が優れていれば良い。『実利論』にも二・二七・二七等で遊女の一種として言及される。

(79) ヴィダルバ……ハリシュードラさん Vidarbhavāsī talavaro Hariśūdraḥ. talavara は都市の警護者、警察官を指し、taravara, talāra, talavarga, talārakṣa, talavāṭaka ともいわれ、グプタ期の印章、碑文にも記録されている。ドラヴィダ系の語らしい。Schokker I, 二五九—六〇参照。ヴィダルバは南インド、ヴィンディヤ山脈の南側の地方。この段に登場する人物はすべて南インド出身である。カーヴェーリーはタミル地方の河の名であり、名前からこの遊女がドラヴィダ人であることが分かる。

(80) 遊女長官、警衛司 veśyādhyakṣapratihāra. 遊女長官 (veśyādhyakṣa) は遊郭に住む遊女を保護監督する官職。『実利論』二・二七に詳しく記述される。警衛司 (pratihāra) については註(47)参照。

(81) 官能の化身 ratir iva rūpiṇī. ラティ (rati) は「喜び、愛、性愛」を意味する女性名詞で、ヒンドゥー神話では愛の神カーマの妻と考えられている。

(82) あなたは……いらっしゃるのね aśokasamadohalo 'si. ドーハラ (dohaḍa, dohala) とは、妊婦が変なもの (香土等) を異常に食べたがることを指すが、サンスクリット文学では樹木にも開花の際にドーハラがあると考えられている。アショーカ樹は開花の時に、若い女の紅を塗り足飾りをつけた足で蹴られることを望むという。他には若い女の口に含まれた酒を吹きかけられることを望むという、バクラ樹 (「極道」註(64)参照) のドーハラが有名である。第一三〇、一三五詩節も参照せよ。

(83) ヤムナー河……無敵なように ヒンドゥー神話によると、ヴィシュヌ神の化身とみなされるクリシュナは少年時代に、ヤムナー河に住む毒蛇カーリヤを退治し、その鎌首の上で踊った。カーリヤに許しを乞われて、クリシュナは彼に、蛇の天敵ガルダ (ヴィシュヌ神の乗物となる鳥) から決して傷つけられないという願い事をかなえてやり、カーリヤは一族とともに海へ去った。上村勝彦『インド神話』二五三ページ参照。

(84) タマーラと……隈取りされた tamālaharitālapaṅkakṛtapattralekhā. タマーラ (tamāla) は Xanthochymus pictorius で、黒い樹皮と芳香の高い暗緑色の葉をもつ樹木であるという。ここでは樹皮または葉の煎じ汁でできた黒い泥状の顔料と思われる。雌黄 (haritāla) は硫化物 (As_2S_3) で黄色顔料として用いられる。隈取り (pattralekhā) とは、頬に描かれる模様化粧を指す。この詩節では、闇の黒さと灯火の黄色が、化粧のタマーラの黒色と雌黄の黄色に喩えられている。パットラ・レーカーについては、松山俊太郎「古代インド人のよそおい (一〇)」(『化粧文化』一二、一九八五年五月) に、この詩節の訳と解説も含めて詳細に考証されている。

(85) ローヒニー Rohiṇī. インド古典天文学で、二十七星宿の第二番目のもの。二十七星宿はすべて月の妻であるが (「蓮華」第四二詩節および註(68)参照)、その中でローヒニーが第一の妃と考えられている。

(86) ガンダルヴァ……一組 gandharvasiddhamithuna. ガンダルヴァとシッダはともに、空を飛ぶ半神的存在。ガンダルヴァは天上の楽人として有名である。mithuna は夫婦、恋人同士を指す。

(87) 水汲み女郎 ghaṭadāsī. kumbhadāsī といわれることが多い。下級の遊女である。『カーマ・スート

ラ』六・五・三〇、六・六・五〇に言及される。Schokker I, 二七七ページ参照。

(88) チャコーラ鳥 cakora. ウズラの類 (Alectoris graeca. 英名 Chukar)。淡黄色で首に黒い斑紋があり、嘴と足は赤い。夜、開けた場所に宿る習性から、サンスクリット文学では、月光を食べて生きる鳥といわれる。さらに恋人の月のような顔をうっとりと見つめる眼が、しばしば月を見つめるチャコーラの眼に喩えられる。ここでは酒に映る自分の顔を見つめる女の眼が喩えられている。

(89) マドゥーカ花 madhūka. Madhuka indica. Madhuka latifolia.

(90) アートマグプター……すがりつく

アートマグプター ātmaguptā. カピカッチュ (kapikacchu. 学名 Mucuna prurita Hook.) の別称。

カディラ khadira. 「極道」註(21)参照。

パトーラ paṭola. Trichosanthes dioica Roxb.

ニンバ nimba. Azadirachta indica. インドセンダン。ヒンディー語でニームといわれる。常緑の高木で、白い芳香ある花をつける。

(91) ヴァーサヴァダッター……ウダヤナ ヴァッツァ国の王ウダヤナとアヴァンティ国の王女ヴァーサヴァダッターの恋物語は、大説話集『ブリハットカター』に語られ、その後、物語や文学の素材として愛好されている。ウダヤナ王はアヴァンティの王プラディヨータによって、ウッジャイニーの王宮に囚われの身となり、そこで王女ヴァーサヴァダッターに竪琴を教授し、二人は恋におちる。ウダヤナは王女の雌象バドラーヴァティーにヴァーサヴァダッターを乗せて、自身の王都コーサンビーに連れ去る。その後アヴァンティ王の許しを得て、二人は結ばれる。

(92) 若葉ヴィタ viṭapravāla. 字義通りには「ヴィタの中の若葉、新芽」という意味である。未熟さ、青臭さをからかったあだ名であろう。

(93) 集まり sadas. sadas にはこの意味のほかに「空」と「家」という意味がある。第一二〇詩節の前半は sadas を「空」の意味に、後半は「家」の意味にとっている。前半の、投げかけられる流し目であたり

がまだらになるという表現は、サンスクリット文学でよく用いられる発想であり、眼の黒い瞳と白眼の部分が、視線によってまわりに映り、周囲が黒白まだらになるということである。第一四一、一四四詩節にも使われている。

(94) スヨーダナ……のそれ ヴリコーダラは『マハーバーラタ』の主人公パーンダヴァ兄弟の二番目ビーマの別称。スヨーダナは敵方のカウラヴァ兄弟の長男ドゥルヨーダナの別称。ビーマとドゥルヨーダナの棍棒による決闘は『マハーバーラタ』九・五七に語られる。ビーマが勝ち、パーンダヴァ軍に勝利をもたらす。

(95) 文脈からみて、ここのところでマッラスヴァーミンは、次に続くアーリヤラクシタの反論に対応する贖罪を提案したと思われる。第一三五詩節の反論から考えると、ヴィシュヌナーガの頭にマダナセーニカーが口に含んだ酒を吐きかけるという贖罪であろう。

(96) シビ一族……経にけり シビ (Śibi) は『マハーバーラタ』に語られる王仙の名。鳩を助けるために自分の命を投げ出す話がよく知られている。『ジャータカ』にも含まれる。バルトリスターナは、Schokker によると、『マハーバーラタ』で言及される巡礼地の一つである。詳しくは Schokker I, 二九一ページ参照。

(97) 青き……似合いたる taruṇasahakārapriyasakha. まだ熟してないマンゴーの実は漬け物にしたり、甘く煮てチャツネにしたりする。酒のつまみに良いのであろう。

(98) 三様の……弾き方で vādyeṣu trividheṣv anekakaraṇaiḥ. バラタ作『ナーティヤ・シャーストラ』(Ed. by R.S. Nagar and K.L. Joshi, Delhi : Parimal Publications, 1984) によると、vādya はヴィーナーによる演奏曲で、tattva, anugata, ogha の三種に分類される (二九・七六)。また karaṇa は四種の奏法、運指法 (dhātu) の一つであり (二九・五〇)、長く延ばす終止音で三、五、七、九回弾弦する弾き方である。井上貴子、前掲論文、八二ページ、Schokker I, 二九三—九四ページ参照。なお本作品集の中の音楽に関する記述については、井上貴子氏から直接多くの教示を得た。

(99) 琴の胴部にそえし kolambānugata. kolamba は弦以外の竪琴の本体を指す。M&A 註によると、この部分は kolaṃ vānugata- とも読める。kola は「胸、腰」の意味があり、その場合には「(女の) 胸または腰にそえし (彼の手)」と訳すことができる。

(100) 魔法の竪琴 yogavīṇā. ここでは、戦闘のさなかに鳴る魔法の竪琴を、交わりの際に音をたてる女の腰帯の飾りに喩えているが、この魔法の竪琴がどのように使われ、どのような魔力を持つのかは不明。

(101) ヴァラルチの詩風 Vararucikāvya. Schokker によると、「ヴァラルチの詩」はパタンジャリ作『マハーバーシヤ』に初めて言及される。プラークリット語の文法書を著わしたヴァラルチと同一人物か。「逢引」の作者ヴァラルチとは別人のようである。Schokker 1, 二九六―九七ページ参照。

解説

古典サンスクリット戯曲は、伝統的に、正劇十種と副劇十数種[1]とされるジャンルに分類されているが、そのうちで、バーナ (bhāṇa) は正劇十種の中のひとつに数えられている形式である。

それは、一幕の、韻文散文混合のモノローグ戯曲であり、粋人 (viṭa) 役によって演じられる一人狂言のごときものである。開幕導入部をのぞき、すべて主人公であるヴィタが、自分自身の体験、見聞を語り、また、舞台に実際には姿を現わさない他の人物のしぐさ、会話の模写 (ākāśabhāṣita という手法) によって情景を伝える。この形式は、日本の落語に見られるごとき、一人で演ぜられる声色芝居と相い似ているが、同時に、挿入されている韻文詩の技巧を誇示する詩劇でもある。

現存するバーナ劇は、ほとんどが一四世紀以降の比較的新しい作品であるが、ただひとつ古くから伝承されており、かつ文学史的に評価されているのが、本訳の『チャトゥルバーニー』(Caturbhāṇī「四つのバーナ」) である。

以下に、(一) バーナの構成、特性、(二)『チャトゥルバーニー』の社会的背景、成立時期、および作者など、(三) テクストおよび参考文献について、本訳を鑑賞するための必要最小限の解説を記す。

一　バーナの構成・特性

バーナ劇[2]は、ひとりの演者によって演じられ、演者は自分の体験を物語るとともに、他人の行動を、自分と他人との問答およびしぐさで活写する一幕物の演劇形式であり、取り扱われる人物は、演者であるヴィタと、彼をとりまく遊興人たちおよび遊女たちである。そして基本的に、勇武および恋愛という情趣(ラサ)を勇気や美の描写によって喚起するといわれるが、実際には、恋愛とともに諧謔や揶揄を通じて滑稽という情趣が中心的主題となっている[3]。

舞台の開幕は、多くの他のサンスクリット劇と同様に、舞台監督[4]（あるいは一座の座頭）による挨拶的導入部のあと主役のヴィタが登場し、以後閉幕までおおむね一日の出来事を独演する。

バーナ劇の筋立ては、一般的に単純である。舞台はおおむね遊廓街であり、わけ知りの主人公ヴィタが、遊冶郎たちのさまざまな依頼を引き受けて、花街を徘徊し、出会う遊女たち、風流人たちと軽妙な会話を交わし、遊女の品定め、遊興の極意などを披瀝し、依頼の役目を果たすことによって幕が閉じられるのである。

ここでは、筋立てよりも、ヴィタと彼を取り巻くさまざまな男女との会話の面白さや、花街の情景の描写に力点がおかれており、いわば寸劇の連鎖のごとき構成となっている。そして、挿入される韻文詩に象嵌される修辞的技巧、たとえば韻律、同音反復、語呂合わせ、比喩、対句などの妙に凝ることに作者の努力がはらわれる。また、それら詩文の醸しだす情調の精妙さが誇示されることも、他のサンスクリット美文学の場合と同様である。

次に、バーナ劇において取り扱われる人物の類型（ヴィタ以外には実際に登場しないが）について簡

単に述べる。

まずヴィタであるが、本訳では通人と訳した。一般的に、ヴィタとは[5]、教養があり、遊芸に精通し、有閑市民層に属しているが、遊興に耽ったためにみずからの財を蕩尽して、今は富裕の遊興者たちの寄生者的存在となった人物を指している。英訳としては、したがって、parasite 等と訳されることもある。しかし、『チャトゥルバーニー』（とくに「足蹴」[6]）にては、ヴィタはより広義に、粋人・大通を指すがごとく、裁判官や貴族の公子等もヴィタの仲間とされている。したがって、ヴィタは必ずしも我が国の幇間のごとき職業人でもないのであるが、遊女と客の橋渡しの役をつとめることが多い。いずれにせよ、花街に顔が利き、みずからはすでに卒業した男女の色の道に通じ、若い遊客たちにアドバイスを与える、中老の男として登場する。

一方、ヴィタに対比されて登場するのがドゥールタ[7]（dhūrta）たちである。ここでは、極道と訳したが、遊び人、伊達男のたぐいの人間（時としては悪漢、ごろつき）を指していて、バーナ劇では、遊廓で遊ぶ、比較的年若の、富裕な有閑市民として描かれている。ヴィタにせよドゥールタにせよ、カースト的には上流の社会層に属し、社交語としてのサンスクリット語をしゃべる。

女性として登場するのは、ほとんどが、花街に住む遊女およびそれらを取り巻く女将、遣り手女、かむろ、お付きの女たちである[8]。古典インド、とくにグプタ朝の頃の大都市における遊女階層の実態は、それ自体、比較社会学的に興味あるテーマであるが、ここでは、遊女にはさまざまな階層があり、我が国の江戸中期における、吉原や島原の太夫・花魁の生態を、当時の遊里の構造・機能を含めて想起すれば、本書の鑑賞に十分であろうとのみ述べておく。

劇の長さとしては、通例、韻文の四行詩句が六、七十ないし二百句前後提示されるので、中編の戯曲といえよう。実際の上演のために、文中さまざまな「ト書き」（たとえば「近づいて」、「立ち上がっ

て」、「耳をかたむけて」、「ひとまわりして」等）によるしぐさの指示が挿入されている。

古典期のバーナで、現在、定本的に読めるのは、この『チャトゥルバーニー』のみであるが、一四世紀以降の比較的新しいバーナ劇は、六十数種以上が伝承されている。[9] しかし実際に、現在、上演されることはほとんどないようである。現在、バーナ劇については、ラガヴァン門下のジャーナキ等によって、他のサンスクリット古典演劇とともに、考証や伝承保存の努力がなされている。

二　『チャトゥルバーニー』の成立・作者・内容等について

『チャトゥルバーニー』は、一九二二年、M.Ramakrishna Kavi および S.K.Ramanatha Sastri の手によって Trichur で初めて発見された写本から校訂・印刷された。これは古典バーナ劇を四篇集録したもので、爾来、このジャンルの作品としては、唯一、学界で評価され、サンスクリット文学史の書物に必ず言及されている作品である。[10]

内容は、次の四篇からなる。

『蓮華の贈り物』(Padmaprābhṛtaka)　シュードラカ (Śūdraka) 作
『極道と通人の対話』(Dhūrtaviṭasaṃvāda)　イーシュヴァラダッタ (Īśvaradatta) 作
『逢い引き』(Ubhayābhisārikā)　ヴァラルチ (Vararuci) 作
『足蹴にされた男』(Pādatāḍitaka)　シュヤーミラカ (Śyāmilaka) 作

それぞれの梗概は、各訳の篇初に記しておいた。

まず各篇の特色と作者について、簡単にまとめておく。『蓮華の贈り物』は説話集『ブリハットカター』から登場人物をとった作品である。作者のシュードラカについては『ムリッチャカティカー』の作者シュードラカとの関係が議論されているが、[11]『ムリッチャカティカー』の作者が、作品の序幕に語られているとおりにシュードラカ王なのかどうか自体がまた議論の種となっており（序幕は後補であるという説が有力）、現在の時点では、この問題は解決できない。ただし『ムリッチャカティカー』と『蓮華の贈り物』は、遊女およびヴィタの登場、『ブリハットカター』に関連する点など、共通の要素をもつ。

『極道と通人の対話』は、性愛学、遊女学に関する蘊蓄を傾けた一篇である。作者のイーシュヴァラダッタについては、特に考証されていない。

『逢い引き』は四篇中もっとも短く、可憐な掌篇とでもいうべきものであるが、ヴァイシェーシカ、サーンキヤという哲学学派への言及、舞踊に関する記述などで注目される。作者のヴァラルチを紀元前三世紀頃の文法家・詩人のヴァラルチに比定するのは無理であろう。

『足蹴にされた男』はもっとも長く、かつジャーナリスティックな作品であり、歴史的社会的資料を豊富に含む。作者のシュヤーミラカは、ラージャシェーカラの詩論書『カーヴィヤ・ミーマーンサー』に、シュヤーマデーヴァという名で初出することから、九世紀以前に措定される。その後、アビナヴァグプタ、クシェーメーンドラ、クンタカ等のカシュミール人の詩学論者の著書に「足蹴」からの引用が見られることから、ショッカーはシュヤーミラカはカシュミール系の詩人ではないかと推定している。[12]

以上四篇は、言語・文体・表現の類似から、ほぼ同じ時期に制作されたと考えられ、カーリダーサとバーナの間に位置づけることができるが、その確実な成立年代については、多くの他のインド古典

と同じく、確定されていない。

ただし四篇中、すでに述べたようにもっとも情報量の多い「足蹴」について、ショッカーが研究史をまとめてかなり限定された成立年代を推定している。[13] 最初にテクストの記述を歴史資料と照合し、「足蹴」の成立年代を論じたのは、トマス・バローである。彼は第六〇詩節に歌われるバドラーユダの遠征を、チャンドラグプタ二世の遠征の一部とみなし、他の資料も考え合わせて、四一〇年頃という成立年を提起した。ダシャラタ・シャルマはそれに反論し、第六〇詩節をスカンダグプタの遠征の一部と考え、五〇〇年頃という成立年を提起する。ショッカーはダシャラタ・シャルマの説に従い、「足蹴」成立の上限として、スカンダグプタの遠征（四五五―五六）を、下限として匈奴（フーナ）の侵入によりウッジャイニーが破壊された五一〇年をとり、その間でもおそらくより早めの時期に作られたと推測する。

他の三篇中、「足蹴」と同じくウッジャイニーを舞台とする『蓮華の贈り物』は、言語表現上「足蹴」と著しい類似を示し、影響関係は明白である。その前後関係について、ショッカーは表現の比較から「足蹴」を先行作とするが、[14] これは十分に説得力のあるものとは思えない。パータリプトラを舞台とする他の二篇については、西・中インドの領地を失い、マガダ地方を拠点とする後期グプタ朝が滅びる六世紀後半を、その下限とすることができる。

以上の議論から、四篇全体の成立年代は、五世紀から六世紀前半が妥当であろう。四篇の前後関係については決定できない。

『チャトゥルバーニー』として、四つのバーナが一本に編纂された時期および場所についても、明確な措定はなされていない。後代（一四世紀頃）のバーナ、Vitanidra の中に、四つのバーナについての記述が見出され、また、「蓮華」の写本のひとつの巻末に、四人の作者名がまとめてカーリダーサと対比されて記されているという。[15] それ以外に、四作が一本にまとめられた経緯については、明らかにされていないようである。

『チャトゥルバーニー』四篇はいずれも古典インドの大都市[16]（パータリプトラとウッジャイニー）の遊廓街周辺の出来事を扱っている。プロットそのものは四篇とも他愛ないものであって、作者のねらいは、遊里やそこに出入りする人々の情景および雰囲気を、美文をもって活写することにある。

我が国の江戸中期の遊里文学（洒落本、人情本のたぐい）と同じように、そこには、遊女の品定め、評判記、そして遊びの道の極意など『カーマ・スートラ』的な指南あるいは色道哲学が繰り広げられている。また、かなり艶笑的な情景も点描されているが、決して野卑に陥らぬ節度を守って描かれている。

教養・技芸兼備の高級遊女から、町外れの木陰で色を売る下級娼婦まで、さまざまな出身やタイプの女性が現われ、中には尼僧崩れや男娼も登場する。一方、遊客もいろいろな職業、年齢、性格が描き分けられている。それらの人士が、花を飾られ香を焚き込められ管弦の響く爛熟の繁華街で、ウイットのある会話を交わしあうのである。

このような美的情緒描出とともに、今ひとつ注目されるのは、四篇を通じての徹底した現世主義、快楽至上主義とでもいうべき思想に裏付けられた、権威的なものへの痛烈な揶揄、風刺、皮肉が、哄笑を伴って全篇に漲っていることである。もっともらしい言説をする文法学者、バラモン、仏教修行者、そして王侯等が揶揄の対象とされる場面が多出するのである。特に「極道」「足蹴」の二篇は、その点で文学史的に注目に値する作品といえるのではなかろうか。

最後に付言すべき点は、この作品の詩的技巧の面である。[17] 全篇に散りばめられた詩句は、サンスクリット詩劇一般の詩学的伝統をふまえて構成されており、さまざまな韻律（二十数種）が用いられて

いる。修辞的技法も、前節一に述べたように、多彩な技法が駆使されている。本来的には、このような側面の美的鑑賞が須要なのであろうが、外国語訳としては極めて困難といえよう。本訳も、その点では、原典の香気を十分に伝えているとは到底いえないことを付言しておく。

三　テクストおよび参考文献

本訳において、参照した『チャトゥルバーニー』のテクストおよび参考文献について述べておく。

Ramakrishna Kavi and S.R.Ramanatha Sastri, *Caturbhāṇī*. Trichur, 1922.

この刊本によって、初めて『チャトゥルバーニー』が学界に紹介され注目を受けることとなった。いわゆる editio princeps であるが、入手できず未見。

Moticandra and V.S.Agrawala, *Caturbhāṇī*. Bombay : Hindī Grantha Ratnākara Kāryālaya, 1959.（略称 M&A）

これは、テクスト、ヒンディー語訳、解説、注釈（いずれもヒンディー語）からなっており、完璧な批判校訂本とはいえないまでも、かなり検討・改善を加えられたテクストとして評価されている。本訳の「極道」はこの刊本を底本としている。また、他の三篇の訳出においても、適宜参照した。

各作品ごとのテクスト（英語訳をともなう）としては、次の三つがある。

J.R.A.Loman, *Padmaprābhṛtaka*. Amsterdam : Uitgeverij de Driehoek, 1956.（略称 Loman）

本訳「蓮華」の底本として使用した。なお、「蓮華」に関しては、Kuiper によって次の論文において、第一九詩節の手前まで新しい写本も使用して Loman のテクストへの訂正・考証がなされており、その部分は Kuiper の訂正を採用した。第一九詩節以下では、訳者の判断で数箇所で M&A の読みを

採用した（M&A は Loman を参照している）。

F.B.J.Kuiper, "The Padmaprābhṛtaka Notes, part 1." *Indo-Iranian Journal* 32 (1989), pp.115-140.（略称 Kuiper）

A.K.Warder and T.Venkatacarya, *Ubhayābhisārikā*. Madras : V.Sambamurthy, 1967.（略称 W&V）

「逢引」訳の底本として使用した。

A.Rao and B.G.Rao, *Ubhayābhisārikā*. New Delhi, 1979.

これは、英語詩文的な自由訳である。

G.H.Schokker, *The Pādatāḍitaka of Śyāmilaka*. Part 1 (Text and Commentary). The Hague : Mouton & Co., 1966. Part 2 (English Translation, Glossary etc). Dordrecht : D. Reidel Publishing Company, 1976.（略称 Schokker 1, 2）

この Schokker の著書は、『チャトゥルバーニー』全般についての考証・インデックスをも含み、非常に優れた研究書である。本訳「足蹴」はこのテクストを底本として使用した。

この他に、

M.Ghosh, *Glimpses of Sexual Life in Nanda-Maurya India*. Calcutta : Manisha Granthalaya, 1975.（略称 Ghosh）

がある。これは四篇すべてのテクスト・英訳および解説を含んでいるが、内容的には信頼しがたい部分が多く、あまり参照の対象となりえない。（「極道」については、S.S.Janaki による批判校訂版と英訳の刊行が進行中のようである。）

なお、翻訳および訳註において、個別に言及はしていないが、以下の研究を参考にした。

植物については、
西岡直樹『インド花綴り』木犀社、一九八八年。
西岡直樹『続・インド花綴り』木犀社、一九九一年。
中村元編著『仏教植物散策』東京書籍、一九八九年。
T・C・マジュプリア著、西岡直樹訳『ネパール・インドの聖なる植物』八坂書房、一九八九年。
G.J. Meulenbeld, *The Mādhavanidāna*. Leiden : Brill, 1974, Appendix 4.
Rahul Peter Das, *Das Wissen von der Lebensspanne der Bäume : Surapālas Vṛkṣāyurveda.* Stuttgart : Franz Steiner, 1988, Anhang 1.
鳥類については、
K.N. Dave, *Birds in Sanskrit Literature.* Delhi : Motilal Banarsidass, 1985.
Hugh Whistler, *Popular Handbook of Indian Birds.* Rev. & enlarged by Norman B. Kinnear. Dehradun : Natraj Publishers, 1986[Rep. of 4 ed.].
神話については、
菅沼晃編『インド神話伝説辞典』東京堂出版、一九八五年。
Vettam Mani, *Purāṇic Encyclopaedia.* Delhi: Motilal Banarsidass, 1975.
哲学用語については、
早島鏡正監修・高崎直道他編『仏教・インド思想辞典』春秋社、一九八七年。
地図作成については、
A Historical Atlas of South India. Ed. by Joseph B. Schwartzberg. Chicago and London: The Univ. of Chicago Press, 1978.

最後に、本書の鑑賞・理解のために、一般読書人にとって有益と考えられる参考文献を、日本語刊本に限って以下に紹介する。
古典インドの社会的規範・習俗等については、次の三原典の訳書が参照さるべきである。
上村勝彦訳『カウティリヤ実利論』上下、岩波文庫、一九八四年。
渡瀬信之訳『マヌ法典』中公文庫、一九九一年。
岩本裕訳『カーマスートラ』杜陵書院、一九四九年。
『実利論』の上巻第二七章には、遊女長官についての興味ある記述が見出される。
サンスクリット文学一般およびバーナの地位については、
辻直四郎『サンスクリット文学史』岩波全書、一九七二年。
サンスクリット演劇の簡潔な理解のためには、
辻直四郎「サンスクリット劇入門」(『シャクンタラー姫』岩波文庫、一九七七年、巻末論文)。
本論文は、サンスクリット劇について、その舞台構造、役者、演出等まで、きわめて網羅的にしかも簡潔に紹介している有益なものである。
古典インドの軟文学、遊里情緒、美意識などについての理解に関しては、
田中於莵彌訳『遊女の手引き——クッタニー・マタ＝遣手女の忠言』平河出版社、一九八五年。
田中於莵彌『酔花集——インド学論文・訳詩集』春秋社、一九七四年・新版一九九一年。
松山俊太郎『インドのエロス』白順社、一九九二年。
松山俊太郎「古代インド人のよそおい」(『化粧文化』第三号、一九八〇年一二月より、現在も連載中)。
などを参照されることを望む。とくに、これからの興味ある課題として、この領域に関する比較文学、比較文化論的研究がなされることを期待する。

（1） 正劇（rūpaka）十種はバラタ『ナーティヤ・シャーストラ』、ダナンジャヤ『ダシャルーパカ』等において分類されている。バーナは正劇の一種で、プラハサナ prahasana とともに、喜劇、笑劇の代表的ジャンルである。正劇・副劇については、

Sten Konow, *Das Indische Drama*. Berlin und Leipzig: Vereinigung Wissenschaftlicher Verleger, 1920.

Sylvain Lévi, *Le Théâtre indien*. Paris, 1980.

A.B. Keith, *The Sanskrit Drama*. Oxford, 1924 [rep. Delhi: Motilal, 1992].

等のインド演劇史の研究書に解説されている。

（2） バラタを初めとする伝統的な演劇論書に定義される。Schokker 1, pp.39-64 に比較分析されている。また、S.S. Janaki によるバーナ全般の研究書が現在印刷中とのことである。

（3） J.A. Loman, "The Comic Character of the Caturbhāṇī." *The Adyar Library Bulletin* 25 (1961), pp. 173-87.

サンスクリット文学における笑い・滑稽に関しては次の著書が有益である。（バーナや『チャトゥルバーニー』についても論及されている。）

V.Raghavan, *The Comic Element in Sanskrit Literature*. Madras, 1989.

（4） sūtradhāra. 字義的には「経糸を持つ人」で、一座のリーダー、劇団長であり、上演劇の配役・演出を司り、自身も演者としてプロローグに顔を出し、口上などを述べる。

（5） ヴィタは『カーマ・スートラ』一・四・三二および演劇論書において定義される。Schokker 1, pp. 43-46 参照。また演劇論書中の定義については、上村勝彦「サンスクリット文芸作品に見られる人間観——演劇の登場人物とその性格」（前田専学編『東洋に於ける人間観』東京大学出版会、一九八七年）一〇六ページ参照。

（6） この場合ヴィタはむしろ、洗練された都市の遊興市民を指すナーガラカ（nāgaraka）を含んでいる。ナーガラカの生活は『カーマ・スートラ』一・四に詳しく述べられる。通常はヴィタはこのナーガラカの

取り巻きの一人である。

（7） 極道（dhūrta）は、英訳では、gallant, bon-vivant, rougue, gamester などとされる。「蓮華」の中心人物ムーラデーヴァ・カルニープトラがその代表人物である。

（8） 『実利論』二・二八「遊女長官」、『カーマ・スートラ』第六巻「遊女学」等参照。古典ギリシャの hetaera, ルネサンス・イタリアの高級娼婦との実態比較も興味あろう。本作品中では、高級遊女ガニカー、美貌を売り物にする女ルーパージーヴァ、ガニカーのお付き女中、水汲み女郎、機女郎等の遊女階層、遣手女、遊女の娘などが登場する。

（9） Konow 前掲書、一一九—一二三ページに作品名が列挙されている。主な作品は以下のとおりである。

Vatsarāja, *Karpūracarita* (in *Rūpakaṣaṭkam*. Gaekwad's Orienal Series 8, Baroda, 1918).（一二世紀後半の作と推定されている。）

Anon., *Viṭanidrā*. (cf. K.Kunjunni Raja, "Viṭanidrā : Oldest South Indian Bhāṇa." *Sanskrita Ranga Annual* 6, Madras, 1972, pp.153-167)（一四世紀頃）

Varadācarya, *Vasantatilaka*. Ed. by Damaruvallabha Śarma, Calcutta, 1868.（一五世紀頃）

Vāmanabhaṭṭabāṇa, *Śṛṅgārabhūṣaṇa*. Kāvyamālā 58, Bombay, 1927.（一五世紀頃）

Rāmabhadra Dīkṣita, *Śṛṅgāratilaka*. Kāvyamālā 44, Bombay, 1938.（一七世紀後半）

Nallādīkṣita, *Śṛṅgārasarvasva*. Kāvyamālā 78, Bombay, 1911.（一八世紀初）

Śaṅkara, *Śāradātilaka*. Ed. by F.Baldissera, Poona : Bhandarkar Oriental Research Institute, 1980.

Ghanaśyāma, *Madanasamjīvana*. Ed. by Yutaka Ojihara, *Bulletin d'Étude indiennes* 4 (1986), pp.15-163.
（一八世紀前半）

Kāśīpati, *Mukundānanda*. Kāvyamālā 16, Bombay, 1926.（一八世紀）

Yuvarāja, *Rasasadana*. Kāvyamālā 37, Bombay, 1922.（一九世紀）

なお、一五世紀以降の新しいバーナ全般については、次の総説を参照されたい。

S.S. Janaki, "Le più recenti composizioni teatrali di tipo Bhāṇa." *Atti della Accademia delle Scienze di Torino* 2, vol. 107 (1973), pp. 459-90.

横地優子「サンスクリット劇の新風――バーナ劇と春祭り」（辛島昇他編『インド入門2――ドラヴィダの世界』東京大学出版会、一九九四年）。

(10) 初期の主な研究論文には次のものがある。

S.K. De, "A Note on the Sanskrit Monologue Play (Bhana), with special reference to the Caturbhani." *JRAS* (1926), pp.63-90.

F.W. Thomas, "Four Sanskrit Plays." *Centenary Supplement of the JRAS* (1923), pp. 123-36.

F.W. Thomas, "The Pada-taditaka of Syamilaka." *JRAS* (1924), pp. 262-65.

(11) Schokker I, pp. 26-31.

(12) Schokker I, pp. 13-18.

(13) Schokker I, pp. 18-25.

主な論文として以下のものがある。

T.Burrow, "The Date of Śyāmilaka's Pādatāḍitakam." JRAS(1940), pp.46-53.

Dasharatha Sharma, "The Date of Śyāmilaka's Pādatāḍitaka: about 500 A.D." *The Journal of G.Jha Research Institute 14* (Nov. 1956-Aug. 1957), p. 17ff.

M&Aテクストのヒンディー語序文はバロー説をとり、歴史的考証を行なっている。

(14) Schokker I, p. 29 および Appendix 3 参照。

(15) Schokker I, p. 13 および K.Kunjunni Raja 前掲論文参照。

(16) 古典インドの大都市については、上村勝彦「インド古典における都市の情景」（『比較文明』5、刀水書房、一九八九年）を参照されたい。

あとがき

本書を終えるにあたり、あらためて、御懇篤な序文を賜わった東京大学東洋文化研究所教授上村勝彦先生に深甚の謝意を表する。先生の御鞭撻・御指導なくしては、訳者の公的業務の余暇を用いてのこの訳出作業は、結実しなかったであろうとしみじみおもう。

また、原典のコピーをさせて頂いた土田龍太郎先生をはじめ、東大印度文学研究室、東文研南アジア部門の多くの方々に、直接、間接いろいろとお世話になったことに感謝する。

最後に、この激動の時代に一見閑文字ともみられる書物の刊行を引き受けられた春秋社および同編集部の佐藤清靖、浜野哲敬両氏に感謝したい。とくに両氏には、内容編集全般に渡って、専門的知識に裏付けられた協力を頂いたことに御礼申し上げる。

訳　者

一九九三年一二月

訳者略歴

藤山覚一郎（ふじやま・かくいちろう）

1928年　東京に生まれる
1950年　慶応義塾大学工学部応用化学科卒
現　在　日本エヌ・シー・アール株式会社常勤監査役
　　　　社団法人糖業協会理事長

横地優子（よこち・ゆうこ）

1984年　東京大学文学部卒
1990年　東京大学大学院博士課程（印度哲学印度文学）中退
現　在　東京大学文学部印度語印度文学科助手

遊女の足蹴——古典インド劇・チャトゥルバーニー

1994年2月10日　第1刷発行

訳　者　藤山覚一郎・横地優子
発行者　神田　明
発行所　株式会社春秋社
〒101 東京都千代田区外神田2-18-6
電話　03-3255-9611（営業）
　　　03-3255-9614（編集）
振替　東京8-24861
印刷所　株式会社萩原印刷所
製本所　寿製本株式会社
装　丁　永畑風人

定価はカバー等に表示してあります

ISBN 4-393-13270-X　Printed in Japan